# 「道具」からみる

# 縄文晩期の生業について

―根挟みを中心に―

川添和暁

今回、食料獲得活動の立場で文化総体を検討する視点から、生業に使われたとされる根挟みについて総合的検討を行った。列島的視点からの分析を行い、従来からいわれてきたものとは別視点から、地域差を指摘した。さらに欠損・製作・再加工の状況を整理し、鹿角製品の製作状況を総体的に研究する必要を述べた。また、対応する石鏃については東北地域・東海地域を個別に分析し、東海地域では特に部分磨製石鏃の存在に注目した。これらから派生する問題を整理しつつ、最後に根挟みの機能について想定を行った。

#### 1 はじめに

#### (1) 研究の経緯

「縄文時代」の「生業」は一様ではなく、各時期に日本列島各地で多様な活動を行っていたとされる。「生業」には、食料獲得や社会組織的な側面のみならず、道具の製作・交易、場合によっては精神文化的な側面など、さまざまな要素が絡み合っているのが実情であろう。できるだけこれらを切り離すことなく、総体として考察する研究も必要なのではないのか考えるのである。食料獲得活動の視点から文化総体を検討する、いわば「生業史観」ともいうべき立場である。

今回は、東海地域でよく知られている「根挟み」について考察し、一つの糸口にしたい。「根挟み」の検討を行うことによって、それをめぐる道具の製作・使用体系のみならず、それが存在する生業活動とは実際にどのような意味をもつものであったのかに迫りたい。

なお、今回取り上げる「根挟み」は、縄文時代晩期に入り東北地域・東海地域を中心として盛行したものを中心とする。従って、それとは 異質なものとされる関東地域の縄文時代後期に 見られる一群は除外した。

#### (2) 根挟みについて

「根挟み」とは、二又に分かれる先端に鏃を挟んだと考えられる一つの独立した道具でありながら、使用時には矢の一部分として機能し

ていたと想定される遺物とする。現在、縄文時代のものは、考古遺物的にはすべて骨角器であり、鹿角製である。ここでは、仮に根挟みの部位名称・計測部位を提示する(図1)。根挟みを大きく「二又部」・「胴部」・「基部」に分け、二又部にみられる切込み部分のみを「切込み部」とする(赤色で示した部分)。また、切込み部が平面的に見える面を「平面」とし、その面から90度回転させた面を「側面」とする。

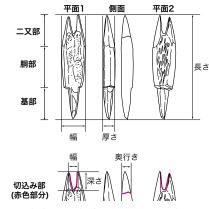


図1 根挟み部位名称および計測位置図

#### 2 研究小史

### (1) 研究動向

大きく三つの時期に分けることができる。

< I 期 はじめて資料紹介された時期 「矢筈」> 根挟みがはじめて取り上げられたのは、大野延太郎氏による。氏は数度にわたり三河地域の

踏査を行い、稲荷山貝塚 (大野 1901)、伊川津 貝塚 (大野 1905)から遺物の採集を行ってい る。その用途を推定し、「矢筈」と報告されて いることが注目される。

一方、岸上鎌吉氏は、早い段階に人工遺物・ 自然遺物の分析を通じて、原始時代の漁業史の 構築を進められた (Kishinoue1911)。その中 の「Missile Implements」とされた項目で、 宮城県沼津貝塚出土の根挟みについて説明さ れている。「・・・(stone arrow-heads) are devoid of such tang or shank (· · ·) and are connected with the shaft by means of a horny arrow-nock( $\cdot\cdot\cdot$ ) or by other means. The horny arrow-nock is coated with pitch at both extremities. · · · 」以上 のように石鏃への装着やピッチの付着など、用 途的には現在の根挟みと同様の内容を想定され ている。このように、実質的に矢筈としての 用途を想定していない場合も含めて、報告では 「矢筈」という名称が広く使われることとなる。

#### <Ⅱ期 「根挟み」の名称>

文化財保護委員会による愛知県吉胡貝塚の報告で、久永春男氏がこの名称「根挟み」をはじめて使用されている(文化財保護委員会1952)。これには山内清男氏の影響があったといわれる(渡辺1973)。山内氏は同報告書で「所謂矢筈」とされ、「・・・矢筈と云われているが、これには疑問がある。・・・恐らく鏃を挟んだものと考えられる。・・・」と述べられている。また、詳細には述べられていないものの、東北地域のものと東海地域のものとは「形態が多少異な」ることを指摘されている。

# < Ⅲ期 列島的視点 (集成)と東北地域・東 海地域での検討>

a. 列島的視点 渡辺 誠氏は、はじめて根挟みに関する出土遺跡集成とその所属時期をまとめられた(渡辺 1973)。材には鹿角のみが使用されるなど、根挟みに関する基本的事柄はこの時点ですでにまとめられたといえるであろう。丹羽百合子氏は東京都なすな原遺跡出土資料の報告の際に、「系統」という言葉を使い、東北地域のものと東海地域とのものとに

「製法」の違いがあることを述べられた(丹羽1984)。金子浩昌・忍澤成視両氏は、縄文時代の骨角器集成を行う中で「鏃 III」としてまとめられ、金子氏も関わった、なすな原遺跡報告の事柄に基づく分類で、根挟みを概観されている(金子・忍澤1986・1987)。

#### b. 東北地域・東海地域の検討

1.東北地域 宮城県中沢目貝塚の1973年調査で石鏃が装着された状態の根挟みが出土した。この事例は、岸上氏により石鏃の装着が想定されて以来、それを実証するものとなった。また、報告書の中では対応する石鏃に対して対している(須藤編1984)。宮城県田柄貝塚では、層位的に時期区分された状態で大量の石器・骨角器が調査・報告された。それにより当遺跡での根挟みの帰属時期が提示されたばかりでなく、石鏃の帰属時期により無茎鏃の多出が連動する事柄が報告されている(新庄屋・阿部ほか1986)。また、岩手県大洞貝塚では、最近の調査により二例目となる、石鏃が装着された状態の根挟みが出土した(金野編2000)。

**2. 東海地域** 1969 年に『日本貝塚の研究』 が刊行される。この中に、稲荷山貝塚・吉胡 貝塚などから出土した根挟みが報告されてい る。記述の中で根挟みの用途についても言及さ れており、注目される。1984年に愛知県伊川 津貝塚の調査が行われた。この調査成果は、根 挟み研究に大きな布石となった。上敷領久氏 は根挟み・ヤス・釣針を取り上げ、渥美半島 周辺の生業形態について考察されている(上敷 領 1987)。氏の根挟みの分析は石鏃との対応関 係を統計処理されたものであり、注目すべき手 法である。これにより、氏は対応する石鏃につ いて具体的数値を提示されている。また、根挟 みの切込みの形態と石鏃の基部形態とを対応さ せたのも注目される。西本豊弘氏は、根挟みの 出土「数」や有茎・無茎石鏃出土「数」から、 骨角器の示す地域性、特に伊川津貝塚を中心 とした東海地域の意味を考察されている(西本 1987)。このなかで破損した根挟みの再加工の 存在についても触れられている。

#### (2) 研究・分析の方向性

以上、現在までの研究を概観した。これによ

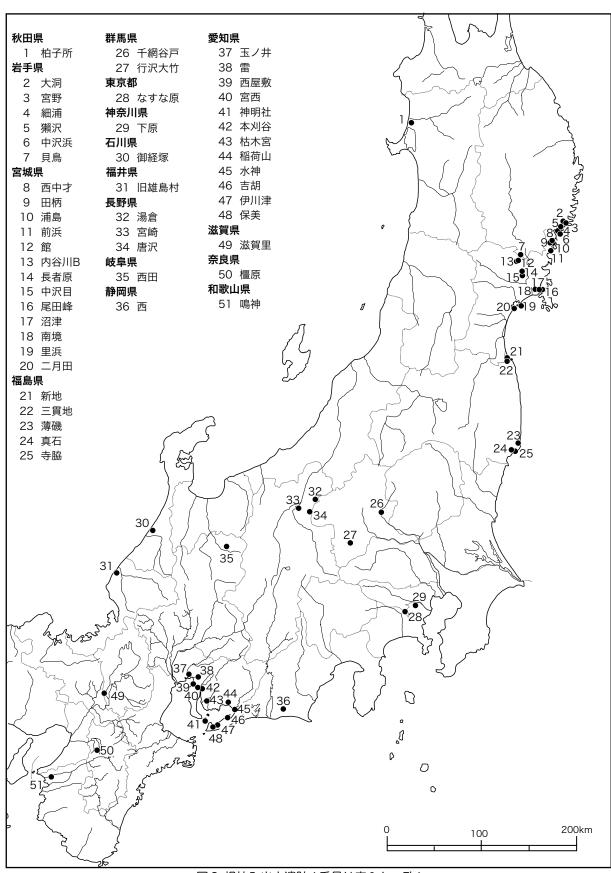


図2 根挟み出土遺跡(番号は表1と一致)

## 表 1 根挟み出土主要遺跡一覧(番号は図2と一致)

|    | 表1根挟み出土主要遺跡一覧(番号は図2と一致) |                   |                           |     |               |         |         |     |            |   |   |                                   |
|----|-------------------------|-------------------|---------------------------|-----|---------------|---------|---------|-----|------------|---|---|-----------------------------------|
| 番号 | 遺跡名                     | 所在地               | 時期                        | 点数  |               | 断面<br>b |         | d A | 司·基<br>人 B |   | 文献  | 備考                                |
| 1  | 柏子所貝塚                   | 秋田県能代市            | 晚期前葉(大洞BC)                | 2   | 0             |         | 0       | С   | _          |   | 大和久震平,1966『柏子所貝塚一第2次·第3次発掘調査報告書一』秋田県教育委員会。  |                                   |
| 2  | 大洞貝塚                    | 岩手県大船渡市           | 晚期                        | 16  | 0             |         | 0       | С   |            | 0 | 益野良一編。2000 『大洞貝塚』 大船渡市教育委員会。岩手県立博物館、1995 『岩手県立博物館収蔵資料目録 第11集 小田島コレクション その2』。  |                                   |
| 3  | 宮野貝塚(A地点)               | 岩手県三陸村            | 後期後葉~晩期初頭<br>(宮戸島IIB~大洞B) | 2   |               | 0       |         | C   |            |   | 三陸村教育委員会、1962『宮野貝塚』。  |                                   |
| 5  | 獺沢貝塚                    | 岩手県陸前高田市          | 晩期(大洞B~C2式                | 4   | 0             | 0       | 0       | С   | ,          |   | 及川 洵·金子浩昌,1977『獺沢貝塚 緊急発掘調査概報』<br>陸前高田市教育委員会。松浦宥一郎·安藤広道·小野寺恵<br>子·金子浩昌,2003『東京国立博物館図版図録 縄文遺物篇<br>(骨角器)』東京国立博物館。  |                                   |
| 6  | 中沢浜貝塚                   | 岩手県陸前高田市          | 晩期                        | 3   |               |         | 0       | С   |            |   | 陸前高田市教育委員会,1987 『中沢浜貝塚発掘調査概報<br>  」。陸前高田市教育委員会,1988 『中沢浜貝塚発掘調査概   |                                   |
| 7  | 貝鳥貝塚                    | 岩手県花泉町            | 後期末葉~晩期・後期<br>中葉?         | 5   |               |         | 0       | С   | $\top$     |   | 草間俊一・金子浩昌、1971『貝鳥貝塚』 花泉町教育委員会。  |                                   |
| 9  | 田柄貝塚                    | 宮城県気仙沼市           | 晚期初頭                      | 41  | 0             | 0       | 0       | С   | ,          | 0 | 新圧屋元晴・阿部思他、1986 『田柄貝琢』 III.呂城県教育委  <br> 昌会。   | 晩期初頭が多いと指<br>摘。石鏃との関係につ<br>いても言及。 |
| 10 | 浦島貝塚                    | 宮城県気仙沼市           | 大洞BC式                     | 3   |               |         |         |     |            |   | 宮城県鼎が浦高等学校社会班,1965『気仙沼周辺遺跡の概要<br>及び大島磯草貝塚・大浦浦島貝塚発掘調査報告』。  |                                   |
| 11 | 前浜貝塚                    | 宮城県本吉町            | 晩期                        | 1   |               |         |         |     |            |   | 百々幸雄,1979『前浜貝塚』本吉町文化財報告書第2集。  |                                   |
| 14 | 長者原貝塚                   | 宮城県南方町            | 晩期                        | 1   |               | 0       |         | С   |            |   | 阿部恵・遊佐五郎,1978『長者原貝塚』南方町文化財調査報告1。南方町教育委員会。   |                                   |
| 15 | 中沢目貝塚                   | 宮城県田尻町            | 晚期前葉(大洞BC)                | 6   |               | 0       |         | С   | L          | L | 須藤 隆編,1984『中沢目貝塚』東北大学文学部考古学研究会。   | 無茎鏃との装着例あり                        |
| 16 | 尾田峰貝塚                   | 宮城県石巻市            | 後期後葉~晩期前葉                 | 7   |               | 0       | 0       | С   |            |   | 楠本政助ほか、1967 『尾田峰貝塚出土資料』 石巻古代文化研究所。  |                                   |
| 17 | 沼津貝塚                    | 宮城県石巻市            | 後期~晩期                     | 9   |               | 0       | 0       | С   | )          | 0 | Kamakichi Kishinoue,1911 Prehistoric Fishing in Japan,Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo7-3,pp.327~382.毛利総七郎・遠藤源七,1953『陸前沼津貝塚骨角器図録』・『陸前沼津貝塚骨角器図録解説』東京。松浦有一郎・安藤広道・小野寺恵子・金子浩昌,2003『東京国立博物館図版図錄 縄文遺物篇(骨角器)』東京国立博物館。 |                                   |
|    | 里浜貝塚                    | 宮城県鳴瀬町            | 後期~晩期                     |     |               | 0       |         | С   |            |   | 小井川和夫·岡村道雄,1985『里浜貝塚』IV.東北歷史資料館。阿部博志·須田良平,1997『里浜貝塚』X.東北歷史資料館。  |                                   |
| 20 |                         |                   | 後期後葉~晩期                   | 1   | $\neg$        | 0       |         | C   | +          |   | 塩釜女子高等学校社会部,1972 『二月田貝塚川』<br>八幡一郎,1924 「磐城國小川貝塚発見の骨角器」 『人類学雑  |                                   |
| 21 | 新地貝塚                    | 福島県新地町            | 後期~晚期                     | 1   |               | 0       | 4       | С   |            |   | 誌 40-9』326~335頁。  |                                   |
| 22 | 三貫地貝塚                   | 福島県新地町            | ~晚期中葉(~大洞<br>C2)          | 4   |               |         |         |     |            |   | 森 幸彦・設楽博己,1988『三貫地貝塚』福島県立博物館。   |                                   |
| 23 | 薄磯貝塚                    | 福島県いわき市           | 後期~晩期                     | 2   | ?             |         | 0       | С   |            | 0 | 大竹憲治・山崎京美,1988『薄磯貝塚』いわき市教育委員<br>会。  |                                   |
| 24 | 真石貝塚                    | 福島県いわき市           | ~晚期中葉(~大洞<br>C2)          | 2   |               | 0       |         | С   |            |   | 西村正衛,1968「真石貝塚の調査」『小名浜』221~228<br>頁。福島県いわき市教育委員会磐城出張所。  |                                   |
|    |                         | 福島県いわき市           | 後期~晩期                     | 26  | 0             | 0       | 0       | С   |            | 0 | 江坂輝弥・渡辺 誠、1968 「寺脇貝塚発掘調査報告」 『小名<br>浜』157~218頁。福島県いわき市教育委員会磐城出張所。<br>渡辺一雄・松本友之・渡辺誠・馬目順一、1966 『寺脇貝塚』<br>いわき市教育委員会。  |                                   |
| 26 | 千網谷戸遺跡                  | 群馬県桐生市            | 後期~晩期                     |     |               |         | _       |     |            |   | 1978『千網谷戸遺跡調査報告書』桐生市教育委員会。  |                                   |
| 27 | 行沢大竹遺跡                  | 群馬県妙義町            | 後期~晩期中葉                   | 1   |               | 0       |         | С   |            |   |   | 報告                                |
|    | なすな原遺跡                  | 東京都町田市            | 晚期初頭                      | 2   |               | 0       |         | С   |            |   | 成田勝範ほか、1984『なすな原遺跡』なすな原遺跡調査会。   | 形態から、東北地域ではなく、東海地域との関連性を指摘        |
|    | 下原遺跡<br>湯倉洞窟            | 川崎市多摩区 長野県高山村     | 晩期前葉~中葉<br>後期~弥生          | 1 2 | $\rightarrow$ | 0       | 0       | C   | -          | 1 | 浜田晋介,2000『下原遺跡』川崎市市民ミュージアム。<br>関 孝一ほか,2001『湯倉洞窟』高山村教育委員会。   | SB02一括資料                          |
|    | 宮崎遺跡                    | 長野県長野市            | 晚期中葉                      | 2   | $\rightarrow$ | ?       |         | С   | 1          | t | 長野市教育委員会,1988『宮崎遺跡』。  |                                   |
| 34 | 唐沢岩陰                    | 長野県真田町            | 後期~晩期                     | 5   |               | 0       |         | С   |            |   | 樋口昇一,1983「唐沢岩陰遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会。  |                                   |
| 35 | 西田遺跡                    | 岐阜県丹生川村           | 後期後葉~晩期                   | 1   |               |         |         |     |            |   |   | ヤスもしくは根ばさみと報告                     |
| 36 | 西貝塚                     | 静岡県磐田市            | 後期後葉(宮滝新式)                | 1   |               | 0       | 1       | С   |            |   | 麻生 優編,1961『西貝塚』磐田市教育委員会。  |                                   |
| 30 | 御経塚遺跡                   | 石川県野々市町           | 後期中葉~晩期                   | 1   |               | 0       |         |     |            |   | 新美倫子,2003「御経塚遺跡の自然科学的分析」『野々市町<br>史』資料編1 考古 古代・中世.97~102頁。野々市町。  |                                   |
| 37 | 玉ノ井貝塚                   | 名古屋市南区            | 晚期前葉                      | 4   |               | 0       | 0       | С   |            |   | 纐纈 茂編,2003『埋蔵文化財調査報告書44 玉ノ井遺跡<br>(第3・4次)』名古屋市教育委員会。   |                                   |
| 38 | 雷貝塚                     | 名古屋市緑区            | 晩期                        | 5   |               | 0       |         | С   |            |   | 伊藤正人・川合 剛,1993『名古屋の縄文時代 資料集』名<br>古屋市見晴台考古資料館。   |                                   |
|    | 西屋敷貝塚                   | 愛知県知多市            | 晩期前葉                      | 1   |               |         | 0       | С   | -          |   | 杉崎 章他,1958『西屋敷貝塚』知多町教育委員会。  |                                   |
|    | 宮西貝塚                    | 愛知県東浦町            | 晚期前葉                      | 3   | $\rightarrow$ | 0       | $\perp$ | С   | -          | _ | 杉崎 章他,1965『宮西貝塚』東浦町教育委員会。   |                                   |
|    | 神明社貝塚 本刈谷貝塚             | 愛知県南知多町<br>愛知県刈谷市 | 後期後葉~晩期前葉<br>後期末~晩期前葉     | 3   | $\neg$        | 0       |         | C   | +          |   | 山下勝利編,1989 『神明社貝塚』 南知多町教育委員会。<br>加藤岩蔵・齋藤嘉彦ほか,1972 『本刈谷貝塚』 刈谷市教育委  |                                   |
|    | 枯木宮貝塚                   | 愛知県西尾市            | 晩期前葉                      | 4   |               | 0       | +       | С   | +          |   | 員会。 牧 富也ほか,1973『西尾市史 自然環境・原始古代』西尾   |                                   |
|    |                         |                   | 1                         |     |               |         |         | Ĺ   |            |   | 市史編纂委員会。  |                                   |

| w. C | 遺跡名   | 所在地      | 時期           | - M/L | 断面形 |               |   | 胴・基部 |           |   |   |                                 |            |
|------|-------|----------|--------------|-------|-----|---------------|---|------|-----------|---|---|---------------------------------|------------|
| 番号   |       |          |              | 点数    | а   | b             | С | d    | Α         | В | С | 文献                              | 備考         |
|      |       | 愛知県小坂井町  | 後期後葉〜晩期中葉    | 20    | С   |               |   |      | Ì         | Ī | П | 大野延太郎,1901「三河國発見の鹿角器を見て」『東京人類   |            |
| 44   | 稲荷山貝塚 |          |              |       |     | ام            | 0 |      | $\neg$    |   |   | 学会雑誌』16-182.321~325頁。東京人類学会。清野謙 |            |
|      |       |          |              |       |     | $^{\vee}$     |   |      |           |   |   | 次,1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。出口       |            |
|      |       |          |              |       |     |               |   |      |           |   |   | 剛,1992『平井稲荷山』小坂井町教育委員会。         |            |
| 45   | 水神貝塚  | 愛知県豊橋市   | 晚期前葉~中葉      | 1     |     | 0             |   |      | 0         |   |   | 芳賀陽編,1997『水神貝塚』豊橋市教育委員会。        |            |
| 16   | 吉胡貝塚  | 愛知県田原市   | 後期~晩期        | 87    |     | ol            |   |      | 0         |   |   | 文化財保護委員会,1962『吉胡貝塚』。清野謙次,1969『日 |            |
| 40   |       |          |              |       |     | $\subseteq$   |   |      |           |   |   | 本貝塚の研究』東京 岩波書店。                 |            |
|      | 伊川津貝塚 | 愛知県渥美町   | 後期後葉〜晩期中葉    | 157   |     |               |   |      |           |   |   | 大野延太郎,1905「愛知縣下旅行調査報告」『東京人類学会   |            |
|      |       |          |              |       |     |               |   |      |           |   |   | 雑誌』20-230.344~351頁。東京人類学会。久永春男ほ |            |
| 17   |       |          |              |       |     | $\sim$        | 0 |      | $\neg$    |   |   | か,1972『伊川津貝塚』渥美町教育委員会。小野田勝一・春   |            |
| 47   |       |          |              |       |     | $^{\vee}$     |   |      | $^{\vee}$ |   |   | 成秀爾・西本豊弘,1988『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。   |            |
|      |       |          |              |       |     |               |   |      |           |   |   | 小野田勝一・芳賀陽・安井俊則,1995『伊川津遺跡』渥美町   |            |
|      |       |          |              |       |     |               |   |      |           | Ш |   | 教育委員会。                          |            |
| 48   | 保美貝塚  | 愛知県渥美町   | 晩期           | 5     |     | 0             |   |      | 0         |   |   | 小林知生他,1966『保美貝塚』渥美町教育委員会。       |            |
|      | 滋賀里貝塚 | 滋賀県大津市   | 晩期(滋賀里II~IV) | 11    |     |               |   |      |           |   |   | 田辺昭三編,1973『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係   | 出土層位から時期によ |
| 49   |       |          |              |       |     | $\circ$       | 0 |      |           |   |   |                                 | る形態変化の可能性を |
|      |       |          |              |       |     |               |   |      |           |   |   | 遺跡調査団。                          | 指摘         |
| 50   | 橿原遺跡  | 奈良県橿原市   | 晩期前葉         | 11    | 0   | 0             |   | 0    | $\circ$   | 0 | 0 | 末永雅雄,1961『橿原』奈良県教育委員会。          |            |
| E 1  | 鳴神貝塚  | 和歌山県和歌山市 | 晩期後半         | 3     |     | $\overline{}$ |   |      |           |   |   | 石部正志ほか,1968「鳴神貝塚発掘調査報告」『和歌山県文   |            |
| 31   |       |          |              |       |     | 9             |   |      | $\square$ |   |   | 化財学術調査報告書』第III冊.和歌山県教育委員会。      |            |

#### り、以下のことを行っていく。

- (1) 列島的視点で再度分析を行う。これまでいくつか言われてきた、東北地域と東海地域と の地域差を再検討する必要があるからである。
- (2) 根挟みと石鏃との対応関係を再検討する。 上敷領氏の分析手法は注目すべきであるが、これには根挟み自体の分析がさらに必要であると 考えられる。
- (3) 製作工程の復元および再加工の事例を考察し、その意義を検討する。特に再加工に関して、西本氏は文章で触れられているものの、現在これを具体的事例で示したのは、管見の限りでは名古屋市玉ノ井遺跡の報告での新美倫子氏の指摘のみのようである(新美 2003)。事例を集め、体系的な検討が必要であろう。
- (4) 道具としての根挟みが生業の技術体系内にどう位置づけられるものか、の検討を行う。

#### 3 根挟みの分布・地域性

#### (1) 出土遺跡、時期的・地域的分布

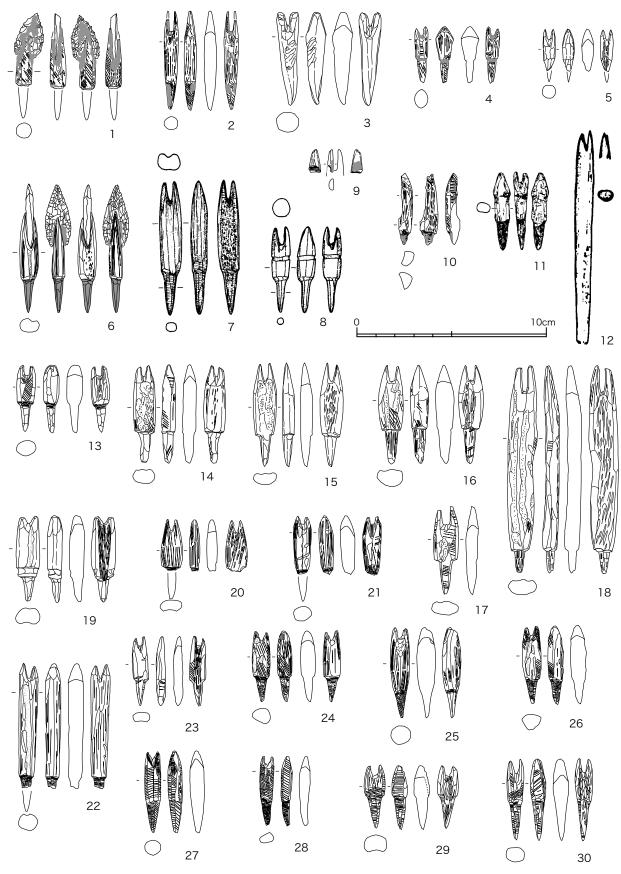
管見の限りでは、現在、根挟みは51遺跡470点以上が出土している(図2・表1)。地域的な広がりでは、北は秋田県柏子所貝塚から西は和歌山県鳴神貝塚までと、これまで知られている通りである(註1)。東北地域と東海地域の太平洋岸を中心に出土遺跡が固まっており、出土点数も大多数はここからのものが多い。一方、群馬・東京・神奈川・長野・岐阜・

奈良など、貝塚の形成がみられない内陸部の遺跡からでも出土例が知られているのは注目される。今後の調査により、内陸部の遺跡からの出土例は増加するものと考えられる。日本海側の地域では柏子所貝塚と福井県旧雄島村から出土したとされる例に加え、最近、石川県御経塚遺跡からの出土例も報告された。今後、日本海側の地域での動向も注意したいところである。

時期的にはこれまでも縄文時代後期後葉から 晩期中葉までといわれているものの、後期後葉 に属する可能性が高いとされる例は、限られているのが現実である。これは、根挟みが出土と ている遺跡の多くは後期後葉から晩期へと離れている遺跡の多くは後期で宮滝新式の土器と共生 して営まれていることが理由でもある。東と共生 した出土例が報告されている(麻生編 1961)。 これにより東海地域では後期後葉から根挟みが 存在すると言われているものの、ほぼ同時期の 同県の蜆塚貝塚からは現在までのところ根挟み の出土が知られていないことなどから、これが 渥美半島などの根挟みに直接つながるものかど うかは即断できないであろう。

一方、晩期に属するとされる事例は、いくつか知られている。田柄貝塚出土品の多くは、晩期初頭に属すものと報告されている。また、中沢目貝塚からは石鏃装着の見られる根挟みは晩期大洞BC式期とされている。伊川津貝塚でも、晩期初頭とされるV層より上層からの出土が主体である。

(註1)金子・忍澤両氏によると、青森県亀ヶ岡遺跡からの出土もあるとのことである(金子・忍澤 1986)。



 $1\sim5$  大洞貝塚、6 中沢目貝塚、 $7\sim10$  田柄貝塚、11 里浜貝塚、12 唐沢岩陰、13 玉ノ井貝塚、 $14\sim16$  稲荷山貝塚、 $17\cdot18$  吉胡貝塚、 $19\sim30$  伊川津貝塚、

図3 根挟み実測図1(7・8・11・12は各報告書より転載)

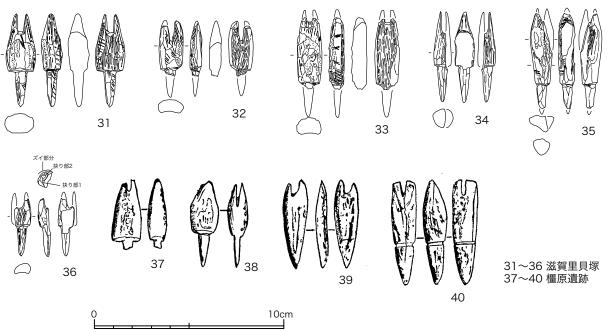


図4 根挟み実測図 2(37~41 は報告書より転載)

また、終焉に関しては、東北地域では大洞 C2 式期までのようである。中部高地の長野県 宮崎遺跡例が佐野II式期までのようであり、 東海地域でも五貫森式期以降を主体とする遺跡 からの出土はないようであることから稲荷山式 期から西之山式期までの間で使用されなくなっ たと考えられる。鳴神貝塚では晩期後半を主体 とする、撹乱を受けていない貝層中から出土し たと報告されている。確実視できる根挟み最終 末の事例と位置づけることができよう。

#### (2) 形態分類とその分布傾向(表2)

根挟みの形態について三つの属性に注目した。 第一の属性は最大径の断面形である。第二の 属性は胴部と基部との境目についてである。第 三の属性は切込み部の形態である。第三の属性 は、矢の一部分としての根挟み本来の機能に関 連するもので、対応する石鏃との関係をみるた めの属性である。第二の属性は、材の種類や使 われ方をみるためである。第一の属性は、矢の 一部分としての機能的な差はそれほど大きくな いと考えられる属性である。第三の属性は後述す る石鏃との対応関係のところで触れることとし、 ここでは第一・第二の属性について述べていく。

最大径部の断面形は、(a) から(d) の四形態 に分類できる。最大径の部分が二又部と胴部と

の境に相当するものと、それが胴部中央部に相 当するものとが存在する。断面形 (a) は東北地 域に多くみられ(図3の4・11など)、その他 の地域では奈良県橿原遺跡で報告されている以 外にはみられない (図4の38)。一方、断面形 (b)・(c) はどの地域にも見られる形態のようで ある。断面形 (d) は現在のところ滋賀県滋賀里 貝塚からの一例しか見られない(図4の35)。

胴部と基部との境目については、(A)から (C) の三形態に分類できる。(A) は根挟み分布 域全体にみられる形態で、これが基本形態であ ると考えられる。一方、(C) の分布は東北地域 に固まるようである。東北地域以外では、時期 が新しくなっても形態 (A) のみであることは注

表 2 形態分類一覧

| 胴部最大径断面       |  | 切込み部        |          |  |  |
|---------------|--|-------------|----------|--|--|
| (a)平面側に扁平な楕円形 |  | 亚王亚米        | 凹形       |  |  |
| (b)側面側に扁平な楕円形 |  | 平面形態        | V形       |  |  |
| (c)円形および隅円方形  |  |             | (i) A    |  |  |
| (d)三角形        |  |             |          |  |  |
| 胴部・基部         |  | /DUTE TO AN | , , A    |  |  |
| (A)段により区分     |  | 側面形態        | ( ii )   |  |  |
| (B)溝により区分     |  |             | $\wedge$ |  |  |
| (C)段・溝による区分なし |  |             | ( iii )  |  |  |

目できる。また、形態 (B) は極めてまれで、橿原遺跡の一例のみである (図4の40)。胴部に溝がつけられているものはまれに存在する (図3の8・19)。この橿原例も形態 (C) のものに溝が施されたものである可能性もある。

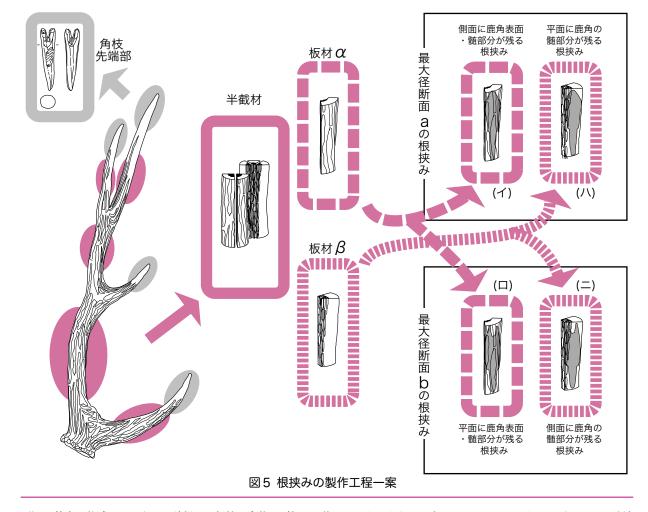
また、従来より、東北地域の例と東海地域の例との異なる点として、長さ、特に胴部の長さがいわれている(註2)。確かに、東北地域以外で長さの長いものが散見される。田柄貝塚では7cm前後が最長である。一方、完形品で最も長いのは全長11cmを測る吉胡貝塚の例である(図3の18)。長野県唐沢岩陰遺跡の例は基部が欠損しているものの、11.2cmと現長でもその吉胡例よりも長い(図3の12)。

# 4 製作・使用・廃棄について

#### (1) 製作について

上にも記したように、根挟みは現在までのところすべて鹿角製である。ここでは、最大径断面(a)・(b)の資料を中心に製作工程について述べていく。

鹿角からの材の取り方は、大きく二通りである(図5)。一つは、角枝の先端を利用し先端 部側を基部として作られているもので、岩手県 大洞貝塚や奈良県橿原遺跡などで若干みられる のみである。もう一つは、角幹部分を半截した 材、およびそれを板状にした材から作られるもので、これを出自とするものが大多数である。



(註2)筆者は後述するように、破損した根挟み自体に再加工が施されたものもあると考えている。しかしながら長さによる地域の違いはある一定の意味を有するものと考える。それは当時の人たちの破棄を行うまでの使われ方の差の表れであると考えるからである。

板材にしてから根挟みが作られる場合、その板 材は、 $(\alpha)$  鹿角の表皮部分を中心にとられた 板材と、 $(\beta)$ 髄の見られる中心部に向けてと られた板材という二種類存在していたようであ る。板材(α)から最大径断面(a)の根挟みを 製作する場合、側面に鹿角表面や髄部分が残存 するもの(イ)となる。一方、最大径断面(b) の根挟みを製作する場合、平面に鹿角表面や髄 部分が残存するもの(ロ)となる。また、板材 (β)から最大径断面(a)の根挟みを製作する 場合、平面に鹿角表面や髄部分が残存するもの (ハ)となり、最大径断面(b)の根挟みを製作す る場合、側面に鹿角表面や髄部分が残存するも の(二)となる。東北地域においては(イ)(ロ) (ハ)(ニ)がすべて見られる一方(註3)、東 海地域では(ロ)が圧倒的に多く、(イ)(ハ) (二)の根挟みは遺物としてほとんど存在しな いのは注目される。

# (2) 欠損傾向について

根挟みは、そのほとんどが破損品である、といえるほどである。遺物の観察の結果、(A) 二又部の欠失・(B) 二又部と胴部の欠失・(C) 基

A 二又部の欠失

A1 片側の欠失

A2 両側の欠失

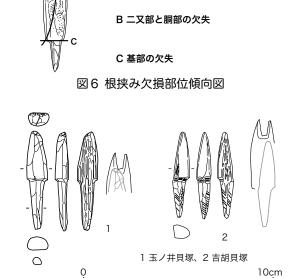
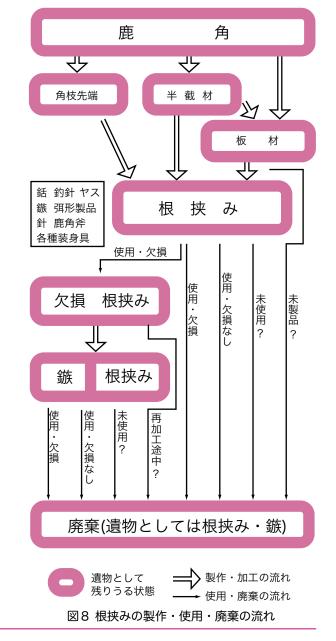


図7 鏃に再加工された根挟み

部の欠失、の大きく三パターンに分けられる(図5)。パターン(A)は片側の欠失か両側の欠失かでさらに二分される。破損はパターン(A)・(B)・(C)のいずれか、もしくは複合したものと理解することができる。その中で特に多いのはパターン(A)・(B)の傾向である。これは使用時に二又部を中心として縦方向に強い力が加わった結果と考えることができ、根挟みが二又部に石鏃を挟み込んで使用したものとする根拠の一つとすることができよう。



(註 3) 中沢目貝塚で、根挟みの未製品とされるものが 1 点報告されている。板材 ( $\alpha$ ) から最大径断面 (b) の ( $\alpha$ ) を製作しようとしたものと考えられるか。

#### (3) 再加工品について

また、欠損率が高かった根挟みは、再加工してまた使用されていたことが指摘されている。田柄貝塚では、欠損パターン(B)のものをそれまでの切込み部に対して直角方向に再び切込み部を作り使用されたものが見つかっている(図3の10)。また、滋賀県滋賀里貝塚でも欠損パターン(B)のものをそれまでの切込み部に対して45度の方向に作り直している例がある(図4の36)。なお、田柄貝塚では二又部の一部のみの出土が報告されているが、それには二又部と胴部との境で擦り切られた痕跡が残されている。再加工の際に擦り切られたものと考えられる(図3の9)。

鹿角製鏃には、根挟み欠損品を再加工して作られた可能性が考えられるものがある (図7)。愛知県玉ノ井貝塚の例は、欠損パターン (A)のものを再加工したものと考えられる。先端部に刻み状の痕跡がみられるが、恐らく切込み部削出時の加工痕であろう。吉胡貝塚の例は、欠損パターン (B) のものをもとに欠損部を研磨した再加工が施されたものと考えられる。両者とも東海地域の事例であり、最大径断面 (b) の、板材 ( $\beta$ ) から作られた ( $\alpha$ ) である (註4)。

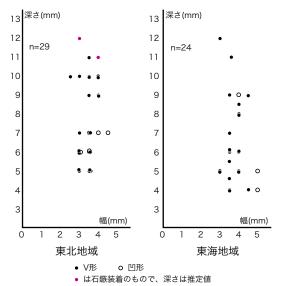


図9 根挟み切込み部大きさ散布図

以上のことから、根挟みの製作・使用・廃棄の 流れを図示した(図8)。実際は、各地域におい て鹿角製品の様相が異なるため、同じ根挟みを製 作するにも、状況が異なることが想定される。

#### 5 機能の実際

#### (1)装着された石鏃について

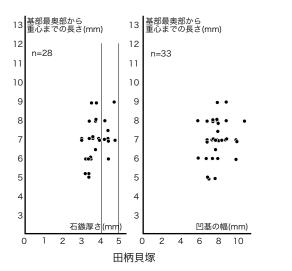
根挟みに対応する石鏃が無茎鏃であること は、容易に理解できるところである。

その前段階として、対応する根挟みの切込み 部に関しての検討が必要である。それは、上敷 領氏が「ネガとポジの関係」と言われたように、 使用時に大きな力が加わると考えられる切込み 部は、装着による不整合部分はできるだけなら すように調整されたことが想定されるからであ る。ここでは結果のみを述べるが、今回は平面 形態と側面形態とに分けて分類を試みた(表2)。 平面形態では、溝状に深く掘り込まれているも のと、浅くて開放気味になっているものとに分 けられる。前者を「凹形」、後者を「V形」とする。 側面形態では、(i)緩い円弧を描くもの、(ii) 鋭角気味になるもの、(iii) 左右非対称のもの、 とに分けられよう(註5)。

まず、平面形態についてである。切込み部の深さと幅の計測を試みた(図9)。幅は2.5mmから5mm、深さは4mmから12mmまでの範囲におさまるものの、「凹形」は幅が4.5mm以下と、「V形」に比べ若干幅が狭い傾向にある。特に「凹形」の幅は、3mmから4mmの間におさまる資料が大多数である。東北地域と東海とはないものの東海地域の資料を比較しても、切込み部の入資料を比較には大きな違いはないものの東海地域の資料を比較には大きな道いものがみられる。また、側面形態に対しては、平面形態「凹形」には側面形態に)(ii)(ii)のみのようである。これも東北地域と東海地域とである。これも東北地域と東海地域と下きな差はなさそうである。

(註4)今回、東北地域の根挟み転用の鹿角製鏃の様相を明らかにすることができなかった。(イ)(ロ)(ハ)(ニ)がすべて見られるため、鹿角製鏃の中で根挟み出自の可能性があるものの幅は広がるものと考えられる。

(註5)切込み部の形態は、着装石鏃との関係を考える上で重要である。しかし、切込み部側面形態が図化されたものはほとんどない。根挟み自体の表裏両面と側面が図化されていればある程度想定は可能であるものの、厳密ではない。ここに切込み部側面形態の図化の必要性を提唱する次第である。



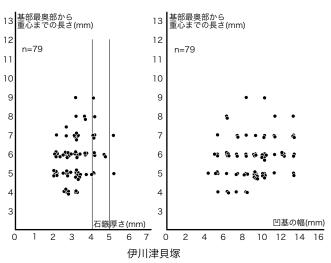
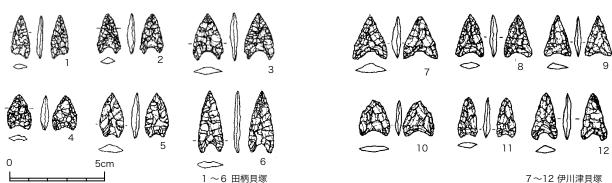


図 10 石鏃測定値散布図



7~12 伊川津貝塚

1・2・4 珪化凝灰岩、3・5 珪質頁岩、6 玉髄、7・10 チャート、8・9・11・12 安山岩

図 11 石鏃実測図 (原図・石材名ともに報告書より転載)

以上のことを基に、装着された石鏃について 検討していく。しかし、この時期は地域により 石鏃総体のあり方が異なるため、全地域を一括 した議論は難しい。ここでは東北地域と東海地 域と分けて検討をしていきたい。

#### 1. 東北地域

この地域では大きく二つの点から、対応する 石鏃に対してある程度絞り込みがなされている。

一つは第一級資料として石鏃が装着された状 態の根挟みが出土していることである。現在の ところ大洞貝塚(図3の1)と中沢目貝塚(同 図の6)の二例である。これらを観察すると、 石鏃の重さの加わる中心部分(ここでは「重心」 と呼称する)付近まで、挿入されている様子が 見られる。これらの根挟みは図9で見ても、切 込み部の深さが 10mm 以上と深い部類に入る ものである。一方、これらの石鏃自体は似た形 態を有している。平面形態が縦長気味のもので あり、側面観は扁平であるものの、先端部は若 干細めに鋭く作り出されているようである。石 材は両者とも「頁岩」ということである。

もう一つは田柄貝塚の報告である。東北地域 ではこの時期、有茎鏃が盛行することが知られ ている。しかしこの遺跡では、根挟みが固まっ て出土した層位と、無茎鏃のまとまった出土が みられた層位が一致することから、これらの無 茎鏃が根挟みに対応する可能性が高いことが指 摘されている。これらの石鏃は縦長気味のもの で、凹基部分が浅い形態のものが大多数のよう である(図11)。石鏃凹基部分の形態と、根挟 み切込み部側面形態(i)(ii)とを比較し ても特に違和感なく整合するものが多い。石 鏃自体の幅は3mmから5mmまでの中にお さまり、根挟み切込み部の幅と一致する。ま

た、ここで報告されている石鏃の凹基部分の幅は 5mm から 10mm までであり、その中でも 6mm から 8mm までが大多数である。これは根挟みの切込み部側面奥行きに符合する値といえよう(図 10)。

#### 2. 東海地域

東北地域とは異なり、東海地域ではこの時期は有茎鏃よりも無茎鏃が広く使われるようである。これらの無茎鏃がどの程度根挟みに対応するかを考察するために、根挟みとともに石鏃の出土が層位的に報告されている伊川津貝塚1984年調査の事例をみていく(図11)。この遺跡出土の石鏃群は、石材はともかくとして、形態的には東海地域の晩期前半期の石鏃形態をよく表していると考えられるからである。

石鏃の厚さは 2mm から 5.5mm との幅であるが、多くのものは幅 4mm 以下のようである。基部最奥部から重心までの長さは田柄貝塚例よりも若干短いものがみられるが、これは東海での根挟み切込み部の深さと一致する傾向にある。また、田柄貝塚の例とは大きな相違が見られる点は、凹基部分の幅が広いものが多く存である。田柄貝塚で見られるようなには、四基部分の幅が成み部側面奥行きに切込み部側面形態奥行きと比べて、凹基部分の幅が表のの、根挟みのの幅が数 mm ほど長いものもむしろ主体的に存在する。東海地域では、これらの石鏃も根挟みにあずる。東海地域では、これらの石鏃も根挟みにがある。東海地域では、これらの石鏃も根挟みにがある。東海地域では、これらの石鏃も根挟みにがある。東海地域では、これらの石鏃も根挟みにあげる部分磨製石鏃の形態からも窺えられる。

#### (2) 東海地域の部分磨製石鏃について

東海地域では、後期以降、下呂石製の石鏃が

多用されることが知られている。そうした石鏃 の中には、石鏃の基部から重心部分を中心とし て研磨工程を行った、部分磨製石鏃の存在が知 られている。齋藤基生氏は、縄文時代早期のみ ならず、縄文時代晩期にも部分磨製石鏃の存在 を指摘し、注意を促している (齋藤 1986)。こ の中で齋藤氏は、あつかった岐阜県阿曽田遺 跡・中村遺跡・北裏遺跡出土資料の帰属時期に ついて、「縄文時代晩期(もしくは後期)」とい う表現を用いて、晩期を主体としつつも若干後 期にまでさかのぼる可能性をも残している。大 工原豊氏も関東地域・東海地域の後期から晩期 に属する「局部磨製石鏃」を分析されている(大 工原 1990)。まず、関東地域にみられる、後期 前半から弥生時代前期終末にまでに所属する 一群について、「I 形態 ( 凹基無茎鏃:筆者註 ) であることと、黒曜石であることを十分条件と する局部磨製石鏃を「関東型局部磨製石鏃」と」 された。一方、齋藤氏があげられた岐阜県美濃 地域の一群については、「安山岩(恐らく下呂 石:筆者註)を用い、形態規制の緩やかな中部 高地以西の局部磨製石鏃を「中部型局部磨製石 鏃」と」された。出現の主体は晩期以降である ことと、中村遺跡に見られる1点の黒曜石製の 「局部磨製石鏃」の存在から、「・・・こうした 石鏃が独自に発生したとみるより、関東地方か ら伝播したと考えるのが妥当であろう」と述べ られている。

筆者は、現在のところ、この石鏃の部分磨製という志向自体が、関東(北関東)地域から伝播したものか、東海地域で独自発生したものかの評価は持ち合わせていない。しかし、大工原氏のいうところの「中部型局部磨製石鏃」の

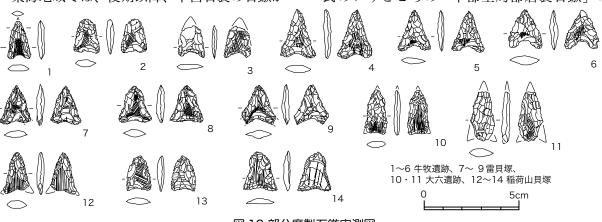


図 12 部分磨製石鏃実測図

消長は、東海地域における根挟みのそれにほぼ近い。また、部分磨製により、石鏃の厚さが3.5mmから4mm程度にまで薄くなっている効果が窺えられる。これらのことから東海地域においては、部分磨製石鏃と根挟みがある程度有機的な関係を持っていたものと考えられる。

今回、名古屋市牛牧遺跡(註6)と同市雷貝 塚(註7)・愛知県大六遺跡・稲荷山貝塚でも 部分磨製石鏃の存在を確認することができた (図12)。これらの石鏃はすべて下呂石製であ り、形態は伊川津貝塚で見てきたものと類似す る。また、重心部分を中心とする研磨により、 石鏃自体の厚さは 3.5mm から 4mm 程度にま で薄くされている。これまで知られていた部分 磨製石鏃出土遺跡の中で、根挟みが出土してい る遺跡は黒曜石製石鏃が主体の群馬県千網谷戸 遺跡以外はなく、特に下呂石製主体の東海地域 では、共に出土している遺跡は知られていなか った。今回、根挟みが出土している稲荷山貝塚 で数点もの部分磨製石鏃を見つけることができ たのは多いに注目すべきことであり、今後西三 河や尾張地域での根挟み出土遺跡からも部分磨 製石鏃の発見が期待される。

#### 6 まとめ

以上、根挟みとその周辺ついて考察してきた。これまでの分析をまとめると、以下のようになる。

- (1) 現在までのところ北は秋田県柏子所貝塚から西は和歌山県鳴神貝塚までみられる。分布の中心は東北地域と東海地域である。内陸部の遺跡や日本海側の事例も徐々に増えてきており、今後もこの傾向は注目される。時期的には、後期後葉以降から見られる可能性があるものの、主体的に見られるのは晩期で、下限は大洞 C2 式併行期ごろのようである。
- (2) 東北地域と東海地域とでは形態に差があることが以前から指摘されていた。今回、最大 径部の断面形という別視点から、形態の差を指 摘した。これは、製作工程にも関連する可能性 を指摘したが、今後、根挟みのみならず、両地

域の鹿角製品製作状況全体を分析する必要があ ろう。また、東北地域では同じく石鏃の装着が 知られる回転式離頭銛との関連も考慮しなくて はならない。さらに、東海地域の資料で指摘さ れる、長身のものの存在は、機能的な側面から も注目される。

- (3) 根挟みの多くは欠損した状態で出土する。 今回、欠損傾向を三パターンに分類した。いずれも、石鏃を装着して使用したときの衝撃によるものと考えられる。また、欠損後のものを再加工して、根挟みにおよび鏃に転用している例を提示した。
- (4) 東北地域・東海地域における根挟みに対応する石鏃についてみてきた。根挟みの切込み部の大きさから類推して、切込み部凹形の根挟みでは幅 4 mm 以下、同 V 形の根挟みでは幅 5 mm 以下の石鏃が対応するものと考えられる。現在のところ、東海地域での根挟みに対応する石鏃の形態は、東北地域のそれよりも幅広い感がある。また、東海地域の下呂石製を主体とした部分磨製石鏃の出現は、根挟みと有機的関係を持っている可能性が高いといえる。

これらのことをもとに、最後に、根挟みの機能・用途に関して想定を試みたい。

まず、今回取り扱ったものには、東北地域と 東海地域とで、形態の差が存在することは指摘 した。しかし、当地の鹿角製品製作状況による 差が反映された可能性があることや、切込み部 の幅に大きな差がないこと、今後内陸部遺跡か らの出土例が増加し分布的空白が小さくなって いく可能性が高いことなどから、これらの使用 にはそれほど相違がなかったのでないかと考え られる。また、内陸部遺跡での出土の様相から、 狩猟活動での使用が主体ではなかったかと考え られるのである(註8)。

問題となるのは、なぜ根挟みという道具が出現・盛行したのか、である。これは根挟みが矢の一部としてどのような役割を担っていたのか、が大きく関わってくる。須藤氏は「根挟みを用いる矢柄の装着法は北海道アイヌも行っている。これは「マカニット」とよばれ、矢柄と

<sup>(</sup>註6)齋藤基生氏のご教示による。

<sup>(</sup>註7)川合 剛氏のご教示によれば、8点確認されているとのことである。図12の7~9は氏からご提供頂いた図面である。

<sup>(</sup>註8)内陸部遺跡などでは、根挟みは焼獣骨などとともに出土する場合が多いからである。

鏃の接目に用い、鏃に重みをつけ、貫通力を増す利点があるといわれている」と述べられている(須藤編 1984)。西本氏も同様にアイヌの民族例を参照し、鏃と矢柄の中間に用いられた中柄ではなかったかとし、「矢の先を重くして、矢全体の重心を調整するためと言われている」とされている(西本 1987)。ただ西本氏が指摘されているように、マカニットは骨製であることが知られている。

しかし、今回とりあげた根挟み自体は、長さ・幅がさまざまで、重量にも幅があるものと考えられる。また、小型のものも多く存在し、鏃に重みをつける効果があまり期待できないようなものも存在する。

清野謙次氏は、根挟みに毒矢としての使用を 想定されている(清野 1969)。清野氏は根拠な ど多くを語られていないが、大変魅力的な仮説 である。アイヌの民族例にも毒矢が用いられた ことがよく知られているが、これらでは夕ケ類 で作られた鏃の凹みに毒を入れている。根挟み に装着されたと考えられる石鏃にはそのような 凹みは存在しない。しかし、民族事例の引用か ら、想定によっては毒の塗布は可能である(石 川 1963)。 筆者は根挟みの第一義的な存在意義を、石 鏃を装着した根挟みを事前に用意しておくこと で、石鏃部分には触れず矢柄に装着できること だったのでないのか、と想定している。これが 冒頭で「一つの独立した道具でありながら、使 用時には矢の一部分として機能していたと想定 される遺物」とした理由である。

今回、根挟みの消滅の状況および、渡辺氏が問題提示された動物相との関係を追究するまでには至らなかったのは、筆者の力不足による。最後に今後の課題としたい。

この小論をまとめるにあたり、齋藤基生・川合 剛・須藤 隆・渡辺 誠の諸先生、および愛知県埋蔵文化財センター諸氏からは多くのご教示を賜りました。また、渥美町郷土資料館・大船渡市立博物館・奈良県立橿原考古学研究所博物館・滋賀県立安土城考古博物館・瀬戸市教育委員会・天理大学天理参考館・東北大学考古学研究室・東北歴史博物館・名古屋市博物館・名古屋市見晴台考古資料館には、資料調査に便宜をはかっていただきました。ここに感謝の意を申し上げます。

#### 参考文献

麻生 優編,1961『西貝塚』磐田市教育委員会。

石川元助,1963『毒矢の文化』東京 紀伊国屋書店。

大野延太郎,1901「三河國発見の鹿角器を見て」『東京人類学雑誌』16巻 182号.321~325頁。東京人類学会。

大野延太郎,1905「愛知縣下旅行調査報告」『東京人類学雑誌』20巻230号.344~351頁。東京人類学会。

金子浩昌・忍澤成視,1986・1987『骨角器の研究』縄文篇 I・II。東京 慶友社。

上敷領 久,1987「東海地方先史時代の骨角器」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』中.166 ~ 180 頁。岡崎敬先生退官記念 事業会。

清野謙次,1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。

金野良一編,2000『大洞貝塚』大船渡市教育委員会。

齋藤基生,1986「縄文時代晩期の部分磨製石鏃について」『古代文化』38-3.128 ~ 137 頁。財團法人 古代學協會。

新庄屋元晴・阿部 恵ほか,1986『田柄貝塚』III. 宮城県教育委員会。

須藤 隆編,1984『中沢目貝塚』東北大学文学部考古学研究室。

大工原 豊,1990「縄文時代後・晩期における局部磨製石鏃の展開と意義―縄文時代における石器研究の一試論―」『青山考古』8.39 ~ 57 頁。 青山考古学会。

新美倫子 ,2003「骨角器・貝製品」『埋蔵文化財調査報告書 44 玉ノ井遺跡 ( 第 3・4 次 )』100 ~ 103 頁。名古屋市教育委員会。

西本豊弘,1987「骨角製漁具 ―とくにネバサミについて―」季刊考古学 21.68 ~ 71 頁。東京 雄山閣出版。

丹羽百合子,1984「骨角器」『なすな原遺跡 —No.1 地区調査』597 ~ 605 頁。なすな原遺跡調査会。

文化財保護委員会,1952『吉胡貝塚』。

渡辺 誠,1973「鹿角製根挟みに関する覚え書」小田原考古学会会報.5.104~110頁。小田原考古学研究会。

Kamakichi Kishinoue,1911 Prehistoric Fishing in Japan, Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo7-3,pp.327  $\sim$  382.

# 弥生集落史の地平 その2

――凹線紋系土器期以前の弥生中期―



石黒立人

弥生時代の集落をどのように捉えるのか。小論では弥生中期前半に時期を限って、まず基本単位を抽出し、その複合のありかたから極大型・大型・中型・小形・極小型に類型区分を行った。そして拠点・ 集住などいくつかの概念を検討し、最後に極大型を軸に変遷の見通しを述べた。

#### 1 はじめに

#### (1) なぜ凹線紋系土器期以前なのか

なぜ凹線紋系土器期以前を対象とするのか。 というより、なぜ凹線紋系土器期以前でなけれ ばならないのか。

凹線紋系土器期以前へのこだわり。この思い は、わたしが埋蔵文化財行政に関係し、朝日遺 跡やその他の弥生遺跡を調査し、また土器編年 に手を染めて以来もち続けているものである。 わたしには事の初めから、弥生時代における諸 要素の画期と中・後期区分が何かそぐわないも のに思えた。もともと凹線紋系土器期を後期と する立場(註1)が身近にあったけれど、土器 編年の画期はそれほど重視していなかった(と いうよりあまり理解していなかった)から、そ れが後期であっても中期であってもどうでもよ かった。むしろ遺構変遷における凹線紋系土器 期前後の変化の方が重要に思えた。かつて凹線 紋系土器の影響を環濠の消長にからめて、外部 世界の拡大に伴う直接的な波及を表示するとみ なし、人間集団の移動に惹起された地域社会の 大変動であると理解した。しかし、前後の事象 を整理して比較したわけではないので、具体性 に乏しく構想に終わった。

小論は上記の延長にある。わたしが意図するのは、弥生時代の時空区分変更の可能性の追求である。しかも対象を巨視的にではなく、些細な細部からの見直しである。〈大きな話〉は細部が無くとも可能だが、〈小さな話〉は細部に依拠しつつ細部を編み上げるものだから、統しつつ細部を編み上げるものだから、に見つかる。その意味で巨視的立場とはなり論理も実践的・即応的でなければならない。地域に即せば即すほど、空理・空論は峻別されるからである。そこに立ち戻ってから〈きな話〉に反転しても遅くはないと考える。

もちろん、細部にこだわるといってもおのず と限界がある。小論の主旨は近畿・中部・関東 というレベルでの比較なので、個別の遺跡につ いては必要最小限しか深入りしない。詳細は自 他の個別論に委ねることを予めお断りしておく。

#### (2)都市論をめぐって

現在は沈静(むしろ低迷?)化した「弥生都 市論」は、その賛否に関わらず、20世紀最後 の数年間において弥生時代研究の主要なモティ ーフのひとつであった。

(註1) 柴垣勇夫氏や加藤安信氏は朝日遺跡の報告書(愛知県教育委員会 1975、同 1982)において高蔵式(凹線紋系土器期後半)を後期に含めている。それに対して紅村 弘氏や大参義一氏は中期に含めており、わたしもそれを踏襲した。いっぽう、弥生前期について、近畿以西では前半と後半の差異に注目し、そこに画期を認める立場がある。伊勢湾周辺でも金剛坂式や水神平式の成立など土器に大きな変化があり、また方形周溝墓の出現など墓制においても変化がある。しかし、集落は前期の前半と後半で大きな変化は無く、むしろ中期に断絶する例が目立つ。中期の極大型・大型には前期の集落と重複してあたかも継続しているようにみえる例がある。果たして連続性はあるのだろうか。繋がる系譜、途切れる系譜、太い系譜、細い系譜のどれに重点をおくのか、結局はわれわれの歴史観・社会観・文化観による。現実問題として土器編年上の前期・中期・後期の3区分はそれ自体で意味をもっているわけではなく、慣用句に過ぎない。前提である<弥生時代>の評価が変われば意味を失う。

そもそも九州は佐賀県吉野ヶ里遺跡の調査・報道をきっかけとして始まり、近畿は大阪府池上曾根遺跡を軸に乾 哲也氏が論陣を張った(乾 1996)。ただ、考古学的というよりは、半ば行政サイドの目的遂行に重点をおく多分にジャーナリスティックな側面もあり、当初はそれが弥生時代研究に果たす役割に関して十分に議論が行われなかった。議論への参加よりも、拒絶が風潮であったように思える。

「弥生都市」肯定論の弱点の一つが資料的な 裏付けであると見た秋山浩三氏は、その根幹で ある池上曽根遺跡の調査への関与を機に、既 調査分・新規調査分の事実確認作業を猛然と 進め、見事に整理された資料を提示するに至っ た。調査成果の共有や標準化を意図した緻密な 基礎作業とその公表は、池上曽根遺跡を軸とす る「弥生都市論」を吟味する上で不可欠であり、 この結果、池上曽根「弥生都市論」をめぐる場 は、大勢として否定論が主導権を握った観があ る今日このごろである(註2)。

しかし、こうした動きが「都市論」あるいは 集落論の活性化のきっかけになったのかといえ ば、近畿では若林邦彦氏や寺前直人氏のほかに 目立った動きは無い。相変わらずもの言わぬオ ーディエンスを前に、大きな舞台上に少数の演 者しかいない状況が続いている(註3)。

関東では、これまで安藤広道氏がもっぱら宮

ノ台式期の集落について精力的に考察を進め、さらにその対象を広げている。石川日出志氏や及川良彦氏もそれぞれ集落論を展開しつつあり、潜在的な弥生集落研究者数は近畿以西よりも多いのではないかと思える。近畿以西と異なり都市論に絡むことはないが、むしろそのことが特定の視点に規定されない多様な集落・社会像の構想を可能にするであろう。弥生集落論の活性化は関東から、といったところか。

ところで、九州から近畿にかけて「弥生都市」 肯定論・否定論のいずれもが、もとより弥生時 代全般を対象としたものではなく、時期的にも 弥生中期後半・凹線紋系土器期(近畿第IV様式) 以後に焦点を絞る限定的なものにとどまって いることに、あらためて注意を向ける必要があ る。佐賀県吉野ヶ里遺跡、愛媛県文京遺跡、大 阪府池上曽根遺跡などを巡る議論は実質、凹線 紋系土器期(近畿IV様式)から弥生後期に重心 があるのであって、池上曽根遺跡の場合、弥生 中期前半が議論の俎上にのぼることはまずない。

ここにみえるのは、あくまで<首長>を媒介 項とする社会構成論、あるいは国家形成論の 序論としての、古墳時代前史としての色彩が極 めて強いことであって、縄文時代以後の通時的 な、連続的な集落変遷としての把握を前提にし てはいないのである。

簡単に言えば、「弥生都市」肯定論に与せず

(註2) 秋山浩三氏は池上曽根遺跡の調査データうち遺物を中心に順次再整理・公表を進めている。目下、「都市論」に関わる手工業生産部門(専業的従事者の有無確認)が課題のようだが、しかしその年代帰属については明確でない。長期継続集落遺跡では長期にわたって遺構・遺物が集積されるために個別の年代を決めることは実際のところ難しいし、さらに他者が調査した資料となるとその再発掘・追認は絶望的である場合もある。だが、年代を積分状態においたままでは池上曽根「弥生都市論」と同様に議論は大雑把にとどまる。少なくとも遺構・遺物変遷について様式区分は当然としてさらなる細分を試みる必要がある。空間の質を問うのであれば、遺物分布が細別区分に対応してどのように変遷するのかを把握しなければならない。

わたしたちも朝日遺跡で各種生産物の分布図を作成したことがある。石器関連は時期区分ができないために玉作を除いて手工業生産の空間的イメージを鮮明にできなかったし、木器・骨角器は遺存状況に差があるために一般化もできなかった。けれど、積分状態ではあっても磨製石斧は後述する単位居住区ごとにまとまる傾向をみせ、分業は明確ではないが生産活動の単位が単位居住区にある点は確認できた。むしろ、玉作が特定区画に限定されることを重視すべきだと考える。

集落遺跡における遺物分布は安定累重的ではなく二次的な移動もある。さらに廃棄パターンとの関係もあり、けっしてデータがそのまま過去を語ることは無い。むしろ、データが何を表しているのか、データをどのように解釈するのか、その<構え>についての議論こそが集落論のために何にも増して必要であると考える。

(註3)最近、近畿では珍しく、若林邦彦氏と酒井龍一氏の間で対抗的な議論が起きた。若林氏の批判に対する酒井氏の反批判として始まったものだが、両者の議論が弥生集落論・弥生時代論の活性化(演者およびオーディエンスの増加・交流)につながることを期待する。

とも関説するほとんどの研究者は重心の一方を 古墳時代に置いて弥生・古墳を一連としてその 推移を見ており、結果として遡及的に考えると いう傾きをもつ。だからどうしても発展図式に もとづく予定調和的な姿をまとう。

他方、弥生時代に重心をおく研究者の多くも、集落論を重視しこそすれ、都市論には積極的に絡まない。たしかにわたし自身も、「弥生都市論」を研究の軸にする必要は無いと考えているし、はたして軸になるのかどうか、むしろ疑問にさえ思っている。集落論を軸にするからこそ都市論を考える必要があるのではないかと思っている。その意味で後者を大規模集落遺跡論と呼んで差し支えないのではという異論もあろうが、あくまで、〈量〉ではなく〈質〉を問いたいので、あえて「都市論」と名づけている。

さて、「弥生都市論」をめぐる動きは反「弥 生都市論」を生んだのであろうか。具体的な資 料の裏付けが弱い、まさに浮遊する概念の是非 を問うことは、けっして反「弥生都市論」では ない。資料読み取りの適正化を図り、〈弥生都 市〉という安易なイメージの払拭を進めたこと は有効であったし、かえって資料読解のはらむ 問題を明らかにした点で必要不可欠であった。 この点で、それ自体が「弥生都市論」、そして 弥生集落論を構成するものであったが、だれも 「弥生都市論」を消し去ろうとはしていない。

「弥生都市」否定論が事実の確認に固執することは、日本考古学における実証主義の伝統に照らせば、擁護されこそすれ批判されるものではない。むしろ、理念を振りかざす「空想・弥生都市論」が批判されてしかるべきかもしれない。ただ、議論の流れに注意すれば、理念の可能性の広がりを局所的な事実によって限定・制限することに果たして問題はなかったのか、とわたしは思う。都市論の広がりは一遺跡、一資料によって決定されるようなものではない。「弥生都市」肯定論は、いささか性急かつ素朴すぎるものであったが、「弥生都市」否定論の現状も同様に思える。

オギュスタン・ベルク氏も次のように述べている。

実証主義は「同じ尺度で測れるものだけを認め、同じ尺度で測れないものを廃絶する」と(オギュスタン・ベルク 2002、p116)。

考古学において何にも増して事実の積み重ねは重要だが、当該の時空に関係する完全な事実など存在しない。われわれに必要なのは、断片的な(むしろ断片的であり続ける以外にない)考古学的事実をいかに組織化するのか、その論理や事実解釈の<構え>の在り様を問い続けることである。適正の「弥生都市論」とはそうしたものであり、「弥生都市論」そのものを否定するべきではない。

従来に無い考え方を提出することは、まさに 《試行》なのであり、《錯誤》を経た上でなけれ ば適正化しようがない。ある程度の振れは避け ようがなかろう。その振れのいくつかを取り上 げるのみで中心軸をなす重要な問題を掴めない とすれば、それは単に研究の広がりも無い偏狭 な姿勢となる。

個々の集落遺跡に焦点を結びつつ地域にも焦点を当てる、<地>と<図>を固定させること無く絶えざる反転を進めるためにこそ、いっそうの間口の広い議論(それが「弥生集落論」とリンクする「弥生都市論」であろう)が前にも増して必要である。そしてそれは決して古墳時代前史ではない。

わたしは弥生集落論に関わる議論として、「弥 生時代の集落はすべてムラか?」「弥生時代に <都市>があるならそれはどのようなものか」 「<都市>とは何か?」という素朴な設問が決 して無意味ではなかったと考える。だが、実 証主義的・実在論的な傾向は「どの集落遺跡が <都市>なのか?」という問題設定へシフトし た。「どの集落遺跡が<都市>なのか?」とい う設問は実証主義的考古学では馴染みやすかっ たかもしれないが、その場合の都市の要件は普 遍性が重視され、最大公約数的であり、かつ借 用であった。あるいは「「都市」成立の史的契機」 (三木 2003) という言述に示されるように都 市成立が国家形成と不可分であるというテーゼ に規定された。調査成果に基づき帰納的な道筋 がとられるなら、比較集落論的な、その意味で 実証的な議論が可能であったと考えるが、残念 ながら都市論を否定するための実証主義になったように見える。実は弥生都市論はこうした研究動向から離脱する契機になったかもしれないが、いまその余地は無いかのようだ。

第2の課題としては、弥生中期前半を軸に集 落論の展望について考える。

# 2 弥生集落を考える

#### (1) 弥生中期前半の集落の様相

A. 事例 伊勢湾周辺地域の事例を軸に考 えてみる(註4)。

朝日遺跡では、弥生中期前葉後半に新たな集落プランが成立する。谷A南側の居住域では、谷Aに並んで東北東から西南西に向かう区画大溝が掘削されて長軸約600mの基本区画が設けられ、これに直交する溝によってさらに約100m四方の単位居住区に区画される。谷A北側は内部がよくわからないけれども、谷Aに接して玉作工房区が設定されている。方形周溝墓からなる墓域は中期前葉には東西2墓域であったのが、中期中葉には居住域の周囲を取り巻き環状をなす。

ここにあるのは<分割と配列>である。単に 区画が房状に付随するのではなく、まず一定の 範囲が大きく囲い込まれ、その内部がさらに分 割されたのである。まさに、水田の大小区画に 類似している。わたしはこれを「囲郭集落」と 呼んだ。これが<極大型>の姿である。

同類は奈良県唐古・鍵遺跡と石川県八日市地方遺跡。前者は多重環濠の内径が約400 mで、内部にも多くの溝が掘削されている(藤田1999)。後者は集落II期:弥生中期中葉のピーク時には谷を挟んで長軸500 mほどの広がりをもち、玉生産区域・木器生産区域の存在が窺え、しかも方形周溝墓からなる墓域が朝日遺跡と同様に環状に取り巻く(福海2003)。ほかに三重県納所遺跡および周辺遺跡群、静岡県梶子遺跡および周辺遺跡群、静岡県梶子遺跡および周辺遺跡群、流賀県野洲川下流域遺跡群なども可能性がある。これらの遺跡では

遺物量が豊富で遺構の密度も高い。また遠隔地の物産も出土し、手工業生産も複合的である。神奈川県中里遺跡について正式報告はまだないが、いくつかの情報によれば、大形掘立柱建物や井戸があり、近畿系や伊勢湾系の土器、サヌカイト製打製尖頭器もあり、遠隔地と広域的に連係している。中里遺跡も地域における相対的な区分で言えば極大型である。

低丘陵上に立地する三重県平田遺跡の下面から、中期前葉に属す2棟の竪穴建物が発見された。同時存在かどうかは判断が難しい。倉庫が見つかっておらず、一時期1棟と看做すのが適当だろう。一時期に1棟としても、これらはどういった性格の居住地なのだろうか。

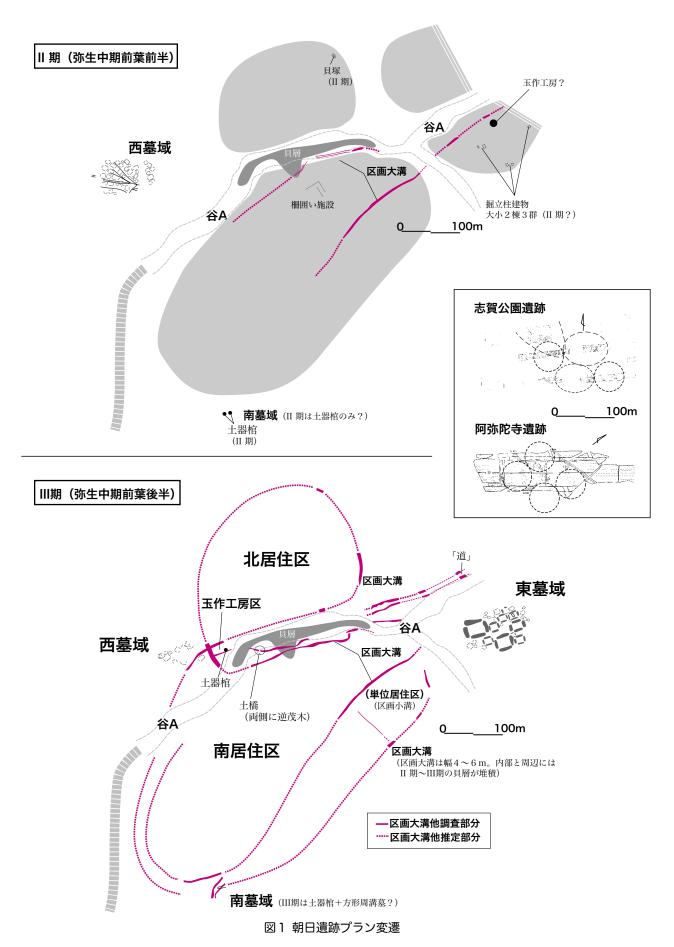
愛知県門間沼遺跡は中期前葉に属す土器・石器が出土し、土坑もともなっていたが、竪穴建物は検出されなかった。石器には石鏃、粗製剥片石器、凹石、打製石斧があり、粗製剥片石器に使用痕は明瞭であった。同様の遺跡は濃尾平野北部に多い。多くは水田稲作に関わるキャンプ地か?

これらが<極小型>の姿である。

極大型・極小型の間を埋めるのが以下の事例である。

愛知県阿弥陀寺遺跡は朝日遺跡から南西に約 3.3 kmの距離にある。北側を大溝と低地、南 側を谷に画された幅80mほどの東西に細長い 微高地に立地している。南側の谷は微高地南 端の竪穴建物を切り込んでおり、多少侵食が 進んでいるようだ。遺跡形成当初の微高地は もう少し幅が広かったかもしれない。中期中葉 前半には床面積 100 ㎡以上の大形竪穴建物を 中心にして4単位ほどの竪穴建物・土坑群が約 15000 ㎡の範囲に展開する。各単位は径約 50 m (約2000 m) で、後述の志賀公園遺跡の居 住域に近似する。阿弥陀寺遺跡の範囲はさらに 広く推定されており、調査で検出された単位が どういった位置を占めるのか定かではない。床 面積 100 ㎡を超える竪穴建物の検出例が稀有 であることを考慮すれば、中核をなす単位であ

(註4) 小論の時期区分は以下の通りである。中期前葉前半:朝日式・朝日Ⅱ期・尾張Ⅱ-1・2期、中期前葉後半:朝日Ⅲ期・尾張Ⅱ-3期、中期中葉前半:貝田町式(古)・朝日Ⅳ期・尾張Ⅲ-1~3期、弥生中期後葉:凹線紋系土器期・朝日Ⅵ期・尾張Ⅳ期(ただし、高蔵式は中期後葉後半に該当する)。



った可能性は高い。

なお、阿弥陀寺遺跡の北西約 l k mには同時期の森南遺跡がある。

愛知県猫島遺跡は中期前葉から中葉前半にかけての集落遺跡で、朝日遺跡の北約 6.4 kmにある。楕円形の 2 重環濠は長軸が 200 m以上あり、外濠がところどころ途切れて陸橋部を作っている。東西に方形周溝墓群からなる墓域が形成されている。濃尾平野では朝日遺跡に次いで玉作関連遺物が出土し、玉作工房の存在が想定される。

愛知県八王子遺跡は朝日遺跡の北西約11 km に位置する。南を河道に画された微高地に2重から3重の環濠がめぐる。環濠は弥生中期前葉終末から中期中葉初めにかけて掘削される。遺跡の範囲は猫島遺跡と同程度であろう。

岐阜県宮塚遺跡は朝日遺跡の北約20 kmにあり、径64 mほどの2重環濠に囲まれた小規模集落である。環濠掘削時期は中期前葉末から中期中葉初めにかけてである。生活関連遺構は削平されて残っていなかったが、土器・石器がまとまって出土した。これまでのところ周辺に同時期の遺跡は知られておらず孤立的である。

志賀公園遺跡は朝日遺跡の東南東約5.2 km に位置する中期前葉後半から中葉前半にかけての集落遺跡である。中期前葉後半に属す竪穴建物と掘立柱建物から構成される径50 m弱の居住域が二つ(97 E居住域・98 J居住域)並存し、間に方形周溝墓群が展開する。97 E居住域では「松菊里型」を含む2棟の円形竪穴建物と2間×6間と2間×4間の近接棟持柱建物、1間×2間の掘立柱建物、廃棄用土坑が見つ

かっている。98 J 区では円形竪穴建物はみつ かっておらず、方形竪穴建物と2間×4間の近 接棟持柱建物、1間×2間の掘立柱建物が見つ かっている。ただ、98 J 区から 97 F 区南部 にかけては多くの柱穴や土坑もあり、これらの 区域には中期中葉以降の居住域が広がっている ようだ。中期中葉前半の方形周溝墓群は 98 J 区から98 I 区にかけて展開しているので、98 J区北部から 97 F南部にかけて同時期の居住 域が広がっていたと考えられる。居住域の広が りは各時期とも約2000㎡で、中期前葉は掘立 柱建物の切り合いを重視すれば3時期に区分で きる。未調査分はあるが、竪穴建物は1時期2 棟程度としてそれに近接棟持柱建物が1棟組み 合うとすれば、竪穴建物 1 棟では 1000 m必要 となる。志賀公園遺跡は現状では西志賀遺跡の 環濠北東約 400 mに位置し、離れている。こ の距離が近いのか遠いのかはともかく、居住域 と墓域がユニットをなす点で独立した集落では あろう。だが村落結合という点では無関係では ないだろう。

居住域が2単位、墓域が1単位からなる集落 遺跡は、伊勢湾西岸では弥生中期前葉から中期 中葉前半に属す東庄内B遺跡が知られる。居住 域は径50mを超えることはなく、墓域は居住 域の間ではなく一方の居住域に接している。し かし、方形周溝墓は2列存在するので居住域2 単位に対応しているとみることができる。

#### B. 類型区分と建物数の概算

まず、極大型と極小型は設定可能である。 極大型の朝日遺跡は、区画小溝で区切られた

(註5)竪穴建物は集落構成の基本要素であるが、掘立柱建物は見つからない場合もあるので、竪穴建物を基準にする。

ところで、弥生中期後葉に限定される一色青海遺跡では、愛知県埋蔵文化財センターによる 2003 年度の約 7000 ㎡の調査で 110 棟前後の建物が検出されたが、削平分を含めればそれを超える棟数になる。 6 時期で均分すれば 1000 ㎡あたり 2.6 棟となるが、遺跡には低調期・高調期もあるから後者では 1000 ㎡: 3 棟(2000 ㎡: 6 棟)の時期があったかもしれない。これだと志賀公園・阿弥陀寺遺跡の 3 倍の建物数になる。かつてわたしは朝日遺跡の竪穴建物 1 棟の必要面積を 250 ㎡としたが、少し無理があったかもしれない。いくら集住したとはいえ、 1 棟 500 ㎡以下で 2 倍であり、 250 ㎡では 4 倍になる。一色青海遺跡が特殊例なら下限を 500 ㎡、上限を 750 ㎡程度に考えると朝日遺跡では 140000 ㎡で 180 ~ 280 棟となる。集住したからといって掘立柱建物が多いわけではないので竪穴建物の中に倉庫を含め 70 パーセントを住居とすれば 126 ~ 196 棟、掛ける 5 人で 630 ~ 980 人が建物に住む人々ということになろう。いずれにしても、志賀公園遺跡や阿弥陀寺遺跡の単位認定については妥当性があると考えるが、朝日遺跡の推定は机上の空論の域にあるかもしれない。

(註6)建物が存在したのに検出できなかった可能性もある。とすれば集落論の基盤そのものが危うくなるのだが、しかしそれも 含めての集落論であるとわたしは考えている。いずれにしても、調査において細心の注意を払う必要があること言うまでも無い。 単位居住区が約10000 ㎡の広さをもち、居住域全体では140000 ㎡と想定可能なので単位居住区は10単位以上と考えられる。問題は単位居住区に何棟建つのかであるが、単純計算なら5単位10棟×10=100棟以上、集住して密度が高いなら2倍で200棟以上となるが、果たしてその正否は(註5)。

極小型はそもそもしっかりした建物をともな

わない可能性があり、縄文時代の居住地にも類似する回帰的な居住地といえようか。調査の精度についても再検討すべきかもしれない(註6)。

極大型と極小型の間には多くの集落遺跡が含まれる。極小型の上位に阿弥陀寺遺跡や志賀公園遺跡でみとめられた単位がくる。ひとつの単位は竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟からなり、2000㎡の広がりをもつ。志賀公園遺跡は2単

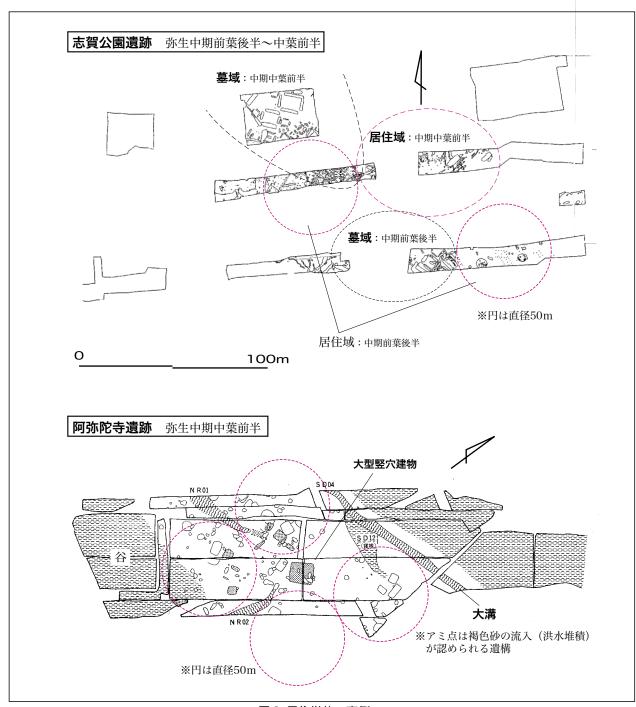


図2 居住単位の事例

位、阿弥陀寺遺跡には4単位以上が並存する。

宮塚遺跡の広がりは上記1単位に相当する が、環濠の掘削は単独で可能なのだろうか。環 濠は上部が大幅に削平されており、推定規模の 見積もり方しだいによって掘削土量は大きくか わる。環濠の深さを 1.5 mとすれば 1250 ㎡、 深さを2mとみると 2000 ㎡以上と幅がある が、膨大であることにかわりはない。1人が1 m/日の作業量とすれば、のべ1250~2000 人が必要となる。もし、1単位2棟の竪穴建 物なら、1棟5人で10人という計算を当ては めても実働人員はそれより少ないだろうから、 5人なら250~400日、7人としても180 ~ 290 日となる。 4 単位が集住したとすれば、  $60 \sim 100$  日、あるいは  $45 \sim 70$  日となるけ れども、環濠掘削時に周辺集落から応援が来た のかどうか、現状では付近 10 km以内に同時 期の遺跡は知られていない。

2単位以下の平田遺跡・志賀公園遺跡で大溝の掘削はなく、方形周溝墓の周溝掘削に限定されるが、阿弥陀寺遺跡では幅約5m、深さ約1.5mの大溝が掘削されているから、一定の単位数を超えれば大溝の掘削が行われると考えられる。逆に、大溝を掘削するために単位数を増やす(分村せず拡大する)ことがあったかもしれない。

さて、猫島遺跡の居住域は 20000 ㎡以上と 推定される。環濠プランについて現状では綺麗 な小判型を想像させるが、中央部分に大型建物 は検出されていない。したがって、重心は北部 (名神高速道路の下)にあり、環濠が北に張り 出す扁平なオムスビ形のプランになる可能性も ある。検出された遺構分布は密度が低いけれど も、後世の削平によるところが大きい。なお、 東外側に別区もあるようだが、ここでは扱わない。 西部では環濠内側に方形周溝墓が営まれているので、同時期には 10 単位以上が充当できる。環濠で囲まれているので、1 単位 2 棟以上 として 20 棟以上が同時並存した可能性がある。 さて、極大型と極小型の間は<大型>が八王 子遺跡・猫島遺跡、<中型>が阿弥陀寺遺跡、 <小型>は志賀公園遺跡が該当する。単位数に 換算可能なのは猫島遺跡以下であり極大型は対 象外である。ただ、集住を考慮すれば基本的に 環濠集落は推定が難しいのかもしれない(註7)。

#### (2)範囲と規模、あるいは「拠点」ということ

上記の議論は従来、範囲・規模として行われてきたものである。だが、果たして範囲の大小とは地域社会における序列に関係するのだろうか。じつはこのような問いを立てても解答を導き出すことは極めて難しい。そうした比較図をよく目にするが、根拠は希薄である。

そもそも集落遺跡として把握できるとはどの ような事態を指すのであろうか。墓や建物を含 む各種生活関連遺構および生活廃棄物のひろが りが途切れたところがその縁辺、その外が境界 であるとしても、若干の距離をおいて同様の広 がりが展開する場合にそれらを区別することに どれほどの意味があるのか。通常は集落遺跡を 自立した単位と看做しているので近接していて も「集落群」と呼ぶことになるが、見かたを変 えれば、それぞれを居住域と呼んで、全体を「集 落」と考えることもできる。朝日遺跡は初期に は「朝日遺跡群」と呼称したけれども、調査 が進む中で後者の立場をとって「朝日遺跡」と 名称変更した経緯がある。現状では、現在考え られている朝日遺跡の範囲を超えて朝日遺跡が 広がる可能性は少ない。貝殻山貝塚地点の南西 約1kmに弥生中期中葉後半の遺物が出土する 地区が最近隣のほか、西方2kmに松の木遺跡 (弥生中期前葉~中葉) がある程度で、弥生中 期において朝日遺跡周辺は空白地域となってい る。石川県八日市地方遺跡も同様の傾向をみせ ている。

これに対し大阪平野、河内潟周辺では遺跡群としか呼称しようがない濃密な範囲があり、個々の居住域を単独に扱うよりも、密集域として把握する方が適している(若林 2003)。滋賀県野洲川最下流域の遺跡群も同様であろう。

(註7)弥生前期には大規模集落はみられず、径 100 m程度の環濠集落が多い。それは逆に環濠が掘削可能な人口規模であったということ、つまりは水田開発の基礎単位がどの程度であったかを示しているともいえる。それに比べれば弥生中期の環濠集落ははるかに大規模であり、その機能も弥生前期と同じではないだろう。

近接して複数の居住域や墓域が展開する場合、 もちろんその同時性が問題になる。この点に関 してわたしは検証を済ませているわけではない が、大雑把にいえば集落の相が異なる地域の集 落を単純に比較してきたこれまでの弥生集落論 は、改めてそれぞれの地域に即して吟味するべ きである。そのうえで他地域との異同を検討し ても遅くない。弥生文化というアプリオリな共 通基盤は幻想であり、東海の弥生集落を考える 上で近畿も関東もスタンダードではない。

ともかく、環濠をもたない集落遺跡には密集部分と散在部分があり、全域が調査されれば密集・散在とも一つの集落遺跡における二つの相と捉えることも可能だが、部分的な調査の累積では両者を別な集落類型として扱っている可能性が無いとはいえない(註8)。

ところで、拠点集落とは上述の議論とどのように関係するのであろうか。田中義昭氏による <拠点/周辺>区分は大小を視点に社会的性格 を加味した区分になっており、拠点が中心を意 味する(田中 1976)。いっぽう酒井龍一氏は、 一定のキャッチメントエリアをもつ径 300 m ほどの定住地を拠点集落とし、拠点集落を形 成する集団には複数の基本的生活集団が内属し ており、社会の中核を構成するとされる(酒井 1997)。拠点集落は生と死をあわせもつ固有の小世界である。田中氏は関東の事例、酒井氏は近畿の事例に基づく点で一般化できないけれど、従来は重要なモデルとして尊重されてきた。

しかし、<拠点>とはそもそも何を意味して、何を指すのか。わたしは拠点集落という用語を使わなくなって久しいけれども、伊勢湾周辺地域で上記の<拠点>が意味するところを再検討してみたい。

集落の大小に<拠点>は表われているのか。 まず極小型は拠点とは無縁である。遺構・遺物 が生活や特定作業に必要な分だけしか揃ってい ないからである。極大型は質・量ともに他を圧 倒している。各種手工業生産が行われ、遠隔地 の物産も出土し、多様な生産と交通をあわせも つ、ゆえに拠点の典型といえる。

それでは上記の大型・中型・小型はどうであ ろう。

小型は志賀公園遺跡と宮塚遺跡である。志賀公園遺跡は西志賀遺跡と無関係とは考えられないが、それでも生と死をあわせもつ複数の単位からなる自律的な存在である。この点は東庄内B遺跡も同様である。ただ、両者とも環濠はめぐらない。いっぽうで宮塚遺跡は小面積ながら環濠がめぐる。しかし、近辺に同時期の遺跡は知られていない。まだ見ぬ遺跡があるのだろうか。小規模であるにもかかわらず2重環濠がめぐる点を重視すれば、それが孤立的でなければ相対的に<拠点性>をもつとみなすことは可能である。

中型は阿弥陀寺遺跡である。大型竪穴建物が 複数の単位の中心を占め、磨製石斧の再生産や 木製品の生産が小規模ながら行われている。調 査で確認された部分が遺跡の全体像ではないわ けだから、調査部分が集落全域の中核部分であ った可能性は残る。周辺2km圏内には森南遺 跡・松ノ木遺跡があり、それらに比べれば大き く長期にわたる集落遺跡である。

大型は八王子遺跡や猫島遺跡であり、2~3 重の環濠に囲まれ、猫島遺跡では玉作工房の存

(註8)密集・散在という建物配置は、中世集落を調査しているとしばしば遭遇する様相である。とりわけ 15 世紀では濃尾平野において集住化が進むと考えられているが、それは密集区域と散在区域から構成されており、弥生集落も類比的に捉えられる可能性が高い。

在も窺える。

以上の様相を整理して配列すれば、藤田三郎氏の奈良盆地モデルと同じようなものができあがるのだろう (藤田 1999)。では、そのモデルにおいて拠点集落とはどのレベルが該当するのだろうか。阿弥陀寺遺跡では墓域が見つかっていないけれど、小型でさえ墓域があるのだから当然並存するだろう。つまり、中型以上はすることない場合によっては小型も拠点集落となき当後では、拠点集落とは一定程度以上では普通によっては、拠点集落と呼ぶ必要も無くなれば、拠点集落ではない集落遺跡を探する。むしろ拠点集落ではない集落遺跡を探す必要があり、それが小論の小型・極小型であるが、事例は少ない。

拠点集落がこのように単一の相ではなく幅をもつ存在であるなら、それはどのように区分すべきか。すでに大規模で長期であることは拠点集落の要件なのでここでは除外される。また手工業生産の有無も、特殊品目を指標にすれば別だが、ブリコラージュ程度なら中型以上では常態であろうから除外される。道具の手直しや修繕ぐらいはどこでも行われているであろうし、それができないのは道具の需給体制から疎外された現代都市民だけである。

わたしは、拠点集落は結局のところ区分できないと考える。つまり、拠点集落という概念では弥生集落の複雑さは説明できないのだ(註9)。しかし「都市」は駄目だという、ならばどうすればよいのか。

#### (3) 過度な集住と外部依存をめぐって

都出比呂志氏は「都市」の定義について G. チャイルドに拠りつつも、「過度な集住と 外部依存」であると単純明快にのべた(都出 1997)。つまり、過度な集住により自給自足を 喪失した、ゆえに外部依存型社会であり、そこ に特殊機能が発達して特化されたものということである。

さて、人間集団は通年定住するやいなや外部 依存が必須となり、物流網の成長・定着が集落 存続の前提になった。瀬口真司氏によれば、それは弥生時代ではなく、縄文時代中期後半のことである(註10)。とすれば、ここで都出ことが 提起した都市論の要件がひとつ脱落であればことが なる。確かに、都市の実在を問うのくとも外である。が、少なくとも外であるうが、少なくとも外でであればいのか再検討が必要件に相応しいのか再検討が必要件に相応して物流の管理・統制をある。 を都市機能として挿入するが、結になるので、具体的な接近から後退することになる。

弥生時代の外部依存は遥か以前に人間が定住 を開始して以来の延長にあり、それが「過度な 集住」をおこなった場合に依存を必要とする品 目・量が過度に増加、強化されたということで ある。問題は品目・量の増加が比例的なのか、 飛躍的なのかだが、前者は縄文時代以来の量 的変化、後者こそが弥生時代としての質に関わ る。また特殊機能も過度な集住に伴い内部的・ 外部的な調整機能を発達させる必要から生じ たと考えられるのであって、ここではなぜ「過 度の集住」が起こったのかが基本的な課題とな る。ここで広瀬氏は「過度な集住」の原因を権 力に求めるが、それはどのように証明されるの であろうか。

実際のところ「過度な集住」とはどのような 事態を指すのか、集落遺跡に即して示すことは 容易ではない。各種生活関連遺構・遺物の量を 測定することは、集落遺跡の完全発掘ができな い中で、せいぜい遺跡の範囲をそれに代えるこ とができるだけである。とりわけ長期に重複し て営まれるのがここで問題にしようとしている

(註9) <拠点>は周辺と対比させれば中心の謂いとなるが、関係性における<拠点性>を考慮すればネットワークの結節点となる。この意味で、酒井龍一氏の「拠点集落」は中心ではなくネットワークの結節点を意味する(ゆえに、「線態」「面態」も可能になる)。孤立的な集落が想定できない以上、集落には程度の違いはあれ<拠点性>が内包されているといえる。もちろん閉じた空間における<拠点>と開かれた空間における<拠点>はおのずと異なるだろうが、<拠点・性>から言えるのはここまでである。弥生集落の内実にまで踏み込むには別の概念が必要であり、現在それが求められている。弥生集落論は酒井氏のネットワーク論によって実証主義的原子論から脱皮したはずであったが、日本考古学の伝統はあまりにも強固だ。「都市」論も正しくはネットワーク論であるとわたしは考えるが、相変わらず実証主義原子論に絡めとられ<関係性>から切り離されている。

(註 10) 勢濃尾研究会第 3 次年研究会 (2003 年 12 月 13 日開催) の口頭発表・レジュメによる。

極大型であり、それは<大規模・長期継続・集落>遺跡なのであるから時期ごとの数量を描き 出すことは困難である。せいぜい、すでに崩壊 し去った数多の遺構に思いを馳せるのみである。 そもそも大規模であれば、それが「過度な集住」ということでなくても、なぜ大規模な集落遺跡が成立したのか、その背景は何なのか、という単純な問題設定で十分ではないかと考え

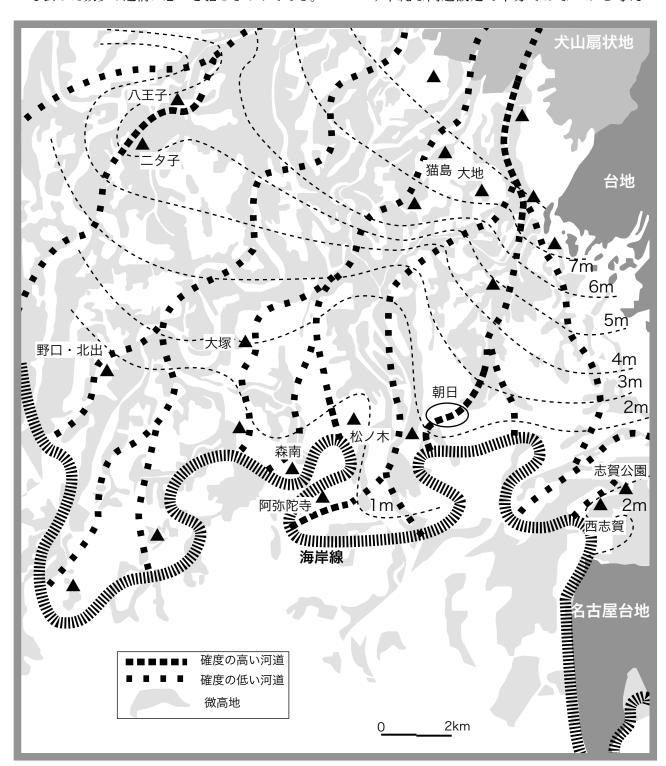


図3 濃尾平野南部における弥生中期前半の遺跡分布

※等高線・河川・海岸線は想定。土地条件図をもとに調査データを加味して作成。

る。なぜ、朝日遺跡や中里遺跡のような極大型が 成立したのか、そして、それがなぜ旧国範囲で一 か二つ程度しかなく、しかも弥生中期という限定 された時期に存在するのかということである。

#### 3 極大型の変遷

#### (1) 弥生中期に極大型が成立したということ

朝日遺跡は中期前葉前半の姿がいささかおぼろげだけれども、中期前葉後半には全体プランを確立する。八日市地方遺跡も集落II期にピークを迎える。中里遺跡は前にも後にも無い。なぜか。

弥生時代には灌漑型水田稲作が普及し、それ に合わせて道具の体系も変わる。道具体系の変 化は生産・供給にも変化を及ぼしたが、縄文時 代以来の道具で代替可能なものはそのまま存続 した。しかし、もっとも変化を必要としたのは 社会組織であった。弥生時代には大小長短、多 くの溝が掘削されたが、そのための新たな道具 立てと労働編成が必要であった。集住はその一 つであり、それが開墾・基盤整備等のための労 働力の基盤をなした。集住や労働力の大規模化 は当然のことながら農具だけでなく生活用具な ど各種道具類の必要量を増大させた。そのため に外部依存の比重はより高まった。安定流通は 前提であり、それを担う集落相互のネットワー ク化が進行したであろう、というのが極大型を めぐるわたしの認識である。

もう一度確認しよう。人口密度が低ければそ もそも上記の実現は不可能である。小規模な集 落が分散するだけでは、灌漑水路の掘削・維持・ 管理などを伴う開発型の水田稲作を行い、独自 に各種道具類を確保することは難しい。そのた めに人口密度の低い地域ではある時期に極大型 や大型の集落を形成して、労働力の集約、つま り労働力の再生産のための基盤を確保し、さら に生産活動の基盤である各種手工業生産をも集 中したのである。その上で周辺地区の開発を進 めるとともに、中型以下の新開集落を析出させ たと考える。集落の析出は、母村・子村関係で はあっても人口増加によるものではなく、極大 型・大型によってまず中核を形成し、それを 基盤として新たな定住地を確保し、その密度を 高めるとともに流通ネットワークの安定化を図 り、水田開発や集落の再生産を進めていったと 要約できるだろう。したがって、この理解によ る限り、新開集落は極大・大型とユニットをな すのは当然として、自然発生的な集落ではなく 計画的集落ということになるし、極大型・大型 は他より長期継続でなければならなかったとい える。

流通ネットワークの形成と水田開発に伴う新開集落の析出は現象的に重なっているが、基本的には別の動きである。流通ネットワークの形成は極大型および大型集落の成立を契機として、新開集落の形成とともに網の目は細かくなられる。そのなかで、くまなく行き渡った品目が生まれ、その差をわたしたちは「威信財」という用語では容易ではない。要は普及財と希少財(プラス広域流通品)ということだけれども、前者はどこでもみられるが、後者の出土は集落遺跡のとこのに、ということである。

さて、水田開発は、極大型・大型を中心にし てひたすら外部へと開発が進行し、それにあ わせて中型以下の新開集落が析出されたと考え る。それらの関係性こそが集落群であろう。た だし、その分布が同心円的である保証は無い。 長大な水路網を軸とするなら、線的・面的の両 者があり、その決着は中小河川や旧地表面の起 伏を復元しないと不可能である。集落遺跡の地 理的分布における最近隣関係が確かに有意な時 期・時代もあろうが、弥生時代中期まで時代が 下れば、それが実際の社会関係の粗密を表すと 考えるのはあまりにも素朴である。むしろ関係 の再生産こそが歴史・神話であり、それは空間 的距離に還元されない。ただ、残念ながら物質 を研究対象にする考古学では歴史・神話を扱う 方法は十分に洗練されていない。

極大型や大型集落は流通ネットワーク形成の 基盤であった。そして実態はターミナルではあったと認定できても、中継点であったと結論づけることはできない。朝日遺跡は磨製石斧の破損品を素材とする再生産(二次的生産)が行われた「消費地型生産地」である。それは基本的に供給を目指すものではなく、あくまで「と ことん使い切る」という方向にあったと考える (註 11)。濃尾平野ではこのことが大なり小なり 集落における生産局面を規定していたであろう。

# (2)極大型は唯一無二ということ

極大型は大型と峻別できるが、大型を析出した母体ではないし、また地域のなかでピラミッド構成の首座を占めるかどうかもわからない。むしろ、手工業生産の多様性・複雑性、広域的な関係性、継続する大規模性に意味がある。先には安定化のためにまず集住したと考え、基盤を確保して後に周辺に進出したと説明した。そうならば、極大型は縮小し周辺に集落を分散させた様子は窺えない。特になり、を対しており、現状では朝日遺跡に集落を分散させた様子は窺えない。特になり、を対しており、現状では朝日遺跡に関がである。実際は志賀公園遺跡のような小型が周辺に点在していたと考えているが、なお集中を継続しており、極大型は中期後半に続く(註12)。

朝日遺跡が析出したであろう小型の実例は明確ではないけれども、中型については阿弥陀寺遺跡が該当すると考えている。中期前葉末に朝日遺跡から析出した中型である可能性は高い。

したがって、この範囲では極大型を中心にして 大型・中型・小型という配列にはならない。た だ、阿弥陀寺遺跡と森南遺跡のように中型か ら小型の析出は通常のありかたであったと考え る。小型は極大型、大型、中型いずれからも析 出するということであろう(註13)。

#### (3)極大型の終末

弥生中期前半に成立した極大型の連続性は凹線紋系土器期をもって途絶える。八日市地方遺跡も戸水B式期には衰退する。

凹線紋系土器期には三重県では長・山籠遺跡群(丘陵上に立地)、愛知県では一色青海遺跡、川原遺跡など注目すべき遺跡が存在する。これらは同時期では規模が大きいだけでなくきわめて密集度が高い。だが環濠はめぐらないし、凹線紋系土器期のうちに終末を迎える。朝日遺跡もこの時期に集落が営まれるけれども、墓域の連続性が途絶えるので同一集落の連続とは考えない。この点が唐古・鍵遺跡と異なる。

わたしはここに環濠の廃絶に重ねて、極大型 集落の歴史的連続の途絶をみたいのである。

(註 11) この点に関しては長野県松原遺跡も再検討が必要だろう。榎田遺跡はたしかに「原産地型生産遺跡」であるが、松原遺跡はあくまで消費地であって、流通ネットワークをコントロールする機能があったかどうかはわからない。むしろ榎田遺跡の3 重環濠で囲まれた集落こそが春山B遺跡や松原遺跡など千曲川流域の遺跡群に対して中枢機能を果たしていた可能性は無かったのかと、わたしは思っている。

(註 12) 朝日遺跡には円窓付壺、八日市地方遺跡には多様な木製祭具、唐古遺跡には大型掘立柱建物があり、これらは同時期に一般的ではない。朝日遺跡の円窓付壺は凹線紋系土器期にも存続するが、その出土量は朝日遺跡への集中が顕著である。また、弥生中期中葉では浅鉢類が他に見ないほど出土頻度が高く、独自性が窺える。創造性も極大型の要件である。

(註 13) こうした関係がそのまま社会関係の安定性・連続性を意味するわけではない。若林氏は近畿について社会的安定性・統合性を維持する基盤として親族関係を想定したが、同祖同族が同心円的な広がりをもつとは限らないし、親族関係が相互の安全を保障するとも限らない。親族関係がある種の社会的緊張を緩和した可能性が無いとはいわないけれども、同時に緊張の原因になった可能性もあり、両義的であろう。

集落はいったん成立すれば、各種ネットワーク関係による相互の規制が多少はあっても、その振舞いは自由であろう。とはいえ、 洪水の頻発する低地帯が広がる河内平野や濃尾平野の集落間関係は、人々の移動が不測の事態ではなく織り込み済みであるよう な柔軟性がなければ存続できない。緊張と緩和の間で揺れるあらゆる関係の結節点として、極大型があらわれた可能性も考えて みたい。

大型は別にして中型から小型までは単位の複合という程度であり、それは個別の条件に適応したもので統一基準と序列が背景にあるわけではない。大型、そして極大型が核として存在したからこそ中型から小型が成立したのであり、したがって成層的なピラミッド構成ではなく、あくまで平板的な関係性において突出した集落を極大型・大型と考える。見かけ上、濃尾平野では極大型・大型が径約 10 kmに一つ程度存在して核を形成し、周辺を中型から小型、そして極小型が埋めるけれども、その配列はどのようにも読み取ることができる。わたしは、朝日遺跡が最近隣関係を超越するとみているが、いまだ十分に説明できない。

小論は、青木一男、秋山浩三、安藤広道、石川日出志、伊丹 徹、大島慎一、蔭山誠一、酒井龍一、笹沢正史、佐藤由紀男、篠原和大、菅榮太郎、武末純一、田崎博之、中島郁夫、禰宜田佳男、馬場伸一郎、平井 勝、平井典子、藤田三郎、福海貴子、穂積裕昌、松本 完、松本洋明、

森岡秀人、若林邦彦の諸氏との交流において、 わたしが受け取った明示的・暗示的な種々の教 示に基づく。また一色青海遺跡については樋上 昇・早野浩二両氏からいろいろ教えていただい た。多謝。

#### 主要「参考・引用〕文献

#### 報告書

愛知県教育委員会1975『環状2号線関係 朝日遺跡群第一次調査報告』。

愛知県教育委員会1982『朝日遺跡 I (本文篇1)』。

愛知県埋蔵文化財センター 2000『朝日遺跡 VI』。

愛知県埋蔵文化財センター1990『阿弥陀寺遺跡』。

愛知県埋蔵文化財センター1999『門間沼遺跡』。

愛知県埋蔵文化財センター 2001 『志賀公園遺跡』。

愛知県埋蔵文化財センター 2002 『八王子遺跡』。

愛知県埋蔵文化財センター 2003『猫島遺跡』。

甚目寺町教育委員会 1990『森南遺跡』。

三重県教育委員会 1970「東庄内 B 遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』。

津市教育委員会 1989『長遺跡』。

安濃町教育委員会1987『平田古墳群』。

三重県埋蔵文化財センター 1997『一般国道 23 号中勢道路 (9 工区) 建設事業に伴う長遺跡』。

各務原市埋蔵文化財調査センター 1994『宮塚遺跡 A 地区発掘調査報告書』。

#### 論文他

秋山浩三 1999「近畿における『神殿』・『都市論』の行方」『ヒストリア』163 号、大阪歴史学会。(この他、関係文献多数)

乾 哲也 1996「弥生中期における池上曽根遺跡の集落構造-都市的集落の解明に向けて-」『ヒストリア』152 号、大阪歴史学会。

宇野隆夫 1998「原始・古代の流通」『古代史の論点』第3巻、小学館。

金関 恕 1998a「都市の出現」『古代史の論点』第3巻、小学館。

金関 恕 1998b「都市の成立-西と東-」『考古学研究』第 45 巻第 3 号、考古学研究会。

蒲原宏行編(図録)2003『弥生都市はあったかー拠点環濠集落の実像ー』佐賀県立博物館。

酒井龍一1997『歴史発掘⑥ 弥生の世界』、講談社。

菅榮太郎 2003「弥生時代環溝集落小論 (2)」『考古学に学ぶ II』同志社大学考古学シリーズ VIII、同志社大学考古学シリーズ刊行会。

武末純-1998「弥生時代環溝集落と都市」『古代史の論点』第3巻、小学館。

武末純一2002『弥生の村』日本史リブレット、山川出版社。

田中義昭 1976「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』第 22 巻第 3 号、考古学研究会。

地村邦夫編 (図録)『弥生都市は語る-環濠からのメッセージー』大阪府立弥生文化博物館。

都出比呂志 1997「都市の形成と戦争」『考古学研究』第 44 巻第 2 号、考古学研究会。

寺沢 薫 1998「集落から都市へ-首長居館の成立と都市の誕生」『古代国家はこうして生まれた』、角川書店。

広瀬和雄 1998「弥生都市の成立」『考古学研究』第 45 巻第 3 号、考古学研究会。

福海貴子 2003「小松市八日市地方遺跡の報告」『フォーラム 北陸における弥生都市-小松市八日市地方遺跡を検証するー』小松市教育委員会。

藤田三郎 1999「奈良盆地における弥生集落の実態」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズVII、同志社大学考古学シリーズ刊行会。

三木 弘 2003「「弥生都市」の射程」『羽衣学園短期大学研究紀要』第 39 巻。

若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価-大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に-」『日本考古学』第 12 号、日本考古学協会。

若林邦彦 2003「基礎集団・遺跡群・弥生地域社会-大規模集落評価をめぐる補論-」『考古学に学ぶ II』 同志社大学考古学シリーズ VIII、同志社大学考古学シリーズ刊行会。

オギュスタン・ベルク 2002『風土学序説』、筑摩書房。

# 西尾市古新田遺跡出土瓦の再検討

―胎土分析の結果から―

● 小

小嶋廣也

古新田遺跡は、愛知県西尾市志貴野町宮前に所在する古代から中世にかけての複合遺跡である。矢作川と矢作古川の分岐点付近の矢作川左岸に位置している。遺物に凹面に布目痕の残る瓦が多く出土した。この矢作川流域には多くの古代寺院跡や瓦窯跡が知られており、本遺跡のすぐ南側に「志貴野廃寺」推定地や大郷瓦窯跡が位置している。報告書作成に際しこれらの瓦との比較検討をするために胎土分析を行ったが、時間的余裕がなく分析結果を十分に検討することができなかった。今回良き機会を得て分析結果をもう一度見直すことができた。小稿によって分析を行った各寺院跡・瓦窯跡を見ていくことで、古新田遺跡から出土した古代瓦について考えてみたいと思う。

#### 1 はじめに

古新田遺跡は、西尾市志貴野町宮前に所在する古代から中世にかけての複合遺跡である。検出された竪穴住居に代表されるように古代集落を中心とする遺跡で、寺院跡や瓦窯跡とは直接には関係がない。しかし、調査の際に包含層や中世の井戸・溝の中から凹面に布目の残ったるで、軒丸瓦の瓦当面と思われる瓦片や瓦塔なども確認されている。遺跡の南側には「志貴野廃寺」推定地や、やや離れて大郷瓦窯跡が位置しており、本遺跡周辺で古代瓦が採取されることは以前から知られていた。

昨年度、『古新田遺跡』の報告書を作成した中で、古新田遺跡で出土した瓦が何を意味するのかを少しでも明らかにするために古代瓦の胎土分析を実施した。分析は古新田遺跡だけではなく、豊田市の伊保白鳳寺跡・神明瓦窯跡、西尾崎市の北野廃寺跡、安城市の寺領廃寺跡、西尾市の雨堀瓦窯跡、幡豆町の北迫瓦窯跡・鳥羽神宮寺跡など、本遺跡出土の軒丸瓦と類似する軒丸瓦が出土している豊川市の三河国府跡や、寺領廃寺跡で出土した軒平瓦と同笵と思われる軒平瓦が出土している豊橋市の市道遺跡など、豊川流域の古代寺院跡の資料も比較資料として含めてい

る。胎土分析は、株式会社第四紀地質研究所に依頼した。報告書作成中は時間的な制約もあって結果を掲載することが精一杯で、検討を加えることができなかった。今回、再考をする機会を得た。

## 2 分析資料

資料の選定には、高浜市やきものの里かわら 美術館の天野卓哉氏にご協力いただいた。基本 的に丸瓦・平瓦を中心に、その中でも須恵質・ 土師質のもの、凸面の調整に違いのあるもの (ナデや叩き目調整など)を主に選び出してい る。報告書では東三河の豊川流域の資料を含め て253点を行っているが、今回対象となるも のは矢作川流域に所在する古代寺院跡と瓦窯跡 で、全部で213点となる(表1)。内訳は、軒 丸瓦4点、軒平瓦2点、丸瓦91点、平瓦116 点である。また、凸面の調整別に見てみると、 丸瓦ではナデ(ナデ消しを含む)と思われるも のを含めて83点、縄目叩きが7点、格子目と 思われるものが1点であり、平瓦ではナデ(ナ デ消しを含む)と思われるものを含めて40点、 縄目叩きが53点、格子目叩きが18点、平行 叩きが4点、不明が1点(凸面が剥離している ため調整が確認できない)である。中でも丸瓦 は、行基葺丸瓦を中心にしているが、玉縁式丸 瓦を5点含んでいる。以下、分析を行った古新 田遺跡を含む18ヶ所の寺院跡や瓦窯跡を簡単 に紹介する (図1)。なお、各資料の詳細につ いては、報告書(小嶋編 2003) を参照してい ただきたい。(註1)

#### 伊保白鳳寺跡 (豊田市保見町)

発掘調査は行われていないが、伊保川の河川付け替え工事の際に瓦列や瓦塔が出土したことから寺院跡と考えられている。資料は丸瓦8点・平瓦12点の計20点で、平瓦の凸面調整は縄目叩きが多く格子目叩きは少ないようである。

#### 牛寺廃寺跡 (豊田市野見町)

昭和 48 (1973) 年に発掘調査が行われているが、面積が僅かであったため遺構の性格や伽藍配置については不明な点が多い。資料は丸瓦4点・平瓦6点の計10点で、平瓦の凸面調整は格子目叩きがほとんどである。

#### 神明瓦窯跡 (豊田市鴛鴨町)

発掘調査は行われていないが、段丘崖下の水路から大量の瓦が出土していることから瓦窯跡と推定されている。採集された瓦の中に北野廃寺で出土した軒丸瓦と同じ文様をもつ軒丸瓦が確認されたことから、北野廃寺に瓦を供給していた瓦窯の1つと考えられている。資料は丸瓦9点・平瓦6点の計15点で、丸瓦・平瓦ともに凸面調整に叩き調整は見られなかった。

#### 舞木廃寺跡(豊田市舞木町)

塔跡が国指定史跡となり、塔心礎を中心として礎石が残存している。平成15(2003)年にトレンチ調査が行われているが、発掘調査は実施されていない。資料は丸瓦3点・平瓦4点の計7点で、凸面の調整は平瓦で格子目叩きが見られる。

# **勧学院文護寺跡**(豊田市寺部町)

現在の随応院境内に礎石が1つ残存し、文護 寺跡のものといわれる丸瓦・平瓦が1点づつ伝 えられている。資料は丸瓦1点・平瓦2点の計3 点で、平瓦で凸面の調整に格子目叩きが見られる。

#### 下り松瓦窯跡 (西加茂郡三好町)

昭和 40 (1965) 年頃に発掘調査が行われ、 須恵器を併焼した無段の窖窯であることが確認 されている。伊保白鳳寺で出土した軒丸瓦と同 笵の可能性の高い軒丸瓦が出土していることか ら、伊保白鳳寺に瓦を供給していた瓦窯である と考えられている。資料は軒丸瓦1点・丸瓦3 点・平瓦8点の計12点で、丸瓦・平瓦ともに 凸面の調整で縄目叩きが見られる。

#### 北野廃寺跡 (岡崎市北野町)

西三河最古といわれる古代寺院で、国史跡に指定されている。昭和39・54(1964・1979)年に発掘調査により遺構から四天王寺式伽藍配置が確認され、現在史跡公園として整備されている。資料は軒丸瓦2点・丸瓦8点・平瓦8点の計18点で、丸瓦・平瓦ともに凸面の調整に、縄目叩きと格子目叩きのものが見られた。

#### 真福寺東谷遺跡 (岡崎市真福寺町)

北野廃寺が真福寺に移転したと考えられていたが、昭和54 (1979) 年の発掘調査により別の寺院であることが確認されている。資料は丸瓦5点と平瓦5点の計10点で、平瓦の凸面調整で、縄目叩きと格子目叩きと思われるものが見られた。

#### 丸山廃寺跡 (岡崎市丸山町)

正式な発掘調査は行われていないが、校舎造成工事の際に大量の瓦が出土したことから寺院跡と考えられている。資料は丸瓦3点・平瓦3点の計6点で、平瓦の凸面調整で、縄目叩きが見られる。

#### 別郷廃寺跡(安城市別郷町)

発掘調査は行われていないが、古代瓦が散布していることから寺院跡と推定されている。資料は丸瓦4点・平瓦5点の計9点で、凸面の調整では丸瓦で縄目叩き、平瓦では平行叩きが見られる。

#### **大久根遺跡**(安城市小川町)

発掘調査は行われていないが、瓦がまとまって確認されていることなどから瓦窯跡と推定されている。資料は丸瓦3点・平瓦3点の計6点で、丸瓦・平瓦ともに凸面の調整に叩き痕は確認できていない。

#### **寺領廃寺跡**(安城市寺領町)

昭和32・平成13 (1957・2001) 年の発掘調査により遺構が確認され東大寺式伽藍配置であることが推定されているが、寺院の領域は確定できていない。資料は丸瓦10点・平瓦10点の計20点で、丸瓦・平瓦ともに凸面の調整で縄目叩きが見られる。

(註1)各寺院跡・瓦窯跡については個別には記載しないが、報告書や後述の参考文献を参照している。

#### 雨堀瓦窯跡 (西尾市米津町)

立地条件などから瓦窯跡と推定されているが、発掘調査が行われないまま消失した。同笵の瓦は確認されていないが、寺領廃寺に瓦を供給していたのではないかと推定されている。資料は丸瓦3点・平瓦3点の計6点で、平瓦の凸面調整で縄目叩きが見られる。

#### 志貴野遺跡 (西尾市志貴野町)

昭和63・平成元(1988・1989)年の発掘調査で奈良時代から平安時代までの集落遺跡であることが確認され、古代瓦が出土している。資料は丸瓦6点・平瓦6点の計12点で、平瓦の凸面調整に縄目叩きと格子目叩きが見られる。

#### 古新田遺跡 (西尾市志貴野町)

本遺跡で、平成 12 年 (2000) 年の発掘調査で奈良時代までの集落跡が確認され、古代瓦や瓦塔が出土している。西尾市教育委員会の調査では、瓦は数点しか出土していない。資料は丸瓦 6 点・平瓦 14 点の計 20 点で、平瓦の凸面の調整には縄目叩きと格子目叩きが見られる。

#### 北迫瓦窯跡 (幡豆郡幡豆町)

土地改良事業に伴い平成4 (1992) 年に試掘調査が行われ、灰原の一部が確認され軒瓦を含む瓦が出土している。出土した軒丸瓦の中に同笵の軒丸瓦があることから、鳥羽神宮寺に瓦を供給していたと考えられている。資料は軒平瓦1点・丸瓦5点・平瓦11点の計17点で、丸瓦・平瓦とも凸面の調整で縄目叩きが見られる。

## 寺部堂前遺跡 (幡豆郡幡豆町)

付近の住民が瓦を持ち込んだことにより寺院 跡と推定されるようになり、寺部廃寺ともいわ れている。平成 14 (2002) 年にトレンチ調査 が行われている。資料は軒平瓦 1 点・丸瓦 5 点・ 平瓦 5 点の計 11 点で、丸瓦・平瓦ともに凸面 の調整で縄目叩きが見られる。

#### 鳥羽神宮寺跡 (幡豆郡幡豆町)

現在の神明社境内周辺から瓦が出土することが知られており、寺院跡と推定されているが発掘調査は行われていない。資料は軒丸瓦1点・丸瓦5点・平瓦5点の計11点で、丸瓦・平瓦ともに凸面の調整で縄目叩きが見られる。

以上が、胎土分析を行った寺院跡・瓦窯跡である。これ以外にも、豊田市の駒場瓦窯跡、知立市の慶雲廃寺跡、岡崎市の大門遺跡・高隆寺

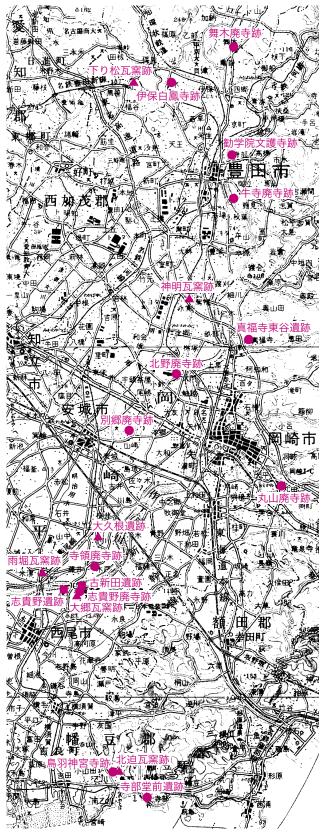


図1 胎土分析を実施した寺院跡・瓦窯跡位置図 (1:200,000)(国土地理院「豊橋」20万分の1より転載)

跡、安城市の塔の元遺跡、西尾市の志貴野廃寺 跡・大郷瓦窯跡等が知られているが、今回は分 析をすることはできなかった。ここで、古新田 遺跡と近接する志貴野廃寺跡と大郷瓦窯跡を紹 介しておく。

#### 志貴野廃寺 (西尾市志貴野町)

広い範囲から古代瓦が採集できることや礎石と 推定される石が存在することなどから、寺院跡と 推定されている。発掘調査は実施されていない。

#### **大郷瓦窯跡**(西尾市小島町)

かつて土取りの際に1ヶ所から多量の瓦が出土したことやその立地などから、瓦窯跡と推定されている。発掘調査が行われないまま消失した。寺領廃寺出土の軒丸瓦と同笵の軒丸瓦が確認されていることから、寺領廃寺に瓦を供給していた瓦窯と考えられている。また、その位置関係から志貴野廃寺にも瓦を供給していたのではないかといわれている。

今回の胎土分析では、X線回析と化学成分分析の2つの分析を行っている。分析の結果については膨大なデータがセンターに保管されてきるので、詳しくはそれを参考にしていただきえられるのかを見ていきたい。しかし、寺院跡で瓦窯跡では発掘調査が行われている事例が極めて少なく、資料も表採資料が多く含まれているではを予め断っておきたい。正確性にやや欠ける面があるかもしれないが、ある程度の傾向を見いだすことができるのではないかと思う。

#### 3 X線回析

#### (1) 実験条件

X線回折に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折によった。測定には日本電子製 JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°、計数時間: 0.5 秒。

(註2)井上氏の報告書に基づく。

#### (2) タイプ分類

X線回析に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字は、チャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの強度を示す。その結果から井上氏は、胎土を9つにタイプ分類されている。(註2) なお鉱物は、モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) である。

**A タイプ**: Hb 1 成分を含み、Mont,Mica,Ch の 3 成分に欠ける。

**Bタイプ**: Mica,Hb,Ch の 3 成分を含み、Mont 1 成分に欠ける。

**Cタイプ**: Mica,Hb の 2 成分を含み、Mont,Ch の 2 成分に欠ける。

**Dタイプ**: Mica,Hb,Ch の 3 成分を含み、Mont 1 成分に欠ける。組成的にはBタイプと類似するが検出強度が異なる。

**Eタイプ**: Mica,Hb の2成分を含み、Mont,Ch の2成分に欠ける。組成的にはCタイプと類似するが検出強度が異なる。

**Fタイプ**: Mica,Ch の 2 成分を含み、Mont,Hb の 2 成分に欠ける。

**G タイプ**: Mica 1 成分を含み、Mont,Hb,Ch の 3 成分に欠ける。

**Hタイプ**: Mont,Mica の 2 成分を含み、Hb,Ch の 2 成分に欠ける。

**Iタイプ**: Mont, Mica, Hb, Ch の 4 成分に欠ける。 高温で焼成されているため、鉱物は分解してガラス に変質したもので、 4 成分は検出されない。

この分類によれば、Aタイプには、丸瓦4点・平瓦2点の計6点で、北追瓦窯跡の丸瓦・平瓦が主体となる。Bタイプには丸瓦のみ3点で、北追瓦窯跡の丸瓦が主体となる。Cタイプには、軒丸瓦1点・丸瓦7点・平瓦12点の計20点で、寺部堂前遺跡・鳥羽神宮寺跡の丸瓦・平瓦が主体となる。Dタイプには平瓦のみ2点である。Eタイプには、丸瓦2点・平瓦3点の計5点である。Fタイプには、丸瓦3点・平瓦6点の計9点で、牛寺廃寺跡の平瓦が主体となる。Gタイプには、丸瓦30点・平瓦36点の

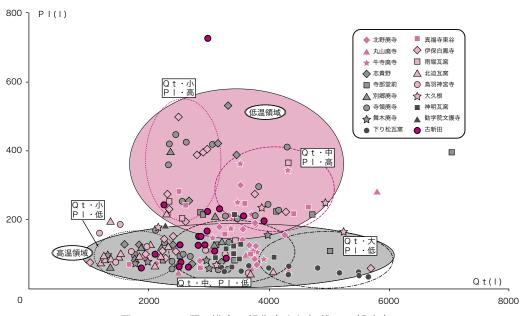


図2 Qt-PI図(総合、報告書より転載、一部改変)

計 66 点で、北野廃寺跡・真福寺東谷遺跡・別 郷廃寺跡・寺領廃寺跡・神明瓦窯跡・古新田遺 跡の丸瓦・平瓦が主体となる。Hタイプは、丸 瓦・平瓦が各1点の計2点である。 I タイプに は、軒丸瓦3点・軒平瓦2点・丸瓦41点・平 瓦 54 点の計 100 点で、ほとんどの瓦が含まれ ているが、北野廃寺跡・伊保白鳳寺跡・丸山廃 寺跡・舞木廃寺跡・下り松瓦窯跡・志貴野遺跡・ 古新田遺跡の丸瓦・平瓦、神明瓦窯跡の丸瓦、 北迫瓦窯跡の平瓦が主体となり、軒丸瓦・軒 平瓦のほとんどが含まれている。9つのタイプ のうち、高温で焼成され4成分が検出されない I タイプが最も多く、全体の 46.9%を占める。 次いで、雲母類 (Mica) の1成分が検出され る G タイプが 31.0%、雲母類 (MIca)・角閃 石(Hb)の2成分が検出されるCタイプが9.4% を占め、この3試料で全体の87.3%を占めてい る。これ以外のA、B、D、E、F、Hの6タ イプでは全体の12.7%を占めるのみである。

#### (3) 石英(Qt) -斜長石(PI) の相関について

胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は、粘土の材質、焼成温度と大きな関わりがある。これにより胎土を分類することができる。図2のQt-Pl図(総合、丸瓦・平瓦別は図3)

に示すように、石英(Qt)の強度が小さい領域から大きい領域にかけてQt:小、Qt:中、Qt:大、斜長石(Pl)の強度が低い領域から高い領域にかけて焼成温度の低いPl:高、焼成温度の高いPl:低に分類されている。(註3)

Qt: 小・PI: 高 – Qt が 2000 ~ 3200、PI が 200 ~ 550 の領域に分布する。

Qt: 中・PI: 高 – Qt が 3100 ~ 5200、PI が 200 ~ 400 の領域に分布する。

Qt:小・PI:低 – Qtが 800 ~ 2600、PIが 50~ 200 の領域に分布する。

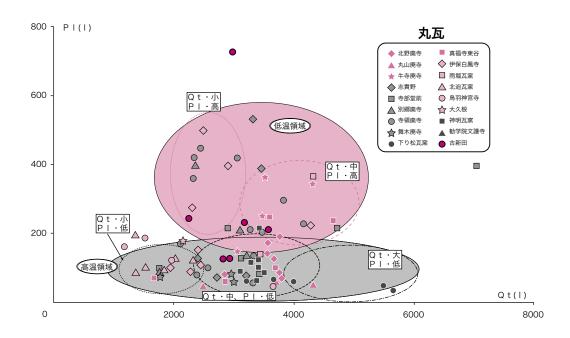
Qt:中・PI:低-Qtが2500~4400、PIが50~200の領域に分布する。

Qt:大・PI:低-Qtが3600~6000、PIが50 ~200の領域に分布する。

その他:上記の分類に入らないものが「その他」として分類されている。古新田遺跡-5はPlが高、丸山廃寺跡-4、寺部堂前遺跡-5はQtが大で異質である。

これによれば、「Qt:小・Pl:高」には、丸 瓦10点・平瓦16点の計26点で、伊保白鳳 寺跡・寺領廃寺跡の丸瓦・平瓦と、真福寺東谷 遺跡・雨堀瓦窯跡の平瓦が主体となる。「Qt:中・

(註3)註2に同じ。



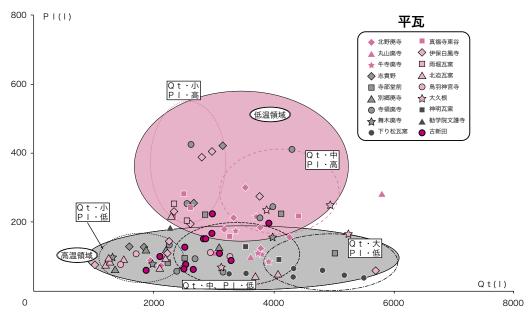


図3 Qt—PI図(平瓦・丸瓦、報告書より転載、一部改変)

PI:高」には、軒丸瓦1点・丸瓦13点・平瓦14点の計28点で、寺領廃寺跡・真福寺東谷遺跡・牛寺廃寺跡の丸瓦・平瓦と、北野廃寺跡の平瓦が主体となる。「Qt:小・PI:低」には、軒平瓦1点・丸瓦24点・平瓦36点の計61点で、伊保白鳳寺跡・北迫瓦窯跡・鳥羽神宮寺跡・別郷廃寺跡・志貴野遺跡の丸瓦・平瓦と、舞木廃寺跡・古新田遺跡の平瓦が主体となる。「Qt:中・PI:低」には、軒丸瓦3点・丸瓦36点・平瓦41点の計80点で、北野廃寺跡・丸山廃寺跡・

神明瓦窯跡・鳥羽神宮寺跡の丸瓦・平瓦と、舞木廃寺跡・牛寺廃寺跡の丸瓦、別郷廃寺跡・古新田遺跡の平瓦が主体となる。「Qt:大・Pl:低」には、軒丸瓦1点・丸瓦3点・平瓦8点の計12点で、下り松瓦窯跡の丸瓦・平瓦が主体となる。これ以外に、「Qt:小中・Pl:高」には、丸瓦2点・平瓦1点の計3点で、すべて志貴野遺跡の瓦である。「その他」に分類されたものが、丸瓦2点・平瓦1点の計3点である。このうち、一番多いのは「Qt:中・Pl:低」の瓦

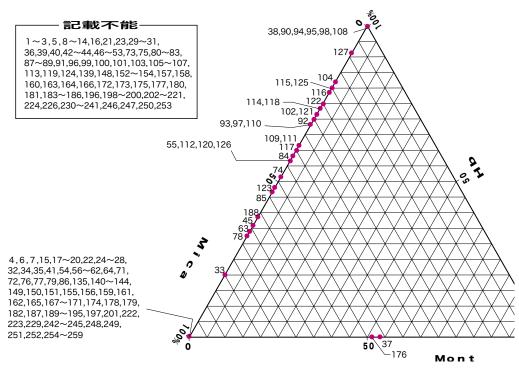


図4 Mont—Mica—Hb 三角ダイヤグラム (報告書より転載、一部改変)

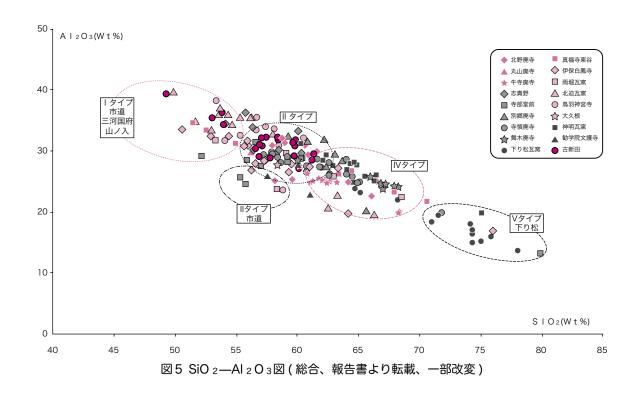
で37.6%、次いで「Qt:小・Pl:低」の瓦で28.6%であり、この2つで全体の66.2%を占めている。また、石英(Qt)・斜長石(Pl)を別々に見てみると、「Qt:小・中」の瓦が混入される砂の量が比較的少ない瓦は全体の93.0%とその大半を占めている。「Pl:低」の焼成ランクが高い瓦は、全体で71.8%を占めている。

#### (4) 小結

図4のMont - Mica - Hb 三角ダイヤグラムを見ると、3つの成分を含まないとして記載不能とされた瓦が多く見られるが、これは高温で焼成されたことで鉱物がガラスに変質であることができる。これ以外の可能であると考えることができる。これ以外の可能であるとがわかる。雲母類が花崗岩の特徴的であることからいたことを示めしていたことを示めしていたことを示めしていたことを示めしている。この中で、雲母類が100%の瓦は、丸瓦33点・平瓦41点の計74点である。北野廃寺跡・真福寺東谷遺跡・神明瓦窯跡・牛寺廃寺跡・寺領廃寺跡・別郷廃寺跡・市堀瓦窯跡・東瓦、伊保白鳳寺跡・東山廃寺跡の丸瓦、舞木廃寺跡・丸山廃寺跡の

を見ることができる。丸瓦のうち32点はナデ調整(ナデ消しを含む)で、残る1点は縄目叩き調整である。平瓦のうちナデ調整(ナデ消しを含む)の瓦は18点で、縄目叩き13点、格子目叩き8点、平行叩き2点となっている。

また、雲母類 (Mica) が100%の瓦74点 をタイプ別に見てみると雲母類 (Mica) の 1 成分が検出されるGタイプがほとんどである が、雲母類 (Mica)・角閃石 (Hb) の2成分 が検出されるFタイプが8点(丸瓦3点・平瓦 5点) 含まれている。石英(Qt) -斜長石(Pl) 別に見てみると、「Qt:小・Pl:高」には、丸 瓦6点・平瓦8点の計14点(18.9%)である。 「Qt:小・Pl:低」には、丸瓦2点・平瓦7点 の計 9 点 (12.2%) である。「Qt:中・Pl:高」 には、丸瓦 10 点・平瓦 9 点の計 19 点 (25.7%) である。「Qt:中・Pl:低」には、丸瓦 13 点・ 平瓦 15 点の計 28 点 (37.8%) である。「Qt: 小中・Pl:高」には、丸瓦のみ 1 点 (1.4%)、 「Qt:大·Pl:低」には、平瓦のみ 1 点 (1.4%)、 「その他」には、丸瓦・平瓦が各1点の計2点 (2.7%) である。全体の比率から見てみると、 「Qt:中・Pl:低」が多いことには変わらない が、「Qt:小・Pl:高」の比率が減少し「Qt:



中・PI:高」が増加していることが確認できる。これは、焼成ランクが低い瓦が多いことを示している。ただし、焼成ランクの高低については、同じ窯においても窯内に詰められた段階で焚き口に近いか遠いかで違いが生じるとも考えられ、一概に焼成温度の違いだけで分類することが可能であるのか疑問が残る。同じタイプならば、焼成ランクの違いだけで分類するのは好ましくないと思われる。

#### 3 化学成分分析

#### (1) 実験条件

化学成分分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーテングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧:15kV、分析法:スプリント法、分析倍率:200倍、分析有効時間:100秒、分析指定元素10元素で行った。

分析結果は酸化物として、ノーマル法(10

元素全体で 100% となる)で計算し、化学成分分析表を作成している。その分析表に基づいて Si O  $_2$  – Al  $_2$  O  $_3$  図、Fe  $_2$  O  $_3$  = Na  $_2$  O 図、 K  $_2$  O – Ca O 図、 Ti O  $_2$  – Mn O 図を作成し、 瓦を元素の面から分類している。ここでは、組成分類の基本となっている Si O  $_2$  – Al  $_2$  O  $_3$  図を中心に見ておく。

#### (2)Si O<sub>2</sub>- Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の相関について

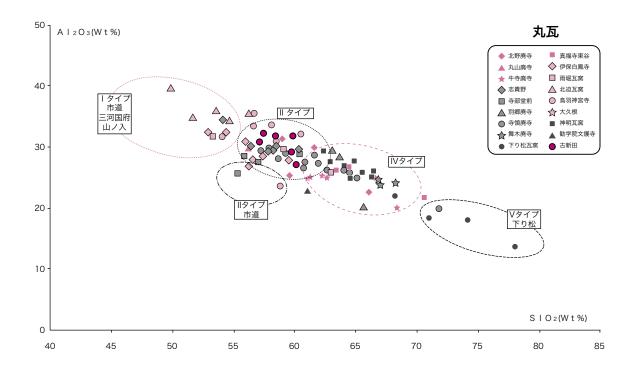
図 5 の Si O<sub>2</sub> – Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図 (総合、丸瓦・平瓦別は図 6) に示すように、瓦は Si O<sub>2</sub>が低い領域から高い領域に向かって、  $I \sim V$  タイプの 5 タイプに分類されている (表 1)。(註 4)

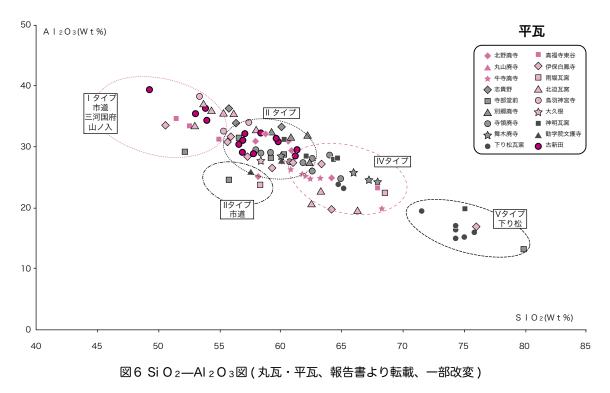
I タイプ: Si O₂が 43 ~ 56%、AI₂O₃が 28 ~ 40%の領域に分布する。

 $\mathbb{N}$ タイプ:Si O  $_2$ が 60  $\sim$  70%、Al  $_2$  O  $_3$ が 18  $\sim$  30%の領域に分布する。

Vタイプ: Si O  $_2$ が 70  $\sim$  82%、Al  $_2$  O  $_3$ が 12  $\sim$  22%の領域に分布する。

(註4)註2に同じ。





I タイプには、丸瓦 8 点・平瓦 17 点の計 25 点で、伊保白鳳寺跡・志貴野遺跡・北迫瓦窯跡の丸瓦・平瓦、真福寺東谷遺跡・古新田遺跡の平瓦が主体となる。Ⅲタイプには、丸瓦 1 点・平瓦 2 点の計 3 点のみである。Ⅲタイプには、軒丸瓦 3 点・軒下瓦 1 点・丸瓦 49 点、平

瓦 68 点の計 121 点で、北野廃寺跡・丸山廃寺跡・伊保白鳳寺跡・寺領廃寺跡・大久根遺跡・ 志貴野遺跡・寺部堂前遺跡・鳥羽神宮寺跡・古新田遺跡の丸瓦・平瓦、真福寺東谷遺跡・雨堀 瓦窯跡の丸瓦、牛寺廃寺跡・勧学院文護寺跡・ 別郷廃寺跡・神明瓦窯跡の平瓦が主体となる。 IVタイプには、軒平瓦1点・丸瓦30点・平瓦21点の計52点で、北野廃寺跡・舞木廃寺跡・神明瓦窯跡の丸瓦・平瓦、牛寺廃寺跡・別郷廃寺跡の丸瓦、雨堀瓦窯跡・北迫瓦窯跡の平瓦が主体となる。Vタイプには、軒丸瓦1点・丸瓦3点・平瓦8点の計12点で、下り松瓦窯跡の丸瓦・平瓦が主体となる。5つのタイプのうち一番多いのはⅢタイプの瓦で、56.8%を占めている。次いでIVタイプが24.4%を占め、この2つのタイプで全体の81.2%を占めている。

## (3) 小結

各寺院跡・瓦窯跡の瓦を Si O 2-Al 2 O 3 図 で分類されたタイプ別に見てみると、丸山廃寺 跡の瓦は1タイプ、牛寺廃寺跡・舞木廃寺跡・ 勧学院文護寺跡・下り松瓦窯跡・北野廃寺跡・ 別郷廃寺跡・大久根遺跡・志貴野遺跡・鳥羽神 宮寺跡の瓦は2タイプ、神明瓦窯跡・真福寺東 谷遺跡・寺領廃寺跡・雨堀瓦窯跡・古新田遺跡 の瓦は3タイプ、伊保白鳳寺跡・北迫瓦窯跡・ 寺部堂前遺跡の瓦は4タイプに分かれている。 これらのタイプ数の違いが意味するものは何で あろうか。単純に複数の瓦窯から瓦が供給され たと考えることができるし、寺院が長期間存在 していたために創建時の瓦以外に補修用の瓦が 新たに搬入されたとも考えることができる。表 採資料が多いこともあり詳しいことはわからな いが、北野廃寺跡や寺領廃寺跡の例などから後 者であった可能性が高いと思われる。

また、Mont - Mica - Hb 三角ダイヤグラムで雲母類 (Mica) が100%の瓦74点だけを見てみると、 I タイプには、丸瓦2点・平瓦5点の計7点(9.5%) である。II タイプには丸瓦のみ1点(1.4%)である。III タイプには、丸瓦16点・平瓦27点の計43点(58.1%)である。IVタイプには、丸瓦13点・平瓦8点の計21点(28.4%)である。Vタイプには丸瓦・平瓦が各1点で計2点(2.7%)である。これを全体と比較してみると、 I・Vタイプがやや減少し、III・IVタイプが増えていることが確認できる。これは I・Vタイプの瓦が高温で焼かれているため、鉱物が分解しガラスに変質している瓦が多いことが影響しているのかもしれない。

## 4 まとめ

## (1) 胎土分析の結果について

古新田遺跡より出土した瓦の分析と周辺地域の瓦の分析結果を取りまとめたものが表 2の組成分類表に示してある。これは化学成分分析による  $Si O_2$  –  $Al_2O_3$  の相関で  $I \sim V$  の 5 つのタイプに分類したものを、X 線回析による石英(Qt) – 斜長石(Pl) の相関を加味して細分し、表 2 に示すように全体で瓦を 43 タイプに分類されている。(註 5) 43 タイプのうち、軒丸瓦は 3 タイプ・軒丸瓦は 2 タイプ・丸瓦は 18 タイプ・平瓦は 20 タイプにそれぞれ分類されている。今回分析を行った寺院跡・瓦窯跡毎に、2 つの分析により得られたタイプ分類と組成分類について見ていきたい。

**伊保白鳳寺跡** タイプ分類では、丸瓦は4タイプ、平瓦は3タイプに分類されている。組成分類では、丸瓦は4タイプ、平瓦は6タイプに分類されている。しかし、焼成ランクが異なるためにいくつかに分類されているが、化学組成的には類似性が高いといえる。

牛寺廃寺跡 タイプ分類では、丸瓦・平瓦ともに3タイプに分類されており、雲母類 (Mica)・角閃石 (Hb) の2成分が検出される Fタイプが目立つ。組成分類では、丸瓦は2タイプ、平瓦3タイプに分類されているが、伊保白鳳寺跡同様化学組成的には類似性が高いといえる。また、丸瓦はIVタイプ・平瓦はⅢタイプと区別されており、瓦の種類により供給元が違う可能性も考えられる。

神明瓦窯跡 タイプ分類では、丸瓦で4タイプ、平瓦で2タイプに分類されている。組成分類では、丸瓦は3タイプ、平瓦4タイプに分類されているが、丸瓦・平瓦ともにIVタイプがその大半を占めていることから、化学組成的には類似性が高いといえる。北野廃寺の瓦の1つのタイプと同じであり、北野廃寺に補修用の瓦を供給した窯跡と考えられる。

**舞木廃寺跡** タイプ分類では、丸瓦で1タイプ、平瓦で2タイプに分類されている。組成分

(註5)(註6)註2と同じ。

類では、丸瓦は2タイプ、平瓦は3タイプに分類されているが、平瓦1点(Ⅲタイプ)を除けばⅣタイプのみとなり、化学組成的には類似性が高いといえる。

**勧学院文護寺跡** 資料数は3点と少ないが、 タイプ分類では丸瓦・平瓦ともに1タイプ、組 成分類でも丸瓦・平瓦ともに1タイプのみに分 類されている。瓦の種類による区別はなさそう である。

下り松瓦窯跡 タイプ分類では、丸瓦・平瓦ともに1タイプのみである。組成分類では、丸瓦は2タイプ、平瓦は3タイプに分類されているが、そのほとんどがVタイプで「PI:低」という焼成温度が高い瓦であり、他の瓦とは明らかに異なっていることがわかる。軒丸瓦についても同様のことがいえる。この瓦窯から伊保白鳳寺に瓦が供給されていたと考えられているが、今回の結果からは共通点が少ないように思われる。(註6)

**北野廃寺跡** タイプ分類では、丸瓦は3タイプ、平瓦は2タイプに分類されている。組成分類では、丸瓦は3タイプ、平瓦は4タイプに分類されているが、焼成ランクが異なるだけで大きくⅢ・Ⅳの2つのタイプに分けられる。2点の軒丸瓦はともにⅢタイプで、丸瓦や平瓦と区別して考えることはできないと思われる。

真福寺東谷遺跡 タイプ分類では、丸瓦は2タイプ、平瓦は1タイプのみに分類されている。Gタイプで雲母類 (Mica) の強度が高いものがあり、他の瓦とはやや異なっている。組成分類では、丸瓦は4タイプ、平瓦は3タイプに分類されているが、焼成ランクが異なるだけで、丸瓦はIII・IVの2つのタイプ、平瓦はI・III・IVの3つのタイプに分けられる。位置的に近い北野廃寺跡の瓦に分類的には近いが、平瓦のIタイプは異質と思われる。

丸山廃寺跡 タイプ分類では、丸瓦では1タイプのみ、平瓦では2タイプに分類されている。Gタイプで雲母類 (Mica) の強度の高いものがあり、他の瓦とはやや異なる。組成分類では、丸瓦は1タイプ、平瓦は2タイプに分類されており、丸瓦・平瓦ともほぼまとまりをもっていると思われる。

別郷廃寺跡 タイプ分類では、丸瓦・平瓦と

も2タイプに分類されている。組成分類でも丸 瓦・平瓦とも2タイプに分類されている。丸瓦 と平瓦は、焼成ランクが異なるものの別々のタ イプと考えられる。

大久根遺跡 タイプ分類では、丸瓦は2タイプ、平瓦は3タイプに分類されている。組成分類でも、丸瓦は2タイプ、平瓦は3タイプに分類されているが、丸瓦・平瓦ともにⅢ・Ⅳの2つのタイプが見られ、瓦の種類による区別はなさそうである。

寺領廃寺跡 タイプ分類では、丸瓦は2タイプ、平瓦は3タイプに分類されている。平瓦に、モンモリロナイト (Mont)・雲母類 (Mica)の2成分が検出されるHタイプが1点確認され、やや異質である。組成分類では、丸瓦は5タイプ、平瓦は6タイプに分類されている。焼成ランクの違いを考慮に入れても、丸瓦は3タイプ、平瓦は2~3タイプになると思われる。他の寺院跡に比べてタイプ数が多く、分散する傾向がみられる。

雨堀瓦窯跡 タイプ分類では、丸瓦は2タイプ、平瓦は3タイプに分類されている。平瓦に雲母類 (Mica)・角閃石 (Hb) の2成分が検出されるCタイプが1点確認されている。組成分類では、丸瓦は2タイプ、平瓦は3タイプに分類されている。丸瓦・平瓦ともにタイプ数が多く、1つの瓦窯としては異質と思われる。この点をふまえると、丸瓦・平瓦ともに寺領廃寺跡の瓦と共通するタイプが見られることから、寺領廃寺に瓦を供給していた窯跡である可能性は高いと思われる。

**志貴野遺跡** タイプ分類では、丸瓦は3タイプ、平瓦は4タイプに分類されている。雲母類 (MIca)・角閃石 (Hb) の2成分が検出される C・E タイプと、雲母類 (Mica)・角閃石 (Hb)・緑泥石 (Ch) の3成分が検出されるDタイプが見られる。組成分類では、丸瓦で3タイプ、平瓦で5タイプに分類されているが、それぞれ大きくⅠ・Ⅲの2つのタイプと考えることができる。

北迫瓦窯跡 タイプ分類では、丸瓦・平瓦とも3タイプに分類されている。角閃石 (Hb) の1成分が検出されるAタイプや雲母類 (Mica)・角閃石 (Hb)・緑泥石 (Ch) の3成

分が検出されるBタイプが目立っている。角閃石(Hb)の強度の高いCタイプの瓦が1点ある。組成分類では、丸瓦で2タイプ、平瓦で5タイプに分類され、Iタイプが半数以上を占めている。軒平瓦はIVタイプで、丸瓦と平瓦は別のタイプと考えられる。タイプ分類・組成分類ともに他の寺院跡・瓦窯跡とは異質である。

**寺部堂前遺跡** タイプ分類では、丸瓦は3タイプ、平瓦は2タイプに分類されているが、角関石 (Hb) の強度の高いCタイプの瓦が目立っている。組成分類では、丸瓦は4タイプ、平瓦は5タイプに分類されているが、丸瓦はⅢタイプの1つのタイプであるのに対し、平瓦はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴの4つのタイプに分けられ特異である。また、軒平瓦はⅢタイプである。

鳥羽神宮寺跡 タイプ分類では、丸瓦・平瓦ともに3タイプに分類されている。北迫瓦窯跡・寺部堂前遺跡と同様、角閃石(Hb)の強度の強いCタイプの瓦が目立っている。組成分類では、丸瓦は2タイプ、平瓦は3タイプに分類されているが、ほとんどがⅢタイプである。また、軒丸瓦はタイプ分類は異なるが、組成分類では丸瓦・平瓦と同様にⅢタイプである。

以上、古新田遺跡を除く17ヶ所の寺院跡・ 瓦窯跡をそれぞれ見てみると、ある程度の傾向 をつかむことができる。神明瓦窯跡・北野廃寺 跡・下り松瓦窯跡・丸山廃寺跡・北迫瓦窯跡な どのようにある程度のまとまりがあるものと、 寺領廃寺跡・雨堀瓦窯跡・寺部堂前遺跡などの ように分散する傾向の強いものとがあること がわかる。これが意味するところは何であろう か。まとまりのみられるものは、1つの窯から 瓦が供給され短期間しか存在しなかった、逆に 分散傾向の強いものは、長期間継続していたた めに複数の窯から瓦が供給されたためと考える ことができるのではないだろうか。また、1つ の窯をみてもいくつかのタイプが見られる。長 期間操業していくなかで、原料の粘土が変化し たり、砂の混合比が変化したり、製作技法が変 化したり、職人が変化したりと、さまざまな要 因を想定することができる。今回の分析におい て、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦という瓦の種類による胎土の違い、凸面の調整による胎土の違い、丸瓦で行基葺丸瓦と玉縁式丸瓦の胎土の違いを明らかにすることを主眼としていたが、今回の分析だけでは不十分であり、まだまだ資料数が不足していると実感した。さらなる胎土分析の積み重ねが必要である。

## (2) 古新田遺跡出土の古代瓦

最後に古新田遺跡の分析結果を見ておく。タ イプ分類では、丸瓦・平瓦ともに雲母類 (Mica) の1成分が検出されるGタイプと、高温で焼成 されたため4成分が検出されない [タイプの2 つに分類される。この2つのタイプで今回分析 を行った瓦全体の約78%を占めている。組成 分類では、丸瓦は3タイプ、平瓦は6タイプに 分類される。丸瓦・平瓦ともに概ねⅢタイプで まとめられるが、丸瓦ではⅡタイプが、平瓦で は I タイプの瓦が確認されている。胎土分析を 行った井上氏によれば、「寺領廃寺の瓦類は大 きく分けて3種類あり、傾向としては異質であ る。(中略) 古新田遺跡の瓦類は寺領廃寺跡の 瓦類と類似する傾向が認められ、3種類とも同 じ領域にあり、関連性が伺われる。」と指摘さ れている。(註7) 今回の分析結果をみてみる と、大部分の瓦については寺領廃寺跡の瓦に類 似していると思われるが、IIタイプの丸瓦やI タイプの平瓦などの一部の瓦では旧幡豆郡の北 迫瓦窯跡・寺部堂前遺跡・鳥羽神宮寺跡の瓦に 共通点が見られるようにも考えられる。

また、古新田遺跡から出土した瓦の中で、軒 丸瓦の瓦当部分が7点と、軒平瓦と思われる瓦 片が数点確認されている(図7)。軒丸瓦の瓦 当面は大きく2つに分けられる。まず1つ目は 1~3(図7)で、半球状の中房をもつ素弁蓮 華文の土師質の軒丸瓦で、三角形の間弁や周囲 に圏線をもち、周縁は無文と思われる。ただし、 瓦当面裏下半部に周縁状の突帯があったのかに ついては摩滅が激しく不明である。一応北野廃 寺系の軒丸瓦とみることができる。類例を探し たところ豊川市の三河国府跡で出土した軒丸瓦

(註7)名古屋市博物館梶山氏やかわら美術館天野氏のご教示による。

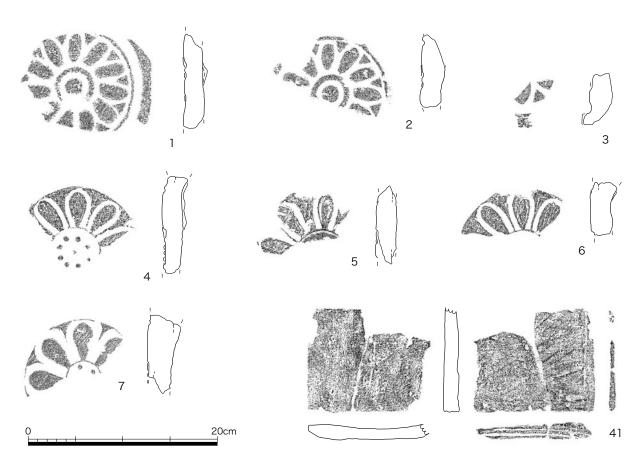


図7 古新田遺跡出土の軒丸瓦・軒平瓦(報告書より転載、一部改変)

が類似しているが、蓮華文の葉の数や間弁が丸 形と三角形という違いがみられる。これは、矢 作川流域で盛んに作られていた北野廃寺系の 軒丸瓦が三河国府に影響を与え、さらに三河 国府から古新田遺跡で出土した軒丸瓦に伝えら れたものと考えられる。(註8) このような例 は他にも見られる。例えば、安城市の寺領廃寺 跡でみられる波状文 (鋸歯文) に珠点を配した 軒平瓦が豊橋市の市道遺跡で出土していること や、小坂井町の医王寺跡でみられる型押し廉状 文の軒平瓦が幡豆町の寺部堂前遺跡で出土して いることなどがあげられる。今回の胎土分析の 結果からそれぞれの瓦の胎土が異なっているこ とは明らかであり、西三河で作られた瓦が東三 河に持ち込まれたのではなく、工人や技術(瓦 の笵など) が移動したことを示していると思わ れる。古新田遺跡で出土したこれらの瓦は、東 三河から逆輸入された工人・技術により作られ たこととなる。時期的にもよくわかっていない が、三河国府跡より新しい段階の瓦と考えられ る。(註9) この軒丸瓦は、周辺の寺院跡から 確認されていないことから、存在に不明な点が 多いが志貴野廃寺の屋根を飾っていた瓦と考え ることも可能である。2つ目は4~7 (図7) で、一部に単弁が見られる素弁蓮華文の文様を もち、中房には蓮子が配置された須恵質の軒丸 瓦である。周囲に布目痕が確認されていること から、側板連結模骨の丸瓦を接合させていたと 思われる。これらの軒丸瓦は、寺領廃寺跡出土 の軒丸瓦と類似性が高い。さらに、西尾市資料 館に所蔵されている大郷瓦窯から出土したとい われる軒丸瓦を見せていただいた時に、4(図 7) の軒丸瓦と酷似しており、これらの軒丸瓦 が大郷瓦窯で作られた可能性が高いと考えるよ うになった。今回胎土分析を実施してはいない が、大郷瓦窯が寺領廃寺に瓦を供給していたと

(註8)(註9) 名古屋市博物館梶山氏やかわら美術館天野氏のご教示による。

# 表1 分析瓦一覧表

| r                     | Market 4    |                   |           |            | <b>3</b> (1) // // // // // // // // // // // // // |                   |    |               |   |                    |
|-----------------------|-------------|-------------------|-----------|------------|---|-------------------|----|---------------|---|--------------------|
| 遺跡試料No                | 資料名<br>遺跡場所 | 旧郡                | 瓦 種       | 材質         |   | 1                 | 備考 | タイプ<br>分類     | 組成分類  | 分析試料番号             |
| 北野廃寺-1                | 岡崎市         | 旧碧海郡              | 軒丸瓦       | 土師質        |   |                   |    |               | IIIタイプ:Q t ー中・P I -低  | 古新田一1              |
| 北野廃寺-2<br>北野廃寺-3      | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧碧海郡              | 軒丸瓦<br>丸瓦 | 土師質<br>須恵質 | 布目痕・模骨痕   | ナデ                |    |               | タイプ:Qt-中・PI-低<br>  Vタイプ:Qt-小・PI-低                                 | 古新田-2              |
| 北野廃寺-4                | 岡崎市         | 旧碧海郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕   | ナデか               |    | G             | タイプ:Qt-中・Pl-低   | 古新田-4              |
| 北野廃寺 - 5<br>北野廃寺 - 6  | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧碧海郡<br>旧碧海郡      | 丸瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕                                      | ナデか<br>ナデか        |    | F             | タイプ:Qt-中・PI-低<br>   タイプ:Qt-中・PI-低                                 | 古新田-5              |
| 北野廃寺-7                | 岡崎市         | 旧碧海郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕   | ナデ                |    | G             | タイプ:Q t -中・P I -低   | 古新田-7              |
| 北野廃寺-8<br>北野廃寺-9      | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧碧海郡<br>旧碧海郡      | 丸瓦<br>丸瓦  | 須恵質<br>土師質 | 布目痕+ナデか<br>布目痕                                      | ナデ<br>格子目叩き       |    |               | Vタイプ:Qt-小・PI-低<br>    タイプ:Qt-中・PI-低                               | 古新田-8 古新田-9        |
| 北野廃寺-10               | 岡崎市         | 旧碧海郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕・模骨痕か  | 縄目叩き              |    |               | Nタイプ:Q t -中・P I -低  | 古新田-10             |
| 北野廃寺-11<br>北野廃寺-12    | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧碧海郡 旧碧海郡         | 平瓦<br>平瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕+ナデ<br>布目痕                                       | ナデ<br>ナデか         |    |               | タイプ:Qt-中・PI-高<br>   タイプ:Qt-中・PI-低                                 | 古新田-11<br>古新田-12   |
| 北野廃寺-13               | 岡崎市         | 旧碧海郡              | 平瓦        | 須恵質        | 布目痕・模骨痕   | ナデ                |    |               | IVタイプ:Q t ー中・P I 一低   | 古新田-13             |
| 北野廃寺-14<br>北野廃寺-15    | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧碧海郡<br>旧碧海郡      | 平瓦平瓦      | 須恵質<br>土師質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕か                                     | ナデ<br>格子目叩き       |    | G             | IVタイプ:Qt-小・PI-低<br>  IIIタイプ:Qt-中・PI-低                             | 古新田-14             |
| 北野廃寺-16               | 岡崎市         | 旧碧海郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕   | 格子目叩き             |    | 1             | タイプ:Q t ー中・P I -低   | 古新田-16             |
| 北野廃寺-17               | 岡崎市         | 旧碧海郡              | 平瓦<br>平瓦  | 土師質        | 布目痕・模骨痕か  | 縄目叩き              |    | G             | タイプ:Qt-中・PI-高<br>   タイプ:Qt-中・PI-高                                 | 古新田-17             |
| 北野廃寺-18<br>真福寺東谷-1    | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧碧海郡<br>旧額田郡      | 丸瓦        | 土師質<br>土師質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕・模骨痕                                  | 縄目叩き<br>ナデか       |    | G<br>G        | タイプ:Q t -中・P I -高<br>   タイプ:Q t -中・P I -高                         | 古新田-18<br>古新田-19   |
| 真福寺東谷-2               | 岡崎市         | 旧額田郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕・模骨痕   | ナデか               |    | G             | Vタイプ:Qt-中・Pl-低  | 古新田-20             |
| 真福寺東谷-3<br>真福寺東谷-4    | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧額田郡              | 丸瓦<br>丸瓦  | 須恵質<br>土師質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕・模骨痕か                                 | ナデナデか             |    | G G           | タイプ:Qt-中・PI-低<br>  Vタイプ:Qt-中・PI-高                                 | 古新田-21             |
| 真福寺東谷-5               | 岡崎市         | 旧額田郡              | 丸瓦        | 須恵質        | 布目痕・模骨痕   | ナデ                |    |               | IVタイプ: Q t −小・P I −低  | 古新田-23             |
| 真福寺東谷-6<br>真福寺東谷-7    | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧額田郡              | 平瓦<br>平瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕か  | 格子目叩きか<br>ナデか     |    | G<br>G        | I タイプ: Q t -小・P I -高<br>    タイプ: Q t -中・P I -低                    | 古新田-24 古新田-25      |
| 真福寺東谷-8               | 岡崎市         | 旧額田郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕・模骨痕か  | 縄目叩き              |    | G             | Nタイプ:Qt-中・PI-高  | 古新田-26             |
| 真福寺東谷-9<br>真福寺東谷-10   | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧額田郡              | 平瓦平瓦      | 土師質        | 布目痕<br>布目痕  | 縄目叩き              |    | G<br>G        | I タイプ: Q t - 小・P I - 高<br>  I タイプ: Q t - 小・P I - 高                | 古新田-27             |
| 丸山廃寺 - 1              | 岡崎市         | 旧額田郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕   | ナデか               |    | - i           | タイプ:Q t -中・P I -低   | 古新田-29             |
| 丸山廃寺-2<br>丸山廃寺-3      | 岡崎市<br>岡崎市  | 旧額田郡              | 丸瓦<br>丸瓦  | 須恵質<br>須恵質 | 布目痕<br>布目痕  | ナデ                |    |               | タイプ:Qt-中・PI-低<br>   タイプ:Qt-小・PI-低                                 | 古新田-30<br>古新田-31   |
| 丸山廃寺-4                | 岡崎市         | 旧額田郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕か  | 縄目叩きか             |    | Ġ             | Ⅲタイプ:その他  | 古新田-32             |
| 丸山廃寺-5                | 岡崎市         | 旧額田郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕   | -                 |    | E             | タイプ:Q t -中・P I -低   | 古新田-33             |
| 丸山廃寺 - 6<br>伊保白鳳寺 - 1 | 岡崎市<br>豊田市  | 旧額田郡              | 平瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕か  | 縄目叩きか ナデか         |    | G<br>G        | タイプ:Qt-中・PI-低<br>  タイプ:Qt-小・PI-高                                  | 古新田-34             |
| 伊保白鳳寺-2               | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕   | ナデか               |    |               | タイプ:Q t −小・P   −高   | 古新田-36             |
| 伊保白鳳寺-3<br>伊保白鳳寺-4    | 豊田市         | 旧賀茂郡<br>旧賀茂郡      | 丸瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>須恵質 | 布目痕 布目痕   | ナデか<br>ナデ         |    | H<br>A        | タイプ:Qt-中・PI-高<br>   タイプ:Qt-小・PI-低                                 | 古新田-37             |
| 伊保白鳳寺-5               | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 丸瓦        | 須恵質        | 布目痕   | ナデか               |    |               | タイプ:Q t -小・P I -低   | 古新田-39             |
| 伊保白鳳寺-6 伊保白鳳寺-7       | 豊田市         | 旧賀茂郡<br>旧賀茂郡      | 丸瓦<br>丸瓦  | 須恵質<br>土師質 | 布目痕<br>布目痕  | ナデ<br>ナデか         |    | l<br>G        | タイプ:Q t -小・P I -低   | 古新田-40             |
| 伊保白鳳寺-8               | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 平瓦        | 須恵質        | 布目痕   | 縄目叩き+ナデか          |    | G<br>I        | タイプ:Q t ー小・P I ー局<br>  Vタイプ:Q t ー小・P I ー低<br>  Vタイプ:Q t ー大・P I ー低 | 古新田-42             |
| 伊保白鳳寺-9               | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕   | 縄目叩き+ナデか          |    |               | Vタイプ:Qt-大・PI-低  | 古新田-43             |
| 伊保白鳳寺-10<br>伊保白鳳寺-11  | 豊田市         | 旧賀茂郡<br>旧賀茂郡      | 平瓦平瓦      | 土師質<br>土師質 | 布目痕<br>布目痕・模骨痕                                      | 縄目叩き              |    | D             | タイプ:Qt-小・PI-低<br>   タイプ:Qt-小・PI-高                                 | 古新田-44<br>古新田-45   |
| 伊保白鳳寺-12              | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 平瓦        | 須恵質        | 布目痕   | 縄目叩き+ナデ           |    |               | タイプ:Q t -小・P I -高   | 古新田-46             |
| 伊保白鳳寺-13<br>伊保白鳳寺-14  | 豊田市         | 旧賀茂郡<br>旧賀茂郡      | 平瓦平瓦      | 土師質<br>須恵質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕                                      | 格子目叩き<br>縄目叩き+ナデか |    |               | タイプ:Qt-小・PI-低<br>   タイプ:Qt-小・PI-高                                 | 古新田-47             |
| 伊保白鳳寺-15              | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 平瓦        | 須恵質        | 布目痕   | 縄目叩き              |    |               | タイプ:Q t -中・P I -低   | 古新田-49             |
| 伊保白鳳寺-16<br>伊保白鳳寺-17  | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 平瓦<br>平瓦  | 須恵質<br>土師質 | 布目痕+ナデか   | 縄目叩き              |    |               | タイプ:Qt-小・PI-低<br>  Iタイプ:Qt-中・PI-高                                 | 古新田-50             |
| 伊保白鳳寺-18              | 豊田市         | 旧賀茂郡<br>旧賀茂郡      | 平瓦        | 須恵質        | 布目痕<br>ナデか  | 縄目叩き              |    | <del></del>   | タイプ:Q t ー中・P I ー低   | 古新田-51 古新田-52      |
| 伊保白鳳寺-19              | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 丸瓦        | 須恵質        | 布目痕   | ナデ                |    |               | タイプ: Qt -中・PI -低<br>   タイプ: Qt -小・PI -低                           | 古新田-53             |
| 伊保白鳳寺-20<br>牛寺廃寺-1    | 豊田市         | 旧賀茂郡<br>旧賀茂郡      | 平瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕+ナデか                                  | 縄目叩き<br>ナデか       |    | F<br>C        | タイプ:Q t -小・P I -高<br>  Vタイプ:Q t -中・P I -高                         | 古新田-54             |
| 牛寺廃寺-2                | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕   | ナデか               |    | F             | Vタイプ:Qt-中・PI-高  | 古新田-56             |
| 牛寺廃寺-3<br>牛寺廃寺-4      | 豊田市         | 旧賀茂郡<br>旧賀茂郡      | 丸瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕 布目痕   | ナデか<br>ナデか        |    | G<br>G        | Vタイプ:Qt-中・PI-高<br> Vタイプ:Qt-中・PI-低                                 | 古新田-57             |
| 牛寺廃寺-5                | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕か  | 格子目叩き             |    | F             | タイプ:Q t -中・P I -低   | 古新田-59             |
| 牛寺廃寺 - 6<br>牛寺廃寺 - 7  | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 平瓦平瓦      | 土師質 土師質    | 布目痕<br>布目痕か   | 格子目叩き 格子目叩き       |    | G<br>         | タイプ:Qt-中・PI-低<br>   タイプ:Qt-中・PI-高                                 | 古新田-60<br>古新田-61   |
| 牛寺廃寺-8                | 豊田市         | 旧賀茂郡<br>旧賀茂郡      | 平瓦        | 土師質        | 布目痕か  | 格子目叩き             |    | F             | タイプ:Q t -中・P I -高<br>   タイプ:Q t -中・P I -低                         | 古新田-62             |
| 牛寺廃寺-9                | 豊田市         | 旧賀茂郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕   | 格子目叩き             |    | E             | IVタイプ:Qt-中・PI-低   | 古新田-63             |
| 牛寺廃寺-10<br>雨掘瓦窯-1     | 豊田市 西尾市     | 旧賀茂郡 旧碧海郡(註10)    | 平瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕<br>布目痕+ナデか                                      | 格子目叩き<br>ナデか      |    | F<br>G        | タイプ:Qt-中・PI-低<br>   タイプ:Qt-中・PI-低                                 | 古新田-64 古新田-71      |
| 雨掘瓦窯 – 2              | 西尾市         | 旧碧海郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕   | ナデか               |    | Ğ             | I タイプ: Q t -中・P I -高  | 古新田-72             |
| 雨掘瓦窯-3                | 西尾市         | 旧碧海郡<br>旧碧海郡      | 丸瓦<br>平瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕 布目痕   | ナデか<br>縄目叩き       |    | C             | タイプ:Qt-中・PI-低<br>   タイプ:Qt-小・PI-高                                 | 古新田-73 古新田-74      |
| 雨掘瓦窯-5                | 西尾市         | 旧碧海郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕・模骨痕   | ナデか               |    |               | Vタイプ:Qt-中・Pl-低  | 古新田-75             |
| 雨掘瓦窯-6<br>志貴野-1       | 西尾市西尾市      | 旧碧海郡<br>旧碧海郡(註11) | 平瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>土師質 | 模骨痕・ナデか<br>ナデか                                      | 縄目叩き+ナデか<br>ナデか   |    | G             | Nタイプ:Qt-小・PI-高<br>Ⅲタイプ:Qt-小中・PI-高                                 | 古新田-76 古新田-77      |
| 志貴野-2                 | 西尾市         | 旧碧海郡              | 丸瓦        | 土師質        | ナデか   | ナデか               |    | E             | I タイプ:Q t −小中・P I −高  | 古新田-78             |
| 志貴野-3                 | 西尾市         | 旧碧海郡<br>旧碧海郡      | 丸瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>須恵質 | 布目痕 布目痕   | ナデか<br>ナデ         |    | G<br>I        | タイプ:Q t -小・P I -低<br>   タイプ:Q t -中・P I -低                         | 古新田-79 古新田-80      |
| 志貴野-5                 | 西尾市         | 旧碧海郡              | 丸瓦        | 須恵質        | 布目痕   | ナデ+ケズリ            |    |               | タイプ:Q t -中・P I -低   | 古新田-81             |
| 志貴野-6                 | 西尾市<br>西尾市  | 旧碧海郡<br>旧碧海郡      | 丸瓦<br>平瓦  | 須恵質<br>須恵質 | 布目痕<br>布目痕  | ナデ<br>ナデ          |    |               | タイプ:Qt-中・PI-低<br>   タイプ:Qt-小・PI-低                                 | 古新田-82<br>古新田-83   |
| 志貴野-7                 | 西尾市         | 旧碧海郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕   | 縄目叩き              |    | Ċ             | タイプ:Q t -小・P I -低   | 古新田-84             |
| 志貴野-9                 | 西尾市         | 旧碧海郡              | 平瓦平瓦      | 土師質        | 布目痕・模骨痕か  | 縄目叩き              |    | D             |   | 古新田-85             |
| 志貴野-10<br>志貴野-11      | 西尾市西尾市      | 旧碧海郡 旧碧海郡         | 平瓦        | 土師質<br>土師質 | <u>布目痕</u><br>ナデか                                   | 格子目叩き<br>格子目叩き    |    | G             | タイプ:Qt-小・PI-高<br>   タイプ:Qt-小中・PI-高                                | 古新田-86             |
| 志貴野-12                | 西尾市         | 旧碧海郡              | 平瓦        | 須恵質        | 布目痕・模骨痕   | 格子目叩き+ナデか         |    |               | Iタイプ:Qt-中・PI-低  | 古新田-88             |
| 北迫瓦窯-1<br>北迫瓦窯-2      | 幡豆町<br>幡豆町  | 旧幡豆郡<br>旧幡豆郡      | 軒平瓦<br>丸瓦 | 土師質<br>土師質 | 布目痕<br>布目痕・模骨痕                                      | ナデか               |    | I             | Vタイプ:Qt-中・PI-低<br>   Iタイプ:Qt-小・PI-低                               | 古新田-89<br>古新田-90   |
| 北迫瓦窯-3                | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 丸瓦        | 須恵質        | 布目痕   | 縄目叩き+ナデか          |    |               | Ⅰタイプ:Qt-小・PI-低  | 古新田-91             |
| 北迫瓦窯-4<br>北迫瓦窯-5      | 幡豆町<br>幡豆町  | 旧幡豆郡<br>旧幡豆郡      | 丸瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕・模骨痕                                  | ナデか<br>ナデか        |    | <u>В</u><br>В | I タイプ: Q t -小・P I -低<br>    タイプ: Q t -小・P I -低                    | 古新田-92<br>古新田-93   |
| 北迫瓦窯-6                | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布目痕・模骨痕   | ナデか               |    | A             | Iタイプ:Qt-小・PI-低  | 古新田-94             |
| 北迫瓦窯 - 7<br>北迫瓦窯 - 8  | 幡豆町 幡豆町     | 旧幡豆郡              | 平瓦<br>平瓦  | 須恵質<br>須恵質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕                                      | 縄目叩き+ナデか<br>ナデ    |    | A             | I タイプ: Q t ー小・P I -低<br>  Nタイプ: O t -由・P I -低                     | 古新田-95<br>古新田-96   |
| 北迫瓦窯-9                | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕・模骨痕   | 縄目叩き              |    | Ċ             | IVタイプ: Q t -中・P I -低<br>  IIIタイプ: Q t -小・P I -低                   | 古新田-97             |
| 北泊瓦窯-10               | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 平瓦        | 須恵質        | 布目痕・模骨痕   | 縄目叩き              |    | A             | タイプ:Q t -小・P I -低   | 古新田-98             |
| 北迫瓦窯-11<br>北迫瓦窯-12    | 幡豆町<br>幡豆町  | 旧幡豆郡              | 平瓦        | 須恵質<br>須恵質 | 布目痕<br>布目痕  | 縄目叩き ナデ           |    |               | I タイプ:Q t −小・P I −低<br>  IVタイプ:Q t −中・P I −低                      | 古新田-99<br>古新田-100  |
| 北迫瓦窯-13               | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 平瓦        | 土師質        | ナデ・模骨痕  | 縄目叩き              |    |               | Ⅲタイプ:Q t −小・P I −高  | 古新田-101            |
| 北迫瓦窯-14<br>北迫瓦窯-15    | 幡豆町<br>幡豆町  | 旧幡豆郡<br>旧幡豆郡      | 平瓦平瓦      | 土師質<br>須恵質 | 布目痕<br>ナデ   | ナデ<br>縄目叩き        |    | C             | タイプ:Qt-小・PI-低<br>  フィプ:Qt-小・PI-低                                  | 古新田-102<br>古新田-103 |
| 北迫瓦窯-16               | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 平瓦        | 須恵質        | 布目痕   | 縄目叩き+ナデ           |    | С             | タイプ:Q t −小・P   −低   | 古新田-104            |
| 北迫瓦窯-17<br>寺部堂前-1     | 幡豆町<br>幡豆町  | 旧幡豆郡<br>旧幡豆郡      | 平瓦<br>軒平瓦 | 土師質<br>須恵質 | ナデー ー   | 縄目叩き              |    |               | I タイプ: Q t -小・P I -低<br>    タイプ: Q t -小・P I -低                    | 古新田-105<br>古新田-106 |
| 寺部堂前-2                | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 丸瓦        | 須恵質        | 布目痕・模骨痕   | ナデ                |    |               | タイプ:Qt-中・PI-低   | 古新田-107            |
| 寺部堂前-3<br>寺部堂前-4      | 幡豆町<br>幡豆町  | 旧幡豆郡<br>旧幡豆郡      | 丸瓦<br>丸瓦  | 土師質<br>土師質 | 布目痕・模骨痕<br>布目痕・模骨痕                                  | 縄目叩き+ナデ           |    | A<br>C        | タイプ:Qt-中・PI-低<br>   タイプ:Qt-小・PI-高                                 | 古新田-108<br>古新田-109 |
| 寺部室前-4<br>寺部堂前-5      | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 丸瓦        | 土師質        | 布日痕・ <b>快</b> 育服<br>布目痕                             | ナデ<br>ナデ          | 玉縁 | C             | タイプ:その他   | 古新田-110            |
| 寺部堂前-6                | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 丸瓦        | 土師質        | ナデ・模骨痕  | ナデ                |    | С             | タイプ:Qt-中・PI-高   | 古新田-111            |
| 寺部堂前-7<br>寺部堂前-8      | 幡豆町 幡豆町     | 旧幡豆郡<br>旧幡豆郡      | 平瓦<br>平瓦  | 土師質<br>須恵質 | ナデ<br>布目痕・模骨痕                                       | 縄目叩き<br>縄目叩き+ナデ   |    | C             | タイプ:Q t -中・P I -高<br>  Vタイプ:Q t -小・P I -低                         | 古新田-112<br>古新田-113 |
| 寺部堂前-9                | 幡豆町         | 旧幡豆郡              | 平瓦        | 土師質        | 布目痕・模骨痕   | ナデ                |    | Ċ             | I タイプ:Q t -小・P I -低   | 古新田-114            |
| 寺部堂前-10<br>寺部堂前-11    | 幡豆町 幡豆町     | 旧幡豆郡              | 平瓦平瓦      | 土師質<br>須恵質 | ナデ<br>布目痕・模骨痕                                       | 縄目叩き # ナデ         |    | C             | タイプ:Qt-大・Pl-低<br>    タイプ:Qt-小・Pl-高                                | 古新田-115            |
| A Ch TRUTH            | URI TY WI   | I CLERTTON        | 1 44      | 水心見        | 12日以 (天日)次  | 120 ALC   1 1 1   |    |               | / / Q L //: F   T   T   | 1 I O              |

|   | 資料名        |              |          |            | 古代              |          |          | タイプ | 組成分類                                      | 分析試料番号                    |
|---|------------|--------------|----------|------------|-----------------|----------|----------|-----|---|---------------------------|
| 遺跡試料No  | 遺跡場所       | 旧郡           | 瓦 種      | 材質         | 凹面              | 凸面       | 備考       | 分類  |   |                           |
| §羽神宮寺 - 1<br>§羽神宮寺 - 2  | 幡豆町 幡豆町    | 旧幡豆郡         | 軒丸瓦      | 須恵質<br>土師質 |                 | ナデ       | 軒丸瓦か     |     | タイプ:Q t -中・P I -高<br>   タイプ:Q t -小・P I -低 | <u>古新田−117</u><br>古新田−118 |
| 羽神宮寺-3  | 幡豆町        | 旧幡豆郡         | 丸瓦<br>丸瓦 | 須恵質        | 布目痕             | ナデか      | まLンいないが、 |     | タイプ:Q t ー中・P I -低                         | 古新田一119                   |
| 羽神宮寺-4  | 幡豆町        | 旧幡豆郡         | 丸瓦       | 須恵質        | 布目痕・模骨痕         | ナデ       |          | Ċ   | タイプ: Q t -小・P I -低                        | 古新田-120                   |
| 羽神宮寺-5  | 幡豆町        | 旧幡豆郡         | 丸瓦       | 土師質        | 布目痕・模骨痕         | 縄目叩き+ナデ  |          | С   | タイプ:Q t - 小・P I - 低                       | 古新田-121                   |
| 羽神宮寺-6  | 幡豆町        | 旧幡豆郡         | 丸瓦       | 須恵質        | 布目痕+ナデ          | ナデ       |          | В   | タイプ:Q t -小・P I -低                         | 古新田-122                   |
| 羽神宮寺 - 7  | 幡豆町        | 旧幡豆郡         | 平瓦       | 須恵質        | 布目痕             | 縄目叩き     |          | Ę   | タイプ: Qt -中・PI -低                          | 古新田-123                   |
| 羽神宮寺-8  | 幡豆町        | 旧幡豆郡         | 平瓦平瓦     | 須恵質<br>土師質 | 布目痕             | 縄目叩き     |          | C   | タイプ:Q t ー小・P I -低                         | 古新田-124                   |
| 3羽神宮寺-9<br>3羽神宮寺-10   | 幡豆町        | 旧幡豆郡         | 平瓦       | 土師質        | 布目痕<br>布目痕 + ナデ | 縄目叩き     | +        | Č   | タイプ:Q t -中・P I -低<br>   タイプ:Q t -中・P I -低 | 古新田-126                   |
|   | 幡豆町        | 旧幡豆郡         | 平瓦       | 須恵質        | 布目痕+ナデか         | 縄目叩き     |          | Č   | タイプ: Q t -小・P I -低                        | 古新田-127                   |
| 別郷廃寺−1  | 安城市        | 旧碧海郡         | 丸瓦       | 須恵質        | 布目痕             | 縄目叩き+ナデ  | 玉縁       | I   | Vタイプ:Qt-小・Pl-低                            | 古新田-148                   |
| 川郷廃寺−2  | 安城市        | 旧碧海郡         | 丸瓦       | 土師質        | 布目痕             | ナデか      |          | G   | Vタイプ: Q t -中・P I -低                       | 古新田-149                   |
| 郷廃寺−3   | 安城市        | 旧碧海郡         | 丸瓦       | 土師質        | ナデか             | ナデか      | 玉縁       | G   | タイプ:Q t -小・P I -高                         | 古新田-150                   |
| 郷廃寺-4   | 安城市        | 旧碧海郡         | 丸瓦       | 須恵質        | 布目痕・模骨痕         | ナデ       |          | G   | Nタイプ: Q t -中・P I -低                       | 古新田-15                    |
| 郷廃寺-5   | 安城市        | 旧碧海郡         | 平瓦       | 須恵質        | 布目痕             | 平行叩き     |          |     | IIIタイプ: Qt -小・PI -低                       | 古新田-152                   |
| 郷廃寺 - 6<br> 郷廃寺 - 7   | 安城市<br>安城市 | 旧碧海郡<br>旧碧海郡 | 平瓦平瓦     | 須恵質<br>須恵質 | 布目痕・模骨痕か<br>布目痕 | ナデ 平行叩き  | _        | -   | タイプ:Qt-中・PI-低<br>   タイプ:Qt-小・PI-低         | 古新田-153                   |
| 郷廃寺-8   | 安城市        | 旧碧海郡         | 平瓦       | 須恵質        | 布目痕+ナデ          | 平行叩き+ナデか | +        | Ġ   | タイプ:Qt-小・FI-低                             | 古新田-15                    |
| 郷廃寺-9   | 安城市        | 旧碧海郡         | 平瓦       | 土師質        | 布目痕・模骨痕         | 平行叩き     |          | G   | タイプ: Q t -小・P I -低                        | 古新田-15                    |
| 久根 – 1  | 安城市        | 旧碧海郡         | 丸瓦       | 土師質        | 布目痕             | ナデか      |          | Ī   | IVタイプ: Q t - 小・P I - 低                    | 古新田-15                    |
| 久根 – 2  | 安城市        | 旧碧海郡         | 丸瓦       | 須恵質        | 布目痕・模骨痕         | ナデ       |          | I   | タイプ:Qt-中・PI-低                             | 古新田-158                   |
| 久根-3  | 安城市        | 旧碧海郡         | 丸瓦       | 土師質        | 模骨痕             | ナデ       |          | G   | タイプ:Q t -中・P I -低                         | 古新田-159                   |
| 久根 – 4  | 安城市        | 旧碧海郡         | 平瓦       | 須恵質        | 布目痕+ナデ          | ナデ       |          |     | タイプ: Q t -中・P I -低                        | 古新田-160                   |
| 久根 - 5  | 安城市        | 旧碧海郡         | 平瓦       | 土師質        | 布目痕+ナデ          | ナデか      |          | F   | タイプ: Q t -中・P I -高                        | 古新田-16                    |
| <a href="mailto:25px 1"> </a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a></a> |            |              |          |            |                 |          |          |     |   |                           |

(註 10)・(註 11)・(註 12)本来西尾市志貴野町・米津町は旧幡豆郡といわれている。しかし、旧幡豆郡とする根拠は明らかにされてはいない。現在の矢作川や市域が区画の根拠になっているように思われるが、これは江戸時代初頭に開削された新しい川であり、集落や寺院があったと思われる古代には対岸の安城市から延びる碧海台地と地続きとなっていたのである。この点から、旧幡豆郡ではなく旧碧海郡と考える方が自然だと思っている。なお、郡の境界は八ツ面山周辺と推定しておきたい。

#### 表 2 組成分類表

| 遺跡試料No   遺跡場所   丸   種   分類   (分析試料番号)  | Action 1 = Date 1 + 4 | ) The   |          | タイプ    | 備考       |
|--|-----------------------|---------|----------|--------|----------|
| 伊保白鳳寺-1         豊田市 丸瓦   古新田-35           伊保白鳳寺-2         豊田市 丸瓦   古新田-75           「タイプ: Qt -中・P   -高           雨烟瓦窯-2         西尾市   丸瓦   正 古新田-72           「タイプ: Qt - 小中・P   -高           志貴野-2         西尾市   丸瓦   正 古新田-78           「タイブ: Qt - 小・P   -高           北边瓦窯-3         幅豆町   丸瓦   日 古新田-91           北边瓦窯-3         幅豆町   丸瓦   日 古新田-91           北边瓦窯-6         幅豆町   丸瓦   日 古新田-92           北边瓦窯-6         幅豆町   丸瓦   日 古新田-92           北边瓦窯-6         幅豆町   丸瓦   日 古新田-92           東福寺寺合-9         岡崎市   平瓦   日 古新田-92           東福寺寺合-9         岡崎市   平瓦   日 古新田-24           東福寺寺合-10         岡崎市   平瓦   日 古新田-25           「タイブ: Qt - 中・P   -高         古新田-24           東福寺寺合-10         岡崎市   平瓦   日 古新田-25           「タイブ: Qt - 中・P   -高         古新田-28           「タイブ: Qt - 中・P   -高         古新田-28           「タイブ: Qt - 中   P   -高         古新田-28           「タイブ: Qt - 中   P   -高         古新田-28           「カイナ: Qt - 中   P   -高         古新田-28           「カイナ: P   P   -高         古新田-28           「カ新田-28         「カ新田-104           北边瓦窯-15         幅豆町   平瓦   日 古新田-104           北边瓦窯-16         幅豆町   平瓦   日 古新田-104           北边瓦窯-16   | 遺跡試料No                | 遺跡場所    | 瓦 種      | 分類     |          |
| 伊保白鳳寺-2         豊田市         丸瓦         I         占新田-36           市場区案-2         西尾市         丸瓦         G         占新田-72           市場区案-2         西尾市         丸瓦         E         占新田-78           お庭屋市         丸瓦         E         占新田-78           19イブ: Qt-小・P1-億         10         10         10           北边瓦案-2         幅豆町         丸瓦         A         占新田-90           北边瓦案-3         幅豆町         丸瓦         A         占新田-91           北边瓦案-3         幅豆町         丸瓦         A         占新田-91           北边瓦案-4         幅豆町         丸瓦         A         占新田-92           北边瓦案-6         岡崎市         平瓦         G         占新田-94           北边瓦案-6         岡崎市         平瓦         G         占新田-92           北边瓦案-6         岡崎市         平瓦         G         占新田-92           北边瓦案-7         豊田市         平瓦         G         占新田-24           東國寺等全台         岡崎市         平瓦         G         占新田-28           地边瓦案-7         棚豆町         平瓦         D         古新田-28           北边瓦案-7         棚豆町         平瓦         D         古新田-85           北边瓦案-7         棚豆   |                       | I タイプ:( | Q t 一小・P | 1-高    |          |
| 19イブ:Q t - 中・P 1 - 高   |                       |         |          | G      |          |
| 商組瓦案 - 2   西尾市   丸瓦   日   古新田 - 7 2  | 伊保白鳳寺-2               |         | 丸瓦       |        | 古新田-36   |
| フタイプ:Q t - ハ・P I - 高   |                       |         |          |        |          |
| 恵養野-2         西尾市         丸瓦         E         占新田-78           1タイプ:Qt-小・Pl-低           北边瓦窯-2         幅豆町         丸瓦         I         占新田-91           北边瓦窯-3         幅豆町         丸瓦         I         占新田-91           北边瓦窯-6         幅豆町         丸瓦         A         占新田-92           支資福寺東谷-6         岡崎市         平瓦         G         古新田-24           真福寺東谷-9         岡崎市         平瓦         G         古新田-27           真福寺東谷-10         岡崎市         平瓦         G         古新田-27           夏福寺東谷-10         岡崎市         平瓦         G         古新田-28           19イブ:Qt-中・P1-高         古新田-27         日         古新田-27           夏福寺東谷-10         岡崎市         平瓦         G         古新田-28           19イブ:Qt-中・P1-高         古新田-28         I         1         古新田-28           19イブ:Qt-中・P1-高         古新田-28         I         1         古新田-28           北边互窯-7         幅豆町         平瓦         I         古新田-51         I         1         古新田-51         I         1         古新田-103         I         1         古新田-103         I         1         古新田-103         I         1         古新田-103         I <td>雨掘瓦窯-2</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>古新田-72</td>   | 雨掘瓦窯-2                |         |          |        | 古新田-72   |
| 19イブ:Qtー小・PIー低    15新田-90   15新田-91   12回五窯-3   16   15新田-91   12回五窯-4   16   15新田-91   12回五窯-6   16   15新田-91   12回五窯-6   16   15新田-91   12回五窯-6   16   15新田-92   12回五窯-6   16   15新田-94   19イブ:Qtー小・PIー高   19イブ:Qtー小・PIー高   19イブ:Qtー小・PIー高   19イブ:Qtー小・PIー高   15新田-24   15新田-27   10   15   15   15   15   15   15   15  |                       |         |          | 2   一高 |          |
| 接回   丸瓦  | 志貴野-2                 |         |          |        | 古新田-78   |
| 北迫瓦窯 - 3   幅豆町   丸瓦   日   古新田 - 9   日   大泊瓦窯 - 4   幅豆町   丸瓦   日   古新田 - 9   日   大泊瓦窯 - 6   幅豆町   丸瓦   日   古新田 - 9   日   大泊瓦窯 - 6   幅豆町   丸瓦   日   古新田 - 9   日   大泊瓦窯 - 6   同崎市   平瓦   日   日   日   日   日   日   日   日   日  |                       |         |          | I-低    |          |
| 北迫瓦窯   |                       |         |          |        |          |
| 北边瓦窯   |                       |         |          |        |          |
| タイプ:Q t ー小・P I ー高  |                       |         |          | _      |          |
| 真福寺東谷-6         岡崎市         平瓦         G         古新田-24           真福寺東谷-9         岡崎市         平瓦         G         古新田-28           「タイプ: Qt-中・Pl-高         古新田-28         19イブ: Qt-中・Pl-高         古新田-28           「タイプ: Qt-中・Pl-高         古新田-51         19イブ: Qt-小・Pl-低         古新田-51           正倉野-9         西尾市         平瓦         A         古新田-95           北边瓦窯-7         幅豆町         平瓦         A         古新田-95           北边瓦窯-15         幅豆町         平瓦         L         古新田-95           北边瓦窯-16         幅豆町         平瓦         L         古新田-103           北边瓦窯-16         幅豆町         平瓦         L         古新田-103           北边瓦窯-17         幅豆町         平瓦         L         古新田-105           寺部壁前-9         幅豆町         平瓦         L         古新田-105           市新田-12         西尾市         平瓦         L         古新田-25           古新田-12         西尾市         平瓦         L         古新田-25           古新田-14         西尾市         平瓦         L         古新田-25           古新田-14         西尾市         平瓦         L         古新田-25           古新田-1         西尾市         平瓦         L         古新田-25  | 北迫瓦窯-6                |         |          |        | 古新田-94   |
| 真福寺東谷-10         岡崎市         平瓦         G         古新田-27           貞福寺東谷-10         岡崎市         平瓦         G         古新田-28           「タイプ:Qt-中・PI-高         古新田-28         1         古新田-28           伊保白鳳寺-17         豊田市         平瓦         I         古新田-51           「タイプ:Qt-小・PI-低         古新田-95         北边瓦窯-7         幅豆町         平瓦         A         古新田-95           北边瓦窯-15         幡豆町         平瓦         I         古新田-99         北边瓦窯-16         幅豆町         平瓦         I         古新田-104           北边瓦窯-16         幡豆町         平瓦         I         古新田-104         七边瓦窯-16         幅豆町         平瓦         C         古新田-105         寺部壁前-9         幅豆町         平瓦         C         古新田-104         古新田-105         寺部壁前-9         幅豆町         平瓦         C         古新田-105         市新田-25         1         古新田-25         1   |                       |         |          |        |          |
| 夏福寺東谷-10         岡崎市         平瓦         G         古新田-28           「タイプ: Qt-中・P   一高         日本新田-51         日本新田-51         日本新田-51           「タイプ: Qt-小・P   一低         日本新田-85         日本新田-85           北迫瓦窯-7         幅豆町         平瓦         A         古新田-85           北迫瓦窯-15         幅豆町         平瓦         I         古新田-99           北迫瓦窯-16         幅豆町         平瓦         I         古新田-103           北边瓦窯-17         幅豆町         平瓦         I         古新田-103           北边瓦窯-16         幅豆町         平瓦         I         古新田-103           北边瓦窯-17         幅豆町         平瓦         I         古新田-104           北边瓦窯-16         幅豆町         平瓦         C         古新田-104           古新田-12         西尾市         平瓦         G         古新田-251           古新田-12         西尾市         平瓦         G         古新田-251           古新田-14         西尾市         平瓦         G         古新田-250           「タイプ: Qt-中・P I - 低         店         古新田-250         E         古新田-250           「カ田-17         西尾市         平瓦         E         古新田-123         E         古新田-250         E         古新田-244         I         タイプ: Qt-小・P I -  |                       |         |          |        |          |
| タイプ:Qt-中・P -高   古新田-51   タイプ:Qt-小・P -低   古新田-51   タイプ:Qt-小・P -低   古新田-51   タイプ:Qt-小・P -低   古新田-85   北迫瓦窯-7   幅豆町   平瓦   日   古新田-95   北迫瓦窯-15   幅豆町   平瓦   日   古新田-95   北边瓦窯-15   幅豆町   平瓦   日   古新田-95   北边瓦窯-16   幅豆町   平瓦   日   古新田-103   北边瓦窯-16   幅豆町   平瓦   日   古新田-104   北边瓦窯-17   幅豆町   平瓦   日   古新田-105   寺部堂前-9   幅豆町   平瓦   日   古新田-105   寺部堂前-9   幅豆町   平瓦   日   古新田-251   日   古新田-115   日   日   日   日   日   日   日   日   日  |                       |         |          |        |          |
| 伊保白鳳寺-17         豊田市         平瓦         I 古新田-51           「タイプ: Q t - 小・P   -他         古新田-85           志貴野-9         西尾市         平瓦         A 古新田-95           北迫瓦窯-7         幅豆町         平瓦         I 古新田-99           北边瓦窯-15         幅豆町         平瓦         I 古新田-104           北边瓦窯-16         幅豆町         平瓦         C 古新田-104           北边瓦窯-17         幅豆町         平瓦         C 古新田-105           寺部堂前-9         幅豆町         平瓦         G 古新田-105           寺部堂前-9         幅豆町         平瓦         G 古新田-253           古新田-12         西尾市         平瓦         G 古新田-253           古新田-17         西尾市         平瓦         I 古新田-256           「タイプ: Q t - 中下         I 古新田-256         国の           「タイプ: Q t - 中下         I 古新田-244         国の           「タイブ: Q t - 小下         I 古新田-256         国の           「カ新田-1 な         I 大京         I 大京         国の         古新田-102         国の         古新田-102         国の         古新田-102         国の         古   | 真福寺東谷-10              |         |          |        | 古新田-28   |
| タイプ:Q t - 小・P   - 低   志新田 - 85   本新田 - 103   北迫瓦窯 - 7   幅豆町   平瓦   日   古新田 - 95   北迫瓦窯 - 16   幅豆町   平瓦   日   古新田 - 95   北边瓦窯 - 16   幅豆町   平瓦   日   古新田 - 103   北边瓦窯 - 16   幅豆町   平瓦   日   古新田 - 103   北边瓦窯 - 16   幅豆町   平瓦   日   古新田 - 104   北边瓦窯 - 17   幅豆町   平瓦   日   古新田 - 105   古新田 - 12   西尾市   平瓦   日   古新田 - 12   日   古新田 - 25   日   日   日   日   日   日   日   日   日  | T 10 + 0 +            |         |          | I 一高   | 1 +< -   |
| 志貴野-9   西尾市   平瓦   D   古新田-85   お道瓦窯-7   幅豆町   平瓦   L   古新田-95   北道瓦窯-11   幅豆町   平瓦   L   古新田-99   北道瓦窯-15   幅豆町   平瓦   L   古新田-103   北道瓦窯-16   幅豆町   平瓦   L   古新田-104   北道瓦窯-16   幅豆町   平瓦   L   古新田-105   寺部堂前-9   幅豆町   平瓦   L   古新田-105   古新田-12   西尾市   平瓦   L   古新田-25   T   五新田-17   西尾市   平瓦   L   古新田-25   T   五新田-17   西尾市   平瓦   L   古新田-25   T   T   T   T   T   T   T   T   T   | 伊保白鳳寺-17              |         |          |        | 古新田-51   |
| 北迫瓦窯   |                       |         |          |        | 1 + -    |
| 北迫瓦窯-11         幅豆町         平瓦         1         占新田-99           北迫瓦窯-15         幅豆町         平瓦         1         占新田-103           北迫瓦窯-16         幅豆町         平瓦         C         占新田-104           北边瓦窯-17         幅豆町         平瓦         L         占新田-105           寺部堂前-9         幅豆町         平瓦         C         占新田-114           古新田-12         西尾市         平瓦         G         古新田-251           古新田-17         西尾市         平瓦         G         古新田-256           古新田-17         西尾市         平瓦         G         古新田-256           上夕イブ:Qt-中・P1-個         国家市         平瓦         E         古新田-123           古新田-1         西尾市         平瓦         E         古新田-123           古新田-5         西尾市         東瓦         G         古新田-123           古新田-5         西尾市         東瓦         G         古新田-123           北边瓦窯-1         中夕ブ:Qt-小・P1-個         C         古新田-102           北边瓦窯-1         地夕ブ:Qt-小・P1-高         C         古新田-102           場部前-1         東京         C         古新田-15           中等電前-2         安城市         丸瓦         G         古新田-15           寺部慶寺市 <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td>   |                       |         |          |        |          |
| 北迫瓦窯-15         幅豆町         平瓦         1         古新田-103           北迫瓦窯-16         幅豆町         平瓦         C         古新田-104           北迫瓦窯-17         幅豆町         平瓦         I         古新田-105           寺部堂前-9         幅豆町         平瓦         C         古新田-114           古新田-12         西尾市         平瓦         I         古新田-251           古新田-17         西尾市         平瓦         I         古新田-256           古新田-17         西尾市         平瓦         I         古新田-256           古新田-17         西尾市         平瓦         I         古新田-256           店部田-17         西尾市         平瓦         I         古新田-256           山夕プブ: Q t -中・P I -低         I         古新田-256         I         I         古新田-256           山夕イブ: Q t -中・P I -低         I         古新田-250         I         I         古新田-23         I         古新田-244         I         I         J         I         古新田-250         I         J         I         古新田-244         I         J         J         I         古新田-123         I         古新田-123         I         古新田-124         I         J         J         J         J         J         J         J  |                       |         |          |        |          |
| 北迫瓦窯-16         幅豆町         平瓦         C         占新田-104           北迫瓦窯-17         幅豆町         平瓦         I         占新田-105           寺部堂前-9         幅豆町         平瓦         C         占新田-114           古新田-12         西尾市         平瓦         G         占新田-251           古新田-17         西尾市         平瓦         I         占新田-251           古新田-17         西尾市         平瓦         I         占新田-251           古新田-17         西尾市         平瓦         I         占新田-256           Jタイプ: Qt-中・PI-個         日本新田-250         I         上 新田-88         I         I         古新田-256         I         J         J         J         J         J         大 京田-256         I         J  |                       |         |          |        |          |
| 北迫瓦窯-17         幅豆町         平瓦         占新田-105           寺部堂前-9         幅豆町         平瓦         C         古新田-114           古新田-12         西尾市         平瓦         G         古新田-251           古新田-14         西尾市         平瓦         I         古新田-253           古新田-17         西尾市         平瓦         I         古新田-253           古新田-17         西尾市         平瓦         I         古新田-250           上京新田-17         西尾市         平瓦         I         古新田-88           上京野-12         西尾市         平瓦         I         古新田-23           古新田-1         西尾市         平瓦         I         古新田-28           山夕イブ: Qt-中・PI-低         古新田-250         I         古新田-250           田夕イブ: Qt-小・PI-低         古新田-24         I         古新田-24           北边瓦         Qt-ブ・Qt-小・PI-高         E         古新田-102         I         お新田-24           田夕イブ: Qt-小・PI-高         要         B         田町・カカ瓦         G         古新田-15         方新田-15         財産         財産         日本新田-16         本新田-15         財産         財産         日本新田-15         日本新田-15         日本新田-15         日本新田-15         日本新田-15         日本新田-16         日本新田-1   |                       |         |          |        |          |
| 専部堂前-9         幅豆町         平瓦         C         占新田-114         古新田-251         古新田-251         古新田-251         古新田-251         古新田-251         古新田-251         古新田-253         古新田-253         古新田-253         古新田-253         古新田-256         古新田-256         古新田-256         古新田-256         古新田-256         古新田-256         古新田-256         古新田-88         馬羽神宮寺-7         幅豆町         平瓦         日 古新田-123         古新田-123         古新田-123         古新田-123         古新田-123         古新田-1250         田タイプ: その他         古新田-1250         日夕イブ: マセール・PI-個         日本新田-1250         日夕イブ: マセール・PI-個         日本新田-250         日夕イブ: マセール・PI-個         日本新田-102         日本新田-102         日本新田-102         日夕イブ: マセール・PI-高         日本新田-102  |                       |         |          | _      |          |
| 古新田-12   西尾市   平瓦   日   古新田-251   古新田-14   西尾市   平瓦   日   古新田-253   古新田-17   西尾市   平瓦   日   古新田-256   日   万田-17   西尾市   平瓦   日   古新田-256   日   万田-17   西尾市   平瓦   日   古新田-256   日   万田-17   西尾市   平瓦   日   古新田-250   日   日   日   日   日   日   日   日   日   |                       |         |          |        |          |
| 古新田−14         西尾市         平瓦         I         古新田−253         古新田−256           古新田−17         西尾市         平瓦         I         古新田−256           正奏野−12         西尾市         平瓦         I         古新田−88           鳥羽神宮寺−7         幡豆町         平瓦         I         古新田−88           鳥羽神宮寺−7         幡豆町         平瓦         I         古新田−224           出りイブ: その他         古新田−244         IIライブ: Q t −ル・P I −億         IIライブ: Q t −ル・P I −高         IID イブ: Q t −ル・P I − 高         IID イブ: Q t −ル・P I − 高< |                       |         |          |        |          |
| 古新田-17         西尾市         平瓦         G         古新田-256           1タイプ: Qt-中・Pl-低         - 古新田-88         - 京田田-88         - 京田田-88         - 京田田-88         - 京田田-88         - 京田田-88         - 京田田-88         - 京田田-123         - 古新田-88         - 京田田-123         - 古新田-250         - 京田田-123         - 京田田-124         - 京田田-123         - 京田田-123         - 京田田-124         - 京田田  |                       |         |          | G      |          |
| 19イブ: Qt-中・PI-低    古新田-88  |                       |         |          |        |          |
| 志貴野-12         西尾市         平瓦         I         古新田-88         E         お新田-123         E         お新田-123         E         古新田-123         E         古新田-123         T         E         古新田-123         T         T         E         古新田-123         T         T         五新田-123         T         五新田-123         T         五新田-123         T         五新田-124         T         五十五年   | 古新田-17                |         |          |        | 古新田-256  |
| 鳥羽神宮寺-7         幡豆町         平瓦         日 古新田-123           古新田-11         西尾市         平瓦         日 古新田-250           古新田-5         西尾市         東瓦         日 古新田-250           古新田-5         西尾市         東瓦         日 古新田-244           中の  |                       | タイプ:(   | Q t -中・P | I 一低   |          |
| 古新田-11         西尾市         平瓦         I 古新田-250           旧タイプ: その他         古新田-244         1           古新田-5         西尾市         丸瓦         G 古新田-244           旧タイプ: Q t - 小・P I - 低         1         1           北迫瓦窯-14         幡豆町         平瓦         C 古新田-102           旧タイプ: Q t - 小・P I - 低         古新田-102         1           寺部堂前-10         幡豆町         丸瓦         C 古新田-115           間タイプ: Q t - 小・P I - 高         日本新田-109         カ瓦         C 古新田-109           別郷廃寺-3         安城市         丸瓦         G 古新田-150         会報田-164           寺領廃寺-2         安城市         丸瓦         G 古新田-167         古新田-241           間タイプ: Q t - 中・P I - 高         G 古新田-241         日本新田-241         日本新田-241           間タイプ: Q t - 中・P I - 高         G 古新田-19         日本新田-241         日本新田-241         日本新田-167         日本新田-167         日本新田-167         日本新田-19         日本新田-19         日本新田-179         日本新田-179         日本新田-179         日本新田-179         日本新田-179         日本新田-179         日本新田-179         日本新田-179         日本新田-245         日本新田-245         日本新田-245         日本新田-245         日本新田-245         日本新田-245         日本新田-245         日本新田-77         日本新田-31         日本新田-31         日本新田-31         日本新田-38  |                       |         |          | _      |          |
| タイプ: その他   |                       |         |          | E      |          |
| 古新田-5         西尾市         丸瓦         G         古新田-244           IIタイプ: Qt-小・PI-低         「古新田-102         「日本田-102         「日本田-102         「日本田-102         「日本田-102         「日本田-102         「日本田-109         「日本田-109         「日本田-109         「日本田-109         日本田-109         日本田-109         日本田-109         日本田-109         日本新田-150         古新田-164         古新田-164         古新田-164         古新田-164         古新田-164         古新田-167         古新田-167         古新田-167         古新田-241         「日本新田-241         「日本新田-241         「日本新田-241         「日本新田-241         日本新田-241         日本新田-37         市本新田-37         市本部田-37         市本部田-37         市本部田-37         市本部田-37         市本部田-111         市新田-37         市本部田-111         市新田-172         日本新田-172         日本新田-172         日本新田-172         日本新田-172         日本新田-172         日本新田-243         日本新田-243         日本新田-243         日本新田-77         「日本新田-77         「日本 田-77         「日本 田-77         日本 田-77         日本 田-77         日本 田-8         <  | 古新田-11                |         |          |        | 古新田-250  |
|  |                       |         |          |        |          |
| 北迫瓦窯 - 1 4         幅豆町         平瓦         C         古新田 - 1 0 2           ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・   | 古新田-5                 |         |          |        | 古新田-244  |
| 旧タイプ:Qt-大・PI-低   古新田-115   旧タイプ:Qt-小・PI-高   野田市   丸瓦   G   古新田-115   伊保白鳳寺-7   豊田市   丸瓦   G   古新田-150   分類解廃寺-3   安城市   丸瓦   G   古新田-160   分類解廃寺-2   安城市   丸瓦   G   古新田-160   分類解廃寺-5   安城市   丸瓦   G   古新田-160   分類解廃寺-5   安城市   丸瓦   G   古新田-160   分類解廃寺-5   安城市   丸瓦   G   古新田-160   分類田-241   旧タイプ:Qt-中・PI-高   世界の関係寺-7   安城市   丸瓦   G   古新田-19   伊保白鳳寺-10   安城市   丸瓦   G   古新田-111   与領廃寺-7   安城市   丸瓦   G   古新田-111   与領廃寺-7   安城市   丸瓦   G   古新田-169   分類田-169   大瓦   G   古新田-172   日本新田-4   西尾市   丸瓦   G   古新田-243   古新田-4   西尾市   丸瓦   G   古新田-245   田タイプ:Qt-小・PI-高   西尾市   丸瓦   G   古新田-245   田タイプ:Qt-小・PI-低   大瓦   G   古新田-31   日本新田-33   伊保白鳳寺-5   豊田市   丸瓦   G   古新田-39   伊保白鳳寺-6   豊田市   丸瓦   G   古新田-39   伊保白鳳寺-6   豊田市   丸瓦   G   古新田-39   伊保白鳳寺-6   豊田市   丸瓦   G   古新田-53   西尾市   九瓦   G   古新田-53   西尾市   九瓦   G   古新田-53   西貫野-1   西新田-50   古新田-50   西尾市   九瓦   G   古新田-50   古新田-50   西尾市   九瓦   G   古新田-50   古新田-50   西尾市   九瓦   G   古新田-79  |                       |         |          |        | 1 +<     |
| 専部堂前-10         幅豆町         平瓦         C         古新田-115           伊保白鳳寺-7         豊田市         丸瓦         G         古新田-41           寺部堂前-4         幅豆町         丸瓦         G         古新田-109           別郷廃寺-3         安城市         丸瓦         G         古新田-160           寺領廃寺-2         安城市         丸瓦         G         古新田-160           寺領廃寺-2         安城市         丸瓦         G         古新田-160           市         丸瓦         G         古新田-241           川夕イブ:Qt-中・Pl-高         百万         古新田-241           川夕イブ:Qt-中・Pl-高         古新田-241           伊保皇鳳寺-3         豊田市         丸瓦         G         古新田-37           寺部座前-6         幅豆町         丸瓦         G         古新田-11         G         古新田-11         G         市新田-11         G         市新田-11         G         市新田-11         G         市新田-11         G         市新田-12         G         市新田-12         G         市新田-12         G         市新田-12         G         市新田-12         G         市新田-12         G         市新田-24         G         市新田-24         G         市新田-24         G         市新田-24         G         市新田-24         G         市新田-77         IIIタイプ:Qt-小   | 北迫瓦窯-14               |         |          |        | 古新田-102  |
| 旧タイプ:Qtー小・Plー高   日本田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田   |                       |         |          |        |          |
| 伊保白鳳寺-7         豊田市         丸瓦         G         古新田-41           寺部堂前-4         幅豆町         丸瓦         C         古新田-109           別郷廃寺-3         安城市         丸瓦         G         古新田-150           寺領廃寺-2         安城市         丸瓦         I         古新田-167           吉新田-167         丸瓦         G         古新田-167           古新田-2         西尾市         丸瓦         G         古新田-167           古新田-2         田崎市         丸瓦         G         古新田-19           伊保白鳳寺-3         豊田市         丸瓦         G         古新田-19           伊保田島県寺-7         安城市         丸瓦         G         古新田-111           寺領廃寺-7         安城市         丸瓦         G         古新田-169           寺領廃寺-7         安城市         丸瓦         G         古新田-172           古新田-4         西尾市         丸瓦         G         古新田-243           古新田-5         豊田市         丸瓦         G         古新田-77   | 寺部堂前-10               |         |          |        | 古新田-115  |
| 専部堂前-4         幅豆町         丸瓦         C         古新田-109           別郷廃寺-3         安城市         丸瓦         G         古新田-150           寺領廃寺-2         安城市         丸瓦         I         古新田-167           寺領廃寺-5         安城市         丸瓦         G         古新田-167           古新田-2         西尾市         丸瓦         I         古新田-19           厚保白鳳寺-3         豊田市         丸瓦         G         古新田-19           伊保白鳳寺-3         豊田市         丸瓦         G         古新田-19           寺部堂前-6         幡豆町         丸瓦         G         古新田-111           寺領廃寺-7         安城市         丸瓦         G         古新田-111           寺領廃寺-7         安城市         丸瓦         G         古新田-172           古新田-4         西尾市         丸瓦         G         古新田-172           古新田-4         西尾市         丸瓦         G         古新田-243           市田-6         西尾市         丸瓦         G         古新田-77           川夕イブ:Q t -小・P I -低         西新田-77         田夕イブ:Q t -小・P I -低         市新田-31           カル原寺-3         豊田市         丸瓦         A         古新田-31           伊保白鳳寺-4         豊田市         丸瓦         A         古新田-31  |                       |         |          |        |          |
| 別郷廃寺-3         安城市         丸瓦         G         古新田-150           寺領廃寺-2         安城市         丸瓦         I         古新田-164           寺領廃寺-5         安城市         丸瓦         G         古新田-167           古新田-2         西尾市         丸瓦         I         古新田-241           川夕イブ:Qt-中・PI-高         百新田-19         中保日本・PI-高         日本部田-37         市部田-37         市部田-37         市部田-37         市部田-37         市部田-111         市場田-37         市部田-111         市場原寿-7         安城市         丸瓦         G         古新田-169         市場田-172         古新田-169         市場田-172         古新田-243         古新田-243         古新田-243         古新田-245         古新田-245         古新田-245         国田/イブ:Qt-小中・PI-高         市新田-245         市新田-77         田/タイプ:Qt-小・PI-個         市新田-77         田/タイプ:Qt-小・PI-個         市新田-31         市新田-31         市新田-38         伊保白鳳寺-4         豊田市         丸瓦         A         古新田-39         伊保白鳳寺-5         豊田市         丸瓦         A         古新田-39         日本新田-53         市新田-53         市町-53         市局市         丸瓦         B         古新田-53         市新田-53         市新田-53         市局市         九瓦         日本新田-53         市新田-53         市新田-53         市新田-53         市新田-53         市新田-53         市新田-53         市新田-53   |                       |         |          |        |          |
| 専領廃寺-2     安城市     丸瓦     I     古新田-167       青領廃寺-5     安城市     丸瓦     I     古新田-167       古新田-2     西尾市     丸瓦     I     古新田-241       川夕プごQt-中・PI-高     田崎市     丸瓦     G     古新田-19       身福寺東谷-1     岡崎市     丸瓦     G     古新田-19       伊保白鳳寺-3     豊田市     丸瓦     G     古新田-111       寺領廃寺-7     安城市     丸瓦     G     古新田-169       寺領廃寺-7     安城市     丸瓦     G     古新田-169       古新田-10     安城市     丸瓦     G     古新田-172       古新田-4     西尾市     丸瓦     G     古新田-243       古新田-6     西尾市     丸瓦     G     古新田-245       川夕イブ:Qt-小中・PI-高     西新田-245     田/ワイブ:Qt-小中・PI-高       市場田-245     カス     日     古新田-77       川夕イブ:Qt-小・PI-億     古新田-77     田/ワイブ:Qt-小・PI-億       丸瓦     日     古新田-31     古新田-38       伊保白鳳寺-3     豊田市     丸瓦     日     古新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     日     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     日     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     日     古新田-79  |                       |         |          | _      |          |
| 専領廃寺-5     安城市     丸瓦     G     古新田-167       古新田-2     西尾市     丸瓦     I     古新田-241       川夕イプ:Qt-中・PI-高     国際市     丸瓦     G     古新田-19       夏福寺東令-1     関崎市     丸瓦     H     古新田-19       伊保白鳳寺-3     豊田市     丸瓦     H     古新田-111       寺領廃寺-7     安城市     丸瓦     G     古新田-111       寺領廃寺-7     安城市     丸瓦     G     古新田-172       古新田-4     西尾市     丸瓦     G     古新田-243       古新田-6     西尾市     丸瓦     G     古新田-245       山野イプ:Qt-小中・PI-高     古新田-245     古新田-77       川夕イプ:Qt-小中・PI-低     田内イプ・Qt-小・PI-低       丸瓦     I     古新田-31       伊保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     A     古新田-38       伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     I     古新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79   |                       |         |          |        |          |
| 古新田-2     西尾市     丸瓦     I     古新田-241       日本中・PI-高     見福寺東谷-1     開崎市     丸瓦     日 古新田-19       伊保白鳳寺-3     豊田市     丸瓦     日 古新田-37       寺部堂前-6     毎毎日     丸瓦     日 古新田-111       寺領廃寺-7     安城市     丸瓦     日 古新田-111       中の展寺-10     安城市     丸瓦     日 古新田-172       古新田-6     西尾市     丸瓦     日 古新田-245       加藤寺-1     西尾市     丸瓦     日 古新田-77       加藤寺-3     園崎市     丸瓦     日 古新田-31       中保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     日 古新田-38       伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     日 古新田-40       伊保白鳳寺-19     豊田市     丸瓦     日 古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     日 古新田-79   |                       |         |          |        |          |
| IIIタイプ:Qt-中・PI-高   |                       |         |          |        |          |
| 真福寺東谷-1         岡崎市         丸瓦         G         古新田-19           伊保白鳳寺-3         豊田市         丸瓦         H         古新田-17           寺簡廃寺-7         安城市         丸瓦         G         古新田-111           寺簡廃寺-7         安城市         丸瓦         G         古新田-169           寺領廃寺-10         安城市         丸瓦         I         古新田-172           古新田-4         西尾市         丸瓦         G         古新田-243           古新田-6         西尾市         丸瓦         G         古新田-245           川夕イブ:Qt-小中・Pl-高         古新田-77         田夕イブ:Qt-小・Pl-個         古新田-77           川夕イブ:Qt-小・Pl-個         本新田-31         日本新田-31           伊保白鳳寺-3         岡崎市         丸瓦         I         古新田-38           伊保白鳳寺-5         豊田市         丸瓦         I         古新田-39           伊保白鳳寺-6         豊田市         丸瓦         I         古新田-53           志貴野-3         西尾市         丸瓦         G         古新田-79  | 占新田-2                 |         |          |        | 占新田-241  |
| 伊保白鳳寺-3         豊田市         丸瓦         H         占新田-37           寺部堂前-6         幅豆町         丸瓦         C         占新田-111           寺領廃寺-7         安城市         丸瓦         G         占新田-169           寺領廃寺-10         安城市         丸瓦         I         占新田-172           古新田-4         西尾市         丸瓦         G         古新田-243           古新田-6         西尾市         丸瓦         G         古新田-245           川夕イプ:Qt-小中・PI-高         古新田-245         田川タイプ:Qt-小中・PI-高         古新田-77           川夕イプ:Qt-小中・PI-高         西尾市         丸瓦         G         古新田-77           九山廃寺-3         岡崎市         丸瓦         I         古新田-31           伊保白鳳寺-4         豊田市         丸瓦         A         古新田-38           伊保白鳳寺-5         豊田市         丸瓦         I         古新田-53           市場田-5         五         上         古新田-53         古新田-53           市場田-5         西尾市         丸瓦         日         古新田-53           市場田-5         西尾市         丸瓦         日         古新田-53           市場田-5         西尾市         丸瓦         日         古新田-79  | *=++\\ \ \            |         |          |        | ±*cm 1.0 |
| 専部堂前-6     幅豆町     丸瓦     C     古新田-111       青額廃寺-7     安城市     丸瓦     G     古新田-169       青額廃寺-10     安城市     丸瓦     I     古新田-172       古新田-4     西尾市     丸瓦     G     古新田-243       古新田-6     西尾市     丸瓦     G     古新田-245       川夕イプ:Qt-小中・PI-高     西尾市     丸瓦     G     古新田-77       川夕イブ:Qt-小・PI-低       丸山廃寺-3     岡崎市     丸瓦     I     古新田-31       伊保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     A     古新田-38       伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     I     古新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79   |                       |         |          |        |          |
| 寺領廃寺 - 7     安城市     丸瓦     G     占新田 - 169       寺領廃寺 - 10     安城市     丸瓦     I     占新田 - 172       古新田 - 4     西尾市     丸瓦     G     古新田 - 243       古新田 - 6     西尾市     丸瓦     G     古新田 - 245       川夕イブ: Qt - 小中・PI - 高     高     古新田 - 245       北京     G     古新田 - 245       川夕イブ: Qt - 小中・PI - 高     高     古新田 - 77       川夕イブ: Qt - 小中 - PI - 個     田戸・グラママートの     中の       丸瓦     I     古新田 - 31       伊保白鳳寺 - 4     豊田市     丸瓦     I     古新田 - 39       伊保白鳳寺 - 5     豊田市     丸瓦     I     古新田 - 40     伊保白鳳寺 - 40       伊保白鳳寺 - 6     豊田市     丸瓦     I     古新田 - 53       志貴野 - 3     西尾市     丸瓦     G     古新田 - 79   |                       |         |          |        |          |
| 寺領廃寺-10     安城市     丸瓦     I     古新田-172       古新田-4     西尾市     丸瓦     G     古新田-243       古新田-6     西尾市     丸瓦     G     古新田-245       IIIタイプ:Qt-小中・PI-高     東面     G     古新田-77       IIIタイプ:Qt-小・PI-低       丸瓦     G     古新田-31       伊保白鳳寺-3     関崎市     丸瓦     I     古新田-31       伊保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     I     古新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     古新田-40       伊保白鳳寺-19     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79   |                       |         |          |        |          |
| 古新田-4     西尾市     丸瓦     G     古新田-243       古新田-6     西尾市     丸瓦     G     古新田-245       川タイプ:Qt-小中・PI-高     古新田-77       北瓦     G     古新田-77       川タイプ:Qt-小・PI-高     古新田-77       川タイプ:Qt-小・PI-高     古新田-31       水山廃寺-3     岡崎市     丸瓦     I     古新田-31       伊保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     A     古新田-38       伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     I     古新田-40       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       市貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79  |                       |         |          |        |          |
| 古新田-6     西尾市     丸瓦     G     古新田-245       IIIタイプ:Qt-小中・PI-高     西尾市     丸瓦     G     古新田-77       地戸イプ:Qt-小・PI-低     地戸・ファール・B     大瓦     日     古新田-77       丸山廃寺-3     岡崎市     丸瓦     I     古新田-31       伊保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     A     古新田-38       伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     I     古新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     古新田-40       伊保白鳳寺-19     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79  |                       |         |          |        |          |
| IIIタイプ: Q t - 小中・P I - 高  古新田-77   IIIタイプ: Q t - 小・P I - 高  古新田-77   IIIタイプ: Q t - 小・P I - 低   |                       |         |          |        |          |
| 志貴野-1     西尾市     丸瓦     G     古新田-77       丸山廃寺-3     間タイプ: Q t -小・P I -低       丸山廃寺-3     間崎市     丸瓦     I     古新田-31       伊保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     A     古新田-38       伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     I     古新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     古新田-40       伊保白鳳寺-19     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79   | 古新田-6                 |         |          |        | 古新田-245  |
| IIIタイプ:Q t -小・P I -低   丸山廃寺-3   岡崎市   丸瓦   I   古新田-31     伊保白鳳寺-4   豊田市   丸瓦   A   古新田-38     伊保白鳳寺-5   豊田市   丸瓦   I   古新田-39     伊保白鳳寺-6   豊田市   丸瓦   I   古新田-40     伊保白鳳寺-19   豊田市   丸瓦   I   古新田-53     志貴野-3   西尾市   丸瓦   G   古新田-79   |                       |         |          | _      | +*cm = = |
| 丸山廃寺-3     岡崎市     丸瓦     I     占新田-31       伊保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     A     占新田-38       伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     I     占新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     占新田-40       伊保白鳳寺-19     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79  | 志貞野-                  |         |          |        | 古新出ーブブ   |
| 伊保白鳳寺-4     豊田市     丸瓦     A     古新田-38       伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     I     古新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     古新田-40       伊保白鳳寺-19     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79   | +.l.es+ ^             |         |          |        | ±*CD 0.3 |
| 伊保白鳳寺-5     豊田市     丸瓦     I     古新田-39       伊保白鳳寺-6     豊田市     丸瓦     I     古新田-40       伊保白鳳寺-19     豊田市     丸瓦     I     古新田-53       志貴野-3     西尾市     丸瓦     G     古新田-79   |                       |         |          |        |          |
| 伊保白鳳寺 - 6     豊田市     丸瓦     I 古新田 - 4 0       伊保白鳳寺 - 1 9     豊田市     丸瓦     I 古新田 - 5 3       志貴野 - 3     西尾市     丸瓦     G 古新田 - 7 9   |                       |         |          |        |          |
| 伊保白鳳寺-19 豊田市 丸瓦 I 古新田-53<br>志貴野-3 西尾市 丸瓦 G 古新田-79  |                       |         |          |        |          |
| 志貴野-3 西尾市 丸瓦 G 古新田-79  |                       |         |          |        |          |
|  |                       |         |          |        |          |
| 北坦瓦第-5   幡豆町   丸瓦   B   古新田-93   |                       |         |          |        |          |
|  | 北坦瓦黑-5                | 幡豆町     | 丸丸       | В      | 古新出一93   |

| \#\0+=#\\\\ \ | /#U+18=C | <b>下</b> | タイプ    | 備考       |
|---------------|----------|----------|--------|----------|
| 遺跡試料No        | 遺跡場所     | 瓦 種      | 分類     | (分析試料番号) |
| 鳥羽神宮寺-2       | 幡豆町      | 丸瓦       | С      | 古新田-118  |
| 鳥羽神宮寺-4       | 幡豆町      | 丸瓦       | C      | 古新田-120  |
| 鳥羽神宮寺-5       | 幡豆町      | 丸瓦       | С      | 古新田-121  |
| 鳥羽神宮寺-6       | 幡豆町      | 丸瓦       | В      | 古新田-122  |
| 寺領廃寺-4        | 安城市      | 丸瓦       | -      | 古新田-166  |
| 寺領廃寺-9        | 安城市      | 丸瓦       | G      | 古新田-171  |
|               | IIIタイプ:C | t -中・P   | I -低   |          |
| 北野廃寺-4        | 岡崎市      | 丸瓦       | G      | 古新田-4    |
| 北野廃寺-5        | 岡崎市      | 丸瓦       | -      | 古新田-5    |
| 北野廃寺-6        | 岡崎市      | 丸瓦       | F      | 古新田-6    |
| 北野廃寺-7        | 岡崎市      | 丸瓦       | G      | 古新田-7    |
| 北野廃寺-9        | 岡崎市      | 丸瓦       | -      | 古新田-9    |
| 真福寺東谷-3       | 岡崎市      | 丸瓦       |        | 古新田-21   |
| 丸山廃寺-1        | 岡崎市      | 丸瓦       | ı      | 古新田-29   |
| 丸山廃寺 - 2      | 岡崎市      | 丸瓦       | -      | 古新田-30   |
| 雨掘瓦窯-1        | 西尾市      | 丸瓦       | G      | 古新田-71   |
| 雨掘瓦窯-3        | 西尾市      | 丸瓦       | ı      | 古新田-73   |
| 志貴野-4         | 西尾市      | 丸瓦       | ı      | 古新田-80   |
| 志貴野-5         | 西尾市      | 丸瓦       | ı      | 古新田-81   |
| 志貴野-6         | 西尾市      | 丸瓦       | ı      | 古新田-82   |
| 寺部堂前-2        | 幡豆町      | 丸瓦       | ı      | 古新田-107  |
| 寺部堂前-3        | 幡豆町      | 丸瓦       | Α      | 古新田-108  |
| 神宮寺 – 3       | 幡豆町      | 丸瓦       | ı      | 古新田-119  |
| 大久根-2         | 安城市      | 丸瓦       | i      | 古新田-158  |
| 大久根-3         | 安城市      | 丸瓦       | G      | 古新田-159  |
| 寺領廃寺-1        | 安城市      | 丸瓦       | T T    | 古新田-163  |
| 古新田-1         | 西尾市      | 丸瓦       |        | 古新田-240  |
| 古新田-3         | 西尾市      | 丸瓦       | G      | 古新田-242  |
|               |          | ′プ:その他   |        |          |
| 寺部堂前-5        | 幡豆町      | 丸瓦       | С      | 古新田-110  |
|               | IIIタイプ:C | ) t 一小・P | I 一高   |          |
| 伊保白鳳寺-11      | 豊田市      | 平瓦       | D      | 古新田-45   |
| 伊保白鳳寺-12      | 豊田市      | 平瓦       | ı      | 古新田-46   |
| 伊保白鳳寺-14      | 豊田市      | 平瓦       | ı      | 古新田-48   |
| 伊保白鳳寺-20      | 豊田市      | 平瓦       | F      | 古新田-54   |
| 雨掘瓦窯-4        | 西尾市      | 平瓦       | С      | 古新田-74   |
| 志貴野-10        | 西尾市      | 平瓦       | G      | 古新田-86   |
| 北迫瓦窯-13       | 幡豆町      | 平瓦       |        | 古新田-101  |
| 寺部堂前-11       | 幡豆町      | 平瓦       | С      | 古新田-116  |
| 寺領廃寺-12       | 安城市      | 平瓦       | G      | 古新田-174  |
| 寺領廃寺-15       | 安城市      | 平瓦       |        | 古新田-177  |
| 古新田-16        | 西尾市      | 平瓦       | G      | 古新田-255  |
|               | IIIタイプ:C | ) t -中・P | I 一高   |          |
| 北野廃寺-11       | 岡崎市      | 平瓦       |        | 古新田-11   |
| 北野廃寺-17       | 岡崎市      | 平瓦       | G      | 古新田-17   |
| 北野廃寺-18       | 岡崎市      | 平瓦       | G      | 古新田-18   |
| 牛寺廃寺-7        | 豊田市      | 平瓦       | F      | 古新田-61   |
| 寺部堂前-7        | 幡豆町      | 平瓦       | С      | 古新田-112  |
| 大久根-5         | 安城市      | 平瓦       | F      | 古新田-161  |
| 寺領廃寺-14       | 安城市      | 平瓦       | Н      | 古新田-176  |
| 寺領廃寺-20       | 安城市      | 平瓦       | G      | 古新田-182  |
| 古新田-20        | 西尾市      | 平瓦       | G      | 古新田-259  |
|               | IIIタイプ:Q | t 一小中・F  | 7   一高 |          |
| 志貴野-11        | 西尾市      | 平瓦       |        | 古新田-87   |
|               | IIIタイプ:C | ) t -小・P | I-低    |          |
| 伊保白鳳寺-10      | 豊田市      | 平瓦       | ı      | 古新田-44   |
| 伊保白鳳寺-13      | 豊田市      | 平瓦       | ı      | 古新田-47   |
| 伊保白鳳寺-16      | 豊田市      | 平瓦       | ı      | 古新田-50   |
| 志貴野-7         | 西尾市      | 平瓦       | ı      | 古新田-83   |
| 志貴野-8         | 西尾市      | 平瓦       | С      | 古新田-84   |
| 北迫瓦窯-9        | 幡豆町      | 平瓦       | С      | 古新田-97   |
| 北迫瓦窯-10       | 幡豆町      | 平瓦       | Α      | 古新田-98   |
| 鳥羽神宮寺-8       | 幡豆町      | 平瓦       |        | 古新田-124  |
| 鳥羽神宮寺-11      | 幡豆町      | 平瓦       | С      | 古新田-127  |

すれば、これらの瓦は寺領廃寺の屋根を飾って いた瓦と考えることができる。軒平瓦につい ては出土数が僅かであるために不明な点が多 いが、41(図7)には端部に重弧文が施され、 軒平瓦の一部と考えることができる。矢作川流 域の寺院跡では、北野廃寺系の軒丸瓦と重弧文 の軒平瓦が多く確認されていることからも、共

通点があるように思われる。

軒瓦以外に、丸瓦と平瓦をみておく。出土し た丸瓦は、行基葺きの粘土板作りで側板連結模 骨を使用し、凸面をナデ調整などで叩き目痕 を消しているものが多い。そのため、凸面にど のような叩き調整が行われていたのか確認する ことは困難である。玉縁式丸瓦は出土していな

|                       | 1          |            | タイプ      | /===                            |
|-----------------------|------------|------------|----------|---------------------------------|
| 遺跡試料No                | 遺跡場所       | 瓦 種        | 分類       | 備考<br>分析試料番号                    |
| 別郷廃寺-5                | 安城市        | 平瓦         | I        | 古新田-152                         |
| 別郷廃寺-7                | 安城市        | 平瓦         | I        | 古新田-154                         |
| 別郷廃寺-8                | 安城市        | 平瓦         | G        | 古新田-155                         |
| 別郷廃寺-9                | 安城市        | 平瓦         | G        | 古新田-156                         |
| 寺領廃寺-11               | 安城市        | 平瓦         | I        | 古新田-173                         |
| 寺領廃寺-19               | 安城市        | 平瓦         | I        | 古新田-181                         |
| 舞木廃寺-6                | 豊田市        | 平瓦         | I        | 古新田-203                         |
| 勧学院文護寺-2              | 豊田市        | 平瓦         | 1        | 古新田-206                         |
| 勧学院文護寺-3              | 豊田市        | 平瓦         | I        | 古新田-207                         |
| 古新田-13                | 西尾市        | 平瓦         | G        | 古新田-252                         |
| 古新田-18                | 西尾市        | 平瓦         | G        | 古新田-257                         |
| 古新田-19                | 西尾市        | 平瓦         | G        | 古新田-258                         |
|                       | タイプ:0      |            |          |                                 |
| 北野廃寺-12               | 岡崎市        | 平瓦         | I        | 古新田-12                          |
| 北野廃寺-15               | 岡崎市        | 平瓦         | G        | 古新田-15                          |
| 北野廃寺-16               | 岡崎市        | 平瓦         | 1        | 古新田-16                          |
| 真福寺東谷-7               | 岡崎市        | 平瓦         | G        | 古新田-25                          |
| 丸山廃寺-5                | 岡崎市        | 平瓦         | E        | 古新田-33                          |
| 丸山廃寺-6                | 岡崎市        | 平瓦         | G        | 古新田-34                          |
| 伊保白鳳寺-15              | 豊田市        | 平瓦         | _ I      | 古新田-49                          |
| 伊保白鳳寺-18              | 豊田市        | 平瓦         |          | 古新田-52                          |
| 牛寺廃寺-5                | 豊田市        | 平瓦         | F        | 古新田-59                          |
| 牛寺廃寺-6                | 豊田市        | 平瓦         | G        | 古新田一60                          |
| 牛寺廃寺-8                | 豊田市        | 平瓦         | F        | 古新田-62                          |
| 牛寺廃寺-10               | 豊田市        | 平瓦         | F        | 古新田-64                          |
| 鳥羽神宮寺-9               | 幡豆町        | 平瓦平瓦       | C        | 古新田-125<br>古新田-126              |
| 鳥羽神宮寺-10              | 幡豆町<br>安城市 | 平瓦平瓦       |          |                                 |
| 別郷廃寺-6<br>大久根-4       |            | 平瓦         | <u> </u> |                                 |
| 大久恨 - 4<br>寺領廃寺 - 1 3 | 安城市        | 平瓦         | <u> </u> | 古新田-160<br>古新田-175              |
|                       | 安城市        | 平瓦         | <u> </u> | 古新田-180                         |
| 寺領廃寺-18<br>神明瓦窯-10    | 豊田市        | 平瓦         | G        | 古新田-192                         |
| 神明瓦窯-15               | 豊田市        | 平瓦         | G        | 古新田-197                         |
| 古新田-7                 | 西尾市        | 平瓦         | ī        | 古新田-246                         |
| 古新田-8                 | 西尾市        | 平瓦         | i        | 古新田-247                         |
| 古新田-9                 | 西尾市        | 平瓦         | G        | 古新田-248                         |
| 古新田-10                | 西尾市        | 平瓦         | G        | 古新田-249                         |
| 古新田-15                | 西尾市        | 平瓦         | G        | 古新田-254                         |
|                       |            | プ:その他      |          |                                 |
| 丸山廃寺-4                | 岡崎市        | 平瓦         | G        | 古新田-32                          |
|                       | タイプ:C      | t -中·P     | I 一高     |                                 |
| 鳥羽神宮寺-1               | 幡豆町        | 軒丸瓦        | С        | 古新田-117                         |
|                       | Ⅲタイプ:C     | ) t -中・P   | I -低     |                                 |
| 北野廃寺-1                | 岡崎市        | 軒丸瓦        | ı        | 古新田-1                           |
| 北野廃寺-2                | 岡崎市        | 軒丸瓦        | ı        | 古新田-2                           |
|                       | Ⅲタイプ:C     |            | I -低     |                                 |
| 寺部堂前-1                | 幡豆町        | 軒平瓦        |          | 古新田-106                         |
|                       | IVタイプ:(    |            |          | 1 +<==                          |
| 寺領廃寺-3                | 安城市        | 丸瓦         | G        | 古新田-165                         |
| 寺領廃寺-6                | 安城市        | 丸瓦         | G        | 古新田-168                         |
| <b>支援まま</b> か ・       | Vタイプ:(     |            | _        |                                 |
| 真福寺東谷-4               | 岡崎市        | 丸瓦         | G        | 古新田-22                          |
| 牛寺廃寺一1                | 豊田市        | <u> 丸瓦</u> | C        | 古新田-55                          |
| 牛寺廃寺-2                | 豊田市        | <u>丸瓦</u>  | F        | 古新田-56                          |
| 牛寺廃寺-3                | 豊田市        | <u>丸瓦</u>  | G        | 古新田-57                          |
| 神明瓦窯-5                | 豊田市        | 丸瓦         | G I      | 古新田-187                         |
| 北昭成土 つ                |            | )t -小・P    |          | 十並用 つ                           |
| 北野廃寺-3                | 岡崎市        | 丸瓦         | I        | 古新田-3                           |
| 北野廃寺-8                | 岡崎市        | 丸瓦         | I        | 古新田-8                           |
| 真福寺東谷-5               | 岡崎市        | 丸瓦         | _ I      | 古新田-23                          |
| 別郷廃寺-1                | 安城市        | 丸瓦         | I        | 古新田-148                         |
| 大久根一1                 | 安城市        | 丸瓦         | I        | 古新田-157<br>古新田-183              |
| 神明瓦窯-1<br>舞木廃寺-1      | 豊田市        | 丸瓦         | I        | <u>古新田− 1 8 3</u><br>古新田− 1 9 8 |
|                       | remiii     | 丸瓦         | 1        | - n ≠ 1 m − 1 9 8               |

| 遺跡試料No             | 遺跡場所            | 瓦 種            | タイプ<br>分類  | 備考<br>(分析試料番号)     |
|--------------------|-----------------|----------------|------------|--------------------|
|                    |                 | ) t —中 · P     |            | (万州政府田石)           |
| 北野廃寺-10            | 岡崎市             | 丸瓦             | 1          | 古新田-10             |
| 真福寺東谷-2            | 岡崎市             | 丸瓦             | G          | 古新田-20             |
| 牛寺廃寺-4             | 豊田市             | 丸瓦             | G          | 古新田-58             |
| 別郷廃寺-2             | 安城市             | 丸瓦             | G          | 古新田-149            |
| 別郷廃寺-4             | 安城市             | 丸瓦             | G          | 古新田-151            |
| 神明瓦窯-2             | 豊田市             | 丸瓦             |            | 古新田-184            |
| 神明瓦窯-3             | 豊田市             | 丸瓦             |            | 古新田-185            |
| 神明瓦窯-4             | 豊田市             | 丸瓦             | 1          | 古新田-186            |
| 神明瓦窯-6             | 豊田市             | 丸瓦             | E          | 古新田-188            |
| 神明瓦窯-7<br>神明瓦窯-8   | 豊田市             | 丸瓦 丸瓦          | G<br>F     | 古新田-189<br>古新田-190 |
| 神明瓦窯-9             | 豊田市             | 丸瓦             | G          | 古新田-191            |
| 舞木廃寺-2             | 豊田市             | 丸瓦             | ī          | 古新田-199            |
| 舞木廃寺-3             | 豊田市             | 丸瓦             | i          | 古新田-200            |
| 勧学院文護寺-1           | 豊田市             | 丸瓦             | Ī          | 古新田-205            |
|                    | IVタイプ:(         |                | I 一低       |                    |
| 下り松瓦窯-3            | 三好町             | 丸瓦             | I          | 古新田-210            |
|                    | IVタイプ:(         |                | 一高         |                    |
| 雨掘瓦窯-6             |                 | 平瓦             | G          | 古新田-76             |
| *****              | Vタイプ:(          |                |            | +**T 0.0           |
| 真福寺東谷-8            | 岡崎市             | 平瓦             | G          | 古新田-26             |
| 寺領廃寺-16<br>神明瓦窯-11 | 安城市<br>豊田市      | 平瓦<br>平瓦       | G<br>G     | 古新田-178<br>古新田-193 |
| 仲明                 | I型四□<br>IVタイプ:( |                |            | 白制田一193            |
| <br>北野廃寺-14        |                 | プレーバ・P<br>平瓦   | 1 – 177    | 古新田-14             |
| 伊保白鳳寺-8            | 豊田市             | 平瓦             | i          | 古新田-42             |
| 舞木廃寺-5             | 豊田市             | 平瓦             | i          | 古新田-202            |
| 舞木廃寺-7             | 豊田市             | 平瓦             | !          | 古新田-204            |
|                    | IVタイプ:(         |                | I -低       |                    |
| 北野廃寺-13            | 岡崎市             | 平瓦             |            | 古新田-13             |
| 牛寺廃寺-9             | 豊田市             | 平瓦             | E          | 古新田-63             |
| 雨掘瓦窯-5             | 西尾市             | 平瓦             | !          | 古新田-75             |
| 北迫瓦窯-8             | 幡豆町             | 平瓦             |            | 古新田-96             |
| 北迫瓦窯-12            | 幡豆町             | 平瓦平瓦           | - 1        | 古新田-100<br>古新田-179 |
| 寺領廃寺-17<br>神明瓦窯-12 | 安城市<br>豊田市      | 平瓦             | G<br>G     | 古新田-179<br>古新田-194 |
| 神明瓦窯-14            | 豊田市             | 平瓦             | ī          | 古新田-196            |
| 舞木廃寺-4             | 豊田市             | 平瓦             | G          | 古新田-201            |
| 74 1 20 3          | IVタイプ: (        |                | I 一低       |                    |
| 大久根-6              | 安城市             | 平瓦             | G          | 古新田-162            |
| 下り松瓦窯-7            | 三好町             | 平瓦             | 1          | 古新田-214            |
| 下り松瓦窯-10           | 三好町             | 平瓦             | I          | 古新田-217            |
|                    | IVタイプ:(         |                | I 一低       |                    |
| 北迫瓦窯-1             |                 | 軒平瓦            |            | 古新田-89             |
| 土研座土 0             |                 | Q t 一中・P       |            | 古新田-170            |
| 寺領廃寺-8             | 安城市<br>  Vタイプ:( | 丸瓦<br>Q t -大・P | G<br>Ⅰ – 低 | 百新田一170            |
| 下り松瓦窯-2            | 三好町             | 丸瓦             | 1 - E      | 古新田-209            |
| 下り松瓦窯-4            | 三好町             | 丸瓦             | i          | 古新田-211            |
| 1 > IADOM          |                 | Q t 一小・P       |            | пин с              |
| 寺部堂前-8             |                 | 平瓦             | i          | 古新田-113            |
|                    | Vタイプ:(          | Q t 一中・P       | I 一低       |                    |
| 神明瓦窯-13            | 豊田市             | 平瓦             | G          | 古新田-195            |
| 下り松瓦窯-5            | 三好町             | 平瓦             | I          | 古新田-212            |
| 下り松瓦窯-8            | 三好町             | 平瓦             | _ !        | 古新田-215            |
| 下り松瓦窯-11           | 三好町             | 平瓦             | 1 /15      | 古新田-218            |
| 伊伊白園夫 O            |                 | Q t 一大・P       | I -低       | 十年四二 4つ            |
| 伊保白鳳寺-9<br>下り松瓦窯-6 | 豊田市<br>三好町      | 平瓦 平瓦          | 1          | 古新田-43<br>古新田-213  |
| 下り松瓦窯-9            | 三好町             | 平瓦             | <u> </u>   | 古新田-216            |
| 下り松瓦窯-12           | 三好町             | 平瓦平瓦           | <u> </u>   | 古新田-219            |
| 1 2 1440 77 1 4    |                 | ŢД<br>Q t −大・P |            | дляд 210           |
| 下り松瓦窯-1            | 三好町             | 軒丸瓦            | . 15       | 古新田-208            |
|                    |                 |                |            |                    |

い。また、出土した平瓦は粘土板桶巻き作りで、 凸面に格子目叩き痕が残るものとナデ調整(ナ デ消しを含む)したものに大きく分けることが できる。これ以外に、平行叩き痕を残す瓦も僅 かに確認されている。また、粘土板一枚作りで 凸面に縄目叩き痕を残す瓦も出土している。志 貴野廃寺跡から出土したといわれるほぼ完形の

平瓦1枚と丸瓦2枚が『西尾市史』に紹介されている。平瓦・丸瓦ともに土師質の大形品で、丸瓦はともに行基葺丸瓦である。他に凸面に格子目叩き痕の残す平瓦片も採集されており、これらの瓦と古新田遺跡で出土した丸瓦・平瓦はともに類似性が高いと思われる。

古新田遺跡から出土した古代瓦は、一時期に

作られた瓦とは考えにくい。例えば、前述した 須恵質の軒丸瓦(図7の4~7)では、間弁が 中房まで繋がっているものや離れているものの 違いがあり時期的な差を見出すことができ、 に土師質の軒丸瓦(図7の1~3)も確認されている。平瓦においても、凸面の調整において、 ナデ調整(ナデ消しを含む)・縄目叩きの違いがあり、一時期に調整の違う平瓦 に登り、一時期に調整の違うに を焼いて寺院の屋根に葺いていたとは考えに ない。また、縄目叩き痕を残す平瓦は、製作技法 も異なっている。そうすると、今回古新田遺跡 から出土した古代瓦は、長い期間にわたって 積されてきたものであることがわかる。

最後に、大胆な推測をして小稿を終えたい。 古新田遺跡の発掘調査によって、多くの古代瓦 が出土し、その瓦が長期間にわたって蓄積され てきたことが確認された。また、本遺跡が大郷 瓦窯跡や志貴野廃寺推定地の北側に位置してい ることを考えあわせてみると、古新田遺跡で検 出された古代の竪穴住居に住んでいた人々は、 何らかの形で瓦に関わっていたのではないかと 推定しておきたい。

#### 5 おわりに

以上、今回の胎土分析の結果から古新田遺跡 から出土した古代瓦について考えてみた。今回 の分析では、丸瓦や平瓦という瓦の種類や凸面 の調整方法の違いから胎土が異なるのかという ことを主眼に分析結果を見てきたが、今回の結 果だけでは明らかにすることはできなかった。 これ以外にも、須恵質・土師質の違いや、瓦の 大きさや厚さの違い、創建時の瓦と補修用の瓦 の違いなど、分析の方法はいくらでもあるよう に思われる。しかし、今回の分析では、出土し た瓦の全体量からいえばごく僅かでしかなく、 表採資料などが多く含まれているため正確性に 欠ける面があり、小稿の大半が推論の域を出て いない点が多く残念である。これからの分析結 果の蓄積に期待していきたい。また、気づいて いないことや間違っていることが多くみられる かもしれないが、それらはすべて瓦について知 識の乏しい筆者の責任であることを付け加えて おく。

最後になりましたが、今回の分析に快く資料を提供していただいた各資料館の方々、ご協力・ご助言をいただいた高浜市やきものの里かわら美術館の天野卓哉氏、ご教示いただいた本センター鬼頭剛氏に感謝の意を表します。

#### 参考文献

稲垣晋也他,1991『北野廃寺』 岡崎市教育委員会。

梶山 勝,1997「西三河の古代寺院-北野廃寺系軒丸瓦を中心として-」『愛知県史研究 創刊号』「愛知県史」研究編集委員会・愛知県総務 部県史編さん室。

小嶋廣也編,2003『木戸城・古新田遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第111集 (財) 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文 化財センター

斎藤嘉彦他,1982『真福寺東谷遺跡』 岡崎市教育委員会。

前田清彦,1992「三河の古代寺院と瓦窯」『第9回東海埋蔵文化財研究会岐阜大会 古代仏教東へ-寺と窯- 1、寺院編』 東海埋葬文化財研 究会実行委員会。

松井直樹,1990『志貴野遺跡』 西尾市教育委員会。

豊田市郷土史研究会,1978『豊田市埋蔵文化財調査集報 第六集 寺院址』 豊田市郷土資料館。

安城市史編さん委員会,1971『安城市史 本文編』

吉良町史編さん委員会 ,1996『吉良町史 原始・古代・中世前期』『猿投町誌』 猿投町誌編纂委員会

豊田市教育委員会・豊田市史編さん専門委員会 ,1976『豊田市史 一 自然・原始・古代・中世』

西尾市史編纂委員会 ,1974『西尾市史 二 古代・中世・近世上』

# 清須城下町における銅製品生産

―愛知県における金属製品生産(7)―

鈴木正貴・蔭山誠一

『清洲城下町遺跡WI』(宮腰・鈴木編 2002) に報告された銅製品関連遺物を中心に分析することにより、戦国時代から江戸時代初期における清須城下町内で行われた銅製品生産の検討を行った。この結果、本町西部地区の城下町期後期(17世紀初頭)の短冊型地割の町屋推定地の一角で小型の銅製品が鋳造されていた可能性が考えられた。そこでは、坩堝または取鍋の出土量の多さと何度も用いられたと思われる使用痕跡からみて、常住した銅細工職人の存在を想定した。また、製作された製品の大きさには多少のバラエティーがある可能性も指摘することができた。

# 1 はじめに

筆者らはこれまでに集落遺跡から出土する金属関連遺物の分析から鉄器生産を中心とした金属製品生産の様相を考察してきた(蔭山他2002など)。今回は、昨年度に刊行された報告書『清洲城下町遺跡Ⅷ』(宮腰・鈴木編2002)に報告された銅製品関連遺物を中心に分析することにより、戦国時代から江戸時代初期における清須城下町内で行われた銅製品生産の検討を行いたい。愛知県下では考古学的に類例がほとんど確認されていない銅細工職人の存在を考察するものである。

さて、多くの銅製品は鋳造と呼ばれる技術で 生産されていたといわれる。鋳造は製錬や精錬 などの地金生産工程の後に、金属地金を溶解し てあらかじめ製作しておいた鋳型に注ぎ込むこ とにより、目的の形態と構造を持った金属製品 を作る技術体系である。日本においては、弥生 時代から銅鐸や銅剣・銅矛などの青銅製品が鋳 造されたのをはじめとし、古代では金銅仏や梵 鐘・仏具、皇朝十二銭などが生産された。平安 時代においては鳥取県伯耆国府跡、福島県番匠 地遺跡、京都市京都大学構内遺跡などで鏡の鋳 型が出土している。中世以降でも、梵鐘など の鋳造遺構が埼玉県金井遺跡B区、大阪府真 福寺遺跡、福岡県鉾ノ浦遺跡などで確認されて おり、これらの遺跡では鉄鋳物の鍋なども生産 されていることから銅鉄兼業の鋳物生産が行わ れていたと考えられている。一方、中世京都に おいては、王朝文化の中心地を特徴づける手工 業生産工房が発見され、鏡の鋳型などの遺物が 京都内の各地で見つかっている。この中で左京 八条三坊周辺の遺跡では数多くの鋳型や坩堝が 出土しており、銅細工師と呼ばれる鋳造工人た ちが一帯の各所に居を構えて鋳物生産に従事し ていたと推定されている。さらに戦国時代を迎 えると、地方に銅鋳物生産が定着するようにな り、福井県一乗谷朝倉氏遺跡や七尾城跡シッケ 地区などで鏡作りの粗型が多数出土していると いう(五十川 2002)。

# 2 清須城下町における 金属製品生産の概要

清須城は応永年間に築城されたといわれ、尾張守護所が下津から移転した文明8 (1476)年からその城下町が本格的に機能し始めたと考えられている。天正14 (1586)年に織田信雄が紀伊長島から清須へ入城した際に大改修が行われ、三重の堀を掘削し広大な城下町域に武家屋敷や短冊型地割の町屋などが建設されたと考えられている。最終的には、徳川義直により名古屋城築城が行われた慶長15 (1610)年に、城と城下町が名古屋に移転したために清須城は廃城となった。清須城に関連する発掘調査は昭和50年代後半から朝日西遺跡、清洲城下町遺跡などの名称で行われ、これまでに約90000㎡行われてきた(図1)。

さて、清須城下町における金属製品生産に関

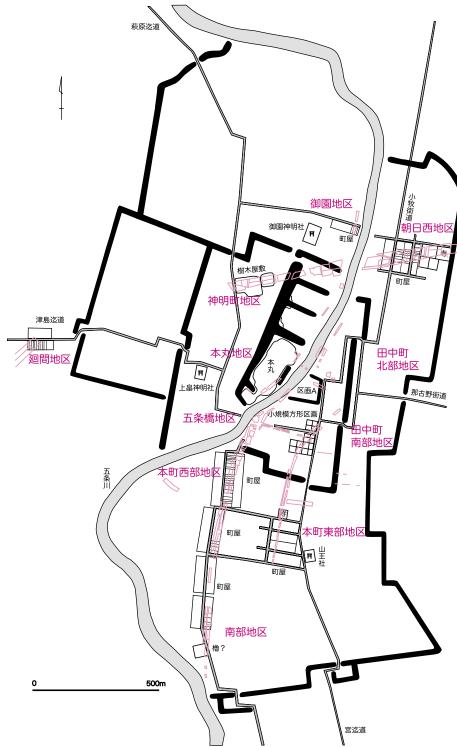
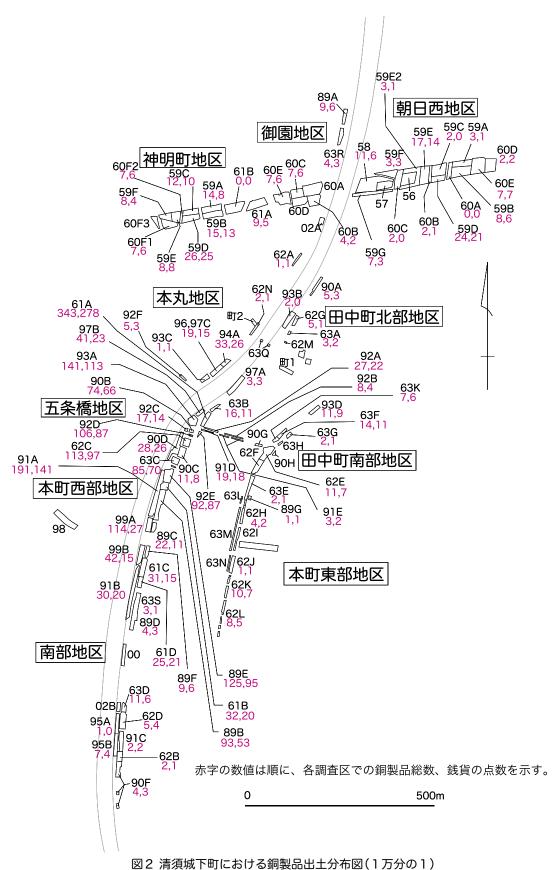


図1 清須城下町に関連する発掘調査区位置図(1万5千分の1) (城下町期III期の遺構復元図(鈴木編1995)を下絵とした)



する考察は、筆者らによる論考が2つ提出され ている。一つは、『清洲城下町遺跡Ⅴ』に掲載 された鉄滓の自然科学的な分析の報告とそれに 若干の考察を加えたものである(鈴木 1995)。 これは川崎テクノリサーチ株式会社に委託した 金属滓の金属学的な分析をもとにして、鉄滓な どの金属滓の分布状況からどの地区でどのよう な金属製品生産が行われたかを推論したもので ある。この結果、61A 区と 61CD 区では精錬 鍛冶などの製造工程が行われた可能性を、89B 区と91A区では鍛錬鍛冶を中心とした鉄製品 生産が行われた可能性を指摘した。また、銅 製品生産は91A区と五条橋地区南部で行われ た可能性をも推測した。この論文は清須城下町 内での具体的な金属製品生産工人の所在を考察 したものであったが、遺物に対する理解や分析 が浅く金属学的な分析結果に大きく依存したも のであったといえる。もう一つの考察は、朝日 西遺跡の金属関連遺物について検討した論考で ある (鈴木・蔭山 2000)。これは清須城下町 の朝日西地区の発掘調査で出土した資料を分析 したもので、金属関連遺物の分布のまとまりを 15 群抽出した。そして、それぞれの群がどの 時期に属し、どのような金属生産工程に起因す るものかについて考察を試みた。この結果、鍛 造鍛冶を中心とした生産工程と精錬鍛冶工程を 加えたものの二者の生産工程を想定することが できた。

一方、今回分析を行う銅製品生産に関連する研究は、前者の論文で金属滓の分布から銅製品生産工程が行われた区域のある程度の特定が行われた以外は、個別の遺物の報告において坩堝が紹介されている程度しか存在しないのが現状であった。しかし、本町地区に属する99A区からこれまでに見ることのできないほど大量の坩堝または取鍋が出土したことから、今回はこれを主たる分析対象とすることにしたい(宮腰・鈴木編2002)。

まず、はじめに、清須城下町における銅生産 関連資料の分布状況を確認しておきたい。これ まで清洲城下町遺跡などで発掘調査された資料 の中で、銅製品の出土量分布を示したのが図2 である。清洲町教育委員会が調査した地点や未 報告の調査区においてはデータが欠ける部分が

あるが、これまでに銅製品(一部の調査区では 銅滓など関連遺物を含む) は 2180 点存在する。 このうち大半を占める遺物は銭貨である。一 調査区で 100 点以上の銅製品が出土したのは 61A、62C、89E、91A、92D、93A の各区で あるが、いずれも銭貨が7割以上を占めている。 これらの調査区は五条橋地区と本町西部地区の 北部に該当しており、旧五条川に隣接した地点 であるという特徴を持っている(鈴木 1996)。 五条橋地区の銅製品の大半は城下町期前期の川 港を中心とした市場推定域に、本町西部地区の 銅製品の半数以上は城下町期後期の短冊型地割 の町屋推定域にそれぞれ属する資料と考えられ る。また、両地区は江戸時代においては清洲宿 場町の一部にも該当しており、その場合におい ても商工業活動に伴うものと考えることが可能 である。一方、銭貨以外の銅製品に着目してみ ても五条橋地区と本町西部地区に遺物が集中す ることが分かる。

次に銅製品生産に関連する遺物の分布について検討しておきたい。これまでに清須城下町に伴う発掘調査で確認された遺物としては、銅塊または銅滴、流動銅滓、坩堝または取鍋、羽口、炉壁、鋳型と思われる粘土塊などがある。

銅塊または銅滴……金属銅が錆びて緑青が浮いた遺物で、金属反応が認められるものもある。ある程度の大きさを持つ塊を銅塊(図 6-3199~3203)、加工の際に飛び散ったもので滓の部分が比較的多いと思われる微細な資料を銅滴(図 6-3204~3205)としておく。

流動銅滓……銅滓は製銅や鋳造などの銅加工の各段階で原料および半加工品、廃棄物を炉の中で溶融させた際に生じる非銅成分が多い滓部分を指す。これまでに流動銅滓のみが確認されている。流動銅滓は一般に流動状の銅滓で、本稿では小型のものを指している(図 6-3217~3220)。

坩堝または取鍋……坩堝(るつぼ)は炉の中に置き金属を加熱して溶解する炉として使用される容器状の製品で、この形態の炉は坩堝炉と呼ばれる。中の材料が直接炎に接触しないため化学変化を起さないことから、成分の割合を貴ぶ合金の溶融に用いるといわれる。一方、取鍋

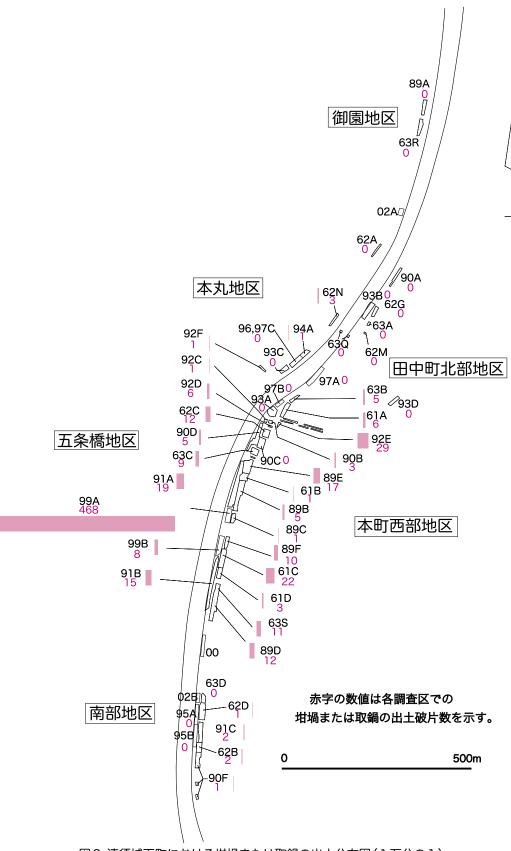


図3 清須城下町における坩堝または取鍋の出土分布図(1万分の1)

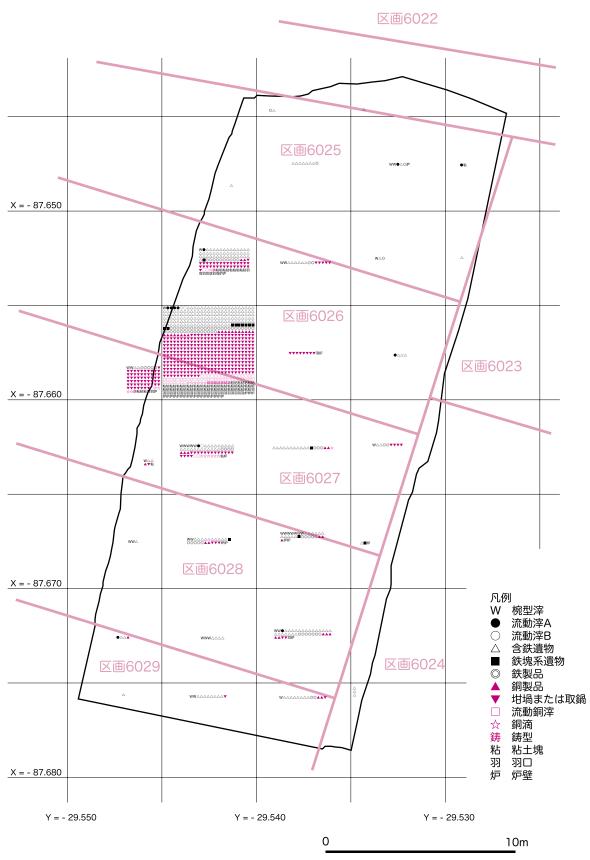


図4 99A区における金属関連遺物の出土分布図(2百分の1)

(とりべ)は炉から出る溶湯を受け運搬や鋳込みを行う容器を指している。これらに該当する出土遺物としては半球状の小型土製容器(図6-3165~3198)が存在する。坩堝と取鍋とではそれを直接過熱するか否かという相違があると考えられるが、出土遺物からみると両者の判別は確定的ではないと思われる。他の報告書では半球状の小型土製容器を坩堝と表現する場合が多いが、今回の清須城下町の事例では内面は溶融したものが多く外面はほとんど溶融していないことから坩堝と呼んでいいのかやや疑問が残る。ここではこの判断を保留して「坩堝または取鍋」と呼称しておきたい。

羽口……炉を過熱させるために送風する送風口に設置された管(図6-3210~3211)。銅製品製作用か鉄製品製作用かの判別は難しい。

炉壁……炉を構成する粘土または石材による 壁材であり、表面に銅滓が付着している(図 6 -3224)。

鋳型と思われる粘土塊……溶けた銅を流し込んで製品を作るための型を指す。明瞭に鋳型と判明する資料は残念ながら確認されなかったが、その一部と推測可能な粘土塊などがいくつか確認されている(図 6-3215)。ただし、これらが仮に鋳型であったとしても、それが銅製品用の鋳型か鉄製品用の鋳型かは判別できない。

以上のような銅製品生産関連遺物について調査区別に出土量を調べるわけだが、実際にこの作業を行うためには多くの困難が伴う。2001年以前に整理報告された調査区においては、坩堝または取鍋の出土量はおおよそ把握されているものの、遺物自体は大量にある土器陶磁器類の中に大別され収蔵されている。しかも、流動銅滓などの微細な資料が十分に抽出されていない可能性が高い。さらに1993年以前に整理報告された調査区においては、坩堝または取鍋の出土量のデータ自体が存在しない。このようなデータのない調査区において再調査を実施することは現実的には極めて困難である。

しかし、上記のようにすべての調査区を同列 に論ずることができない状態であるものの、坩 堝または取鍋については土器陶磁器類として出 土量が計測されている調査区(『清洲城下町遺 跡Ⅲ~Ⅶ』掲載分の調査区)が存在するため、この数値を用いて比較・検討することとしたい。この結果をまとめたのが図3である。これをみると、多くの調査区で坩堝または取鍋が少量ずつ認められるものの、99A区において非常に多く出土している状況が判明する。さらにこの99A区について、金属関連遺物のグリッド別に出土分布を示したのが図4である。これをみると調査区西部中央の特定のエリアに金属関連遺物の集中的な出土状況を読み取ることができる。

以上の検討の結果、調査の精度に大きなばらつきが存在する状況を差し引いて考えてみても、99A区西部中央における銅製品生産関連遺物の大量かつ集中的な出土状態は特異であることが言えよう。次に、この銅製品生産関連遺物の出土状態と遺構との関係を考察する。

まず、銅製品生産関連遺物の所属時期を検討する。多くの遺物は SK89、SK90、SK91、SK94、SK198、SD04、SD12 などの遺構から出土しているが、このうち SK89 と SK91 からわずかに宿場町期(江戸時代前期)に属する可能性がある遺物が出土したものの、その他の遺構については城下町期Ⅲ - 2期(17世紀初頭)に属している。このことからみて、清須城下町最末期に属する資料と見て大過ないであろう。

次に遺構配置との関係について検討する。以 前に筆者が清須城下町の復元的な考察を試みた (鈴木 1995)際に、99A区付近の状況は城下 町期前期(Ⅰ期~Ⅱ-1期)では堀を持つ方形 武家屋敷が展開し、城下町期後期(Ⅱ-2期~ Ⅲ期)では短冊型地割の町屋が展開すると推定 した。その後に99A区の発掘調査が実施され、 城下町期後期に属する井戸が点在し、同時期の おおよそ東西方向に走る溝などが確認されてい る。これまで 99A 区の詳細な遺構配置の検討 を行っていないので、ここで改めて周辺の調査 区とも合わせた遺構図(図5)を作成し検討し てみる。すると井戸は美しく直線的には並ばな いものの、平行して走る溝が数条存在すること から、おおよそ東西方向に細長い区画を想定す ることが可能である。前稿(鈴木 1995)の分 析手法を援用して区画配置の復元を試みると、 井戸 SK250 を中心とする細長い区画 6025、



図5清洲城下町遺跡99A区周辺の遺構図と町割復元案(5百分の1)

井戸 SK203 を中心とする細長い区画 6026、井戸 SK221 と SK207 を中心とする細長い区画 6027、井戸 SK182 と SK68 と SK186 を中心とする細長い区画 6028、井戸 SK44 を中心とする細長い区画 6029 という 5 つの区画が想定される。これらは前稿で設定した区画 6023 と区画 6024 とは別の区画と思われ、ちょうど99A 区と89C 区の境界部に屋敷の背割り線が設定されていた可能性がある。また、99A 区とその北側の 91A 区および 89B 区とでは、区画溝の方位が若干異なっており地割の方向が変化していることが判明する。99A 区とその北側の 91A 区および 89B 区と間に道路が想定され、これが本丸東地区の寺院推定地に隣接する道に通じている可能性も考えられる。

以上の検討結果は、城下町期後期で短冊型地

割の町屋が広がると想定した前稿を大きく覆すような状況ではないといえる。問題の大量に出土した銅製品生産関連遺物は、大半が上記で推定した区画 6026 に属するものと認められ、短冊型地割の町屋の一角から出土したものと評価できよう。

## 3 99A 区出土銅製品生産関連遺物の分析

次に99A区から出土した銅製品生産関連遺物の分析を試みる。99A区から出土した金属製品生産関連遺物の内訳は表1の通りである。これをみると、椀型鉄滓36点や流動鉄滓14点、鉄塊系遺物14点など鉄製品生産関連遺物も一定量認められるものの、銅塊または銅滴18点、流動銅滓55点、坩堝または取鍋460点、羽

表 1 99A 区出土金属関連遺物組成表

| 種別    | 点数  | 種別      | 点数   |
|-------|-----|---------|------|
| 椀型鉄滓  | 36  | 流動銅滓    | 55   |
| 流動鉄滓A | 9   | 銅滴      | 17   |
| 流動鉄滓B | 4   | 銅塊      | 1    |
| 含鉄流動滓 | 1   | 銅製品     | 39   |
| 含鉄遺物  | 327 | 銅片      | 1    |
| 鉄塊系遺物 | 14  | 取鍋または坩堝 | 460  |
| 鉄製品   | 77  | 羽口      | 36   |
| 鉄片    | 15  | 鋳型?     | 9    |
| 炉底滓   | 2   | 粘土塊     | 75   |
| 炉材、炉壁 | 36  | 合計      | 1214 |

さて、99A区の銅製品生産関連遺物の中で 最も多く出土した資料は坩堝または取鍋であ る。ここではこの坩堝または取鍋をさらに検討 していきたい。

99A 区から出土した坩堝または取鍋は 460 点を数え、このうち口縁部が一定度残存し口径を計測することができる資料は 309 点存在する。今回このうち 271 点について形状や付着物の状態などを新たに観察し記録化した。観察の内容は以下の項目に分けて行った。

□縁部の形状……口縁端部の形状で2類に分類した。口縁端部の断面形が丸くなっているものを「丸」、口縁上端面が平らになり断面形が方形に近くなっているものを「平」とした。

茶色系滓……内面に黄褐色から黒褐色に発色 した滓が付着したものに「○」を付けた。大部 分は薄く半透明な滓で光沢を持つものが多い (写真 1)。

黒色系滓……内面または口縁部付近に灰黒色



写真1 3195 内面



写真 2 3191 内面

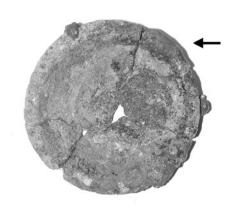


写真3 3169 内面

から黒色に発色した滓が付着したものに「○」を付けた。薄く半透明なものと、表面が凹凸して不透明なものがある(写真 2)。

赤色系滓……内面または口縁部付近に付着した 滓が赤紫色に発色したものに「○」を付けた (写 真 2)。

銅滴……内面または口縁部付近に緑青が浮い

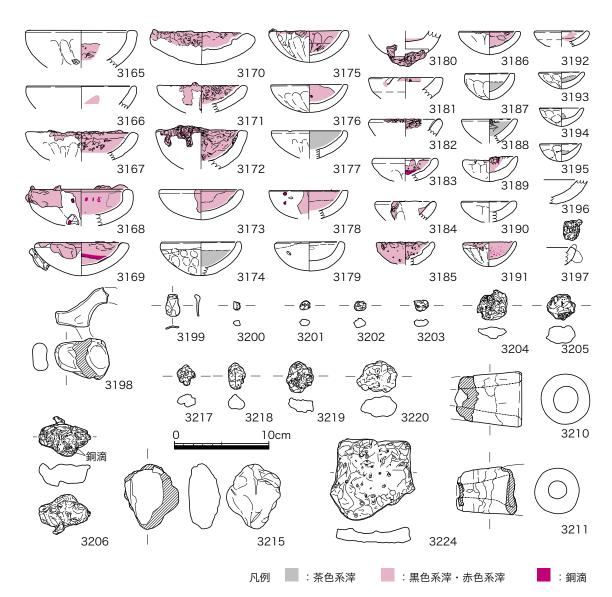


図6 99A区出土銅関連遺物実測図(4分の1)

た銅滴が付着したものに「○」を付けた(写真2)。

**滓付着範囲**……滓などが付着する範囲について3段階に区分して表記した。滓が口縁上端部にまで達して付着したもの(写真2)に「〇」を、滓が体部中央付近までで留まっているもの(写真1)に「 $\triangle$ 」を、滓が全く付着しないものに「 $\times$ 」を付けた。

注ぎ□……今回扱う坩堝または取鍋には特別に片口を有する形状のものは全く存在しない。しかしながら、滓などが口縁部に向かって一方向に伸びる形で付着する資料が存在し、これらは一定方向から銅を流し注いだ痕跡と考えることができる資料が存在する。このような特殊な滓の付着状況を呈するものに「○」を付けた(写

真3)。

**発泡……**付着した滓が発泡したものに「○」を付けた。

以上の内容でデータを採取し、一覧表にまとめたものが表4である。また、口径別に各項目で出土件数を算定したものが表2および図7である。

#### (1) 口径と形状

今回扱う坩堝または取鍋を 1cm 単位で口径を計測しその分布状況をみると、口径は 4cm ~ 12cm の範囲に分布しており、6cm と 8cm がそれぞれ 81 点、78 点と多くなっている。7cm のものがやや少ないのは計測方法上の

100%

|              | 8cm   | 9      | 60 | 38 | 31 | 46                | 23           | 20 | 49   | 40 | 18   | 11       | 18  | 51     | 41 | 28 | 53 | 16 | 78 |              |  |
|--------------|-------|--------|----|----|----|-------------------|--------------|----|------|----|------|----------|-----|--------|----|----|----|----|----|--------------|--|
|              | 9cm   | 2      | 27 | 25 | 4  | 27                | 2            | 9  | 20   | 24 | 5    | 0        | 9   | 20     | 26 | 3  | 22 | 7  | 33 |              |  |
|              | 10cm  | 2      | 21 | 16 | 7  | 19                | 4            | 8  | 15   | 18 | 3    | 2        | 9   | 14     | 18 | 5  | 15 | 8  | 25 |              |  |
|              | 11cm  | 0      | 10 | 9  | 1  | 10                | 0            | 8  | 2    | 9  | 1    | 0        | 3   | 7      | 6  | 4  | 8  | 2  | 12 |              |  |
|              | 12cm  | 1      | 7  | 5  | 3  | 6                 | 2            | 3  | 5    | 5  | 3    | 0        | 3   | 5      | 8  | 0  | 5  | 3  | 11 | J            |  |
| <del>,</del> | 赤色系   |        | 有無 |    |    |                   |              |    |      |    |      | 付達       | き物の | )範囲    | 1  |    |    |    |    |              |  |
| •            | 有     | 137111 |    |    | 無  |                   |              |    |      | □径 | 広    |          | +06 | ,<br>狭 |    |    |    | 無  | Ŧ  |              |  |
| 1            | 2     |        |    |    | 7  | <del>////</del> / | <del>\</del> |    |      |    | 4cm  | 1        |     | 3      | 3/ |    |    | 5  | ж  | <del>*</del> |  |
| ı [          | 5     |        |    |    | 1  | 7                 |              |    |      |    | 5cm  | 8 9      |     |        |    |    |    |    |    |              |  |
| 1            |       | 31     |    |    |    | 40                |              |    |      |    | 6cm  |          |     | 37     |    |    |    | 21 | 13 |              |  |
| ı [          |       | 17     | 7  |    |    |                   | 13           |    |      |    | 7cm  |          |     |        | 20 |    |    | 5  | 5  |              |  |
| ı [          |       | 3      | 18 |    |    |                   | 31           |    |      |    | 8cm  |          |     | 40     |    |    |    | 18 | 11 |              |  |
| . [          |       |        |    | 25 |    |                   |              | 4  |      |    | 9cm  |          |     |        | 24 |    |    |    | 5  |              |  |
| ı [          |       |        | 15 |    |    |                   |              | 7  |      | 1  | 0cm  |          |     |        | 17 |    |    |    | 3  | 2            |  |
| ı [          |       |        |    | 9  |    |                   |              |    | 1    | 1  | 11cm |          | 9   |        |    |    |    |    |    |              |  |
| 1            |       |        | 5  |    |    |                   | 3            |    |      | 1  | 2cm  |          |     |        | 5  |    |    |    | 3  |              |  |
| О            | 1%    |        |    |    |    |                   |              |    | 100% |    |      | 0%       |     |        |    |    |    |    |    | 100%         |  |
| Ę            | 黒色系   | 滓の?    | 有無 |    |    |                   |              |    |      |    | □径   | 発流       | 図の有 | 無      |    |    |    |    |    |              |  |
|              | 3     | 有      |    |    |    | •                 | 無            | ŧ  | _    |    | 4cm  | <b>‡</b> | 1   |        |    |    | 8  | 無  |    |              |  |
| ן י          | 3     |        |    |    |    | 6                 |              |    |      |    |      | 1        |     |        |    |    | 0  |    |    |              |  |
| ו ו          |       |        | 12 |    |    |                   | 10           |    |      |    | 5cm  |          |     | 9      |    |    |    | 13 |    |              |  |
| ا ا<br>-     |       |        | 47 |    |    |                   | 24           |    |      |    | 6cm  |          |     | 36     |    |    |    | 35 |    |              |  |
| ) [          | 24 6  |        |    |    |    |                   |              |    |      |    | 7cm  |          |     |        | 21 |    |    |    | 9  |              |  |
| 1            | 46 23 |        |    |    |    |                   |              |    |      |    | 8cm  |          |     | 41     |    |    |    |    | 28 |              |  |
|              |       |        |    | 27 |    |                   |              |    | 2    |    | 9cm  |          |     |        | 2  | 6  |    |    |    | 3            |  |
| 1            | 18 4  |        |    |    |    |                   |              |    |      |    | 10cm |          |     |        | 17 |    |    |    | 5  |              |  |
| 1            |       |        |    | 10 |    |                   |              |    |      | 1  | 11cm |          |     | 6      | 3  |    |    |    | 4  |              |  |
| 1            |       |        | 6  |    |    |                   |              | 2  |      | 1  | 12cm |          |     |        |    | 8  |    |    |    |              |  |

表2 99A 区出土坩堝または取鍋の分析結果表

1

8

37

20

付着の範囲

 $\triangle$ 

3

9

21

5

×

5

5

13

5

注ぎ口

 $0 \mid 9$ 

5 | 17

11

7 23

×

60

発泡

36

21

8

13 | 22

35

9 24

銅滴

0

3 | 19

18

18

×

9

53

12

赤色系滓

40

13

5 | 17

31

件数

口径

4cm

5cm

6cm

7cm

口径 4cm 5cm 6cm 7cm 8cm 9cm 10cm 11cm

口径 4cm 5cm 6cm 7cm 8cm 9cm 10cm 11cm 茶色系滓

5 | 17

11

×

8

60

29

黒色系滓

3

12

47

24

X

6

10

24

図7 99A 区出土坩堝または取鍋の分析図

100%

問題が想定されるため、口径のピークは6~8cm に認められると評価しておきたい。一方、口縁部の形状について検討すると、口径が5cm 以下の小さい坩堝または取鍋には口縁上端面が平らになるものは存在しないことが判明した。

# (2) 内面付着物の状態

次に、坩堝または取鍋の内面に付着した物質

について検討を加えたい。

0%

まず、茶色系滓が付着するものは全部で32点存在し、全体の約10%を占めている。茶色系滓が付着するものは、他の付着物がほとんど見られず、滓が付着する範囲も狭いという傾向を読み取ることができる。ただし、口径による特別な傾向を読み取ることはできない。

О Д ×

口縁形状

0

0

6

丸

9

52

全件数

10

26

80

40

次に、黒色系滓が付着するものは全部で193

点存在し、全体の約61%を占めている。口径が4cmの資料では黒色系滓が付着するものが付着しないものよりも少ないが、口径が5cm以上の資料になると黒色系滓が付着するものが付着しないものよりも多い傾向を読み取ることができる。

赤色系滓が付着するものは147点存在し、全体の約47%を占めている。そのうち、黒色系滓が付着している資料は144点(98%)と非常に多く、赤色系滓と黒色系滓とは関連性が高いといえる。また、口径が6cm以下の資料では赤色系滓が付着するものが付着しないものよりも少ないが、口径が7cm以上の資料になると赤色系滓が付着するものが付着しないものよりも多い傾向を読み取ることができる。

銅滴が付着するものは86点存在し、全体の約25%を占めている。そのうち、黒色系滓が付着している資料は84点(98%)、赤色系滓が付着している資料は79点(92%)と非常に多く、銅滴が付着する資料は赤色系滓および黒色系滓との関連性が高いといえる。ただし、口径の大小によって銅滴が付着するものが多くなるといった傾向を読み取ることは難しい。

最後に滓などが付着する範囲について検討を加える。滓などが口縁部にまで達する資料は161点存在し、全体の約51%を占める。このうち、赤色系滓と黒色系滓の両方が付着するものに限定すると資料は156点にすると資料は156点にまで達して付着している資料は5点と極めて少ない。また、口径が6cm以下の資料では口縁部にまで達するものが口縁部にまで達しないものよりも少ないが、口径が7cm以上の資料になると口縁部にまで達するものが口縁部にまで達しないものよりも多い傾向を読み取ることができる。

以上の結果から、口径が大きなものほど黒色 系滓、赤色系滓の順に付着する確率が高く、そ の付着物が口縁部にまで達している傾向がある といえる。逆に茶色系滓が付着している資料は 黒色系滓や赤色系滓、銅滴などとの関連性は低 く、付着範囲も狭く収まっていることが判明した。

## (3) 注ぎ口

今回扱う坩堝または取鍋は、滓が付着するあり方から一定方向から銅を流し注いだ痕跡を見出すことができる資料は全部で65点存在する。実際には大半の資料が半分以上欠損したものであることから考え合わせると、注ぎ口が存在した割合はもっと高くなると考えられよう。たし、このような注ぎ口を見出せる資料について、特定の口径や付着物によって割合が高高といった傾向を見出すことはできなかった。このような分析結果からみて、坩堝または取鍋は内容物を過熱・溶融した後に鋳型などに流し込んだ製品と考えることができる。

#### (4) 小結

上記の分析の結果、坩堝または取鍋は、黒色 系滓や赤色系滓などが口縁部にまで達して付着 いるものと、茶色系滓が狭い範囲で付着しているものの2種類が典型的なパターンとして抽出できる可能性があり、前者は比較的口径(法量)が大きく、後者は比較的口径(法量)が小きないずれも一定方向から注いだ痕跡が見出されることから、溶融した金属(この場合は銅される)を鋳型などに流し込む容器であったと対って、坩堝または取鍋と考えられる。したがつて、坩堝または取鍋と考えられる。したがことな溶融した金属の量に相関する可能性が高い。

そこで主要な資料を抽出して実測図上で口 縁端部までの容量を計算すると、口径が4~ 5cm の資料では約10 cm 、口径が6~7cm の 資料では約30 cm、口径が8~9cmの資料で は約60 cm、口径が10cm以上の資料では75 cm以上となっている (表3)。このように坩堝 または取鍋の内容量は最大で約10倍の格差が 認められ、しかも容量が小さい資料は付着す る滓の範囲が狭いことから器の大きさよりも少 ない量の銅を溶融したと思われる。このことか ら坩堝または取鍋の法量は、鋳型などに流し込 む金属量すなわち銅製品の大きさに関係すると 推定される。特に、口径が4~5cmとなる資 料は薄い茶色系滓が狭い範囲で付着する事例が 多く、使用頻度が低く溶融する金属量も極めて 少ないことが予想される。一方、法量が大きい

表3 99A 区出土主要坩堝または取鍋の容量・口径一覧表

| 実測番号 | 容量(cm³) | 口径(cm) |
|------|---------|--------|
| 3169 | 75.5    | 10     |
| 3173 | 59.8    | 9      |
| 3174 | 69.4    | 8      |
| 3179 | 39.8    | 7      |
| 3186 | 23.0    | 6      |
| 3187 | 14.7    | 5      |
| 3193 | 8.4     | 5      |
| 3194 | 9.1     | 5      |
| 3195 | 6.7     | 4      |

資料は、大量に滓が付着する事例が多く、このことからくり返し鋳造に用いられた可能性が高い。あるいは複数の小型製品を連続して鋳造した可能性も考えられよう。

今回の99A区の事例は、一回に溶融する金属量が最大で100 cm以下であり、小型の銅製品を鋳込むための道具と想定される。坩堝または取鍋の法量の多様性からみて、鋳込まれた製品の大きさも多様であったと考えられる。清須城下町で出土する銅製品には銭貨をはじめとして小柄、刀装具、飾金具、こうがい、鏡など多様な製品が出土しているが、これらの一部が区画6026で鋳造された可能性を指摘することができよう。

# 4 まとめ

以上の検討の結果、清須城下町では本町西部 地区の城下町期後期(17世紀初頭)の短冊型 地割の町屋推定地の一角で小型の銅製品が鋳造 されていた可能性が考えられた。鋳込まれた製品がどのようなものかについては、それを示す明瞭な鋳型の発見が認められないため明らかにすることはできないが、その大きさには多少のバラエティーが存在する可能性は指摘されよう。しかも、坩堝または取鍋の出土量の多さと、使用痕跡からみてくり返し鋳造に用いられた可能性が高いことなどからみて、常住した銅細工職人がこの場所に存在した可能性が高いと言える。

翻って、清須城下町内のその他の調査地点に おいても坩堝または取鍋の出土が認められてい るが、これらの場所では坩堝または取鍋の出土 量が30点を超えるものではないことから、銅 細工職人が常在した可能性は低いといえよう。 このような坩堝または取鍋がわずかに出土する 事例については、銅細工職人が出張して作業を 行った可能性も考えられる。いずれにしても、 坩堝または取鍋などの銅製品生産関連遺物が出 土する事例は、清須城下町以外の愛知県下の集 落遺跡では少ないと思われ、都市遺跡における 特徴の一つと言えるかも知れない。

今回は、大量に出土した坩堝または取鍋の分析をもとに分析を進めてきた。しかし、検討は部分的であり、残された問題点が非常に多いといわざるを得ない。鋳型やその可能性が残される粘土塊の分析から鋳造の具体相を考察することや、銅滓・銅滴・坩堝または取鍋に付着した滓部分の金属学的な分析、出土した銅製品との関連など検討すべき課題は山積している。今後さらに調査を進めていくこととしたい。

なお、本稿は資料の観察およびデータ採取は 蔭山と鈴木が共同で実施し、分析と原稿は鈴木 が行い、蔭山が校閲した。

# 表4 99A区出土坩堝または取鍋一覧表(1)

|                  | 双4 99A 区面工地响または収動一見衣( T ) |     |        |      |      |      |    |      |     |    |                |            |                |     |         |      |          |          |    |      |     |          |          |
|------------------|---------------------------|-----|--------|------|------|------|----|------|-----|----|----------------|------------|----------------|-----|---------|------|----------|----------|----|------|-----|----------|----------|
| 保存番号             | 遺構                        | 口縁形 | 口径     | 茶色系滓 | 赤色系滓 | 黒色系滓 | 銅滴 | 付着範囲 | 注ぎ口 | 発泡 | 備考             | 保存番号       | 遺構             | 口縁形 | 口径      | 茶色系滓 | 赤色系滓     | 黒色系滓     | 銅滴 | 付着範囲 | 注ぎ口 | 発泡       | 備考       |
| 448              | SD02                      | 丸   | 10     | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 00-238     | SD13           | 丸   | 11      | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 449              | SD03                      | 丸   | 8      | ×    | Ō    | Ō    | ×  | Ō    | ×   | ×  |                | 604        | SD13           | 丸   | 6       | ×    | ×        | ×        | ×  | ×    | ×   | ×        | 3分割      |
| 450              | SD03                      | 平   | 10     | ×    | ×    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  |                | 609        | SD14           | 平   | 8       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 460              | SD03                      | 丸   | 11     | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 610        | SD14           | 丸   | 10      | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | 0   | 0        |          |
| 461              | SD03                      | 丸   | 10     | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 332        | SK107          | 丸   | 8       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 462              | SD03                      | 平   | 7      | ×    | ×    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 333        | SK107          | 丸   | 9       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 466              | SD03                      | 平   | 8      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 335        | SK112          | 丸   | 8       | ×    | 0        | 0        | ×  | ×    | 0   | 0        |          |
| 464<br>467       | SD03<br>SD03              | 丸丸  | 9      | ×    | ×    | 0    | ×  | 0    | ×   | ×  |                | 338<br>340 | SK112<br>SK114 | 丸丸  | 6<br>5  | ×    |          | 0        | ×  | Ο    | ×   | О<br>×   |          |
| 00-229           | SD03                      | 丸   | 10     | ×    | Ô    | 0    | 0  | 0    | ×   | Ô  |                | 346        | SK114          | 平   | 8       | ×    | ^        | 0        | ^  | 0    | ×   | <u>^</u> |          |
| 00-992           | SD04                      | 平   | 7      | 0    | ×    | ×    | ×  | Δ    | ×   | ×  |                | 347        | SK114          | 丸   | 6       | ×    | 0        | 0        |    | 0    | ×   | 0        |          |
| 468              | SD04                      | 丸   | 10     | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 348        | SK114          | 丸   | 5       | 0    | ×        | ×        | ×  | Δ    | ×   | ×        |          |
| 470              | SD04                      | 丸   | 9      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 349        | SK114          | 丸   | 4       | ×    | ×        | ×        | ×  | ×    | ×   | ×        |          |
| 472              | SD04                      | 丸   | 8      | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |                | 358        | SK114          |     | 11      |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 477              | SD04                      | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 359        | SK114          |     | 7       |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 478              | SD04                      | 丸   | 12     | 0    | ×    | ×    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 360        | SK114          |     | 10      |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 479              | SD04                      | 丸   | 11     | ×    | ×    | 0    | ×  | Δ    | ×   | ×  |                | 361        | SK125          |     | 8       |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 480              | SD04                      | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 366        | SK125          |     | 9       |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 482<br>483       | SD04<br>SD04              | 丸丸  | 9<br>7 | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | ×  |                | 363<br>364 | SK126<br>SK126 |     | 6<br>5  |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 484              | SD04                      | 丸丸  | 5      | ×    | 0    |      | ×  | 0    | ×   | Ô  |                | 367        | SK126          |     | 5       |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 488              | SD04                      | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0    | Ô  | 0    | ×   | 0  |                | 368        | SK198          |     | 7       |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 519              | SD04                      | 丸   | 6      | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |                | 369        | SK198          |     | 6       |      |          |          |    |      |     |          |          |
| 520              | SD04                      | 丸   | 7      | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |                | 376        | SK198          |     | 10      |      |          |          |    |      |     |          | 土師皿転用    |
| 523              | SD04                      | 丸   | 7      | ×    | ×    | 0    | ×  | 0    | ×   | ×  |                | 388        | SK198          | 丸   | 8       | ×    | 0        | 0        | 0  | 0    | 0   | 0        | 図3175    |
| 524              | SD06                      | 平   | 9      | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 389        | SK198          | 平   | 12      | ×    | 0        | 0        | ×  | Δ    | ×   | 0        | 図3165    |
| 531              | SD06                      | 平   | 7      | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  |                | 390        | SK198          | 丸   | 7       | ×    | ×        | 0        | ×  | Δ    | ×   | 0        | 図3188    |
| 532              | SD07                      | 平   | 8      | ×    | ×    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 391        | SK198          | 丸   | 12      | ×    | ×        | 0        | ×  | Δ    | 0   | 0        | 図3166    |
| 533              | SD07                      | 丸   | 7      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 392        | SK198          | 丸   | 8       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | 0   | 0        | 図3184    |
| 00-498<br>02-929 | SD12<br>SD12              | 丸   | 7 8    | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | 0   | 0  | ₩2170          | 393<br>395 | SK198<br>SK198 | 丸   | 8       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        | 図3182    |
| 02-929           | SD12                      | 平丸  | 7      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    |     | 0  | 図3178<br>図3186 | 396        | SK198          | 丸平  | 6<br>7  | ×    | 0        | 0        | 0  | 0    | 0   | 0        |          |
| 540              | SD12                      | 丸   | 10     | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  | M3100          | 397        | SK198          | 平   | 8       | ×    | 0        | 0        | 0  | 0    | ×   | 0        |          |
| 541              | SD12                      | 平   | 6      | 0    | ×    | ×    | ×  | Δ    | ×   | Ō  |                | 398        | SK198          | 平   | 9       | ×    | Ō        | Ō        | ×  | 0    | ×   | Ö        |          |
| 542              | SD12                      | 丸   | 10     | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 399        | SK198          | 丸   | 9       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | 0   | 0        |          |
| 543              | SD12                      | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 400        | SK198          | 平   | 10      | ×    | 0        | 0        | ×  | Δ    | 0   | ×        |          |
| 545              | SD12                      | 丸   | 11     | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 401        | SK198          | 丸   | 9       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | 0   | 0        |          |
| 546              | SD12                      | 平   | 9      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |                | 402        | SK198          | 丸   | 6       | ×    | 0        | 0        | 0  | 0    | 0   | 0        |          |
| 547              | SD12                      | 丸   | 7      | ×    | ×    | 0    | ×  | Δ    | 0   | ×  |                | 403        | SK198          | 丸   | 8       | ×    | 0        | 0        | 0  | 0    | ×   | 0        |          |
| 548              | SD12                      | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 404        | SK198          | 丸   | 9       | ×    | 0        | 0        | ×  | Δ    | 0   | 0        |          |
| 550              | SD12<br>SD12              | 丸   | 8      | 0    | ×    | ×    | ×  | Δ    | ×   | ×  |                | 406        | SK198          | 平   | 7       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 551<br>553       | SD12                      | 丸丸  | 6      | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |                | 407<br>408 | SK198<br>SK198 | 丸丸  | 5<br>8  | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 554              | SD12                      | 丸   | 8      | Ô    | ×    | ×    | ×  | Δ    | ×   | ×  |                | 409        | SK198          | 丸丸  | 6       | ×    | ×        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 555              | SD12                      | 丸   | 9      | 0    | ×    | ×    | ×  | Δ    | ×   | ×  | 破片2            | 410        | SK198          | 丸   | 8       | ×    | ×        | 0        | ×  | Δ    | 0   | 0        |          |
| 556              | SD12                      | 丸   | 6      | ×    | ×    | 0    | ×  | Δ    | ×   | ×  |                | 412        | SK198          | 丸   | 6       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | 0   | 0        |          |
| 559              | SD12                      | 丸   | 8      | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |                | 413        | SK198          | 丸   | 5       | ×    | ×        | ×        | ×  | ×    | ×   | ×        | 羽口か?     |
| 560              | SD12                      | 丸   | 6      | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |                | 414        | SK198          | 丸   | 6       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | ×        |          |
| 562              | SD12                      | 丸   | 10     | ×    | ×    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 415        | SK198          | 丸   | 12      | ×    | ×        | ×        | ×  | ×    | ×   | 0        |          |
| 563              | SD12                      | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 00-571     | SK199          | 平   | 9       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 564              | SD12                      | 丸   | 9      | 0    | ×    | ×    | ×  | Δ    | ×   | ×  |                | 422        | SK203          | 丸   | 6       | ×    | ×        | ×        | ×  | ×    | ×   | ×        |          |
| 565<br>568       | SD12<br>SD12              | 丸丸  | 8      | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |                | 423<br>429 | SK204<br>SK219 | 丸平  | 7<br>10 | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        | 図3169    |
| 00-928           | SD12                      | 丸丸  | 9      | ×    | 0    | 0    | ×  | Δ    | ×   | ×  | 図3173          | 3          | SK219          | 丸   | 5       | ×    | ×        | ×        | ×  | ×    | ×   | О<br>×   | <u> </u> |
| 600              | SD12                      | 丸   | 5      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    |     | 0  | E40110         | 5          | SK33           | 丸丸  | 6       | ×    | <u>^</u> | <u>^</u> | ×  | 0    | ×   | Ô        |          |
| 538              | SD12                      | 丸   | 8      | ×    | 0    | ×    | ×  | Δ    | ×   | ×  | ⊠3198          | 6          | SK33           | 丸   | 7       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 590              | SD12                      | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  |                | 7          | SK38           | 丸   | 11      | ×    | 0        | 0        | 0  | 0    | 0   | 0        |          |
| 591              | SD12                      | 丸   | 5      | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |                | 8          | SK71           | 丸   | 8       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |
| 597              | SD12                      | 丸   | 9      | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  |                | 9          | SK72           | 丸   | 10      | ×    | ×        | ×        | ×  | ×    | ×   | ×        |          |
| 598              | SD12                      | 丸   | 10     | 0    | ×    | ×    | ×  | Δ    | ×   | ×  | 灰釉皿転用          | 02-147     | SK89           | 平   | 8       | ×    | 0        | 0        | 0  | Δ    | 0   | 0        | 図3176    |
| 603              | SD13                      | 丸   | 5      | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | 0   | 0  |                | 02-940     | SK89           | 丸   | 8       | 0    | ×        | ×        | ×  | Δ    | ×   | ×        | 図3174    |
| 607              | SD13                      | 丸   | 5      | ×    | ×    | 0    | ×  | Δ    | ×   | ×  |                | 24         | SK89           | 丸   | 7       | ×    | 0        | 0        | 0  | 0    | ×   | 0        |          |
| 608              | SD13                      | 丸   | 6      | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |                | 25         | SK89           | 丸   | 9       | ×    | 0        | 0        | ×  | 0    | ×   | 0        |          |

# 表4 99A区出土坩堝または取鍋一覧表(2)

|            |              |     |        |      |      |      |     |        | •   |    | 区出土坩埚          | -,0,,0,    | 01-1/(3/9)   | ٠,  |        | -,   |      |        |     |      |     |    |       |
|------------|--------------|-----|--------|------|------|------|-----|--------|-----|----|----------------|------------|--------------|-----|--------|------|------|--------|-----|------|-----|----|-------|
| 保存番号       | 遺構           | 口縁形 | 日径     | 茶色系滓 | 赤色系滓 | 黒色系滓 | 銅滴  | 付着範囲   | 注ぎ口 | 発泡 | 備考             | 保存番号       | 遺構           | 口縁形 | 日径     | 茶色系滓 | 赤色系滓 | 黒色系滓   | 銅滴  | 付着範囲 | 注ぎ口 | 発泡 | 備考    |
| 27         | SK89         | 平   | 8      | ×    | ×    | 0    | ×   | 0      | ×   | 0  |                | 156        | SK90         | 丸   | 7      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 28         | SK89         | 丸   | 6      | ×    | ×    | 0    | ×   | 0      | ×   | 0  |                | 157        | SK90         | 丸   | 5      | 0    | ×    | ×      | ×   | Δ    | ×   | ×  | 図3193 |
| 29         | SK89         | 丸   | 8      | ×    | ×    | 0    | ×   | 0      | ×   | 0  |                | 158        | SK90         | 丸   | 5      | ×    | ×    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 30         | SK89         | 丸   | 8      | 0    | ×    | ×    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 159        | SK90         | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 31         | SK89         | 丸   | 6      | 0    | ×    | ×    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 160        | SK90         | 丸   | 6      | ×    | ×    | ×      | ×   | ×    | ×   | ×  |       |
| 32         | SK89         | 丸   | 6      | ×    | ×    | ×    | ×   | ×      | ×   | ×  | ₩2107          | 161        | SK90         | 平   | 6      | ×    | ×    | 0      | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 48<br>50   | SK89<br>SK89 | 丸丸  | 5.3    | 0    | ×    | ×    | ×   | Δ      | ×   | ×  | 図3187<br>図3181 | 163<br>164 | SK90<br>SK90 | 丸丸  | 4<br>5 | ×    | ×    | ×      | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 74         | SK89         | 丸   | 6      | 0    | ×    | ×    | ×   | Δ      | ×   | ×  | 20101          | 165        | SK90         | 丸   | 8      | ×    | ×    | ×      | ×   | ×    | ×   | ×  |       |
| 76         | SK89         | 丸   | 8      | 0    | ×    | ×    | ×   | Δ      | 0   | ×  | 白色化            | 170        | SK90         | 丸   | 7      | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 78         | SK89         | 丸   | 6      | 0    | ×    | 0    | 0   | 0      | 0   | 0  |                | 171        | SK90         | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | 0   | 0  |       |
| 80         | SK89         | 平   | 6      | ×    | ×    | 0    | ×   | 0      | ×   | 0  |                | 172        | SK90         | 平   | 10     | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | 0   | 0  |       |
| 81         | SK89         |     | 8      |      |      |      |     |        |     |    |                | 175        | SK90         | 丸   | 6      | 0    | ×    | ×      | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 82         | SK89         |     | 6<br>7 |      |      |      |     |        |     |    |                | 182        | SK90         | 丸   | 4      | 0    | ×    | ×      | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 83<br>84   | SK89<br>SK89 |     | 5      |      |      |      |     |        |     |    |                | 183<br>184 | SK90<br>SK90 | 丸丸  | 6<br>4 | ×    | ×    | О<br>× | ×   | ×    | ×   | ×  |       |
| 85         | SK89         |     | 8      |      |      |      |     |        |     |    |                | 185        | SK90         | 丸   | 8      | ×    | ×    | Ô      | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 86         | SK89         |     | 7      |      |      |      |     |        |     |    |                | 00-326     |              | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 87         | SK89         |     | 9      |      |      |      |     |        |     |    |                | 00-326     | SK91         | 丸   | 6      | ×    | ×    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 88         | SK89         |     | 6      |      |      |      |     |        |     |    |                | 00-326     | SK91         | 丸   | 7      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 89         | SK89         |     | 7      |      |      |      |     |        |     |    |                | 00-326     | SK91         | 平   | 8      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | 0   | 0  |       |
| 90         | SK89         |     | 6      |      |      |      |     |        |     |    |                | 00-326     | SK91         | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 91         | SK89         |     | 7      |      |      |      |     |        |     |    |                | 192        | SK91         | 丸   | 11     | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 92<br>93   | SK89<br>SK89 |     | 6<br>8 |      |      |      |     |        |     |    |                | 193<br>194 | SK91<br>SK91 | 丸平  | 6      | ×    | ×    | 0      | ×   | Ο    | ×   | ×  |       |
| 94         | SK89         |     | 4      |      |      |      |     |        |     |    |                | 195        | SK91         | 丸   | 6      | ×    | ^    | 0      | ×   | 0    | ×   | ^  |       |
| 95         | SK89         |     | 7      |      |      |      |     |        |     |    |                | 196        | SK91         | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0      | 0   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 96         | SK89         |     | 8      |      |      |      |     |        |     |    |                | 197        | SK91         | 平   | 9      | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 97         | SK89         |     | 8      |      |      |      |     |        |     |    |                | 198        | SK91         | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 98         | SK89         |     | 7      |      |      |      |     |        |     |    |                | 199        | SK91         | 平   | 8      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 99         | SK89         |     | 12     |      |      |      |     |        |     |    |                | 202        | SK91         | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 13         | SK89         |     | 12     |      |      |      |     |        |     |    |                | 204        | SK91         | 平   | 6      | 0    | ×    | ×      | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 15<br>39   | SK89<br>SK89 | 丸   | 6<br>8 | ×    | ×    | ×    | ×   | ×      | ×   | ×  |                | 205<br>206 | SK91<br>SK91 | 丸丸  | 6<br>5 | ×    | ×    | О<br>× | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 40         | SK89         | 丸   | 4      | ×    | ×    | ×    | ×   | ×      | ×   | ×  |                | 207        | SK91         | 平   | 6      | ×    | ×    | Ô      | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 41         | SK89         | 丸   | 5      | ×    | ×    | 0    | ×   | 0      | ×   | 0  |                | 209        | SK91         | 丸   | 8      | ×    | ×    | 0      | ×   | 0    | ×   | ×  |       |
| 53         | SK89         | 平   | 7      | ×    | 0    | 0    | ×   | 0      | ×   | 0  |                | 210        | SK91         | 丸   | 6      | ×    | ×    | ×      | 0   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 54         | SK89         | 丸   | 6      | 0    | ×    | ×    | ×   | Δ      | 0   | ×  |                | 211        | SK91         | 丸   | 6      | ×    | ×    | ×      | ×   | ×    | ×   | ×  |       |
| 55         | SK89         | 丸   | 6      | 0    | 0    | ×    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 213        | SK91         | 丸   | 7      | ×    | ×    | ×      | ×   | ×    | ×   | ×  |       |
| 59         | SK89         | ļ., | 6      |      |      |      |     |        |     |    |                | 214        | SK91         | 丸   | 5      | ×    | ×    | ×      | ×   | ×    | ×   | ×  |       |
| 69         | SK89         | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0    | 0   | 0      | 0   | 0  | 図3191          | 215        | SK91         | 丸   | 5      | ×    | ×    | ×      | ×   | ×    | ×   | ×  |       |
| 70<br>71   | SK89<br>SK89 | 丸丸  | 8      | ×    | ×    | ×    | ×   | △<br>× | ×   | ×  |                | 217        | SK91<br>SK91 | 丸丸  | 7<br>8 | ×    | ×    | ×      | ×   | ×    | ×   | ×  |       |
| 118        | SK90         | 丸   | 7      | ×    | Ô    | Ô    | Ô   | Ô      | ×   | Ô  |                | 241        | SK93         | 丸   | 7      | ×    | 0    | Ô      | ×   | Ô    | ×   | Ô  |       |
| 119        | SK90         | 平   | 8      | ×    | Ö    | Ö    | 0   | 0      | 0   | 0  |                | 243        | SK93         | 丸   | 6      | ×    | ×    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 120        | SK90         | 丸   | 5      | ×    | ×    | 0    | 0   | 0      | 0   | 0  |                | 244        | SK93         | 丸   | 7      | ×    | ×    | 0      | ×   | Δ    | 0   | 0  |       |
| 121        | SK90         | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0    | 0   | 0      | ×   | 0  |                | 245        | SK93         | 丸   | 8      | ×    | ×    | 0      | ×   | Δ    | ×   | ×  |       |
| 122        | SK90         | 丸   | 9      | ×    | 0    | 0    | ×   | 0      | ×   | 0  |                | 00-359     |              | 平   | 10     | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | 0   | 0  | 図3172 |
| 123        | SK90         | 丸   | 6      | ×    | ×    | 0    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 02-926     |              | 平   | 11     | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | 0   | 0  | 図3168 |
| 124<br>125 | SK90<br>SK90 | 丸平  | 9      | ×    | ×    | ×    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 260<br>261 | SK94<br>SK94 | 丸丸  | 7<br>6 | ×    | ×    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 126        | SK90         | 丸   | 6      | 0    | ×    | ×    | ×   |        | ×   | ×  |                | 262        | SK94         | 丸丸  | 10     | ×    | ×    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 127        | SK90         | 平   | 8      | ×    | ×    | 0    | ×   | Δ      | ×   | 0  |                | 264        | SK94         | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 128        | SK90         | 平   | 8      | 0    | ×    | ×    | ×   | 0      | ×   | ×  |                | 266        | SK94         | 平   | 9      | ×    | 0    | Ö      | Ō   | 0    | 0   | Ö  |       |
| 129        | SK90         | 丸   | 5      | ×    | ×    | 0    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 267        | SK94         | 丸   | 10     | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | 0   | 0  |       |
| 130        | SK90         | 丸   | 6      | 0    | ×    | ×    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 268        | SK94         | 丸   | 6      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 132        | SK90         | 丸   | 8      | ×    | ×    | 0    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 269        | SK94         | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | 0   | 0  |       |
| 137        | SK90         | 丸   | 6      | ×    | ×    | ×    | ×   | ×      | ×   | ×  |                | 270        | SK94         | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0      | ×   | 0    | ×   | 0  |       |
| 138<br>139 | SK90         | 丸   | 8      | ×    | ×    | ×    | ×   | ×      | ×   | ×  |                | 282        | SK94         | 平   | 10     | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 140        | SK90<br>SK90 | 丸丸  | 7<br>6 | ×    | ×    | ×    | ×   | ×      | ×   | ×  |                | 283<br>284 | SK94<br>SK94 | 丸丸  | 9      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   | 0  |       |
| 154        | SK90         | 丸   | 7      | ×    | ×    | ×    | ×   | ×      | ×   | ×  |                | 285        | SK94         | 丸   | 8      | ×    | 0    | 0      | 0   | 0    | ×   |    |       |
| 155        | SK90         | 丸   | 6      | ×    | ×    | 0    | ×   | Δ      | ×   | ×  |                | 286        | SK94         | 丸   | 12     | ×    | 0    | 0      | _   | 0    | 0   | 0  |       |
| -          |              |     |        |      |      |      | . ' | . '    |     |    | . '            |            |              |     |        |      |      |        | . – | 1    |     |    | . '   |

#### 表4 99A区出土坩堝または取鍋一覧表(3)

|      |      |     |    |      |      |      |    |             |     |    |    |        |     | יביטיב | `  | _    |      |      |    |      |     |    |       |
|------|------|-----|----|------|------|------|----|-------------|-----|----|----|--------|-----|--------|----|------|------|------|----|------|-----|----|-------|
| 保存番号 | 遺構   | 口縁形 | 径  | 茶色系滓 | 赤色系滓 | 黒色系滓 | 銅滴 | 付着範囲        | 注ぎ口 | 発泡 | 備考 | 保存番号   | 遺構  | 口縁形    | 径  | 茶色系滓 | 赤色系滓 | 黒色系滓 | 銅滴 | 付着範囲 | 注ぎ口 | 発泡 | 備考    |
| 287  | SK94 | 丸   | 4  | ×    | 0    | 0    | ×  | Δ           | ×   | 0  |    | 662    | 検Ⅱ  | 丸      | 6  | ×    | ×    | 0    | ×  | Δ    | 0   | ×  |       |
| 289  | SK94 | 丸   | 4  | ×    | ×    | ×    | ×  | ×           | ×   | ×  |    | 663    | 検Ⅱ  | 丸      | 8  | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |       |
| 290  | SK94 | 丸   | 4  | ×    | ×    | ×    | ×  | ×           | ×   | ×  |    | 625    | 検Ⅱ  | 丸      | 11 | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | 0   | 0  | ⊠3170 |
| 291  | SK94 | 丸   | 6  | ×    | ×    | ×    | ×  | ×           | ×   | ×  |    | 626    | 検Ⅱ  | 丸      | 6  | ×    | 0    | 0    | 0  | Δ    | 0   | 0  | ⊠3189 |
| 295  | SK94 | 平   | 11 | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | ×   | 0  |    | 627    | 検Ⅱ  | 丸      | 9  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  | 図3171 |
| 296  | SK94 | 丸   | 6  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | ×   | ×  |    | 628    | 検Ⅱ  | 丸      | 10 | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  | 図3167 |
| 298  | SK94 | 丸   | 8  | ×    | 0    | ×    | ×  | Δ           | 0   | 0  |    | 629    | 検Ⅱ  | 丸      | 6  | ×    | ×    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  | 図3192 |
| 305  | SK94 | 丸   | 6  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | 0   | 0  |    | 630    | 検Ⅱ  | 丸      | 8  | 0    | ×    | ×    | ×  | Δ    | ×   | ×  | 図3190 |
| 306  | SK94 | 丸   | 5  | ×    | ×    | 0    | ×  | $\triangle$ | ×   | 0  |    | 631    | 検Ⅱ  | 丸      | 10 | 0    | ×    | ×    | ×  | 0    | ×   | ×  | 図3177 |
| 307  | SK94 | 平   | 12 | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | ×   | 0  |    | 633    | 検Ⅱ  | 丸      | 8  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  | 図3185 |
| 309  | SK94 | 丸   | 6  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | ×   | 0  |    | 634    | 検Ⅱ  | 丸      | 7  | ×    | ×    | 0    | ×  | Δ    | ×   | 0  | 図3183 |
| 312  | SK94 | 丸   | 9  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | 0   | 0  |    | 635    | 検Ⅱ  | 丸      | 8  | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |       |
| 313  | SK94 | 平   | 10 | ×    | 0    | 0    | ×  | Δ           | 0   | 0  |    | 636    | 検Ⅱ  | 丸      | 10 | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |       |
| 314  | SK94 | 平   | 9  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | ×   | 0  |    | 637    | 検Ⅱ  | 丸      | 5  | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |       |
| 316  | SK97 | 丸   | 6  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | ×   | 0  |    | 639    | 検Ⅱ  | 丸      | 6  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |       |
| 317  | SK97 | 丸   | 9  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | ×   | 0  |    | 645    | 検Ⅱ  |        | 8  |      |      |      |    |      |     |    |       |
| 328  | SK97 | 平   | 8  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | ×   | 0  |    | 652    | 検Ⅱ  | 丸      | 8  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |       |
| 329  | SK97 | 丸   | 6  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | 0   | 0  |    | 653    | 検Ⅱ  | 丸      | 8  | ×    | ×    | 0    | 0  | Δ    | ×   | 0  |       |
| 330  | SK97 | 丸   | 9  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | ×   | 0  |    | 654    | 検Ⅱ  | 丸      | 7  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | 0   | 0  |       |
| 618  | SX01 |     | 8  |      |      |      |    |             |     |    |    | 655    | 検Ⅱ  | 丸      | 9  | ×    | ×    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |       |
| 614  | SX01 | 丸   | 11 | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | ×   | 0  |    | 648    | 検Ⅱ  | 丸      | 8  | ×    | ×    | ×    | ×  | ×    | ×   | ×  |       |
| 615  | SX01 | 丸   | 9  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | ×   | 0  |    | 649    | 検Ⅱ  | 丸      | 6  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | ×   | 0  |       |
| 616  | SX01 | 丸   | 8  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | ×   | 0  |    | 659    | 検Ⅱ  | 平      | 10 | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  |       |
| 617  | SX01 | 丸   | 6  | 0    | ×    | ×    | ×  | Δ           | ×   | ×  |    | 651    | 検Ⅱ  | 丸      | 8  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0    | 0   | 0  |       |
| 621  | 検I   | 平   | 12 | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | 0   | 0  |    |        | 整地層 |        | 8  |      |      |      |    |      |     |    |       |
| 622  | 検I   | 丸   | 6  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | 0   | 0  |    |        | 整地層 |        | 9  |      |      |      |    |      |     |    |       |
| 624  | 検I   | 丸   | 12 | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | ×   | 0  |    |        | 整地層 |        | 11 |      |      |      |    |      |     |    |       |
| 619  | 検I   | 平   | 8  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0           | 0   | 0  |    | 00-441 | 不明  | 丸      | 8  | ×    | 0    | 0    | 0  | 0    | ×   | 0  |       |
| 620  | 検I   | 丸   | 9  | ×    | 0    | 0    | ×  | 0           | ×   | 0  |    |        |     |        |    |      |      |      |    |      |     |    |       |

# 参考文献

五十川伸矢 2002「銅と鉄の鋳造」『鉄と銅の生産の歴史 古代から近世初頭にいたる』雄山閣

蔭山誠一・堀木真美子・鈴木正貴 2002「愛知県における鉄器生産を考える(6)―鍛冶に伴う礫―」『研究紀要第3号』(財) 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

蟹江吉弘編 1996『清洲城下町遺跡VI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 65 集

鈴木正貴・小嶋廣也編 1994『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 50 集

鈴木正貴編 1994『清洲城下町遺跡IV』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集

鈴木正貴 1995「金属滓分析」『清洲城下町遺跡V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集

鈴木正貴編 1995『清洲城下町遺跡 V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集

鈴木正貴 1996「清洲城下町遺跡出土の銭貨 - 一般的に出土する銭貨の評価を巡って」『備蓄銭とその出土状態 - 緡銭の復原・備蓄銭の歴史的背景』出土銭貨研究会

鈴木正貴編 1997『清洲城下町遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 70 集

鈴木正貴・蔭山誠一 2000「愛知県における鉄器生産を考える(4)—朝日西遺跡を中心に—」『研究紀要第 1 号』(財) 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

日本鋳造工学会編 1995『図解鋳造用語辞典』日刊工業新聞社

宮腰健司・鈴木正貴編 2002『清洲城下町遺跡1回』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集

# 尾張国冨田荘の考古学的研究

―成願寺を中心として―

中・近世研究部会※

愛知県下の中世集落研究を進めるため、円覚寺に残る『尾張国冨田荘』絵図に描かれた地域の考古学的分析を中心に検討を行った。具体的には尾張国冨田荘の絵図において中心的部分と考えられる「成願寺」付近の地域についての実地踏査、地籍図の分析、地質学的検討を踏まえ、絵図に描かれた河道・道・地名・建物の地籍図における位置の推定を試みた。その結果、絵図に描かれた「成願寺」の位置をおおまかに特定するに至った。

# 1 目的と研究史

本センター中・近世部会では、愛知県下の中世集落研究を進めるため、平成15年度の共同研究テーマとして冨田荘域における考古学的な手法を中心とした総合的研究を取り上げた。このテーマ設定にはさまざまな思惑があるが、尾のの上げた最大の理由は冨田荘には著名な『尾が尾田荘絵図』が存在しており、この治には高田荘絵図』が存在しており、このとの世集落の全体像と考古学的に判する中世集落像を比較対照させる分析が可能なフィールドであることである。考古学的で別とである。考古学のとまる中世集をである。考古学のといる中世集をである。

ここで取り上げる「冨田荘」は、現在の名古屋市中川区と海部郡大治町およびその周辺に比定されており、尾張平野の庄内川流域の沖積低地に立地する。寛治年間官符により四至が定められたとされ、康和5 (1103)年に右大臣藤原忠実領として初めて荘名がみえる。当初本家・領家職は近衛家に相伝され、地頭職は承元5 (1211)年より以前に北条義時に与えられ以降得宗家が継承し、弘安6 (1283)年に円覚寺に寄進された。この冨田荘を描いた『尾張国冨田荘絵図』は神奈川県鎌倉市円覚寺に伝来す

る国重要文化財に指定された絵図である。紙本 淡彩で縦 100.5cm、横 89.7cm を測り、『愛知 縣史第 1 巻』(1935)、『神奈川県史資料編二』 (1973)、『新修名古屋市史第 2 巻』(1998) な ど多くの書籍に写真図版が掲載されている。こ の絵図や豊富な文書の存在により冨田荘の歴 史的研究や荘園絵図研究は著しく進んでおり、 先行研究は多岐に及んでいる。当然のことと がら冨田荘の景観復元研究も上村喜久子( 村 1986、上村 1990 など)、村岡幹生(村岡 1998 など)、安田喜憲(安田 1970) らの考察 があり、現地比定も大略がなされている。これ らは地名や条里制地割の検討など歴史地理学的 な分析手法が多用され、旧河川の復元を中心と した自然地形の復元研究も進められている。

一方、荘域内の集落景観の復元については、 絵図に描かれた建物などの分析(板倉 1952 な ど)が見られるものの、現地の遺跡や遺構など の検討はほとんど行われていないに等しい状態 であった。しかし、最近、名古屋市教育委員会 の精力的な調査によって、その実像が明らかに されつつある。1980年代の遺跡分布調査で中 川区など名古屋市内の荘域内の遺跡がいくつか 確認され(愛知県教育委員会 1986)、1990年 代末からは発掘調査が数箇所で行われるように なった。これらの成果をまとめた報告書(名古 屋市教育委員会 2000 など)では、遺跡の分布

※中・近世研究部会の構成員は、平成 14 年度が川井啓介・小澤一弘・松田 訓・池本正明・小嶋廣也・宇佐見守・鈴木正貴・鬼頭 剛・成瀬友弘・武部真木・蔭山誠一・鵜飼雅弘、平成 15 年度が小澤・松田・池本・小嶋・鈴木・鬼頭・武部・蔭山・鵜飼である。

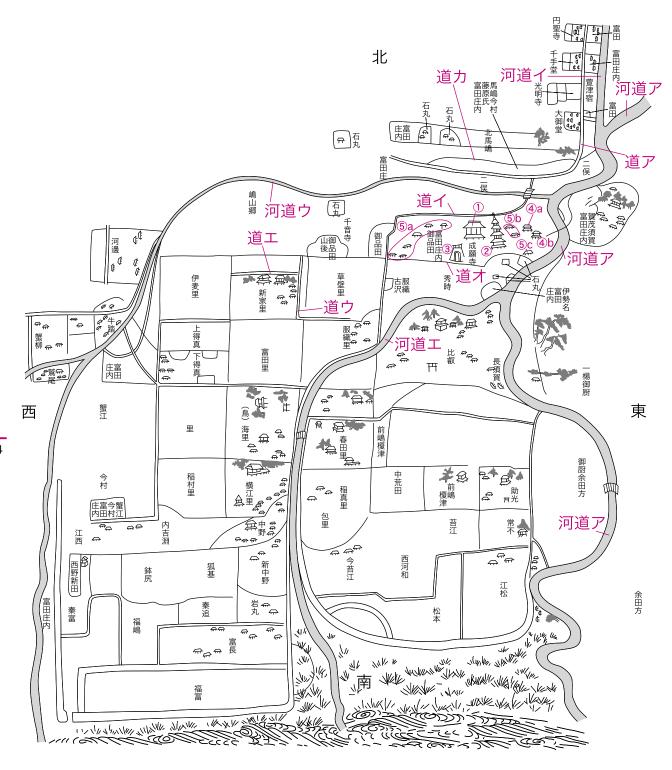


図1 尾張国冨田荘絵図のトレース図(赤字は本文記載の仮の名称。①~⑤c は本文記載の仮の建物の位置)

と関連させて現地比定が試みられており、研究は新たな段階を迎えていると評価できる。具体的には戸田 A 遺跡が稲真里、戸田 B 遺跡が横江里、包里遺跡が今苔江、伏屋遺跡が助光にほ

ぼ位置するという見解が出されている。

こうした名古屋市側の調査の進展に比べ、海 部郡域での研究状況は遅れていると言わざるを 得ない。冨田荘域内の海部郡下の遺跡はほとん ど確認されていない状態であり、わずかに蔭山が採集資料を紹介しながら遺跡の存在をアピールしている(蔭山 2002)に過ぎない。

こうした状況の中、本部会でまず着手した作業は『冨田荘絵図』に描かれた範囲の中で北部地域を中心に景観復元を目標として検討を進めた。分析の手法は次の3つである。

- 1、愛知県公文書館に保管されている明治 17年 作成の「地籍字分全図」(以下「地籍図」と呼ぶ) を用いて、その地名、地割と地目などに着目し、中 世段階の自然地形や地割りなどを復元すること。
- 2、現地を踏査し、散布する表採遺物を採取する 分布調査を行い、すでに知られる関連遺物も加えて 考古学的な検討を行うこと。
- 3、同じく現地踏査の際に、現在も残っているわずかな起伏などの地形観察と水路や地割などの地誌的な検討を行い、景観復元の参考資料を採取すること。

最終的にはこうした作業を総合化して、まず 集落の構成を決定付ける要素の一つである河川 や自然堤防の復元を試み、これに地割や遺物分 布状況などから集落の動態の概要を把握してい きたい。(鈴木正貴)

# 2「尾張国冨田荘」推定地域の 考古学的調査

## (1) 現地踏査の実施

先学の諸研究を参考に、中世冨田荘域に含ま れると考えられる地域を平成15年2月~3月、 10月~11月に実地踏査した。踏査した地点 は、名古屋市中川区の戸田・春田から吉津3~ 4丁目(戸田川上流部と日吉神社周辺)・新家・ 千音寺と海部郡大治町の砂子(自性院周辺)・ 馬嶋・堀之内の各地区で、主に現在の集落区域 とその周辺を踏査した。その結果、図2にみら れる22箇所において古代~近世にかけての遺 物を採集した (表1参照)。実地踏査した状況 では、海部郡大治町砂子の自性院周辺では濃 密に遺物が散在している状況がみられ、宅地周 辺等に残る畑地や雑地を中心に遺物が表採でき た。宅地化された現在の集落内(例えば海部郡 大治町堀之内)、あるいはその他の目的で人工 物が建設されている区域においては、遺物はほ とんど表採できず、名古屋市中川区吉津3~4

丁目、同新家の地区では畑地において区画整理 (表土の移動)が行われたと思われる地点では、 細かい石材が耕作土中に多量に混ざり遺物が表 採できなかったが、その周辺の石材があまり混 ざらない畑地においては遺物が表採できた。今 回の調査において遺物が採集できた地点とその 周辺においては遺物の時期の遺跡が存在する可 能性が高く、遺物が表採できなかった地点も遺 跡の可能性が残る。(小嶋廣也・蔭山誠一)

## (2)表採資料と関連資料

現地踏査により採集した資料について、表1 と図2に示す。ただし採集資料は多くが小片で

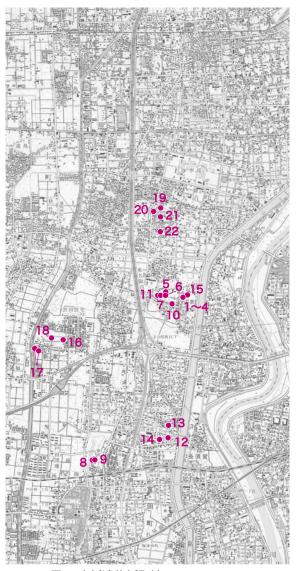


図2 表採遺物採取地(1:50,000) 国土地理院刊行「蟹江・津島」より

表1 表採遺物一覧

|    |      |            | 採集遺物 |       |     |        |               |        |        |         |
|----|------|------------|------|-------|-----|--------|---------------|--------|--------|---------|
| 地点 | 地点名  | 地点詳細       | 古代   |       |     | 中世     |               |        | 江戸時代   | スの州・天田  |
|    |      |            | 須恵器  | 灰釉陶器  | 土師器 | 灰釉系陶器  | 古瀬戸           | 土師器    | 江戸時代   | その他・不明  |
| 1  | 自性院北 | 海部郡大治町砂子   |      | 椀1    | 濃尾系 | 北部小皿 1 | -<br>- 折縁深皿 1 |        |        | 1       |
|    |      | 千手堂自性院境内北  |      |       | 甕 1 | 南部椀 1  |               |        |        |         |
| 2  | 自性院北 | 海部郡大治町砂子   | 3    | 椀5、瓶2 |     | 北部椀3   | - 壺1          | Ш5     | すり鉢1   |         |
|    |      | 千手堂自性院境内北  |      | 高台片 1 | 2   | 南部椀8   |               |        | 皿1     |         |
| 3  | 自性院北 | 海部郡大治町砂子   | 鉢1   | 瓶1    | 1   |        |               | 1      | 瓦質土器 1 |         |
|    |      | 千手堂自性院境内北  |      |       |     |        |               |        | 不明2    |         |
| 4  | 自性院北 | 海部郡大治町砂子   |      | 椀3    |     | 南部椀3   | - 縁釉皿1        | ш1     |        |         |
|    |      | 千手堂自性院境内北  |      | 瓶1    |     | 北部椀3   |               |        |        |         |
|    |      |            |      |       |     | 南部鉢 1  |               |        |        |         |
| 5  | 砂子堂地 | 稲荷社北北東畑地   | 蓋1   | 椀2    |     | 北部系椀2  |               |        |        |         |
|    | 砂子堂地 | 稲荷社北北東畑地   | ,    | 瓶1    |     | 北部椀4   |               |        |        | - 土師器か1 |
| 6  |      |            |      |       |     | 南部皿2   |               |        |        |         |
|    |      |            | 1    | 椀2    |     | 南部壺    |               |        |        |         |
|    |      |            |      |       |     | 甕1     |               |        |        |         |
| 7  | 砂子堂地 | 稲荷社境内北     | 甕1   | 椀3    |     | 北部椀 1  |               |        |        |         |
| 8  | 春田   | 太明神社       |      | 椀 1   |     | 壺・甕1   |               |        |        |         |
| 9  | 春田   | 太明神社       |      |       |     | 南部椀2   |               | 伊勢鍋 1  | 1      |         |
| 10 | 砂子堂地 |            | 甕1   |       |     | 椀か皿 1  |               |        |        |         |
| 11 | 砂子堂地 | 稲荷社堂地      |      |       |     | 南部椀2   |               |        |        |         |
| '' |      |            |      |       |     | 鉢1     |               |        |        |         |
| 12 | 吉津   | 吉津4日吉神社    |      |       |     | 北部椀 1  |               |        |        | - 軽石 1  |
| 12 |      |            |      |       |     | 南部1    |               |        |        |         |
| 13 | 吉津   | 吉津4日吉神社    |      |       |     |        |               | 鍋1     |        |         |
| 14 | 吉津   | 吉津4日吉神社南西畑 |      |       |     | 椀1     |               |        |        |         |
| 15 | 自性院北 | アメニティ大治の北  | 杯1   |       |     | 北部椀 1  |               |        |        |         |
| 16 | 新家a  | 妙本寺東北東     |      |       |     |        |               | - 伊勢鍋1 |        |         |
|    |      | 約200m畑地    |      |       |     |        |               |        |        |         |
| 17 | 新家b  | 福田川東岸の畑地   |      |       |     | 南部椀1   |               |        |        |         |
| 18 | 新家C  | 妙本寺北東      |      |       |     |        | 1             |        | 1      |         |
|    |      | 約150m畑地    |      |       |     |        | <u>'</u>      |        |        | '       |
| 19 | 馬嶋2  |            |      |       |     | 南部椀 1  |               |        | 椀1     | 形象埴輪1   |
| 20 | 馬嶋1  |            |      |       |     | 南部椀2   |               |        |        |         |
| 21 | 馬嶋3  |            |      |       |     |        | 大窯皿 1         |        |        |         |
| 22 | 馬嶋4  |            |      |       |     | 南部椀2   |               |        |        |         |

あったため、実測可能な資料に乏しくまた時期 についても詳細は不明である。

(地点1~4・15) 最も濃密な分布がみられた自性院周辺の地点である。まず須恵器、灰釉陶器、土師器甕など古代に遡る資料が他地点に比較して多いことが特徴の一つにあげられる。中世段階では、灰釉系陶器椀、皿、鉢、土師器、古瀬戸があり、灰釉系陶器では概ね12世紀後半~13世紀前半の時期とされる南部系の資料が13点、また13世紀後半~14世紀代とされる北部系の資料が8点といった割合となる。そして少量ながら古瀬戸と土師器皿が採

取されたのはこれらの地点に限定される。以上より一帯では比較的早い古代の段階から開発され、以降中世後半期まで継続した中心的な地域であったと推定される。

(地点5~7・11) 前述した自性院周辺のすぐ西側にあたる地点である。ここでも須恵器、灰釉陶器など古代に遡る資料が若干量含まれる。中世の灰釉系陶器では南部系資料に対する北部系資料の割合が高く、乏しい資料で断定するのは慎むべきであるが、中世段階の開発は前述の地域にやや遅れて進行したとも考えられる。

(地点 16~18) 踏査した範囲では最も西

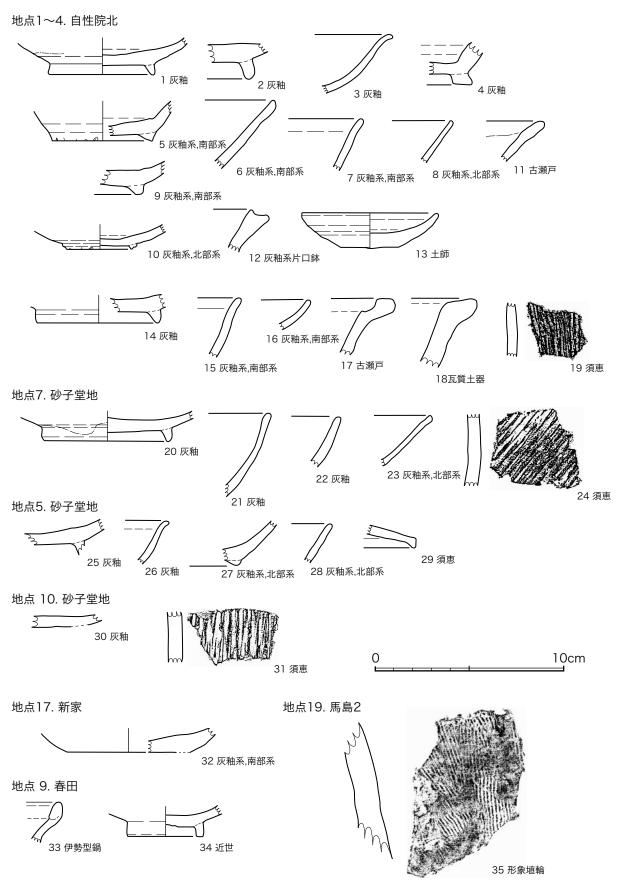


図3表採遺物実測図(1:2)

側に位置する現在の福田川流路左岸にあたる 字新家を含む地域である。古代の資料はみられ ず、中世前半期の資料と古瀬戸がある。

(地点8・9) 踏査した範囲では最も南に位置する。現在の春田集落の西端の地点である。 古代と中世前半期の資料がみられるが、遺物の分布は希薄である。

(地点 19~22) 踏査した範囲の最も北に あたる地域である。全体に資料の分布は希薄で あるが、中世前期の資料が主体であり、特殊な ものとして古墳時代の形象埴輪1点がある。

(地点 12 ~ 14) 新川の左岸にあたり、地点の東方では庄内川が蛇行し西側にせり出して流れる。中世前半期、後半期の資料があるが、遺物の分布はかなり希薄である。

関連資料として名古屋市教育委員会が調査を行った中川区千音寺遺跡出土資料を実見する機会を得た。踏査地点 16 の北東に広がる住宅建設に伴う調査であり、特に1・2次調査地点においてまとまった量の遺物が出土した。報告されているように若干量の須恵器がみられる。 本名 は一世前半期に比重を置きつつ後半期にも継続がみられる。加えて青磁、白磁、土師器鍋や皿、常滑窯産に混じり渥美窯産と推定される壺甕類も少量含まれている。古代の灰釉陶器と中世の古瀬戸はほとんど見られない。(小澤一弘・池本正明・武部真木)

## 3 地籍図の分析

先学の研究においても絵図を現在の地図に具体的に復元する作業が行われてきた。復元作業の重要な手懸りが絵図に描かれた河道や道、地名などで、河道と道の位置が特定できれば絵図に描かれた建物等の位置についても推定が可能になる。このため地籍図に残された明治時代の土地利用を通して分かる地形等により、絵図に描かれた河道と道の位置とその道筋について検討する。今回は現在の地名・河道等から冨田荘絵図に描かれた「成願寺」を中心とする地域の地籍図(明治17年)を土地利用の面から宅地(寺院と神社を含む)と畑地(薮と墓地を含む)、

水田(草生地を含む)の大きく3つに分類し、 主な河道・用水、道・堤を入れたのが図4である。

#### (1) 地籍図にみられる微高地群と低地部

宅地が複数集まった集落は各村に1カ所~2 カ所存在し、八ツ屋村・北間島村・東條村・堀 之内村・馬島村・中島村・西條村南部の集落が 東西に並んで集まって分布しており、その他の 村はその周囲に点在している。これらの集落部 分は現在の集落範囲内にほぼ重なり、砂子村集 落から続く万場村集落のように佐屋街道に沿っ て形成された集落もあり、村々は道によりつな がっている。畑地はこれら宅地(集落)の周囲 を取り囲んだり、宅地とやや混在して分布して おり、さらにその周囲に水田が広がる。宅地と 畑地は水田に比べて高燥な土地条件に営まれ ており、微高地を形成している。濃尾平野部に おける微高地のほとんどが河川堆積による河岸 として形成されたものであり、湿地状の土地と 考えられる水田域は河道部分と河道の後背湿地 (あるいはそれらの痕跡) として現在まで残る ものである。

この地籍図の解析を通じて、以下の7つの微高地群を認識することができた。

○微高地群 A: 長牧村南部と八ツ屋村北東部から 北間島南部・東條村北部・堀之内村中部を経て、馬 島村北部・花常村南部・中島村北部を通り西條村南 部に至る微高地群、微高地群 G を挟んで秋竹村東部 から秋竹村集落に続く可能性がある。

○微高地群 B:鎌須賀村北部・三本木村北東部から砂子村北部・三本木村南部を経て、千音寺中北部 (集落部分を含む)を通り千音寺村北西部に至る微高地群、微高地群 Gと微高地群西端で重なり、さらに西の微高地群 Fに続いていた可能性がある。

○微高地群 C: やや畑地と水田がモザイク状に散在する範囲であるが、万場村中央北村境付近から砂子村南中部経て、万場村西部と千音寺南東端・南中部・新家村北西部を通り、千音寺村南西端と新家村集落に至る微高地群。微高地群 G を挟んで伊福村北東部に続く可能性がある。

○微高地群 D: 鎌須賀村の北集落付近から万場村 北東の飛地部分で、間に谷状の窪地を含む。微高地 群 B と北側で重なる。

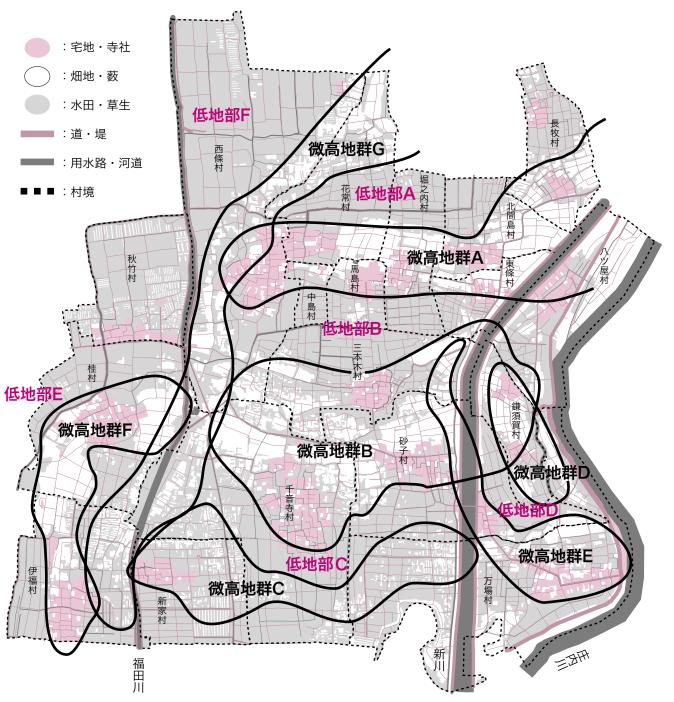


図4 冨田荘「成願寺」推定地区地籍図(約8,300分の1)

○微高地群 E:三本木村東端部から砂子村集落南東部を経て万場村集落に続く佐屋街道沿い付近の微高地群で、三本木村東端部と砂子村集落にて微高地群 Bと重なる。

○微高地群 F: 桂村中央部の集落からやや西寄りに曲がり伊福村北西部の集落に至る微高地群で、南側はさらに南部の徳実村にのびる。

○微高地群 G: 西條村北東部の集落付近と花常村 北端部から西條村東村境に沿って南下し、西條村西 部に至る微高地群で、北側は現在の甚目寺町甚目寺 観音付近から確認できる。南側は微高地群 B と交差 して不明瞭になるが、さらに千音寺村西部の福田川 沿いを経て伊福村集落の北東側に至る可能性がある。

○その他の微高地:今回の図化した範囲では孤立

している微高地として、長牧村北部の集落や秋竹村 南部の集落付近と万場村南村境付近の微高地がある。

また、これら微高地群から外れた低地部は大きく6群ある。

○低地部 A: 微高地群 A の北に分布する水田域で 東は庄内川に隣接する長牧村南集落北部分より始ま り、西は微高地群 g により途切れている。

○低地部 B: 微高地群 A と微高地群 B の間にある水田域で、東は庄内川に隣接する八ツ屋村南部から始まり、西は微高地群 G により途切れている。

○低地部 C: 微高地群 Bと微高地群 Cの間にある水田域で、東は庄内川に隣接する万場村東部より始まり、西は微高地群 Gにより途切れている。

○低地部 D: 鎌須賀村と砂子村の村境から鎌須賀村と万場村の村境付近に沿って分布する水田域で、 北は微高地群 B の北には続かない。

○低地部 E: 微高地群 F の西に分布する水田域で、 東は微高地群 G に隣接する桂村北部から始まり、南 に折れて伊福村の南に続く。

○低地部 F: 微高地群 G の西に分布する水田域で、 南側は秋竹村集落のある微高地により途切れている。

#### (2) 地籍図から河川堆積の痕跡を読み解く

次に絵図に描かれた河道を推定するため、先 に抽出した微高地群と低地部の関係について、 一つの河川堆積の痕跡と推定できる関係を抽出 し、旧河道を推定する。まず、東西にのびる微 高地群A~微高地群Cに対応する低地部は低 地部A~低地部Cがあり、微高地群の規模と 状態が類似する微高地群 A と微高地群 B、2 つの微高地群に挟まれた低地部Bが一つの大 きな河川の堆積活動の痕跡(単位)と捉えるこ とが可能である。同様に南北にのびる微高地群 D~微高地群 Gに対応する低地部は低地部 D~ 低地部Fがあり、微高地群Dは地籍図にある 庄内川右岸の自然堤防ともなっているが、この 微高地群Dには方向が並行する微高地群Eと 2つの微高地群に挟まれた低地部 D が一つの 河川堆積の痕跡に捉えられる可能性が高い。ま た微高地群Fの北側と並行する秋竹村集落の 微高地とこの間に挟まれた低地部Eも一つの 河川堆積の痕跡と考えられ、図示していない地 籍図の西に南北にのびる微高地群も一連の河川 堆積の痕跡と考えられる。一方で、微高地群 G は他に対応する微高地群や低地部がないが、微 高地群Gの中には水田域(低地部)が微高地群 に沿って存在することから、微高地群 G 自体が 一つの河川堆積の痕跡と捉えられる。よって河 道を推定できた4つ河川堆積の痕跡を各々旧河 道 A (微高地群 A·B、低地部 A)、旧河道 B (微 高地群 D·E、低地部 D)、旧河道 C(微高地群 F・秋竹村集落、低地部 E)、旧河道 D( 微高地 群 G) とする。この4つの旧河道において、位 置関係や推定できる河筋から旧河道 A と旧河道 C は旧河道 D を挟んで同一の河道の可能性が高 い。その他の微高地群と低地部も河川の堆積に より形成された可能性が高いが、具体的な河道 の痕跡を推定できる関係を抽出できなかった。

## (3) 絵図に描かれた河道

ここでは地籍図から読み解いた旧河道から、 絵図に描かれた河道を推定する。絵図にみられ る河道は北側の上流部において2条(河道ア・ 河道イ)、南側の下流部において3条(河道ア・ 河道ウ・河道エ)あり、絵図の「賀茂須賀」付 近にて1条の河道(河道ア)に合流し、そこか ら分流するのが大きな特徴である。

明治 17 年の地籍図と中世の絵図との位置関 係は、地籍図においてみられる河道の中で図4 東端にあたる庄内川が絵図に描かれた河道アの 河筋と類似し、また絵図に残る地名と地籍図に 残る地名の対応関係が認識し易い。よって絵図 に残る河道アを地籍図の庄内川と重ねると、絵 図北側において河道アと河道イが合流する地点 から河道アが蛇行する最初の屈曲部が図4の北 東部にあたり、4番目の屈曲部が図4の南東部 に相当する。この河道アの屈曲部をもとに南側 にて河道アから河道ウが分流する地点を推定す ると、地籍図において庄内川が最初に屈曲する 八ツ屋村南部の地点が推定できる。先に地籍図 において推定した旧河道Aと旧河道Cが、絵 図の河道ウと位置と河筋が最も近い。また他に 推定した旧河道では、旧河道Bは微高地群B より北に続かないことから、中世より古い河道 と思われ、旧河道Dは旧河道Aと旧河道Cを 東西に分断するようにみられるので、中世以 後の比較的新しい河道の痕跡と考えられる。この想定が正しいかは今後の調査が必要であるが、 旧河道Bと旧河道Dは絵図には描かれていない。

## (4) 絵図に描かれた道

絵図における道の表現として、二本の線が並行して描かれているもの(堤状のものを含む、以下「二本線の道」)と一本の線で描かれているもの(以下「一本線の道」)があり、一本の線で描かれているものは条里や地域の境としても想定されている。まず二本の並行する線で描かれているものを考えると、地籍図で表現した範囲内に4本ある(道ア~道工)。

道ア:絵図の「萱津宿」付近から逆「L」字状にはしる道。

道イ古庄内川の北の分流に橋をかけ、絵図の「成願寺」北側を西にはしり、「成願寺」の西側にて屈曲して南下する道。

道ウ・道工:絵図の「新家里」の北東側にて「T」 字路をつくる2本の道。

絵図の道ア〜道エと地籍図にある旧道との関 係では、地籍図において萱津から三本木村にい たるやや太線で描かれた道が絵図の道アの南 下する部分と道アから分かれ河道ウを渡る道イ と道筋が類似する。また、地籍図にある旧道が 微高地上にある村々をつないでいるように道が 村々をつなぐという性格を重視し、絵図にある 道も同様な性格をもつものと考え、地籍図にあ る旧道の道筋と微高地の分布を手懸りに絵図に 描かれた道ア~道エの位置を推定する。道アは 地籍図の五条川右岸から続く微高地を萱津付近 から南下して八ツ谷村北部付近にて西に曲がり 微高地群aの上を通り西に至るものと考えら れ、道イは地籍図の東條村集落東側から南下し て三本木村北東部の微高地付近で西に曲がり、 三本木村集落を経て、砂子村と千音寺村の村 境に続く位置を通るものと推定したい。また道 ウ・道工は地籍図において新家村東部を南北に 流れる用水路付近の微高地(道ウ)と東西にの びる新家村集落の上(道エ)を通ってT字路 をなしていたものと推定しておきたい。

次に道の可能性がある一本の線は絵図の「成

願寺」南の東西の線(道オ)と道アの西にのび る部分の北に並行してはしる東西の線(道カ) がある。道オは地籍図の砂子村と万場村の村境 と対応しており、さらに千音寺村集落の南を経 て、新家村と千音寺村の村境に続く。道カは道 アと同様に地籍図の微高地群Aを通るものと 考えられ、地形的に条里等の土地区画に伴う線 と考えるよりは道アから分かれる枝道と考える 方が妥当である。このように考えると微高地群 a では北間島村の南村境に沿った部分から堀之 内村集落の北側を経て花常村南端にかけて微高 地に並行して東西にのびる水田域が存在し、微 高地群Aを南北に区分することができる。よ ってこの水田域を挟んだ南側微高地を道アが通 り、萱津道の枝道と推定される道カを北側の微 高地を通るものと考えられないか。そしてこの 谷状になる水田域が閉じる西條村集落北部にて2 本の道は再び合流し、西にのびるものと考えたい。

# (5) 絵図における地名の位置

絵図に描かれた河道と道の位置をこのように 推定すると絵図の「成願寺」は地籍図の砂子村北 部の集落を中心とする地域に、「秀時」は万場村に、 「千音寺」は千音寺村集落に、「新家里」に描かれ た建物群は新家村集落から東側南北にのびる微 高地に、「草壁里」は千音寺村南部の水田域に各々 の位置が特定できるであろう。( 蔭山誠一)

# 4 地籍図をもとにした微地形分類の 地質学的検討

明治17年発行の地籍図をもちいて海部郡大治町長牧、名古屋市中川区万場、海部郡七宝町伊福、同郡大治町西條で囲まれる東西約2.7km、南北約3.3kmの範囲を、土地利用の差をもとに微地形を分類した。その結果、宅地と畑地の分布状況から周囲に比べて相対的に標高の高いと考えられる微高地を微高地群A~Gの7つに、微高地群以外の相対的に標高の低いところを低地部A~Fの6つにわけた。

ところで、名古屋市南部とその周辺地域に 関する地質学あるいは自然地理学的研究には 井関 (1982a, 1982b)、中井ほか (1982)、安 田 (1971) がある。それらのうち井関 (1982a, 1982b)。中井ほか (1982) は地質学的に更新統 最上部から完新統までの 10<sup>3~4</sup> 年の地層をあ つかっており、本論でのべる時間スケールと 比べてあまりにも古い。安田 (1971) は庄内川 下流域において、航空写真判読と古文書の記載 を参考に歴史時代の河道変遷と微地形を分類し た。参考になるのは安田(1971)しかないわけ である。ここでは本論で区分した微高地と低 地部の分布状況を安田(1971)と比較すること で、既知の部分と今回新たに確認できたことを 整理してみる。なお、安田 (1971) の微地形分 類図では三角州を陸化の有無により分け、陸化 しているところを三角州上位面、陸化していな いところを三角州下位面とした。この区分に従 うと、本論で対象とした地域はその大部分が三 角州下位面となる。陸化していない水中に没し た地域となり。明らかに矛盾してしまう。また、 地質学では三角州を上位面、下位面とに分ける が、いっぱんに淡水河川の卓越する環境を上部 三角州(正確には上部デルタ平原)、潮汐の影 響をこうむる環境を下部三角州(下部デルタ平 原)とに分け、陸化(あるいは離水)の有無で は区分しない (Coleman and Prior, 1980)。 加えて、安田 (1971) では庄内川や戸田川の河 口に、東西方向に帯状にのびる後背湿地が描か れている。自然堤防に分類された周囲には後背 湿地がほとんどみられないにも関わらず、海側 に後背湿地が唐突に出現している。おそらく、 河口の干潟環境に生じる塩性湿地として表現し たかったのかもしれないが、不明である。以上 のような理由で、安田(1971)の微地形分類図 の主に河道跡とその周囲の自然堤防、後背湿地 のみに注目して整理を進めることにする。

整理にあたり、本論の地籍図と安田 (1971) の地形分類図との位置を正確に決定する必要がある。そこで基準となるのが庄内川である。現在の庄内川は、西春日井郡西枇杷島町から海部郡大治町長牧にいたる区間で流路はほぼ直線的である。ところが、海部郡大治町長牧から名古屋市中川区万場の区間では明瞭に蛇行するようになる。蛇行部の地形について、河道の両岸、堤防ではさまれた部分がそれぞれ攻撃斜面と堤防ではさまれた部分がそれぞれ攻撃斜面と滑走斜面とにわけられる。河岸の平面形状が凹型になっているところを攻撃斜面、凸型で河道に向かってゆるく傾斜するところを滑走斜面と

よぶ。庄内川の蛇行部は、伊勢湾にそそぐ河口から約9.1kmの大治町鎌須賀で攻撃斜面、名古屋市中村区稲葉町側で滑走斜面、河口から約7.6kmで流路西側の名古屋市中村区岩塚付近(万場大橋地点)で攻撃斜面、流路東側に滑走斜面、約6.6kmで流路西側の名古屋市中川区万場で攻撃斜面、同市中村区八社で滑走斜面がみられる。このように、蛇行軸に沿う直線距離約1.8kmの区間に3地点の蛇行部が存在する。本論であつかった地籍図の東端には南北方向に屈曲部がみられる。この屈曲部は、現在の大治町鎌須賀から万場大橋にかけてみられる庄内川蛇行部の西側(右岸側)に対応する。この対応部分と新川の位置を合わせて、安田(1971)が作成した地形分類図に投影してみた。

安田(1971)では、庄内川は大治町鎌須賀で 分岐し、西側方向へ向かう河道跡が推定されて いる。この河道跡は海部郡大治町三本木、同町 西條を通り、海部郡七宝町秋竹の秋竹小学校で 南へ方向を変え、同町川部の東側約 300m を 通り、同町鷹居でさらに2本に分岐する。分 岐した西側は七宝町鷹居で蟹江川と津島七宝 名古屋線との交点にある鷹居橋から、津島市金 柳町の東方、蟹江町の東名阪自動車道蟹江イン ターチェンジ、同町北新田にいたる。東側は七 宝町伊福の伊福小学校から、同町鯰橋を経て蟹 江町須成にいたる。上述の河道跡は、本論の微 高地群A・B・Fとに囲まれる低地部B・Eの 大治町三本木から七宝町伊福までにあたる。ま た、上述の安田(1971)の河道跡には大治町西 條北方から合流してくる河道跡があり、その西 側には北東 - 南西方向に長さ約 500m の自然 堤防がみられる。合流する河道跡は本論の低地 部Fの一部に、自然堤防は微高地群Gの北部 に対応する。上述した河道跡の南側には、大治 町砂子から名古屋市中川区富田町北部、大治町 西條南端にいたる(現在の西條中川線を通り七 宝町伊福の約500m 北まで) 明瞭な自然堤防 が分類されており(安田,1971)、これは微高 地群Bに対応する。また、大治町八ツ屋から 名古屋市中川区万場にかける庄内川西側(右岸 側)にみられる自然堤防(安田,1971)は本 論の微高地群 A の東側部分に、名古屋市中川 区万場にみられる自然堤防(安田,1971) は 微高地群 E に、七宝町伊福の北方でみられる 自然堤防(安田,1971)は微高地群 f にそれ ぞれ対応する。さらに低地部 A は後背湿地 (安 田,1971) に、低地部 C は三角州上位面 (安 田,1971) にあたっている。

以上のように、本論の微高地群(A・B・E・ F・G) と低地部 (A・B・C・E・F) が安田 (1971) の河道跡や自然堤防・後背湿地とに対 応関係が認められる。一方で、安田 (1971) に は認められていないものがある。微高地群 A の西側部分(東條・堀之内・馬島・中島にかけて) や、鎌須賀において北西 - 南東方向にのびる微 高地群Dと低地部D、そして微高地群Cであ る。なお、微高地群Cは水田面積に対する宅地・ 畑地面積比がほかの微高地群と比べてきわめ て小さい。微高地群と呼称するにはいささか抵 抗がある。微高地群Dと低地部Dとのセット は、現在の新川と庄内川とに挟まれてみられ、 北西 - 南東方向にのびた庄内川とをつなぐ分岐 流路跡(低地部 D)および自然堤防(微高地 群 D) と考えられる。ところで、村岡 (1998)

は「新修名古屋市史 第二巻」(新修名古屋市 史編集委員会,1998)の中で、文献史学的な 見地から「富田荘絵図」の地域について考察を おこなっており、航空写真判読をもとにして庄 内川と新川とに挟まれた本論と同じ地点に河道 跡を推定した。低地部 D がそれにあたり、安 田 (1971)の分類にはみられない河道跡が、航 空写真判読の結果(村岡,1998)とともに明 治 17 年の地籍図による微地形分類からも指摘 できたことになる。

加えて、微高地群 G は本論の微地形分類範囲を南北方向にのび、安田 (1971) の分類した大治町鎌須賀から西側へ分岐する河道跡を切っており、明らかに時代の新しい河道跡が推定でき、その自然堤防として微高地群 G が存在することを示唆する。(鬼頭 剛)

# 5「成願寺」付近の復元

第3章では地籍図をもとに、絵図に描かれた 河道・道・及び地名を特定した。中でも成願寺

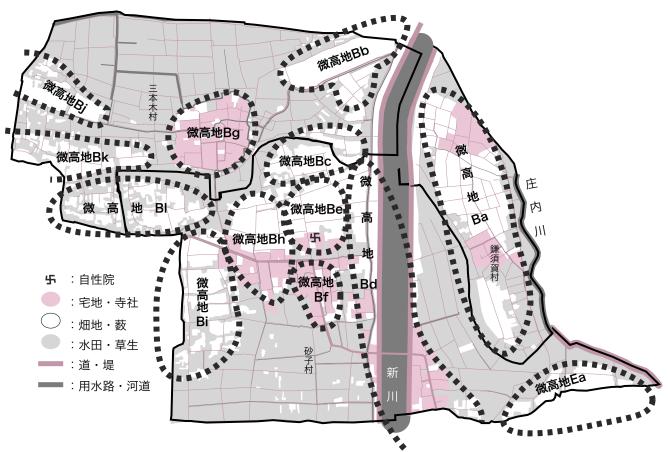


図5 砂子村地区地籍図(約14,150分の1)

が微高地群Bのうち、砂子村北部の集落を中心とする地域に特定できることが明らかになったことから、本章では成願寺付近の推定を試みる。まず微高地群Bを細分して検討し、絵図に描かれた建物の分布を確認したうえで、成願寺が微高地のどの場所に該当するかを推定する。

## (1) 微高地の分析

図5は、砂子村及び三本木村・鎌須賀村地籍 図を合成したものである。この地域では微高地 群B・微高地群D・微高地群Eが該当するが、 分析の中心は微高地群Bになる。微高地群Bを 詳細に検討した結果、微高地BaからBlを析 出することができた。

微高地Ba:鎌須賀村の北部から南南東に帯状に 分布する。その南に微高地群Dが続く。

微高地Bb:三本木村の北東部にY字状に分布する。微高地は南西方向へ帯状に展開して微高地Bgへ続くものと、南方向へ伸びて微高地Bc・Bdに連なるものがある。

微高地Bc:三本木村・砂子村の境で東西に分布するが、一部は東西に伸びる水田の区画で途切れる。 北で微高地Bbと接し、南で微高地Bd·Beと一部が接する。

微高地Bd:北で微高地Bcと重複し、南南東方 向へ展開して微高地群Eに至る。ただし新川開削の 影響を受け、一部は消滅している。

微高地Be:砂子村の中央に分布する。北で微高地Bcと接し、微高地Bd・Bhと東西で重複する。 比較的安定した微高地である。

微高地Bf:微高地Beの南に分布し、西で微高地Bhと重複する。佐屋街道が自性院から南へ屈曲する部分が中心となる。

微高地Bg:三本木村中央で塊状に分布する。孤立して見えるが、西に展開する微高地Bj·Bkと成因過程が同一の可能性がある。

微高地Bh:砂子村中央やや西より、微高地Be・Bf・Biと重複して南北に分布する。比較的安定しているが、佐屋街道より南は細長くなる。

微高地Bi:砂子村・千音寺村境に分布し南北に 展開するが、南側では畑の分布がモザイク状となる。 東で微高地Bhと重複し、北で微高地Bkと接する。

微高地Bj:三本木村西部、畑が北西方向にモザ

イク状に分布する。南で微高地Bkと接する。

微高地Bk:三本木村西部に東西方向でモザイク 状に分布する。北で微高地Bjに、南で微高地Bl に接する。

微高地BI:砂子村西部から三本木村南西部にかけて東西にモザイク状に分布する。北で微高地Bkに、南で微高地Biに接する。

なお、このほかに砂子村南東部から万場村北 西部にかけて塊状に分布する微高地 Eaがある。

# (2)「冨田庄絵図」における建物の分類と位置 の比定

次に「冨田庄絵図」に描かれた成願寺及びその周辺に分布する建物を分類し、微高地上における位置を推定する。絵図に見える成願寺付近は、東は河道ア、西及び北は道イ、南は道オで囲われた地域を指し、5種類の建物を確認することができる。なかでも成願寺を構成すると思われる建物は、本堂(①)、塔(②)、門(③)の3種類である。ついで成願寺の東には、彩色された2棟の二層もしくは庇付建物(④a、④b)と2棟の平屋建物(⑤b)が分布する。このほかには成願寺の西に絵図の右上から左下にかけて平屋建物6棟がみられ(⑤a)、成願寺右下の道オの北側にも平屋建物1棟(⑤c)がある。

当時の集落や寺院は、先に析出した微高地の 分布と一致すると考えることができるので、建 物の分布を地籍図に反映させる作業に移る。ま ず⑤aは南西隅の3棟と北よりの3棟の2群 に分かれ、道イが微高地Bi、Bgを経て微高 地Bbを通ることを根拠に、微高地Biの東記 およびBhの北部に分布していたと考えること ができる。また⑤bは微高地Bdに、⑤cは微 高地Eaにそれぞれ比定が可能である。次に④ a・④bの位置は、⑤bとの間に空白があら 車を想定できること、また建物が左上から右下 に配置されていることから、微高地Baに比 できる。こうして成願寺の寺域は微高地Be・ Bf・Bhに絞られる。

### (3) 成願寺の建物の配置

最後に建物①・②・③の位置を推定するが、 景観復元のためには絵図が描かれた時期を確 認する必要がある。そのために参考とするの

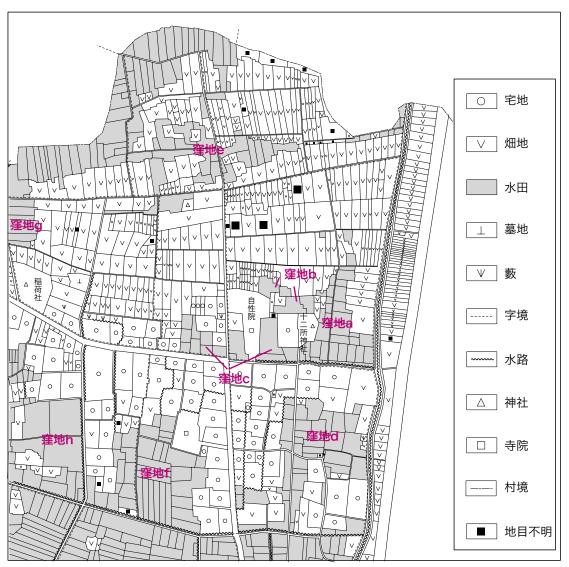


図6 砂子村自性院周辺の地籍図(約1:5,000)

が、現在も大治町砂子に所在し、成願寺の法 燈を継ぐといわれる自性院に伝わる、「自性院 縁起」の記述である。を参考にする。この縁起 は上村喜久子の研究により明応4(1495)年 までに成立していたと考えられ(上村1992)、 成願寺の歴史をたどる上で貴重な史料として利 用されている。同縁起によれば成願寺は延慶2 (1309)年、昼夜三日にわたる「大風逆浪」に より堂塔がことごとく破壊されたとある。また 嘉暦2(1327)年に本堂を南面に改めて貫塔 したとする記事があり、絵図に描かれた堂塔は 同年以降に再建された姿を示していると考えられる。なお村岡幹生氏は『新修名古屋市史』第 2巻(村岡1998)において、絵図の成立契機 を14世紀半ばの尾張国守護土岐氏一族の進出においており、注目される。したがって絵図に描かれた建物の立地は前項の検討結果とあわせると、絵図の表現にデフォルメが想定されるものの、14世紀半ばの状況を反映している可能性が高い。また同縁起に応永23(1416)年に焼亡したとする記事があることから、伽藍は15世紀はじめまで存続した可能性がある。

以上の点を確認した上で寺域の推定を進めるが、寺域は絵図表現におけるデフォルメの程度により、2つの可能性を考えることができる。 絵図のデフォルメが小さい場合は大規模な伽藍配置となるため、建物の立地は窪地の制約を受けるものの、寺域は窪地を含んだ微高地上に立地 することが想定される。したがって前項の分析結果から、①は微高地Beの西から微高地Bhの東にかけて、②は微高地Bhの南側、③は微高地Bfにそれぞれ立地することが考えられる。

一方絵図のデフォルメが大きい場合、立地条件をより限定する必要がある。甚目寺や明眼院など周辺寺院の規模は1辺が100mを超えるが、200mを超えるものはない。したがって成願寺もほぼ同じ規模を想定すると考えると、微高地上で立地可能な範囲は限られる。そこで地籍図から微高地Be・Bf・Bhとその周辺の連続する水田の範囲から窪地の分布を検討すると、次のように析出することができた。

窪地 a: 十二所神社の東、南北方向に幅 20 mで 分布する。またその西にある水田 1 区画も成因が同 一の可能性がある。

窪地 b: 自性院の北の水田 2 区画にあたる。

窪地 c: 自性院の南から西にかけて南北に分布する3本の水田と、幅20 m前後で東西に分布する水田で構成される。なお窪地a・bを含め、ひとつのまとまりとして捉えることが可能である。

窪地 d:十二所神社の南、南北方向に幅30 mで分布する水田と、その東に分布する水田で構成される。

窪地 e: 自性院の北西、東西方向に分布する。また一部は微高地 Bhに約4mの幅で細長く食い込む。

窪地 f: 寺院敷地の南、南北方向に分布する。微高地Bf・Bhの間に相当する。

窪地g:稲荷社の北西、微高地Bh・Bi・Bl の間に分布する。

窪地 h:稲荷社の南、微高地 B h・ B i の間に南 北に分布する。

これらのうち、窪地a・b・c・eは微高地群Bに伴い、窪地a・dは微高地群Eに伴い形成されたものと捉えられるが、窪地a・cは一定の幅で細長く見られることから、人為的に掘削された可能性が残る。寺域は東を窪地a・cによって、北を窪地eによって制約されるため、微高地Be・Bhに絞り込むことができる。よって立地は窪地を含まない安定した微高地に立地する。これらの点を考慮すると、①・②・③は現在の自性院より北西に分布することにな

り、微高地Beの西から微高地Bhの東にかけて立地すると考えられる。( 鵜飼雅弘 )

## 6 まとめ

中・近世研究部会において、尾張国冨田荘を 素材として取り上げ、中世集落研究の手法を模 索し、検討を行ってきた。本研究部会では、考 古学一分野からのアプローチにこだわらず、多 分野からの視点を用いた総合的研究を目指した つもりである。

今回のプロジェクトを始めるにあたり、もっともこだわり、目指したのは景観復元であった。ある地点、時期を目的とした景観復元は、研究分野を越えて様々な手法で行われていある。しかし、どの研究をとってみても、単一な手法では不可能であることが指摘されながらも、最適な手法が見つからない中で、それぞらも、最適な手法が見つからない中で、それぞれが試行錯誤を繰り返しているのが現状であるう。ここでは、文献史学、歴史・自然地理学などの先行研究に助けられつつ、富田荘域の中で絵図にみられる「成願寺」を中心とした地域に絞り、分析を進めてきた。

まず現地踏査においては、地点による採集資料の粗密、資料の製作時期、産地等を調べ、これを比較することによって地点の性格を推測した。その結果、現地踏査という限られた手法の中では、自性院周辺の地点において、もっとも濃密な遺物分布が確認され、古代の早い段階から中世後半期まで、継続して営まれた中心的地域であることが推測できた。

次に地籍図の分析においては、明治期における土地利用の実態から微高地と低地を割り出し、7微高地群と6低地部を認識した。これらの相対関係から河川堆積の痕跡を抽出し、4条の旧河道痕跡を推定した。この推定した旧日と、公園に描かれた河道と比較すること、残りの2条は復元を目的とした中世よりも古と、中世以降の比較的新しい河道と、中世以降の比較的新しい河道と推定した。さらに、地籍図に表記された旧道の道筋と、微高地の分布を手がかりとして、絵図に描かれた「成願寺」の位置を、砂子村北部図に描かれた「成願寺」の位置を、砂子村北部

の集落と比定し、この周辺に描かれた地名についても、位置を特定するに至った。

これらの分析に加えて、地籍図をもとにした 地質学的分析を行い、微地形の分類を行った結 果、先行研究(安田 1971)の矛盾点をあぶり出 しつつ、本稿で分析した微地形の対応関係を補 強する結果が得られた。

以上の結果により、冨田荘絵図の中心部分、「成願寺」のある現・大治町域を中心に、絵図の地点をおおまかに特定することができた。さらに、絵図の表現においてデフォルメの可能性を考え、周辺寺院の規模を考慮し、地籍図にみられる寺院(自性院)の南側と東側を巡る水田域(窪地)の存在に着目して、「成願寺」寺域の推定を行うことができたわけである。

人々が生存する場所には、どの時代においても整備状況に差はあるものの、地形に左右された道が存在する。そして、この道に導かれるように、その時々の生活要因によって住居が築かれ、それぞれの生活圏が交錯することとなる。 冨田荘が立地した沖積低地では、古代から中世にかけて、公家領から寄進地系の寺領荘園へと 伝領される中で、そこに生活の場を定めた人々 の痕跡が、文献資料、現地踏査、発掘調査結果 の事例からも明瞭である。微地形が複雑に変化 する自然環境下で、人々は生業を営み、この地 での生活誌を刻み続けたわけである。この事実 を痕跡だけに放置せず、当時の景観復元まで分 析・調査することによって、単一分野でのアプ ローチからは成し得ない歴史研究が、初めて可 能となるであろう。

今回の分析結果からは、今まで見過ごされがちであった集落遺跡としての冨田荘を、部分的に意義付けることができた。現代に残されている資料を分析素材として、さらなる具体的な解明を行うためには、当該期の中心的エリアを特定し、この部分においての発掘調査事例を追加することが不可欠である。そのためには、当該期の集落がどの地点であったのか、比定の精度を高め、埋蔵文化財調査の対象となりうる根拠を構築してゆく必要があるであろう。当研究部会での試みが、こうした根拠への一助となれば幸いである。(松田 訓)

#### 久州东 (I

参考文献

愛知県(1935)『愛知縣史第1巻』

愛知県教育委員会(1986)『愛知県遺跡分布地図(I)尾張地区』

板倉勝高(1952)「尾張国富田庄を例とせる日本庄園の村落構造」『東北地理5巻1号』

上村喜久子(1986)「絵図にみる冨田荘の開発と形成」『名古屋短期大学研究紀要 24』

上村喜久子 (1990)「冨田荘」『講座日本荘園史 5 東北・関東・東海地方の荘園』

上村喜久子(1992)「「自性院縁起」について」名古屋短期大学研究紀要第30号

神奈川県(1973)『神奈川県史資料編二』

蔭山誠一(2002)「県内遺構遺物集成 Vol22 発掘!尾張国冨田荘」『まいぶん愛知 no69』

名古屋市 (1998)『新修名古屋市史第2巻』

名古屋市教育委員会 (2000)『埋蔵文化財発掘調査報告書 35 千音寺遺跡 (第1・2次)』

村岡幹生 (1998)「第四章 荘園・公領制下の人々の生活」『新修名古屋市史第2巻』

安田喜憲(1970)「尾張国冨田庄の歴史地理学的研究」『立命館文学 303』

Coleman, J. M. and Prior, D, B., 1980, Deltaic sand bodies, Amer. Assoc. Petrol. Geol. Continuing Education Course Note, No.15, 171p.

井関弘太郎・森山昭雄・藤井昭二, 1982a, 名古屋港周辺の完新統とその基底地形, 第四紀研究, 21, 3, 145-151.

井関弘太郎・藤井昭二・藤 則雄, 1982b, 名古屋港周辺資料に基づく完新世の海水準変動, 第四紀研究, 21, 3, 179-182.

村岡幹生,1998,第四章 荘園・公領制下の人々の生活,新修名古屋市史 第二巻,名古屋市,195-292.

中井信之・太田友子・藤澤 寛・吉田正夫, 1982, 堆積物コアの炭素同位体比, C/N 比および FeS2 含有量からみた名古屋港周辺の古気候, 古海水準変動, 第四紀研究, 21, 3, 169-177.

新修名古屋市史編集委員会,1998,新修名古屋市史 第二卷,名古屋市,829p.

安田喜憲,1971,濃尾平野庄内川デルタにおける歴史時代の地形変化,東北地理,23-1,29-36.

# 考古学と地質学間に生じた 層序認識の違いとその原因

―地質学研究者の視点から―

鬼頭 剛

考古学と地質学は地層をあつかう歴史科学分野でありながら、層序についての認識には差異が生じてしまっている。考古学と地質学、それぞれの層序に関する歴史を比較して、地質学研究者の目からその原因を考察した。

## 1 はじめに

考古学、そして地質学も、同じ地層をあつ かう歴史科学の学問分野である。考古遺跡の 発掘調査法の解説書にはかならず 1669 年、オ ランダのステノによる「地層累重の法則」や、 1815年、イギリスのスミスによる「地層同 定の法則」を基にして解説してある(甘粕、 1983;小林,1983;勅使河原,1988)。それ らは層序学の古典的原理とよばれており、19 世紀初期までの地質学者が構築した層序学の 基本的枠組みであり、層序学の基本原理とし て不変のものであることに疑いはない。とこ ろが、基本原理は同じであるにもかかわらず、 地層そのものに関する認識には大きな差異が 生じてしまっている。たとえば、考古学研究 者が地層の断面に境界線をひく、いわゆる考 古学の分層という作業において、ひとつの単 層の中にわれわれ地質学研究者の肉眼ではま ったく認識できない境界線がふつうに描かれ ていく。地質学的な訓練をうけてきた者から みると、なぜそこにそのような境界線が引か れるのか、境界線の必然性は何なのか理解で きない。では、なぜこのような認識の差異が 生じてしまったのだろうか。本論では日本に おける考古学と地質学の「層序」が発展して きた歴史を比較し、差異の生じた理由につい て地質学の立場から検討をおこないたい。

# 2 考古学における層序の歴史

日本の考古学は、地質学が欧米の科学者た

ちによりその礎がきずかれたのと同様に、エドワード・シルベスター・モース (Edward Sylvester Mouse, 1838-1925) による大森貝塚の発掘で幕が開ける (Morse, 1879)。モース以後の日本考古学における層序のとらえ方の変遷は、麻生優 (1985) が詳細に述べており、

1890-1915 年(第1期): 考古学に層位論的視点がようやく考古学に導入され始めた時期。

1916-1925年(第2期):松本彦七郎が型式論と調和をはかり層位論の実践研究でいちはやく成果をあげ、考古学における層位論研究の開祖となる。

1926-1936 年 (第3期): 山内清男は層位論が 日本考古学の秩序を支えることを主張した。

1937-1966 年(第4期):時期の近接する遺物の層位的共伴と混入との理論的根拠の必要性が明らかとなる。これは層位的発掘の実践が感性でのみ解決されてはならないことを示した。

1967-1984年(第5期):細かな編年体系を組みたてる過程で役立つ柱状図が作成され、合わせて鍵層の活用は地学との共同研究も前進させた。

以上のように、その歴史をおおきく 5 期に区 分した。

筆者は日本考古学会の「考古学雑誌」、物質文化研究会の「物質文化」、日本人類学会の「東京人類学会雑誌」・「人類学雑誌」や書籍、刊行物などにおいて「層序」に関して記載のあるものを調べた。時期区分は麻生(1985)にしたがい、それらを列記する。

1890-1915年(第1期)には「東京人類学会雑誌」に多くの報告がみられる。山崎直方(1893)は「下総貝塚遺物見解」の中で、スケッチ的ではあるが貝殻密集層の層序断面図を示

した。佐藤傳蔵・若林勝邦 (1894) の「常陸国 浮島村貝塚探求報告」では、茨城県霞ヶ浦の浮 島において下位から砂礫層・砂層が堆積し、そ の上を貝殻密集層がおおう模式層序断面図(図 1)と、第三紀層・洪積層・沖積層とに区分さ

れた地質図が掲載傳亀 (1896)は「臨発」と (1896)は「これでは (1896)は「これでは (1896)は「これでは (1896)は (1896)は (1897)に (1907)の (1907



貝塚調査報告」の中 図1 佐藤傳蔵・若林勝邦 で、神奈川県川崎市 (1894)の層序断面図

## 面断切跡遺岡%亀

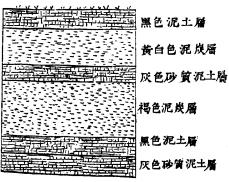


図2 佐藤傳蔵 (1896) の層序断面図

の南加瀬貝塚における層序断面図を報告した。 また、鳥居龍蔵 (1902) は「伊豆大島熔岩流下 の石器時代遺跡」として、高さ 23m の崖にあ らわれた層序断面が下位から火山灰層・溶岩流 (論文中では熔岩流)・泥流層・火山灰層に分け られ、溶岩流におおわれた火山灰層の最上部か ら石器が出土していることを述べた。また、海 岸の横断面図も図示されているが、「此のこと に就ては大築理学士が精しく地質学雑誌に載て ありますから御覧を願ひます」とある。考古学・ 人類学と地質学とが相互に、柔軟に連携してい る状況がみてとれて興味深い。

1916-1925年 (第2期) には,東北帝国大学の松本彦七郎 (1919a, 1919b, 1919c) が宮

戸島里浜貝塚と宝ヶ峰遺跡において地表から地下にむかって地層に番号をふり、それぞれの地層から出土した遺物の形態について論じた。京都帝国大学文学部考古学研究室の初代教授であった浜田耕作は、その著書「通論考古学」で先史考古学研究に必要な3つの方法をあげ、「(a)層位学的方法、(b)型式学的方法、(c)土俗学的方法。此のうち(a)は考古学の材料は発掘にもって地下より取り出す場合が多い処から、考古学の特殊研究法となったのであって、地質学の特殊研究法となったのであって、地質学さが地層中にある化石を其の地層の性質によって推究するのと類似の方法である。」の述べた(浜田、1922)。また、同書の「考古学と他学科との関係」では考古学と地質学との関係を、

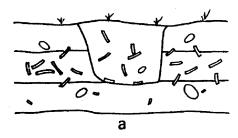
「地質学 (Geology) は先史考古学に於いて特に其の関係切要なるを見る。人類初現の問題より、旧石器時代の研究に於いては、吾人の地質学者の知識を借り来るに非ずんば、何等の提言をなすは能はざるべし。蓋し人類の遺跡は地殻の上に存し、其の遺物は地層中に埋没するを常とするのみならず、殊に其の遺跡の研究に外とする場合に於ける、遺跡の研究に外となす。又岩石学上の知識が石製遺物の研究に基礎的知識を供し、古代に於ける交通貿易等の状態を知るに資す可きものあるは言を俟たず。」と論じた。近代考古学がはじまった折りから地質学との関連性について述べていたのである。

1926-1936年(第3期)のころ、水野清一(1933)は人類学雑誌において「満州旧石器時代の骨角器資料」と題し、高さ32m、幅140mで10層に層序区分された地質断面図を載せている。

1937-1966年(第4期)では、高井冬二・棚井敏雄(1949)が「所謂「ニツポナントロプス」の産出地層について」と題し、詳細な地質柱状図が載せられている。明石人骨を産出した地層の究明のため明石累層の記載をし、Nipponanthropusの産出層準を特定できず「地質学的には疑問を呈す」との内容である。なお、この論文は東京大学理学部地質学教室の地質学者による報告のため、考古学者によるものではない。

**1967-1984年(第5期)**には、Oda and Keally(1973)により詳細な地質柱状図をもと

に局部磨製石斧の産出層準を提示した。林 謙 作 (1973) は地層の記載や分類方法について地 質学の定義を引用しながら、考古学でみられる 地層について論じた(図 3)。第 5 期以降では 麻生 (1985) が地質学と考古学の地層認識の違いについて解説している。



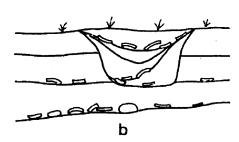


図3 林 謙作 (1973) の考古遺跡で みられる層序分類 層中(a)と面上(b)の分布

以上のように、1879年に刊行されたモースによる大森貝塚から14年後、それも1800年代後半に、日本人による層序断面図を用いた報告がされている事実は、地質学研究者からみても驚きである。

## 3 地質学における層序

日本における層位・層序学、そしてそこから派生した堆積学へとつづく歴史は岡田博有が詳細にまとめている(岡田,1998,2002)。岡田(2002)は日本の層序学・堆積学確立までの歴史を6期に区分した。各時期の主要な事項が詳しく述べられているが、それを要約したものを以下に記す。

1920年~50年(第1期):八木次男(1929)により「堆積学」という用語が導入され、今井半次郎(1931)は「地層学」を出版した。また、松本達郎(1949)により「日本地史学の課題」として層序地

質学の概念が出された。

1950年~60年代(第2期): 湊 正雄(1953)の「地層学」の出版が出版され、井尻正二(1950)が堆積学を地質学の現在科学的基礎分野として位置づけた。庄司力偉(1955)による堆積機構の研究や、層序学・古生物学研究者による堆積相、堆積作用、堆積環境の研究が活発化した。

1960年~1970年(第3期):「地向斜」研究の 全盛時代であり、庄司力偉(1971a, 1971b)による「堆積学」と「堆積岩石学」の教科書が出版された。

1970 年 ~ 80 年 代 (第 4 期): 勘 米 良 亀 歳 (1976)、平 朝彦・田代正之編 (1980) などのプレート テクトニクスによる付加体研究が全盛となる。

1980年~90年代(第5期): 平 朝彦(1981) などにより付加体研究が多様化した。

1990年以降(第6期):シークエンス層序学(東層層序学)が発展し(斉藤ほか, 1995),実験堆積学(Yagishita and Taira, 1989)や理論堆積学(Muto, 1992)など、研究内容が多様化した。

以下では岡田 (2002) の時期区分にもとづいて、日本地質学会の「地質学雑誌」と地学団体研究会の「地球科学」の中で、筆者が調べた考古学の層序にも関連すると思われる事項のみを簡単に述べる。なお、地質学・自然地理学・考古学などの近隣緒科学の成果を統合した「第四紀学」分野もあるが、もともと人類紀ともよばれ、自然と人との関係を論じる学問として発展してきた応用的な側面をもつため、今回は除いた。

1920~50年代(第1期)よりも前に、「地質学雑誌」の地質学的情報を紹介する「雑報」の中で、「赤クラグ層に発見の人類遺跡」として考古遺跡が紹介されている(日本地質学会、1912)。1881年に発見された彫刻のある貝殻片が、その割れ口面が殻の他の部分と同じ赤褐色を呈することから、その層に人の時代があったことを示したニュース的なものである。これ以外に考古遺跡を取りあげたものはまったくみられない。

1950年~60年代(第2期)には、鹿間時夫 (1950)が1942年、東京都千代田区の有楽町 累層中から、水流により摩滅した中期縄文土 器片が発見された意義を唱えた。また、本論文中で考古学研究者の江坂輝弥が1948年に日本

の旧石器時代の上限年代を示したことを引用している。鹿間時夫・杉原荘介 (1951) は日本地質学会第 58 年学術大会で「岩宿石器文化の層序学的位置」と題し、1949 年から 1950 年に実施された群馬県の岩宿遺跡の発掘調査において、同遺跡がウルム氷期に対比されることを発表した。また、藤岡一男 (1952) は秋田県大湯環状列石の発掘調査への参加報告を発表している。

小林国夫ほか (1957) は考古学研究者である 杉原荘介が 1956 年に発表した「縄文文化以前 の石器文化」で、文化遺物の上では blade 文 化と point 文化にわけられることを引用し、中 央アルプスのカール谷底の堆積物の意義を論じ た。また、小林国夫・郷原保真 (1958) は「信 州ローム層の分帯・氷期・文化層との関係」で 氷期と考古遺物との関係を層序学的に検討し た。湊 正雄 (1954) は江坂輝弥が 1954 年に 発表した「海岸線の進退からみた日本の旧石 器時代」に関連し、「私がここにこの問題をと りあげるのは、私どもが土器型式による貝塚の 対比や編年にくらく、同時に地質学の分野以外 の人々の古地理復元や地殻変動のとりあつかい に、多少ながらドグマティシュなところがある ように感じるからである。今後、私どもはいっ そう密接な連絡のもとに、この中間領域をうず めていくべきではなかろうか」と述べている。 このころには地質学と考古学研究者との共同研 究や、論文中で考古学研究者の成果を引用する など、積極的な関係がみられる。

1960年~1970年(第3期)には、榎本金之丞・松井 健(1962)が1957年に東京都北多摩郡保谷町の坂下遺跡において立川ローム層中から容器状粘土を検出し、その鉱物組成・X線回折・示差熱分析・化学成分分析から、それが人工物である可能性が高いことを指摘している。斉藤豊・野尻湖底発掘グループ(1964)や亀井節夫ほか(1964)は、1962年(昭和37年)と1963年(昭和38年)に長野県の野尻湖でおこなわれた第一次・第二次発掘調査の成果をほ乳動物化石の観点から考察した。赤木三郎・豊島吉則(1965)は鳥取砂丘の新砂丘は土師・須恵器をともなう腐植層(クロズナ)が基準であることを述べた。中川久夫(1965)は考古学者の芹沢長介が大分県早水台産の旧石器をRiss

氷期に対比したことを受けて、旧石器時代の地質学的な考察をおこなった。新井房夫 (1968) は栃木市の星野遺跡において芹沢・阿久津・中川 (1966・1967) が層位的にも本邦最古の旧石器文化と断言できると指摘したことに対して、「テフラ層序学の立場から根本から再検討されることが望まれる」と反論した。

以上のように、第3期にも第2期と同様に 考古学と地質学とが連携し、検討をくわえる論 文がみられる。

1970年~80年代(第4期)になると、それまでの考古学研究者との共同研究あるいは考古学のデータを用いた論文は減少し、学会誌からほとんどみられなくなる。原著論文ではないが、井尻正二・新堀友行(1976)が編集した「新版 地学入門」や、大久保雅弘・藤田至則(1984)の「新版 地学ハンドブック」に石器や土器の変遷図が引用されているくらいである。

1980年~90年代(第5期)から現在にいたるまでは、考古学研究者との共同研究や考古学的データの引用はまったくみられない。

# 4 考古学者からみた層序論

概観してきた考古学と地質学の層序に関する歴史を表1にまとめた。それらの黎明期において、学会誌に層序断面図がもっともはやく取り入れられたのが考古学であり、その報告数も多いことに気づき、たいへん興味深い。地質学よりも先んじていたこの事実は高く評価されよう。

では、考古学における層序学の先達は誰であろうか。林 謙作 (1973) は「日本考古学に層 序区分の方法を導入したのは、・・・中略・・・と 松本彦七郎の業績におうところがおおおい」とした。麻生 優 (1983) は「すでに岩宿の発見の中で、層位的な研究方法が、松本彦七郎の発見の中で、層位的な研究方法が、松本彦七郎以来とられてきた考古学の基本的な、重要な方法 おる層序区分の先達は松本彦七郎であるのがおおかたの見方のようである。ところで、この松本彦七郎の論文について、林 (1973) は「彼はいくつかの文化期を区分し、これに対応するといくつかの文化期を区分し、これに対応する、そのなかで、地層そのものについての分析・記

2000

1990

麻生 優(1985): 「層位論」 小林達雄(1983): 「層位」について言及

1980

林 謙作(1973): 「層序区分-その現状と問題点-

Oda and Keally(1973): 地質学的柱状図をもとに局部磨製石斧の産出層

準を提示 1970

1960

1950

高井冬二・棚井敏雄(1949):「所謂「ニツポナントロプス」の産出地層 水野清一(1933):「満州旧石器時代の骨角器資料」に層序断面図 水野清一(1933):

19<u>20</u> 浜田耕作(1922): 「通論考古学」で地質学の必要性 松本彦七郎(1919): 日本で初めての分層発掘

八木奨三郎(1907):「中間土器(弥生式土器)の貝塚調査報告」に 層序断面図

19<u>00</u> 鳥居龍蔵(1902): 「伊豆大島熔岩流下の石器時代遺跡」に層序断面図 佐藤伝蔵(1896): 「陸奥亀ヶ岡発掘調査報告」に層序断面図 ・若林勝邦(1894): 「常陸国浮島村貝塚探求報告」に模式層序 断面図と地質図

副副品とで現在 山崎直方(1893): 「下総貝塚遺物見解」に貝層断面のスケッチ Edward Sylvester Morse(1879): 「Shell Mounds of Omori」刊行

載はまったく省略している。その意味で彼のお こなった地層区分は、正統的な層位学の方法か ら逸脱したものであったといいうる。言いかえ れば、松本は"地層"を歴史的な形成過程をへ た"堆積物"として、分析・検討をくわえるとい う立場は松本の方法論のなかにはかけているの である。」とした。また、筆者も原著論文を読 んだところ、松本 (1919b) では「蓋しこの貝 塚層は初め水平に沈積して然る後に第二次的に 傾斜したらむが如きものには非ず、最初より斯 くの如く傾斜して堆積したるタラス堆積なるべ し」という一文があった。地質学用語に「タラ ス」ないしは「タラス堆積」というものはない。 タラスにあたる単語にテーラス (talus) がある。 それは「崖錐」といい、重力の直接の作用によ って、急斜面上の風化岩屑が崖下に落下して形 成した円すい状の堆積地形のことをさす。この ような堆積地形では、時代を異にする岩塊が無 秩序にたまるため、本来層序区分を細密におこ

岡田博有(2002):「堆積学」刊行 八木下晃司(2001): 「岩相解析および堆積構造」刊行 原田憲一(1999):「層序学と推積学の基礎」刊行 斉藤文紀ほか(1995):シークエンス層序(束層層序)学 武藤鉄司(1992): 理論堆積学 Yagishita and Taira(1989): 実験堆積学

地質学

平 朝彦(1981): 海溝沈み込みと付加体の研究 平 朝彦・田代正之(1980): 四万十帯の研究 勘米良亀齢(1976): 四万十帯の研究

庄司力偉(1971a):「堆積学」の教科書 庄司力偉(1971b):「堆積岩石学」の教科書 新井房夫(1968): 星野遺跡における文化層の層位について 赤七郎・豊島吉則(1965): 鳥取新砂丘は土師器・須恵器を伴う腐植層(クロズナ) を基準

斉藤 豊・野尻湖底発掘グループ(1964):野尻湖底の含哺乳動物化石層について

亀井節夫ほか(1964): 野尻湖のほ乳動物化石群と自然環境について 榎本金之丞・松井 健(1962): 関東ローム層出土の容器状粘土の産状とその鉱物組成

小林国夫・郷原保真(1958):信州ローム層の分帯・氷期・文化層との関係

小林国天・郷原保臭(1958): 信州ローム層の分帯・氷期・文化層 庄司力偉(1955): 堆積機構の研究 湊 正雄(1954): 江坂輝弥の海水準変動に言及 湊 正雄(1953): 「地層学」刊行 藤岡一男(1952): 秋田県大湯環状列石発掘調査に参加して 鹿間時夫・杉原荘介(1951): 岩宿石器文化の層位学的位置 井尻正二(1950): 堆積学を現在科学的基礎分野として位置づける

鹿間時夫(1950): 有楽町累層中より水流により摩滅した中期縄文土器片を発見

松本達郎(1949): 層序地質学の概念

今井半次郎(1931) : 「地層学」刊行 八木次男(1929) : 「堆積学」という言葉を初めてつかう

日本地質学会(1912): 「赤クラグ層に発見の人類遺跡」

Edmund Naumann(1875): 日本の近代地質学開祖

なえない。松本 (1919b) が崖錐堆積物とあえて 断った上での細かな層序区分には疑問を感じる。 さて、層序について林 (1973) は「"層序区 分"は今日の考古学の基本的な方法、もしくは 技術のひとつであると言いうる」の述べた。小 林達雄(1983)は「層位学は、地質学における <地層塁重の法則>の大原則にもとづいてい る」とした。麻生 優 (1985) は「地層の変化 を系統的に追及する層位論は、地質学研究の基 本原理であるのみならず、考古学研究にとって も編年論の骨格を組み立てるためのもっとも重 要な方法論である」と論じている。層序が考古 学にとっても極めて重要であるとの認識がされ ている。ところが、考古遺跡の「層序」そのも のについて論じたものはたいへん少ない。その 中で林 謙作 (1973) は層序に関して詳しい検 討をくわえた。林 (1973) は「層序区分 - その 現状と問題点 -」と題し、地質学者の井尻正二・ 正雄・庄司力偉らの定義にもとづいて、「単 83

層」や「層序区分」という用語を紹介した。そして考古遺跡における層序を「複数の累積する層のうみだす関係」とし、また「人為層序」という新称を設定して「相対的にゆるやかなって、一様なテンポをたもって進行する自然の堆積作用の過程に、人為的な要因によって区切りがつけられている層序」と定義している。また、「"人為層序"は"自然層序"のうちの一部が拡大もしくは誇張されたものであって、本質的には自然層序の中に包摂されるべきである」とした。そして、「人為層序とまったく対照的なカテゴリーを筆者は"自然層序"と呼びたい」としたが、人為的な要因の具体的な説明はしなかった。

# 5 考古学からみた相違の認識

ところで、林 謙作 (1973) は「地質学を中 心とする隣接分野の研究者との共同調査の経験 がつみかさなってゆくとともに、考古学の層 序区分は地層累重の法則を母胎としていながら も、かなり"ユニーク"な方向にむかっている ことがあきらかになってきた」とし、「考古学 における「層序区分」の原則についてあらため て検討をくわえ、隣接科学の諸分野 (ことに地 質学) での層序区分との一致点・不一致点をあ きらかにしなければ、共同作業をすすめるうえ で、根本的な理解が成立せず、共同作業そのも のの意義は半減するであろう」とした。また、 麻生 優 (1985) は「層位論の原理・原則のみ では理解できない日本考古学の課題がそこにあ る。しかし現在では、地質学的な方法論である 層位的な方法と、考古学における層位の認識と が、多少変化をきたしているのが現状である。」 とし、考古学の層序認識が地質学とは異なっ てきていることを示した。そして、「たとえば 地質学の層位の認識オーダーは、何万年か、あ るいは何億年かというように、そのスケールが ひじょうに大きいため、一般的に目盛りが比較 的荒い。一方、考古学における層位の認識は比 較的細かく、しかもそれが自然層だけならいざ しらず、さらにすすんで、文化層へと移るので ある。ここに、考古学における層位論の問題が あるのである。自然層から文化層へとすすむに は、大部分の場合、地質学と同じように、自然 層から化石産出層へと進むに従って、だんだん 最小の単位をもって文化層を認識していく方向 性をたどっている。」と述べ、「またその他の遺 跡の層位も同様であるが、自然層の肉眼的に識 別できない場合には、文化層として区別する方 向にきている。」と説明した。

上記のような認識の違いが生まれたその理由について、林 (1973) は「不充分さは、集落址の調査のうち期限においまくられる緊急発掘・事前調査として実施されたものが圧倒的多数をしめているという実情からうまれていることは事実であろう」と、充分な検討時間の不足と指摘した。

## 6 考察

考古学では 1800 年代後半に、かつ、地質学よりもはるかに早い時期に層序断面図を用いながら、なぜ今日のような層序に関する認識の違いが生じてしまったのか。以下ではその原因について考察したい。

#### 教育の違い

林 謙作 (1973) は考古学の立場から考古学と地質学との教育の違いにふれ、「地質学専攻の学生は、層位学にかんする理論的な学習をいっぽうでうけながら、野外の実習に参加し、その法則を体得してゆく。しかし、考古学のばあい、層序区分は発掘調査の途中で、経験的に習得してゆかねばならないというのが、大多数の大学の実情ではなかろうか」と述べ、違いが生じた原因のひとつを受けてきた教育の違いにもとめた。地質学研究者がどのような教育を受けてきたのか、それを解説するのも一助になると考えて以下に紹介する。

テリー・原田 (1991) は 1990 年に全国 28 大学の理学部地球科学系教室で開講されている 授業科目を調べた。それによると岩石学・鉱物 学・構造地質学・地史学・古生物学などの講義 が 263 あり、たいへん細かく別れている。筆 者の専門である層序・堆積学を例としよう。層 序・堆積学を専攻するからといって、地層のみ を教えられてきたわけではなく、岩石学・鉱物 学・構造地質学などをひと通り学ぶ。たとえば、 鉱物学ならば 1669 年にステノ (地層累重の法 則を提唱したステノと同一人物)によって発見 された「面角安定の法則 (law of constancy of interfacial angles)」からはじまる結晶光学 を学ぶ。特性X線や励起X線などの原理を学 んだのち、X線回折や蛍光X線分析装置を使 った実習にはいる。プレートテクトニクスを考 える際には、球面上の図形移動であるオイラー 回転という幾何学を学習する。卒業論文にはい る前には進級論文として数名のチームを組み、 論文をひとつまとめあげなければならない。ま た、層序学では質量保存の法則やエネルギー保 存の法則をもとに、ベルヌーイのエネルギー方 程式を経て、フルード数やレイノルズ数とよば れる水理学の基礎的な講義をうける。ときには 実験水槽で実際の堆積粒子が堆積する様子を観 察してから、実際のフィールドで確かめること をする。ここで強調したいのは、ある対象物を 研究する際にも、すぐにその対象物の研究には 入らず、基礎理論を徹底的に教えこまれるので ある。

林 (1973) が述べたのは 1970 年代の考古学の様子である。また、筆者は考古学教室でどのような教育がおこなわれているのかわからない。が、21 世紀を迎えた今日でもまだ状況がかわっていなかったなら、それはたいへん憂慮すべき問題であり、考古学との層序の認識の差はますます広がるものと予想される。

#### 研究姿勢

 が鮮明にされなかったのである。」と地質学を 批判した。

ところで、考古学では報告書をまかされ、仕 上げられたら一人前の考古学研究者である、と の見方があるそうである。いっぽうで、地質学 では専門学会誌に掲載された論文数は業績とな るものの、報告書や一般向けの書籍・刊行物な どは何編執筆しようがカウントされることはな い。また、地質学の層序の歴史で示したよう に、1920年~1940年(第1期)には日本列 島全体の地質を把握することが急務であった。 1960~1970年(第3期)には、この時期に 有力であった「地向斜造山論」という理論で日 本の地質がどうとらえられるか、その検証に努 力していた。1970年(第4期)から現在までは、 地球物理学から提示された「プレートテクトニ クス」によりどうとらえられるのか、自らの研究 分野のデータ集めに一生懸命であり、他の研究分 野にはほとんど目がとどかなかった、というより もむしろ、目をむける余裕がなかったのが現状で ある。そのために、大学・研究所の地質学研究者 が考古学に対して積極的に関与しなかったので ある。これらのことが、層序に関する認識の溝が ひろがってしまった原因のひとつでもある。

#### 発想の違いと定義

考古遺跡の発掘調査では、丸く掘られた小穴 が並べば住居跡となり、赤褐色の地面に炭化物 と遺物がみられればカマド跡となる。その根拠 を考古学者に問えば、何をいまさらあたり前の ことを、住居跡(カマド跡)に決まっているじ ゃないか、と言われそうである。いっぽう、理 学系研究者であれば、あたり前だと説明されて それで素直に納得するようならば、今すぐ理学 系研究者をやめたほうがよい。あたり前の裏側 にひそむ根本原理をつきとめるのが「理学」だ からである。これは発想の違いともいえる。こ こで自然科学系の学問分野について説明を加 えたい。自然科学系の学問分野には理学・農 学・工学・医学などがある。考古学研究者か らは、それらはほぼ一緒のものとみなされて いるきらいがある。しかし、元素記号や数式を つかう同じ自然科学系でも、理学系研究者から みたとき、農学・工学系研究者とはその発想が 大きく違うのである。その発想の違いのひとつ を太田 (1981) は「なぜ (WHY)」と「どうして (HOW)」の違いとして説明した。理学部の人 は「なぜこんなことが起こるのか。なんとか解 明できないものか」と「なぜ」がまず先に立つ。 自然現象に対する好奇心が研究の動機になるの である。いっぽう、農学・工学部の人は「どう して」・「どのようにして」が先行することが多 い。考古学研究者の場合「どうしてこの遺物は このような形なのか。誰が使っていたものか。 その社会的な背景は何か。」と考える。このよ うな考え方はどちらかと言えば農学・工学部系 の発想である。考古学の方々が抱く「自然科学」 のイメージを、考古学と法学・経済学とをひと くくりに「人文社会系」としている、と説明す ればその違いを理解していただけようか。常に 「なぜ」と問いかける地質学者と「どうして」 を問う考古学者とでは、発想そのものが当初か ら違うために層序に関する認識の違いが生まれ たともいえる。

また、考古学では対象物や用語についての定 義が、長さ・体積・質量などの物理学的な基本 量をもちいていないため不明確である。たと えば、ある地層が「厚い」という場合にも地質 学的には厳密に定義されており、地層の厚さ 1cm を基準としてそれよりも厚い場合には「単 層」、薄い場合には「葉理」としている。また、 同じ単層でも1~10cmまでが薄層、30cm を超えるときにはじめて「厚い」という言葉 をつかう。なぜこのように、あらゆるものを厳 密に定義してきたのか。これは、対象物を観察 する個人間にうまれる主観をとり除くためであ る。研究者間での認識の差をなくすために厳密 に定義されているのである。定理・法則ととも に定義づけを厳密におこなうことによって、た とえまったく見たこともない地層についても海 外の研究者と対等に議論ができるのである。自 然科学的に意味のある定義がないことが、地質 学者が立ち入れない原因でもある。

### 複雑なものをより複雑に 複雑なものを簡単に

物理学ではふつう、関連するあらゆる要素の 中から理論化に重要な要素を選択して、より単 純な系を用いて法則性を明らかする。たとえ ば、「空気抵抗はないものと仮定して」とか「摩擦はないものとする」など、実在しない理想的な状態を仮定して理論を進める。物理学者がもし、実在する物のみを対象にしていたら、今日の体系化はできなかったであろう。また、理論の検証をおこなうときには測定・分析がおこなわれる。そのような測定・分析では汚染(コンタミネーション)を極端にきらう。もちろん、汚染が入ると、まったくかけ離れた値となるばかりか、値そのものが出ないときすらある。

層序学の基本的な前提は物理学(化学)の基 礎法則は時間的に不変だということである。だ からこそ、何十万年、何億年も前の事柄をさも 見てきたことのように議論できるわけである。

対して考古学者の場合、無機的な物理・化学 的な諸現象に比べて、より複雑な構造と機能を もついろいろな遺物に魅力を感じているようで ある。そしてその複雑さの中に潜む文化や社会 的背景を極めたいという絶えざる欲求をもって いるようである。「より単純なモデル」を使っ て考察する物理学の発想とはまったく逆な方向 である。ニュートン (1642-1727) が木からリ ンゴが落ちるのをみて万有引力の法則を発見し た、という逸話はあまりにも有名である。この、 リンゴが地面に落下した事実をもって、落下し たのは木の品種のためか、季節はどうだ、天気 はどうだったか、風は吹いていなかったか、な どとあれこれ悩んでいる姿を浮かべる。また、 先にのべた汚染の、もっとも避けるべきもの に、手でさわる、異物を加えるといった人的汚 染がある。ところが、考古試料では、その試料 の基本にあるのが「人間」である。「人間」の 介在するものを対象としてあつかうため、最初 から試料そのものが汚染とは切り離せない存在 なのである。つまり、物理・化学の基本法則で 説明できる堆積物に、「人間」という新たな要 素がひとつ加わった状態が考古学分野である。 地質学の理論を検証するときには、地層の保存 状態のよい、かつ、ほとんど乱されていないも のを選択する。考古学では「人間」というたい へん複雑な要素を考慮しなくてはならず、もっ とも難しい領域にのぞんでしまったわけである。

さて、心理学に「図 - 地の分化」なる概念がある (Miller, 1967)。たとえば、図 4 にはふつ

う、さまざまな大きさの黒い6個の多角形が みえる。ところが、別の見え方もある。今まで 図と思っていた黒い多角形が地になり、地(白 く抜けた部分)であったところが図となる。す ると、そこには「THE」の文字が浮かぶ。一 次的で重要な部分と二次的で重要でない部分と の認識の差が、見え方の差をうむのである。本 論の冒頭で述べた地層境界線の認識の差はこれ に例えられる。考古学者は地層の中にすでに白 いパターン (THE) を見だしてすいすいと境界 線を描いていく。だが、地質学者には黒いパタ ーンしかいまだ見えず、そのためにいつになっ ても (THE) という境界線が認識できない。考 古学者と地質学者を入れ替えてもよい。現在 の地層についての認識は、どちらかいっぽうだ けが「THE」をみているだけで、いつまでた っても両研究者間の統一見解がだせないのであ る。「THE」の文字が地層にひそむ根本原理と するならば、考古学側からも、そして地質学側



図4 「図-地の分化」(Miller, 1967)

からも白いパターン (THE) が認識できるようになってはじめて、「地層」そのものについての共通認識ができたといえることとなる。

## 7 おわりに

考古学と地質学との層序の歴史を概観・比較し、層序について両者間の認識の違いが生じたその原因を考察した。考古学の書籍・刊行物は地質学に比べて膨大な数があり、筆者の把握できていないものがまだあると思われる。層序に関して記載のあるものをご存知の方は、筆者までご連絡いただきたい。また、浅学非才とせまい視野のため、考古学的に不正確な点がある場合にはご指摘、ご教示をいただければ幸いである。

#### 謝辞

本論をまとめるにあたり、愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の川添和暁氏には考古学の文献をご紹介いただいた。同調査研究員の永井宏幸氏、蔭山誠一氏、早野浩二氏には考古学に関する情報をご教示いただいた。以上の方々に記して感謝の意を記します。

# 参考文献

赤木三郎・豊島吉則, 1965, 鳥取砂丘の構造と起源について, 日本地質学会第72年学術大会における講演要旨, 地質学雑誌, 71, 836, 357.

甘粕 健, 1983, 発掘とは何か, 甘粕 健編「考古資料の見方(遺跡編)」, 柏書房, 90-117.

麻生 優,1983, 概説, 麻生 優・加藤晋平・藤本 強編「日本の旧石器文化」1 総論編, 雄山閣出版,4-35.

麻生 優, 1985, 層位論, 岩波講座 日本考古学 1「研究の方法」, 岩波書店, 79-113.

新井房夫, 1968, 星野遺跡における文化層の層位について, 日本地質学会第74年学術大会における講演要旨, 地質学雑誌, 74, 1, 123.

地学団体研究会·地学事典編集委員会編,1970,地学事典 增補改訂版,平凡社,1612p.

地質学雑誌, 1912, 赤クラグ層に発見の人類の遺跡, 雑報, 19, 223, 208.

榎本金之丞・松井 健,関東ローム層出土の容器状粘土の産状とその鉱物組成,地球科学,59,40-43.

藤岡一男,1952,縄文時代巨石文化遺跡の秋田県大湯環状列石発掘調査に参加して(代読),地質学雑誌,58,682,日本地質学会第59年学術大会における講演要旨,281.

浜田耕作, 1922, 通論考古学, 大鐙閣, 230p.

林 謙作, 1973, 層序区分 - その現状と問題点 -, 物質文化, 21, 物質文化研究会, 1-17.

原田憲一訳, 1999, ウイリアム J. フリッツ・ジョニー N. ムーア著「層序学と堆積学の基礎」, 愛智出版, 386p.

井尻正二, 1950, 堆積学の根本問題, 科学, 20, 7, 298-302.

井尻正二・新堀友行, 1976, 新版 地学入門, 築地書館, 231p.

今井半次郎, 1931, 地層学, 古今書院, 546p.

亀井節夫・小野寺信吾・森 由起子・野尻湖底発掘グループ,1964,野尻湖底より産出した哺乳動物化石群とその自然環境について(野尻湖底発掘報告その 2),日本地質学会第71年学術大会における講演要旨,地質学雑誌,70,825,407.

勘米良亀齢, 1976, 過去と現在の地向斜堆積物の対応(Ⅱ),(Ⅱ), 科学, 46, 5, 287-291; (6), 371-378.

小林国夫・森 義直・原田哲朗・河内晋平, 1957, 中央アルプス氷蝕圏谷底の堆積物とその地史学的意義, 地質学雑誌, 63, 736, 9-25.

小林国夫・郷原保真, 1958, 信州ローム層の分帯・氷期・文化層とのかんけい, 日本地質学会第65年年会学術大会における講演要旨, 地質学雑誌, 64, 748, 694,

小林達雄, 1983, 層位論, 麻生 優・加藤晋平・藤本 強編「日本の旧石器文化」1 総論編, 雄山閣出版, 114-136.

松本彦七郎 , 1919a, 陸前国寶ヶ峰遺跡の分層的小発掘成績 , 人類学雑誌 , 34, 5, 161-166.

松本彦七郎, 1919b, 宮戸島里濱介塚の分層的発掘成績, 人類学雑誌, 34, 9, 285-315.

松本彦七郎 , 1919c , 宮戸島里濱介塚の分層的発掘成績完 , 人類学雑誌 , 34, 10, 331-344.

松本達郎, 1949, 日本地史学の課題, 平凡社, 東京, 178p.

Miller, G. A., 1967, 戸田壹子・新田倫義訳「心理学の認識 - ミラーの心理学入門 -」, 白揚社, 505p.

湊 正雄, 1953, 地層学, 岩波書店, 東京, 330p.

湊 正雄, 1954, 冲積世の海進, 地質学雑誌, 60, 700, 459-460.

湊 正雄, 1973, 地層学 第2版, 岩波書店, 東京, 396p.

水野清一, 1933, 満州舊石器時代の骨角器資料, 人類学雑誌, 48, 12, 676-683.

Morse, E., 1879, Shell mounds of Omori, Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan, 1, pt1.

Muto, T., 1992, Retreat of the front in a prograding delta, Geology, 20, 967-970.

直良信夫, 1981, 自然環境復元の歴史と諸問題, 考古学ジャーナル 特集・縄文時代の自然環境, 192, 2-5.

中川久夫, 1965, 大分県早水台の旧石器の地質時代に関する諸問題, 日本地質学会第72年学術大会における講演要旨, 地質学雑誌, 71, 836, 358.

Oda, S. and Keally, C. T., 1973, Edge-ground stone tools from the Japanese preceramic culture, Material Culture, 22, The Society for the Study of Material Cultures, 1-26.

岡田博有, 1998, 日本の堆積学小史, 堆積学研究, 48, 5-12.

岡田博有, 2002, 堆積学-新しい地球科学の成立-, 古今書院, 219p.

大久保雅弘・藤田至則, 1984, 新版・地学ハンドブック, 築地書館, 233p.

太田次郎, 1981, 文科の発想・理科の発想, 講談社現代新書, 201p.

斉藤文紀・保柳康一・伊藤 慎,1995,シーケンス層序学 - 新しい地層観を目指して -, 地質学論集第45号,日本地質学会,249p.

斉藤 豊・野路湖底発掘グループ, 1964, 野尻湖底の含哺乳動物化石層について(野尻湖底発掘報告・その 1), 日本地質学会第 71 年学術大会に おける講演要旨, 地質学雑誌, 70, 825, 407.

佐藤傳蔵·若林勝邦,1894,常陸国浮島村貝塚探求報告(圖入),東京人類学会雑誌,10,105,106-115.

佐藤傳蔵, 1896, 陸奥亀ヶ岡発掘報告, 東京人類学会雑誌, 11, 118, 125-149.

鹿間時夫, 1950, 本邦第四紀の編年について, 地質学雑誌, 56, 659, 399-406.

鹿間時夫・杉原荘介,1951,岩宿石器文化の層序学的位置,地質学雑誌,57,664,日本地質学会第58年学術大会講演要旨,289.

庄司力偉, 1955, 堆積機構の基礎的研究, 沈殿池につくられた累積層および砂漣, 地質学雑誌, 61, 722, 518-531.

庄司力偉, 1966, 堆積学の最近の進歩, 地学雑誌, 75(1/2), 12-35, 70-83.

庄司力偉, 1971a, 堆積学, 朝倉書店, 280p.

庄司力偉, 1971b, 堆積岩石学, 朝倉書店, 285p.

平 朝彦・田代正之編, 1980, 四万十帯の地質学と古生物学, 林野弘済会高知支部, 389p.

平 朝彦, 1981, 四万十帯の形成過程, 科学, 51, 516-523.

高井冬二・棚井敏雄, 1949, 所謂「ニツポナントロプス」の産出地層に就て, 人類学雑誌, 60, 3, 117-120.

勅使河原 彰, 1988, 年代と時代区分, 大塚初重・戸沢充則・佐原 眞編「日本考古学を学ぶ」(1) 日本考古学の基礎, 有斐閣選書, 27-42.

テリー・ヒリー・原田憲一, 1991, 日本が直面する地球科学的諸問題と地球科学教育, 地質学雑誌, 97, 5, 389-399.

鳥居龍蔵, 1902, 伊豆大島熔岩流下の石器時代遺跡, 東京人類学雑誌, 17, 194, 320-338.

Yagishita, K. and Taira, A., 1989, Grain fabric of a laboratory antidune, Sedimentology, 36, 1001-1005.

八木下晃司, 2001, 岩相解析および堆積構造, 古今書院, 222p.

八木奨三郎, 1907, 中間土器(弥生式土器)の貝塚調査報告, 東京人類学会雑誌, 22, 250, 134-142.

八木次男,1929,北海道海成頁岩の化学的緒性質並に海底風化作用の特異性に就て,岩鉱,1(2),17-29.

山崎直方, 1893, 下総貝塚遺物見解, 東京人類学会雑誌, 8, 85, 269-274.